

魔王と救世主で世界最強

たかきやや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です！

魔王と勇者………がいるなら救世主がいても良いよね？ ついでにチート無双しても良いよね？

そんな感じで始まる作者の趣味と勢いで始まる物語

技・理論の参考

ウルトラマンシリーズ

ガンダムシリーズ

仮面ライダーシリーズ

魔法科高校の劣等生

呪術回戦

アプモン（デジモン）

デュエルマスターズ

とある科学の一方通行

鬼滅の刃

盾の勇者の成り上がり

痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思います。

etc.

以後、追加予定

目次

終わりの始まり	1
現状確認	8
救世主様はチート	18
解説と相棒	29
軽い遊び（原作だと虐めの回）	37
誓いの夜	42
オルクス大迷宮	53
ベヒモス	61
離別と復讐	71
出陣	75
シヨウの本気	78
奈落と嫁↑は？	81
新婚さんの快進撃	87
もはや、何でもアリ	90
再会、そして驚愕	94
回想其の壱 ハジメ達に何があつたのか	98
回想其の弐 “ユエ”の誕生	112
回想其の参 ヒュドラ	118
神代魔法を越えてゆけ	133
出発	140
お外と初チエンジ	148
This is ウサギ but 残念	155
兎とフォームチエンジと	159
敵に回したくないタイプ	164

ハルツイナ樹海	170
フェアベルゲン 前編	177
フェアベルゲン 後編	183
ハウリアの特訓	194
一方その頃、シアさんは	199
お巡りさん、こいつらです	215
先生	219
ウサギと大樹	227
町とギルド	235
宿屋で一悶着	243
痛い二つ名	248
ライセンの大迷宮と無情？	256
あのウザいミレディに天罰を！	262
短縮と再会	267
愛子の質問	273
伝えたい事、伝えておきたい事	281
割りと早く見つかった	288
ハジメ！ボルメテウス作ろうぜ！	298
願い	305
七人の騎士	318
蹂躪	328
使徒、再来	344
やがて最強は一つになる	351
支部長、気絶	358
デート……………って言ったのに！	368

魔人族	382
懐かしい街にて	393
乙女の進化とインフレ	402
無能／最強	412
アレコレ カレコレ サレコレ	424
トータス放浪記①（所要、キャラ紹介）	442
力を求む神（笑）と勇者	445
イフ√：もし勇者が決闘を申し込んでいたら	449
砂漠と病気	459
砂漠の国アンカジ公国	465
問題全部お片付け	474
チェンジ！デイメンクインフォーム！	482
会合 ～魔人族と魔王一向～	502
海上都市エリセン	508
蒼キ者、来訪	521
蒼 真空	524
救世主と姪の1ページ	529
メルジーネ攻略【前編】	534
メルジーネ攻略【中編】	551
メルジーネ攻略【後編】	557
メルジーネ攻略（完）	572
魔王の帰還	579

終わりの始まり

月曜日。それは一週間の内で最も憂鬱ゆううつな始まりの日。きつと大多数の人が、これからの一週間に溜息を吐き、前日までの天国を想ってしまう。

「ハジメくねみーよー学校いきたくね〜」

「それは僕も同じだよ、シヨウ。でも人生に保険と退路は必要だよ。」
「だなく」

黒髪の少年——南雲　ハジメと蒼髪の少年——蒼　翔（アオイシヨウ）は、なんてどうとでもない会話しながら学校に向かった。

ハジメ達は、いつものように始業チャイムがなるギリギリに登校し、徹夜でふらつく体でなんとか踏ん張り教室の扉を開けた。

その瞬間、教室の男子生徒の大半から舌打ちやら睨みやらを頂戴する。女子生徒も友好的な表情をする者はいない。無関心ならまだいい方で、あからさまに侮蔑の表情を向ける者もいる。

そんなハジメを見たシヨウはクラス中を睨んだ。そしたら生徒達はハジメから、否！ハジメの後ろにいるシヨウから目をそらしたのだ！

「よお、キモオタ！　また、徹夜でゲームか？　どうせエロゲでもしてたんだろ？」

「うわっ、キモ〜。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃん〜」

一体何が面白いのかゲラゲラと笑い出す男子生徒達。

声を掛けてきたのは檜山大介（ひやまだいすけ）といい、毎日飽きもせず日課のようにハジメに絡む生徒の筆頭だ。

近くでバカ笑いをしているのは

斎藤良樹（さいとうよしき）、

近藤礼一（こんどうれいいち）、

中野信治（なかのしんじ）

の三人で、大体この四人が頻繁にハジメに絡む。

「あれ？お前らまだ生きてたのかよ、そもそも何で生きてるのかな
この変態」

シヨウから放たれる殺気に檜山達が後退り道ができる。

なぜ檜山達がシヨウを恐れるかと言うとさかのぼることだ半年前
.....

檜山達がハジメに危害を加えた。↓それにシヨウが切れた。↓檜
山達をフルボッコにした挙げ句、全裸で体育館裏に3時間放置した。
のである。

2

事情を知った学友達はシヨウを「決して怒ら

せてはならない者」と認識し、高校も、1度は彼を退学処分にしよ
うとしたが・・・ハジメが檜山達に危害を加えられた証拠を叩き付け、
不問にさせたのだ

それ以来檜山達はシヨウに逆らえなくなつた・・・

「南雲くん、おはよう！ 今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」

シヨウが作った道をニコニコと微笑みながら一人の女子生徒がハ
ジメのもとに歩み寄った。このクラス、いや学校でもハジメにフレ
ンドリーに接してくれる数少ない例外であり、この事態の原因でもあ
る。

名を白崎香織（しらさきかおり）という。学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇る途轍とてつもない美少女だ。腰まで届く長く艶やかな黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳はひどく優しげだ。スツと通った鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる。

そんな彼女はなぜかよくハジメを構うのだ。

ハジメは、彼女からの好意で、檜山や多くの者から敵意を向けられている。

「何でゲームオタクの彼奴が白崎さんと仲良くしてるんだ!？」

「白崎さんに面倒かけておいて何で直そうとしないの?」

そんなやつかみをだ。

ハジメは「趣味の合間に人生を」…と、座右の銘を掲げている彼の父親はゲーム会社の社長。母親は人気少女漫画家——筋金入りのオタクなのだ。ちなみに俺もそこでお手伝いとして、働いている。

「あ、ああ、おはよう白崎さん」

すわっ、これが殺気か!? と言いたくなるような眼光に晒さらされながら、ハジメは頬を引き攣つらせて挨拶を返す。

シヨウはハジメに殺気を向ける奴等に殺意を向け、皆一斉に黙らせる。

——鬱陶しい。いつそ拉致しようか——

「蒼くんもおはよう」

「! ああ、おはようさん」

なんてことを考えていたら香織がシヨウに気づき挨拶してきたので軽く挨拶を返した。

ハジメ達が会話を切り上げるタイミングを図っていると、三人の男が近寄って来た。

「南雲君。蒼くん。おはよう。毎日大変ね」

「香織、また彼の世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツにやあ何を言っても無駄と思うけどなあ」

三人の中で唯一朝の挨拶をした女子生徒の名前は八重樫雫（やえがしずく）。香織の親友だ。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の目は鋭く、しかしその奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカツコイイという印象を与える。

百七十二センチメートルという女子にしては高い身長と引き締まった体、凛とした雰囲気は侍を彷彿とさせる。

事実、彼女の実家は八重樫流という剣術道場を営んでおり、雫自身、小学生の頃から剣道の大会で負けなしという猛者である。現代に現れた美少女剣士として雑誌の取材を受けることもしばしばあり、熱狂的なファンがいるらしい。後輩の女子生徒から熱を孕んだ瞳で「お姉さま」と慕われて頬を引き攣らせている光景はよく目撃されている。

次に、些いささか臭いセリフで香織に声を掛けたのが天之河光輝（あまのがわこうき）。いかにも勇者っぽいキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人だ。

サラサラの茶髪と優しげな瞳、百八十センチメートル近い高身長に細身ながら引き締まった体。誰にでも優しく、正義感も強い。

小学生の頃から八重樫道場に通う門下生で、雫と同じく全国クラスの猛者だ。雫とは幼馴染である。ダース単位で惚れている女子生徒がいるそうだが、いつも一緒にいる雫や香織に気後れして告白に至っていない子は多いらしい。それでも月二回以上は学校に関係なく告白を受けるといふのだから筋金入りのモテ男だ。

だがシヨウはそう思わない。正義感ではなくただ思い込みが激しい、ハリボテみたいな男だ。

最後に投げやり気味な言動の男子生徒は坂上龍太郎（さかがみりゅうたろう）といい、光輝の親友だ。短く刈り上げた髪に鋭さと陽気さを合わせたような瞳、百九十センチメートルの身長に熊の如き大柄な体格、見た目に反さず細かいことは気にしない脳筋タイプである。

龍太郎は努力とか熱血とか根性とかそういうのが大好きな人間なので、ハジメのように学校に来て寝てばかりのやる気がなさそうな人間は嫌いなタイプらしい。現に今も、ハジメを一瞥いちべつした後フンツと鼻で笑い興味ないとばかりに無視している。古典的な馬鹿だ。

「はくめんどいのが増えた」

「なんだと……どういう事だ、シヨウ？」

「言葉のまんまだよ。自分の事ばかりで周りを見ないトラブルメーカーやハジメに嫉妬して危害を加える雑魚を相手にするのも、薄っぺらい正しさを詰め込んだだけの小言に古典的な脳筋。そういうのの相手をするのがめんどいと言ったんだ」

「なんだとーテメエ!!」

龍太郎がシヨウに襲いかかろうとするが光輝が押さえる。

「やめろ、龍太郎！蒼も謝って！」

「俺は悪くない」

「ちよ、シヨウ謝ろう。ね、ね！」

「えく、・・・『すまんかった』、これで満足か？」

「ちよつと、蒼君!？」

「というか、ハジメもハジメだ。意見が通らないかどうかなんて言つて見ないとわかんないぞ」

「それはごもつともだけど！」

「ちよつと南雲くん！私何かしたかな！かな！」

「香織落ち着きなさい！今はそれどころじゃないでしょ！」

そんなこんなで言い争いしてたら急に教室のドアが開いた。

「皆さん何やってるんですか!?!ケンカはダメですよー」

出てきたのはこのクラスの社会担当の畑山愛子先生、愛称 愛ちやんだった。

「龍太郎君拳を納めて翔くん早く離れて」

「問題ない。この程度なら避けられる」

「何だところのやろう！」

「騒ぐな。俺は徹夜明けで眠いんだ」

「今はそれどころではありません！」

そんな感じでクラスは混沌としてきたその時、事態は起きた。

光輝の足元に純白に光り輝く円環と幾何学模様が現れたからだ。その異常事態には直ぐに周りの生徒達も気がついた。全員が金縛りにでもあつたかのように輝く紋様——俗に言う魔法陣らしきものを

注視する。

その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大した。

自分の足元まで異常が迫って来たことで、ようやく硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だ教室にいた愛子先生が咄嗟に「皆！ 教室から出て！」と叫んだのと、魔法陣の輝きが爆発したようにカツと光ったのは同時だった。

数秒か、数分か、光によって真っ白に塗りつぶされた教室が再び色を取り戻す頃、そこには既に誰もいなかった。教室の備品はそのままにそこにいた人間だけが姿を消していた。

この事件は、朝の高校で起きた集団神隠しとして、大いに世間を騒がせるのだが、それはまた別の話。

現状確認

両手で顔を庇い、目をギュツと閉じていたシヨウは、ざわざわと騒ぐ無数の気配を感じてゆっくりと目を開いた。そして、周囲を呆然と見渡す。

まず目に飛び込んできたのは巨大な壁画だった。縦横十メートルはありそうなその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうつすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

背景には草原や湖、山々が描かれ、それらを包み込むかのように、その人物は両手を広げている。美しい壁画だ。素晴らしい壁画だ。だがしかし、シヨウは興味をもたなかった。

そんなことより周囲を見渡し状況を確認する。どうやら自分達は巨大な広間にいるらしいということが分かった。

素材は大理石だろうか？ 美しい光沢を放つ滑らかな白い石造りの建築物のようで、これまた美しい彫刻が彫られた巨大な柱に支えられ、天井はドーム状になっている。大聖堂という言葉が自然と湧き上がるような荘厳な雰囲気の間である。

シヨウ達はその最奥にある台座のような場所の上にいるようだった。周囲より位置が高い。周りにはハジメと同じように呆然と周囲を見渡すクラスメイト達がいた。どうやら、あの時、教室にいた生徒は全員この状況に巻き込まれてしまったようである。

シヨウはチラリと背後を振り返った。そこには、やはり呆然としてへたり込むハジメの姿があった。

「ハジメ、大丈夫か？」

「ああ、うん。大丈夫だよ」

怪我はないようで、シヨウはホツと胸を撫で下ろす。

そして、おそらくこの状況を説明できるであろう台座の周囲を取り囲む者達への観察に移った。

そう、この広間にいるのはシヨウ達だけではない。少なくとも三十人近い人々が、シヨウ達の乗っている台座の前にいたのだ。まるで祈りを捧げるように跪き、両手を胸の前で組んだ格好で。

彼等は一様に白地に金の刺繍がなされた法衣のようなものを纏まとい、傍らに錫杖のような物を置いている。その錫杖は先端が扇状に広がっており、円環の代わりに円盤が数枚吊り下げられていた。

その内の一人、法衣集団の中でも特に豪華で煌びやかな衣装を纏い、高さ三十センチ位ありそうなこれまた細かい意匠の凝らされた烏帽子のような物を被っている七十代くらいの老人が進み出てきた。

もともと、老人と表現するには纏う覇気が強すぎる。顔に刻まれた皺や老熟した目がなければ五十代と言っても通るかもしれない。

そんな彼は手に持った錫杖をシヤラシヤラと鳴らしながら、外見によく合う深みのある落ち着いた声音でシヨウ達に話しかけた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ラングバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

そう言つて、イシユタルと名乗った老人は、好々爺然とした微笑を見せた。

「ハジメ、どうやら俺達は異世界召喚されたらしい」

「まさか、そんなことつて…」

~~~~~

現在、シヨウ達は場所を移り、十メートル以上ありそうなテーブルが幾つも並んだ大広間に通されていた。

この部屋も例に漏れず煌びやかな作りだ。素人目にも調度品や飾られた絵、壁紙が職人芸の粋を集めたものなのだろうとわかる。

おそらく、晩餐会などをする場所なのではないだろうか。上座に近い方に畑山愛子先生と光輝達四人組が座り、後はその取り巻き順に適当に座っている。シヨウは最後方だ。隣にハジメが座っている。

ここに案内されるまで、誰も大して騒がなかったのは未だ現実に認識が追いついていないからだろう。イシユタルが事情を説明すると告げたことや、カリスマレベルMAXの光輝が落ち着かせたことも理由だろうが。

教師より教師らしく生徒達を纏めていると愛子先生が涙目だった。

全員が着席すると、絶妙なタイミングでカートを押しながらメイドさん達が入ってきた。そう、生メイドである！地球産の某聖地にいるようなエセメイドや外国にいるデブプリしたおばさんメイドではない。正真正銘、男子の夢を具現化したような美女・美少女メイドである！

こんな状況でも思春期男子の飽くなき探究心と欲望は健在でクラス男子の大半がメイドさん達を凝視している。もつとも、それを見た女子達の視線は、氷河期もかくやという冷たさを宿していたのだが……

ハジメも傍に来て飲み物を給仕してくれたメイドさんを思わず凝視……しそうになってなぜか背筋に悪寒を感じ咄嗟に正面に視線を固定した。

シヨウがチラリと悪寒を感じる方へ視線を向けると、なぜか満面の笑みを浮かべた香織がジツとハジメを見ていた。シヨウは見なかったことにした。

全員に飲み物が行き渡るのを確認するとイシュタルが話し始めた。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

そうやって始めたイシュタルの話は実にファンタジーでテンプレートで、どうしようもないくらい勝手なものだった。

要約するところだ。

まず、この世界はトータスと呼ばれている。そして、トータスには大きく分けて三つの種族がある。人間族、魔族、亜人族である。

この内、人間族と魔族が何百年も戦争を続けている。

魔族は、数は人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人間族は数で対抗していたそうだ。戦力は拮抗し大



規模な戦争はここ数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが、魔人族による魔物の使役だ。

魔物とは、通常の野生動物が魔力を取り入れ変質した異形のことだ、と言われている。この世界の人々も正確な魔物の生体は分かっているにないらしい。それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力に凶悪な害獣とのことだ。

それを、魔人族が使役できるようになった。

これの意味するところは、人間族側の“数”というアドバンテージが崩れたということ。つまり、人間族は滅びの危機を迎えているのだ。それを救ってもらうために俺達を呼んだと。

—は？バツカジャナイノ！馬鹿じゃないの!!大切なことだから二回言うぞ、馬鹿じゃねえか!!!用は戦争の道具になれつつうことだろ!ばかバカ言っているが馬鹿にしてるんじゃない!馬鹿だと断定した!!!—

「あなた方を召喚したのは“エヒト様”です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があつたのですよ。あなた方という“救い”を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、“エヒト様”の御意志の下、魔人族を打倒し我々人間族を救って頂きたい—

イシユタルはどこか恍惚とした表情を浮かべている。おそらく神

託を聞いた時のことでも思い出しているのだろう。ぶつちやけキモい。

イシユタルによれば人間族の九割以上が創世神エヒトを崇める聖教教会の信徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。

シヨウが、「神の意思」を疑いなく、それどころか嬉々として従うのであろうこの世界の歪さに言い知れぬ危機感を覚えていると、突然立ち上がり猛然と抗議する人が現れた。

愛子先生だ。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようってことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずです！ あなた達の一歩はただの誘拐ですよ！」

ぷりぷりと怒る愛子先生。彼女は今年二十五歳になる社会科の教師で非常に人気がある。百五十センチ程の低身長に童顔、ボブカットの髪を跳ねさせながら、生徒のためにとあくせく走り回る姿はなんとも微笑ましく、そのいつでも一生懸命な姿と大抵空回ってしまう残念さのギャップに庇護欲を掻き立てられる生徒は少なくない。

「愛ちゃん」と愛称で呼ばれ親しまれているのだが、本人はそう呼ばれると直ぐに怒る。なんでも威厳ある教師を目指しているのだとか。

今回も理不尽な召喚理由に怒り、ウガーと立ち上がったのだ。「ああ、また愛ちゃんが頑張ってる……」と、ほんわかした気持ちでイシユタルに食ってかかる愛子先生を眺めていた生徒達だったが、次のイ

シユタルの言葉に凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

愛子先生が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですね」  
「そ、そんな……」

愛子先生が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

パニックになる生徒達。

ショウも平気ではなかったが、そんなことよりハジメの事が心配だった。

「ハジメ大丈夫か？」

「僕は大丈夫だけど、シヨウは？」

「お前が無事なら俺も大丈夫だ」

互いに心配をしあいながらシヨウたちは回りを見る

誰もが狼狽える中、イシユタルは特に口を挟むでもなく静かにその様子を眺めていた。

だが、シヨウは、なんとなくその目の奥に侮蔑が込められているような気がした。今までの言動から考えると「エヒト様選ばれておいてなぜ喜べないのか」とでも思っているのかもしれない。当たり前だる戦争道具なんざ、まつぴらごめんだ。

未だパニックが収まらない中、光輝が立ち上がりテーブルをバンツと叩いた。その音にビクツとなり注目する生徒達。光輝は全員の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？ ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ぎつと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

ギョツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。

同時に、彼のカリスマは遺憾なく効果を発揮した。絶望の表情だった生徒達が活気と冷静さを取り戻し始めたのだ。光輝を見る目はキラキラと輝いており、まさに希望を見つけたという表情だ。女子生徒の半数以上は熱っぽい視線を送っている。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ?」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ!」

「香織……」

いつものメンバーが光輝に賛同する。後は当然の流れというようにクラスメイト達が賛同していく。愛子先生はオロオロと「ダメですよ」と涙目で訴えているが光輝の作った流れの前では無力だった。

結局、全員で戦争に参加することになってしまった。おそらく、クラスメイト達は本当の意味で戦争をするということがどういうことか理解してはいないだろう。崩れそうな精神を守るための一種の現実逃避とも言えるかもしれない。だがそこに水を指す者がでた。もちろんシヨウだ。

「だいたいわかった。でそれがどうした?」

「翔君!？」

「人間が滅ぶ? 知るか。滅ぶんだったら勝手に滅べ。わざわざ俺達を巻き込んでんじやねーぞ」

「なんてことを言うんだ、困っていることがある人に手を差し伸べることは当たり前じゃないか！」

天之河を代表に何人か冷たい視線を向けてくるが殺意で黙らせる。殺意って便利だな。

「よく考えろ。知らない世界を助ける義理なんてねえだろ？ タダ働きたまもんじゃねえよ」

「ぐぬ…」

ほらこの考えなし無料で世界救おうとしてやがった。「労働には報酬を」どこの世界でも通じる常識だろ。

「……もちろん勇者様一向には存分な報酬を与える予定です」

どこか険しい眼差しで此方を見るイシユタル。

警戒されたみたいだな。だけど、これくらいの警戒ならどうってことはない。

(ただ、ちよつと天之河君と敵対するのが面倒といえは面倒だな。まあいい。とりあえず俺がすべきことはひとつ。ハジメと二人でこの世界を生き抜くことだ！)

元の世界に戻る方法はさつさとあきらめたシヨウであった。

## 救世主様はチート

翌日から早速訓練と座学が始まった。

まず、集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

騎士団長が訓練に付きつきりでもいいのかとも思ったシヨウだったが、対外的にも対内的にも『勇者様一行』を半端な者に預けるわけにはいかないということらしい。

メルド団長本人も、「むしろ面倒な雑事を副長（副団長のこと）に押し付ける理由ができて助かった！」と豪快に笑っていたくらいだから大丈夫なのだろうか？副団長に敬礼!!

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落ごうほうらいらくな性格で、「これから戦友になろうつてのにいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいだ。

シヨウ達もその方が気楽で良かった。遥はるか年上の人達から慇懃な態度を取られると居心地が悪くてしょうがない。





魔力：—∞

魔耐：ヤバイ

技能： 全属性適性・回復魔法・結界術適正・全属性耐性・物理耐性・状態異常無効・複合魔法・魔力反転・武器召喚・戦闘術・天歩・魔力変換・気配操作・魔力感知・限界突破・成長促進・偽装・重力魔法・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法・変成魔法・言語理解

|| ||

表示された。

いやマテマテ待て、なんだこれ完全にバグだろ。魔力—∞だし。しかも、なんだよ救世主って痛々しいわ！

そんなことを考えていると、メルド団長からステータスの説明がなされた。

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に“レベル”があるだろう？ それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということとは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

どうやらゲームのようにレベルが上がるからステータスが上がる訳ではないらしい。不便だな。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお

前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

メルド団長の言葉から推測すると、魔物を倒しただけでステータスが一気に上昇するということはないらしい。地道に腕を磨かなければならないようだ。めんどい。

「次に“天職”ってのがあるだろう？ それは言うなれば“才能”だ。末尾にある“技能”と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

シヨウは自分のステータスを見る。確かに天職欄に“救世主”とある。ぶっちゃけ見るたびに精神的ダメージをガンガン食らう。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

（間違いない俺のステータスは異常すぎる。特に魔力。ぶっちゃけ見せたくない。）

そんなことを考えていると技能欄に「偽装」という文字を見つけた。（まさかこれでステータスプレートを偽装できたりして……）  
そう考えてながら技能名を小声で唱えた。

『偽装』

（できた）

できちゃいました。こんなに簡単に。実はこれ技能「成長促進」の効果で今この瞬間ちよつとだけ成長したただけなのだ。

「ハジメ、どうだった？」

「僕はうん、何も言わずにこれを見て」

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・言語理解

|||||

これは酷い。でも逆に考えればこれはこれで安全かもしれない。このステータスに非戦闘職の天職のハジメを戦場に出すような真似はしないし。

「シヨウはどう？」

「俺はこんな感じだよ」

|||||

蒼 翔 17歳 男 レベル：1

天職：救世主

筋力：10



まさにチートの権化だった。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」  
「いや、あはは……」

団長の称賛に照れたように頭を掻く光輝。ちなみに団長のレベルは62。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。しかし、光輝はレベル1で既に三分の一に迫っている。成長率次第では、あっさり追い抜きそうだ。

ちなみに、技能⇨才能である以上、先天的なものなので増えたりはしないらしい。唯一の例外が「派生技能」だ。

これは一つの技能を長年磨き続けた末に、いわゆる「壁を越える」に至った者が取得する後天的技能である。簡単に言えば今まで出来なかったことが、ある日突然、コツを掴んで猛烈な勢いで熟練度を増すということだ。

光輝だけが特別かと思ったら他の連中も、光輝に及ばないながらも十分チートだった。それにどいつもこいつも戦闘系天職ばかりなのが……

そんなこんなで俺達の報告の順番が回ってきたのでメルド団長にプレートを見せた。

今まで、規格外のステータスばかり確認してきたメルド団長の表情はホクホクしている。多くの強力無比な戦友の誕生に喜んでいるだろう。

その団長の表情が「うん？」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違

いか？」というようにハジメのステータスプレートのコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そして、ジツと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをハジメに返した。

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときには便利だとか……」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

その様子にハジメを目の敵かたきにしてている男子達が食いつかないはずがない。鍛冶職ということは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立たずの可能性が大きい。

まあ、凡人だったらそうだろうが、実際は違う。鍛冶職は頼りになることこの上無い。例えば八重樫の剣術は日本刀——刀が主流だがこの世界にあるとは思えない。なので作ってもらわなければならぬ。そして刀を知っていて作る事ができるのはただ一人、ハジメだ。さらに刀だけでなく、やろうと思えば銃などの現代兵器が作れるかもしれない。もしかしたら最終的にこの中で一番強いのはハジメかもしれない。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？ 鍛冶職でどうやって戦うんだよ？ メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」  
「……いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲く。お前、そんなんで戦えるわけ？」

そんなことを考えていたら檜山達がハジメを馬鹿にしてきた。見渡せば、周りの生徒達——特に男子はニヤニヤと嗤わらっている。うざったらしいから一回シメとくか。

「いい加減にしろよクソガキが!!」

そう言いながら檜山を蹴ったら筋力10にしてはあり得ない飛びかたをした。

(スゲーな筋力)

そう思いながら変な姿勢になっている檜山に言った。

「防具や武器を作ってくれるハジメは戦闘職しか

いない俺らには一番必要な存在だ。それとも檜山、お前は何も防具を装備せずに体育館裏の時見たいに全裸で魔物の前に飛び出すわけ？ そんな死にたがりの変態と一緒に行動したくないし、それに、ステータスなら俺もハジメとほぼ一緒だよ」

俺はメルド団長に自分のステータスプレートを見せる。

ハジメの時以上に言葉に詰まるメルド団長

メルドさんの持つステータスプレートを覗き込んだ女子生徒の一人が尋ねる。

「あ、あのこの魔力反転って技能はなんですか？」

「それは、俺の魔力マイナスだろ？それを反転、つまりプラスに変える技能らしい。」

「ということとは、魔力だけ高いと……………」

ハジメに対しては嘲笑だったけど、俺に対しては哀れみの視線が多く向けられる。

ただまあ、幾らかは「ざまあみろ!」という視線も混じっている感じだ。

昨日の学校の件やイシュタルとのやり取りでヘイトを集めに集め

たし仕方ない。

次々と笑い出す生徒達の中、ウガーと怒りの声を発する人がいた。  
愛子先生だ。

「こらー！ 何を笑っているんですか！ 仲間を笑うなんて先生許しませんよ！ ええ、先生は絶対許しません！」

ちっこい体で精一杯怒りを表現する愛子先生。その姿にクラス中の男子の毒気を抜かれた。

愛子先生はハジメと俺に向き直ると励まげますように肩を叩いた。

「南雲君、蒼君、気にすることはありませんよ！ 先生だって非戦系？とかいう天職ですし、ステータスだってほとんど平均です。南雲君達だけじゃありませんからね！」

そう言つて「ほらっ」と愛子先生はシヨウ達に自分のステータスを見せた。

|||||

畑山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・



||  
||

ハジメは死んだ魚のような目をして遠くを見だした。シヨウは、

「先生、それ止め刺してますよ。」

と突っ込んだ。

「あれっ、どうしたんですか！ 南雲君！」とハジメをガクガク揺さぶる愛子先生。

確かに全体のステータスは低いし、非戦系天職だろうことは一目でわかるのだが……魔力だけなら勇者に匹敵しており、技能数なら超えている。糧食問題は戦争には付きものだ。ハジメのようによくくらすも優秀な代わりのいる職業ではないのだ。つまり、愛子先生も十二分にチートだった。

「あらあら、愛ちゃんったら止め刺しちゃったわね……」

「な、南雲くん！ 大丈夫!？」

「先生、ハジメのライフはもう0です」

反応がなくなったハジメを見て雫が苦笑いし、香織が心配そうに駆け寄る。愛子先生は「あれえ〜？」と首を傾げている。相変わらず一生懸命だが空回る愛子先生にほっこりするクラスメイト達。

(とりあえず、ハジメにヘイトがいかなくなっただけいいか)



技能・全属性適性（＋想像構成）（＋複数同時構成）（＋遅延発動）・回復魔法（＋想像構成）（＋遅延発動）・結界術適正（＋想像構成）（＋遅延発動）・全属性耐性（＋魔法吸収）・物理耐性・状態異常無効・複合魔法・武器召喚（＋瞬間装備）（＋武器保管）・戦闘術（＋我流流派）・天歩（＋瞬光）・魔力変換（＋衝撃変換）・気配操作（＋気配遮断）（＋気配閔知）・魔力感知（＋特定閔知）・限界突破・成長促進（＋アシスト）・偽装（＋外見変化）（＋力量操作）・重力魔法・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法・変成魔法・魔力反転（＋魔力操作）・言語理解

|||||

これが、二週間の筋トレの成果である。へゝの中のステータスは『偽装』で隠しているものである。あと、『偽装』の派生技能に（＋力量操作）とあるがこれは、『偽装』で偽ってる通りのことしか出来なくするいわゆるちようどよく手を抜く能力である。ちなみにハリボテ勇者の天之河の成果がこちら。

|||||

天之河光輝 17歳 男 レベル：10

天職：勇者

筋力：200

体力：200

耐性：200

敏捷：200

魔力：200

魔耐：200

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・

縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解



規模に比例して魔法陣に書き込む式も多くなり、それは必然的に魔法陣自体も大きくなるということに繋がります―

―例えば、RPG等で定番の“火球”を直進で放つだけでも、一般に直径十センチほどの魔法陣が必要になる。基本は、属性・威力・射程・範囲・魔力吸収（体内から魔力を吸い取る）の式が必要とし、後は誘導性や持続時間等付加要素が付く度に式を加えていき魔法陣が大きくなるということです―

―この原則にも例外があります。それが適性です―

―適性とは、言ってみれば体質によりどれくらい式を省略できるかという問題であり、例えば火属性の適性があれば、式に属性を書き込む必要はなく、その分式を小さくできると言った具合です―

―この省略はイメージによって補完され、式を書き込む必要がない代わりに、詠唱時に火をイメージすることで魔法に火属性が付加されるのです―

―大抵の人間はなんらかの適性を持っているため、上記の直径十センチ以下が平均であるのですが、ショウ様の場合、全く適性がないことになっているため、基本五式に加え速度や弾道・拡散率・収束率等事細かに式を書かなければならなかった―

―ちなみに偽装を解いたら陣なしの詠唱のみで発動可能です―

―そのため、“火球”一発放つのに直径二メートル近い魔法陣を必要としてしまい、実戦では全く使える代物ではなかったのです―

―ちなみに、魔法陣は一般には特殊な紙を使った使い捨てタイプか、鉱物に刻むタイプの二つがあり、前者は、バリエーションは豊か

になるが一回の使い捨てで威力も落ちます。後者は嵩張るので種類は持てないが、何度でも使えて威力も十全というメリット・デメリットがある。イシユタル達神官が持っていた錫杖は後者の方です――

――そんなわけで近接戦闘はステータス的に無理、魔法は適性がなくて無理、頼みの技能の「魔力反転」は使いものにならないと言うことで手軽な装備をもらっただけです――

――とまあこのようにクラスメイト達から無能のレッテルを貼られております――

――解せない。何故シヨウ様が本気を出さないのか？何故無能のレッテルを受け入れているのか？はつきり言って理解できません――

――しかも、自分のことではなく、ハジメ様の心配ばかり！確かに彼は強くなることは間違いないのに何故あそこまで気にかけるのでしょうか？理解できません!!――

アシスト。そのくらいにしてくれ。読者が困る

――私としたことが、失礼いたしました。お詫びとしては何ですがこの世界についていくつか説明させていただきます――

――亜人族と魔族の説明をいたします――

――二つ前の話で出てきた亜人族と言う簡単に言えばケモミミ、ケモシツポの種族が存在します。亜人族は大陸の東の巨大な樹海の中でひっそりと生きているらしいです――

――亜人族は被差別種族であり、基本的に大陸東側に南北に渡って広がる「ハルツエナ樹海」の深部に引き籠っている。なぜ差別されてい

るのかというと彼等が一切魔力を持っていないからです――

――神代において、エヒトを始めとする神々は神代魔法にてこの世界を創ったと言い伝えられている。そして、現在使用されている魔法は、その劣化版のようなものと認識されており、それ故、魔法は神からのギフトであるという価値観が強いのです。もちろん、聖教教会がそう教えているのですが――

――これは余談ですがシヨウ様はその神代魔法を使う事ができます。しかも六つ。そのうちのひとつ、空間魔法で、第四の壁の向こうにある程度干渉することができます。さすがはシヨウ様！略してさすシヨウ!!………話を戻します――

――そのような事情から魔力を一切持たず魔法が使えない種族である亜人族は神から見放された悪しき種族と考えられているのであり、そのため、奴隷以外、まず外では見つからないらしいです――

――じゃあ、魔物はどうなるんだよ？ という声が聞こえてきますが、魔物はあくまで自然災害的なものとして認識されており、神の恩恵を受けるものとは考えられていない。ただの害獣らしい。なんともご都合解釈なことですね――

――なお、魔人族は聖教教会の“エヒト様”とは別の神を崇めているらしいのですが、基本的な亜人に対する考え方は同じらしいです――

――この魔人族は、全員が高い魔法適性を持っており、人間族より遙かに短い詠唱と小さな魔法陣で強力な魔法を繰り出すらしいです。数は少ないのですが、南大陸中央にある魔人の王国ガーランドでは、子供まで相当強力な攻撃魔法を放てるようで、ある意味、国民総戦士の国と言えるかもしれないようです――

—人間族は、崇める神の違いから魔人族を仇敵と定め（聖教教会の教え）、神に愛されていないと亜人族を差別し、魔人族も同じだそうです。亜人族は、もう放っておいてくれといった感じでしょうか？ どの種族も実に排他的であります—

—次に海上の町エリセンの説明です—

—【海上の町エリセン】は海人族と言われる亜人族の町で西の海の沖合にあり、亜人族の中で唯一、王国が公で保護している種族らしいです—

—その理由は、北大陸に出回る魚介素材の八割が、この町から供給されているからであります。全くもって身も蓋もない理由ですね。「壮大な差別理由はどこにいった？」と、この話を聞いたときシヨウ様は内心盛大にツツコミを入れたものです—

—ちなみにですが、西の海に出るには、その手前にある【グリューエン大砂漠】を超えなければなりません。この大砂漠には輸送の中継点として重要なオアシス【アンカジ公国】や【グリューエン大火山】がある。この【グリューエン大火山】は七大迷宮の一つです—

—七大迷宮とは、この世界における有数の危険地帯を言います—

—ハイリヒ王国の南西、グリューエン大砂漠の間にある【オルクス大迷宮】と先程の【ハルツエナ樹海】もこれに含まれます—

—七大迷宮でありながらなぜ三つかというと、他は古い文献などからその存在は信じられているのだが詳しい場所が不明で未だ確認はされていないからです—

—一応、目星は付けられており、大陸を南北に分断する【ライセン



大峡谷」や、南大陸の「シユネー雪原」の奥地にある「氷雪洞窟」がそうではないかと言われています――

――次にこの世界の帝国の説明をいたします――

――帝国とは、「ヘルシャー帝国」のことで、この国は、およそ三百年前の大規模な魔人族との戦争中にとある傭兵団が興した新興の国で、強力な傭兵や冒険者がわんさかと集まった軍事国家らしいです。実力至上主義を掲げており、かなりブラックな国のようです――

――この国には『亜人族だろうがなんだろうが使えるものは使う』という発想で、亜人族を扱った奴隷商が多く存在しています――

――帝国は、王国の東に「中立商業都市フューレン」を挟んで存在しています――

――それでは次に中立商業都市フューレンの説明をいたします。

――「フューレン」は文字通り、どの国にも依らない中立の商業都市です。経済力という国家運営とは切っても切り離せない力を最大限に使い中立を貫いています。欲しいモノがあればこの都市に行けば手に入ると言われているくらい商業中心の都市であります――

――以上で、説明を終わります――

――はいご苦勞様でした。ではそろそろハジメに頼んだ武器ができてそうだし行きますか――

そう思い俺は、支度を整え、訓練場まで歩き出す。

## 軽い遊び（原作だと虐めの回）

訓練施設に到着すると既に何人もの生徒達がやって来て談笑したり自主練したりしていた。どうやら案外早く着いたようである。シヨウは、自主練でもしてハジメ達を待つかと、支給された西洋風の細身の剣を取り出した。

と、その時、唐突に後ろから衝撃を受け、転びそうになったがそれでもなかった。顔をしかめながら背後を振り返ったシヨウは予想通りの面子に心底うんざりした表情をした。

そこにいたのは、檜山大介率いる変態組（シヨウ命名）である。訓練が始まってからというもの、ことあるごとにシヨウとハジメにちよつかいをかけてくるのだ。

「よお、蒼。なにしてんの？ お前が剣持っても意味ないだろう。マジ無能なんだしよ〜」

「ちよつ、檜山言い過ぎ！ いくら本当だからってさ〜、ギャハハハ」  
「なんで毎回訓練に出てくるわけ？ 俺なら恥ずかしくて無理だわ！

ヒヒヒ」

「なあ、大介。こいつさあ、なんかもう哀れだから、俺らで稽古つけてやんね？」

一体なにがそんなに面白いのかニヤニヤ、ゲラゲラと笑う変態達。

「ああ？ おいおい、信治、お前マジ優し過ぎじゃね？ まあ、俺も優しいし？ 稽古つけてやってもいいけどさあ〜」

「おお、いいじゃん。俺ら超優しいじゃん。無能のために時間使つてやるとかさ〜。蒼〜感謝しろよ？」

そんなことを言いながら馴れ馴れしく肩を組み人目につかない方へ連行していく檜山達。それにクラスメイト達は気がついたようだが見て見ぬふりをする。

(まあ、人気の無い方が都合がいいか。さらつと倒してハジメと合流しよう。『偽装』解除)

そうして肩にある檜山達の腕を払った。

「変態ごときが、俺についていけるとでも?」

「はあ? 俺らがわざわざ無能のお前を鍛えてやろうつてのに何言つてんの? マジ有り得ないんだけど。お前はただ、ありがとうございませつて言つてればいいんだよ!」

そう言つて、脇腹を殴る檜山。だか、シヨウは痛くも痒くもない。

しかし、檜山達も段々暴力にためらいを覚えなくなってきているようだ。思春期男子がいきなり大きな力を得れば溺れるのは仕方ないこととはいえ、その矛先を向けられては堪ったものではない。ここらで一回シメとくか。

やがて、訓練施設からは死角になっている人気のない場所に来ると、シヨウは距離を取った。

「ほら、来いよ。特別に相手してやる。」

そう挑発すると檜山、中野、斎藤、近藤の四人がシヨウを取り囲む。シヨウは鼻で笑った。

「チョーシこいてんじゃねえぞ、テメエ、殺すぞ!」

「ハ、殺れるもんならやってみる！」

次の瞬間、背後から背中を強打された。近藤が剣の鞘で殴ったのだ。がしかし、シヨウには効かない、更に追撃が加わる。

「ほら、なに突っ立ってんだよ？ 焦げるぞく。ここに焼撃を望む——『火球』」

中野が火属性魔法『火球』を放ったがシヨウが瞬時に——の魔力で、張った膜に当たり魔法が霧散した。

「『ハア!!』」

「どうした？ その程度か？」

「こ、ここに風撃を望む——『風球』」

焦りながら斎藤が魔法を放った。風の塊が結界に当たり霧散する。

魔法自体は一小節の下級魔法だ。それでもプロボクサーに殴られるくらいの威力はある。それは、彼等の適性の高さで魔法陣が刻まれた媒介が国から支給されたアーティファクトであることが原因だ。

だが、シヨウには全く効かない。理由はさつき張った——の魔力結界だ。——の魔力が普通の魔力にぶつかり、中和され霧散した。だから魔法が効かない。

「さて、こちらもぼちぼちやるか」

そう言つて、シヨウは——の魔力を＋に変え、重力魔法を発動。変態四人はその場に伏せた。

「ハハッ、いい格好になったじゃないか」

鼻で笑って煽った後、そのまま立ち去ろうとしたら

「何やってるの!？」

その声に「やべっ」という顔をするシヨウと地面にひれ伏したままの檜山達。それはそうだろう。その女の子は檜山達が惚れている香織だったのだから。香織だけでなく雫や光輝、龍太郎そして、ハジメもいる。

「おう、ハジメ。白崎はん。八重樫はん。見ての通りだ」

「見ての通りって、状況がわからないんだけど……!」

「喧嘩を売ってきた変態に身の程を教えただけだ。」

簡単に説明をして、その場を後にしようとするシヨウだったがこの状況を見過ごささない男がいる。天之河だ。

「おい、蒼!いくらなんでもこれはやり過ぎだ!!」

「何を言ってるんだ。死ぬよりはましさ」

「死ぬよりはって、殺す気だったのか!？」

「何を言ってるんだい、天之河。俺達は戦争をやるんだ、人殺しは当たり前だろ」

でも、こいつには殺し合いの自覚はないか。

「だとしても、味方を殺すのは間違っている」

「先に手を出したのはそっちだ。でも実際死んで無いし話はこれで終わりな」

めんどくなくなったので無理矢理話を切った。やっぱこいつと話していると疲れる。

「おいーま……」

「やめなさい!光輝」

天之河がシヨウを呼び止めようとしたがそれを八重樫が制止する。

「ハジメ、行こう。もう訓練が始まる」

「うん。それじゃ僕とシヨウは先に行くから」

ハジメを促して俺は訓練施設に戻る。

## 誓いの夜

—解説入ります—

—【オルクス大迷宮】—

—それは、全百階層からなると言われている大迷宮であり、七大迷宮の一つで、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現します—

—にもかかわらず、この迷宮は冒険者や傭兵、新兵の訓練に非常に人気があります。それは、階層により魔物の強さを測りやすいからということと、出現する魔物が地上の魔物に比べ遥かに良質の魔石を体内に抱えているからです—

—魔石とは、魔物を魔物たらしめる力の核をいいます。強力な魔物ほど良質で大きな核を備えており、この魔石は魔法陣を作成する際の原料となる。魔法陣はただ描くだけでも発動しますが、魔石を粉末にし、刻み込むなり染料として使うなりした場合と比較すると、その効果は三分の一程度にまで減退します—

—要するに魔石を使う方が魔力の通りがよく効率的ということですね。その他にも、日常生活用の魔法具などには魔石が原動力として使われており、魔石は軍関係だけでなく、日常生活にも必要な大変需要の高い品なのであります—

—ちなみですが、良質な魔石を持つ魔物ほど強力な固有魔法を使います。固有魔法とは、詠唱や魔法陣を使えないため魔力はあっても多彩な魔法を使えない魔物を使う唯一の魔法であります。一種類しか使えない代わりに詠唱も魔法陣もなしに放つことができます。魔物が油断ならない最大の理由です—

ハジメ達は、メルド団長率いる騎士団員複数名と共に、「オルクス大迷宮」へ挑戦する冒険者達のための宿場町【ホルアド】に到着した。新兵訓練によく利用するようで王国直営の宿屋があり、そこに泊まる。

久しぶりに普通の部屋を見た気がするハジメはベッドにダイブし「ふう〜」と気を緩めた。全員が最低でも二人部屋なのにハジメだけ一人部屋だ。「まあ、気楽でいいさ」と、少し負け惜しみ気味に呟くハジメ。寂しくなんてないっただらないのだ……

明日から早速、迷宮に挑戦だ。今回は行っても二十階層までらしく、それくらいなら、ハジメやショウのような最弱キャラがいても十分カバーできると団長から直々に教えられた。

ハジメとしては面倒掛けて申し訳ありませんと言う他ない。むしろ、王都に置いて行ってくれてもよかったのに……とは空気を読んで言えなかったヘタレなハジメである。

しばらく、借りてきた迷宮低層の魔物図鑑を読んでいたハジメだが、少しでも体を休めておこうと少し早い眠りに入ることにした。学校生活で鍛えた居眠りスキルは異世界でも十全に発揮される。

しかし、ハジメがウトウトとまどろみ始めたその時、ハジメの睡眠を邪魔するように扉をノックする音が響いた。

少し早いと言っても、それは日本で徹夜が日常のハジメにしてはということで、トータスにおいては十分深夜にあたる時間。怪しげな深夜の訪問者に、すわっ、檜山達かつ！ と、ハジメは、緊張を表情に浮かべる。

しかし、その心配は続く声で杞憂に終わった。



「ハジメ、起きてるか？俺だ、シヨウだ」

「南雲くん、起きてる？ 白崎です。ちよつと、いいかな？」

「南雲君、八重樫です。少しいい？」

なんですと？ と、一瞬硬直するも、ハジメは慌てて扉に向かう。そして、鍵を外して扉を開けると、そこには半袖短パンのシヨウと純白のネグリジェにカーディガンを羽織っただけの香織と簡素な寝巻きを着た雫が立っていた。

「……なんでやねん」

「えっ？」

ある意味、衝撃的な光景に思わず関西弁でツツコミを入れてしまうハジメ。よく聞こえなかったのか香織はキョトンとしている。雫は笑っている。

ハジメは、慌てて気を取り直すと、なるべく香織達を見ないように用件を聞く。いくらリアルに興味が薄いとはいえ、ハジメも立派な思春期男子。今の香織達の格好は少々刺激が強すぎる。

「あーいや、なんでもないよ。えつと、どうしたのかな？ 何か連絡事項でも？ それとも『アレ』を取りに来た？」

「ううん。その、少し南雲くんと話したくて……」

「右に同じく。あと、エモノを取りに来た。」

「私もそんなところよ。」

「そ、そう………どうぞ」

最も有り得そうな用件を予想して尋ねるが、香織は、あっさり否定して弾丸を撃ち込んでくる。しかも上目遣いという炸薬付き。効果は抜群だ！ 気がつけば扉を開け部屋の中に招き入れていた。俺を

無視して。

「うん！」

「それでは」

「お邪魔します。」

なんの警戒心もなく嬉しそうに部屋に入り、香織はテーブルセットに、雫ベットに座り、俺は壁に寄りかかった。

若干混乱しながらも、ハジメは無意識にお茶の準備をする。といっても、ただ水差しに入れたティーパックのようなものから抽出した水出しの紅茶モドキだが。シヨウ達と自分の分を用意してシヨウ達に差し出す。そして、香織の向かいの席に座った。

「ありがとう」

「どうも」

「いただくわ」

やっぱり嬉しそうに紅茶モドキを受け取り口を付ける香織。窓から月明かりが差し込み純白の彼女を照らす。黒髪にはエンジェルリングが浮かび、まるで本当の天使のようだ。

ハジメは、欲情することもなく純粹に神秘に彩られた香織に見蕩れた。香織がカップを置く「カチャ」という音に我を取り戻し、気を落ち着かせるために自分の紅茶モドキを一気に飲み干す。ちよつと気管に入ってむせた。恥ずかしい。

香織と雫がその様子を見てくすくすと笑う。ハジメは恥ずかしさを誤魔化すために、少々、早口で話を促した。

「それで、話したいって何かな。明日のこと？」

ハジメの質問に「うん」と頷き、香織はさつきまでの笑顔が嘘のように思いつめた様な表情になった。

「明日の迷宮だけど……南雲くんには町で待っていて欲しいの。教官達やクラスの皆は私が必ず説得する。だから！　お願い！」

話している内に興奮したのか身を乗り出して懇願する香織。ハジメは困惑する。ただハジメが足手まといだからというには少々必死過ぎないかな？　と。

「えっと……確かに僕は足手まといとだは思うけど……流石にここまで来て待っているっていうのは認められないんじゃない？」

「そうだぞ、白崎はん。そんなワガママ今さら通るわけ……」

「違うの！　足手まといだとかそういうことじゃないの！」

香織は、ハジメの誤解に慌てて弁明する。自分でも性急過ぎたと思っただのか、手を胸に当てて深呼吸する。少し、落ち着いたようで「いきなり、ゴメンね」と謝り静かに話し出した。

「あのね、なんだか凄く嫌な予感がするの。さつき少し眠ったんだけど……夢をみて……南雲くんが居ただけど……声を掛けても全然気がついてくれなくて……走っても全然追いつけなくて……それで最後は……」

その先を口に出すことを恐れるように押し黙る香織。ハジメは、落ち着いた気持ちで続きを聞く。

「最後は？」

香織はグツと唇を噛むと泣きそうな表情で顔を上げた。

「……消えてしまうの……」

「……そっか」

しばらく静寂が包む。

再び俯く香織を見つめるハジメ。

確かに不吉な夢だ。しかし、所詮夢である。そんな理由で待機が許されるとは思えないし、許された場合はクラスメイトから批難の嵐だろう。いずれにしろ本格的に居場所を失う。故に、ハジメに行かないという選択肢はない。

そんな時、シヨウが口を開く。

「でもそれは夢だろ？」

「そ、そうだよ、夢は夢だよ、白崎さん。今回はメルド団長率いるベテランの騎士団員がついているし、天之河君みたいな強い奴も沢山いる。むしろ、うちのクラス全員チートだし。敵が可哀想なくらいだよ。僕は弱いし、実際に弱いところを沢山見せているから、そんな夢を見たんじゃないかな？」

そうやって、香織を安心させるために語りかけるハジメの言葉に耳を傾けながら、なお、香織は、不安そうな表情でハジメを見つめる。

再びシヨウが口を開く

「そんなに心配なら、自分で守ればいい」

「え？」

とんでもないことを言いはなった。

「白崎はんは“治癒師”だろ？ 治癒系魔法に天性の才を示す天職。

何があっても……たとえば、ハジメが大怪我することがあっても、白崎はんなら治せるよな。その力で守ってもらえるかな？ それなら、絶対ハジメは大丈夫だ」

しばらく、香織は、ジューとハジメを見つめる。ここは目を逸らしたらいけない場面だと羞恥に身悶えそうになりながらハジメは必死に耐える。

「それに、俺もハジメを守る。たとえ神であってもハジメには指一本触れさせない。」

それは静かに、力強い言葉だった。そんな時、雫から質問が入った。

「そういえばだけどき、蒼君は何で南雲君を守ろうとするの？」

「ちよつと長くなるけどいいか？それはな、……」

要約するところだ。シヨウは不慮の事故により、両親を無くし、祖母と4つ下の妹の三人で貧しく暮らしていた。ある日シヨウが小学3年の時、貧乏な事を理由に虐めてくる年上達から土下座で守ってくれたのだ。しかも、一回だけではなく何回も！しかも土下座で!!それだけ

どんなに弱くても、誰かのために動けるハジメの心の強さに心打たれた。それだけではなく、ハジメは父母に頼み、シヨウをお手伝いとして、迎えてもらい、妹共々、色々とお世話になったのだ。この恩を返したくて、シヨウはハジメを助け、守るのだ！

そんな話を聞いた香織は微笑みながら、そんな恥ずかしい話を聞いて顔を真っ赤にしているハジメに言った。

「変わらないね。南雲くんは」

「？」

香織の言葉に訝しそうな表情になるハジメ。その様子に香織はく

すくすと笑う。

「南雲くんは、私と会ったのは高校に入ってからだと思ってるよね？  
でもね、私は、中学二年の時から知ってたよ」

その意外な告白に、ハジメは目を丸くする。必死に記憶を探るが全く覚えていない。

うくと唸るハジメに、香織は再びくすりと笑みを浮かべた。

「私が一方的に知ってるだけだよ。……私が最初に見た南雲くんは土下座してたから私のことが見えていたわけないしね」

「ま、また土下座!？」

ハジメは、なんて格好悪い所を見られていたんだ！ と今度は違う意味で身悶えしそうになる。そして、人目につくところで土下座つていつ、どこでだ!？ と必死に記憶を探る。一人、百面相するハジメに香織が話を続ける。

「うん。不良っぽい人達に囲まれて土下座してた。唾吐きかけられても、飲み物かけられても……踏まれても止めなかったね。その内、不良っぽい人達、呆れて帰っちゃった」

「そ、それはまたお見苦しいところを……」

ハジメは軽く死にたい気分だ。厨二病を患っていた時の黒歴史とタメを張るくらい最悪のシーンを見られていたらしい。もう、乾いた笑みしか出てこない。隠しておいたエロ同人誌を母親が綺麗に整理して本棚に並べ直していた時と同じくらい乾いた笑みだ。

しかし、香織は優しげな眼差しをしており、その表情には侮蔑も嘲笑もなかった。

「ううん。見苦しくなんてないよ。むしろ、私はあれを見て南雲くんのこと凄く強くて優しい人だって思ったもの」  
「……は？」

ハジメは耳を疑った。そんなシーンを見て抱く感想ではない。もしや、白崎には特殊な性癖が!? と途轍もなく失礼なことを想像するハジメ。

「だって、南雲くん。小さな男の子とおばあさんのために頭を下げてたんだもの」

その言葉に、ハジメは、ようやく思い当たった。確かに、中学生の頃、そんなことがあったと思い出す。

男の子が不良連中にぶつかっただけ、持っていたタコ焼きをべつとりと付けてしまったのだ。男の子はワンワン泣くし、それにキレた不良がおばあさんにイチャモンつけるし、おばあさんは怯えて縮こまり、中々大変な状況だった。

偶然通りかかったハジメもスルーするつもりだったが、おばあさんが、おそらくクリーニング代だろう——お札を数枚取り出すも、それを受け取った後、不良達が、更に恫喝しながら最終的には財布まで取り上げた時点でつい体が動いてしまった。

といっても喧嘩など無縁の生活だ。厨二的な必殺技など家の中でしか出せない。仕方なく相手が引くくらいに土下座をしてやったのだ。公衆の面前での土下座は、する方は当然だが、される方も意外に恥ずかしい。というか居た堪れない。目論見通り不良は帰っていった。

「強い人が暴力で解決するのは簡単だよ。光輝くんとかよくトラブルに飛び込んでいって相手の人を倒してるし……でも、弱くても立ち向かえる人や他人のために頭を下げられる人はそんなにいないと思う。……実際、あの時、私は怖くて……自分は雫ちゃん達みたいに強くないからって言い訳して、誰か助けてあげてって思うばかりで何もしなかった」

「白崎さん……」

「ハジメ、その優しさはお前の強さだ。天之河も坂上も檜山も持っていないお前だけの強さだ。俺はお前の友であることを誇りに思う」

「シヨウ」

「だから、私の中で一番強い人は南雲くんなんだ。高校に入って南雲くんを見つけたときは嬉しかった。……南雲くんみたいになりたくて、もっと知りたくて色々話し掛けたりしてたんだよ。南雲くん直ぐに寝ちやうけど……」

「あはは、ごめんなさい」

「それはしょうがないだろ」

香織が自分を構う理由が分かったハジメは、香織の予想外の高評価に恥ずかしいやら照れくさいやらで苦笑いする。

「だからかな、不安になったのかも。迷宮でも南雲くんが何か無茶するんじゃないかって。不良に立ち向かった時みたいに……でも、うん」

香織は決然とした眼差しでハジメを見つめた。

「私が南雲くんを守るよ」

「そこは、『私達が』ではないかい？」

シヨウがいらん突っ込みを入れつつハジメはその決意を受け取る。真っ直ぐ見返し、そして頷いた。

「ありがとう、二人とも」



それからしばらく雑談した後、八重樫とシヨウは頼んであった武器を受け取り、香織達は部屋に帰っていった。

ハジメはベッドに横になりながら、思いを馳せる。なんとしても自分に出来ることを見つけ出し、無能の汚名を返上しなければならぬ。いつまでもヒロインポジなど、納得できるものではない。ハジメは決意を新たにし眠りについた。

~~~~~

深夜、香織達がハジメの部屋を出て自室に戻っていくその背中を無言で見つめる者がいたことを誰も知らない。その者の表情が醜く歪んでいたことも知る者はいない。

オルクス大迷宮

現在、シヨウ達は【オルクス大迷宮】の正面入口がある広場に集まっていた。

シヨウとしては薄暗い陰気な入口を想像していたのだが、

「ハハ、テーマパークかよ」

まるでテーマパークの入場ゲートのようなしつかりした入口があり、受付窓口まであった。制服を着たお姉さんが笑顔で迷宮への出入りをチェックしている。

なんでも、ここでステータスプレートをチェックし出入りを記録することで死亡者数を正確に把握するのだとか。戦争を控え、多大な死者を出さない措置だろう。

入口付近の広場には露店なども所狭しと並び建っており、それぞれの店の店主がしのぎを削っている。まるでお祭り騒ぎだ。

浅い階層の迷宮は良い稼ぎ場所として人気があるようで人も自然と集まる。馬鹿騒ぎした者が勢いで迷宮に挑み命を散らしたり、裏路地宜しく迷宮を犯罪の拠点とする人間も多々いたようで、戦争を控えながら国内に問題を抱えたくないと言った冒険者ギルドと協力して王国が設立したのだとか。入場ゲート脇の窓口でも素材の売買はしてくるので、迷宮に潜る者は重宝しているらしい。

シヨウ達は、お上りさん丸出しでキョロキョロしながらメルド団長の後をカルガモのヒナのように付いていった。

~~~~~

迷宮の中は、外の賑やかさとは無縁だった。

縦横五メートル以上ある通路は明かりもないのに薄ぼんやり発光しており、松明や明かりの魔法具がなくてもある程度視認が可能だ。緑光石という特殊な鉱物が多数埋まっているらしく、「オルクス大迷宮」は、この巨大な緑光石の鉱脈を掘って出来ているらしい。

一行は隊列を組みながらゾロゾロと進む。

天之河達が魔物達を国から支給された【アーティファクト】で倒す中、俺たちは……………

ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！

「くそ、外した。シヨウ、八重樫さん、そつちに二匹いった」

「おう！セイハ！」

「任せて！ハア！」

素晴らしいながら、シヨウは魔物を串刺しにしながら弾丸を撃ち込み、雫は魔物を輪切りにした。

「やっぱこの武器スゲーわ。流石はハジメ」

「この切れ味、流石ね。南雲君」

「いやいや、二人ともの方がぜんぜんすごいよ」

「なにをいってるの、南雲くんそんなすごい人の武器を作ったのは南雲くんだよ！」

そう、シヨウと雫。二人が使っているのはハジメが作った武器だ。

——ここから先はわたくし、アシストが解説します——

——まずハジメ様が持つ全長約三十五センチ。六連の回転式弾倉。

長方形型のバレル。燃烧石という可燃性の鉱石を粉末状にして圧縮して入れてある鉱石製の弾丸。即ち、大型のリボルバー式拳銃。その名も「雷霆銃・ドンナー」。この世界に初めて誕生した現代兵器です――

――次にシヨウ様が使っているのはSFチックなライフルに、刀のような刃がついたいわゆる、リボルバーソードと言う物です。その名も「ブルー・フアング」。この世界に2番目に誕生した兵器でございます――

――最後に八重樫さんが使っている刀。彼女のもつ刀はまるで光を吸収するような漆黒の刀身を持ち。刃紋はなく、僅かな反りが入っており、先端から少しの間は両刃になっています。所謂、小鳥丸造りと呼ばれる刀に酷似しています。ハジメ様は日本刀自体には詳しくないが、雫から聞かされた日本刀の話を元に作り上げた一品であります――

「これならハジメも十分チートじゃね?」

「そんなに謙遜しなくていいわよ、南雲君。この刀ほんとすごい切れ味なんだから」

「そうだよ、南雲くんはスツゴいんだよ!」

「いや、あははは」

そんな会話をしていると、後ろの方から、驚愕の聲が上がった。

「刀に………銃!?!」

「何だ? あれは【アーティファクト】か?」

驚くクラスメイト達。メルドはシヨウ達の持つ

それを【アーティファクト】なのかとクラスメイト達に問うた

「あ、あれは俺達の世界の武器です……でも、何で南雲達があんなものを!?!」

檜山がメルドの疑問に答えた。そして、シヨウが口を開く。



「あらゆる魔法を無効化する。それが俺の力だ！俺は無能じゃねえんだよ。わかったか？特に変態四人！」

そう宣言し、シヨウは無能のレットルを返上した。

一行は二十階層を探索する。

そんな中、香織がなにかを見つけた。

「……あれ、何かな？キラキラしてる……」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。まるでインデイコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になった。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

—アシスト、グランツ鉱石について教えて—

—了解。グランツ鉱石とは、言わば宝石の原石みたいなものです。特に何か効能があるわけではないですが、その涼やかで煌びやかな輝きが貴族のご婦人ご令嬢方に大人気であり、加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るらしいです—

—流石はアシスト、いい解説だ。—

「素敵……」

香織が、ハジメの簡単な説明を聞いて頬を染めながら更にうっとりとする。そして、誰にも気づかれない程度にチラリとハジメに視線を

向けた。もつとも、俺と雫ともう一人だけは気がついていたが……

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言つて唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。

メルド団長は、止めようと檜山を追いかける。同時に騎士団員の一人がフェアスコープで鉱石の辺りを確認する。そして、一気に青褪めた。

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

しかし、メルド団長も、騎士団員の警告も一歩遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられて不用意に触れた者へのトラップだ。美味しい話には裏がある。世の常である。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に合わなかった。

部屋の中に光が満ち、ハジメ達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

ハジメ達は空気が変わったのを感じた。次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

尻の痛みに呻き声を上げながら、ハジメは周囲を見渡す。クラスメイトのほとんどはハジメと同じように尻餅をついていたが、メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は既に立ち上がって周囲の警戒をしている。

どうやら、先の魔法陣は転移させるものだったらしい。現代の魔法使いには不可能な事を平然とやってのけるのだから神代の魔法は規格外だ。

ハジメ達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざつと百メートルはありそうだ。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑らせれば掴むものもなく真つ逆さまだ。ハジメ達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。



「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が……

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な  
眩きがやけに明瞭に響いた。

まさか……ベヒモス……なのか……

## ベヒモス

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数がおびただしい。

小さな無数の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物「トラウムソルジャー」が溢れるように出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けているようだ。

しかし、数百体のガイコツ戦士より、反対の通路側の方がヤバイとシヨウ達は感じていた。

十メートル級の魔法陣からは体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物が出現したからだ。もつとも近い既存の生物に例えるならトリケラトプスだろうか。ただし、瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているという付加要素が付くが……

メルド団長が呟いた「ベヒモス」という魔物は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアア!!」

「ッ!？」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

「待つて下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ ヤツは六十五階層の魔物。かつて、『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！ さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

メルド団長の鬼気迫る表情に一瞬怯むも、「見捨ててなど行けない！」と踏み止まる光輝。

どうにか撤退させようと、再度メルドが光輝に話そうとした瞬間、ベヒモスが咆哮を上げながら突進してきた。このままでは、撤退中の生徒達を全員轢殺してしまうだろう。

そうはさせるかと、ハイリヒ王国最高戦力が全力の多重障壁を張る。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず——『聖絶』!!』」

二メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠唱、さらに三人同時発動。一回こつきり一分だけの防御であるが、何物にも破らせない絶対の守りが顕現する。純白に輝く半球状の障壁がベヒモスの突進を防ぐ！

衝突の瞬間、凄まじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元が粉碎される。橋全体が石造りにもかかわらず大きく揺れた。撤退中の生徒達

から悲鳴が上がり、転倒する者が相次ぐ。

トラウムソルジャーは三十八階層に現れる魔物だ。今までの魔物とは一線を画す戦闘能力を持っている。前方に立ちはだかる不気味な骸骨の魔物と、後ろから迫る恐ろしい気配に生徒達は半ばパニック状態だ。

隊列など無視して我先にと階段を目指してがむしやらに進んでいく。騎士団員の一人、アランが必死にパニックを抑えようとするが、目前に迫る恐怖により耳を傾ける者はいない。

その内、一人の女子生徒が後ろから突き飛ばされ転倒してしまった。「うっ」と呻きながら顔を上げると、眼前で一体のトラウムソルジャーが剣を振りかぶっていた。

「あ」

そんな一言と同時に彼女の頭部目掛けて剣が振り下ろされた。

死ぬ——女子生徒がそう感じた次の瞬間、トラウムソルジャーの足元が突然隆起した。

バランスを崩したトラウムソルジャーの剣は彼女から逸れてカントツという音と共に地面を叩くに終わる。更に、地面の隆起は数体のトラウムソルジャーを巻き込んで橋の端へと向かって波打つように移動していき、遂に奈落へと落とすことに成功した。

橋の縁から二メートルほど手前には、座り込みながら荒い息を吐くハジメの姿があった。ハジメは連続で地面を錬成し、滑り台の要領で魔物達を橋の外へ滑らせて落としたのである。いつの間にか、錬成の練度が上がっており、連続で錬成が出来るようになっていたおかげ

だ。錬成範囲も少し広がったようだ。

もつとも、錬成は触れた場所から一定範囲にしか効果が発揮されないで、トラウムソルジャーの剣の間合いで地面にしゃがまなければならぬが、シヨウがハジメに襲いかかろうとするトラウムソルジャーを切っては撃つという感じに撃退した。

魔力回復薬を飲みながら倒れたままの女子生徒のもとへ駆け寄るハジメ。錬成用の魔法陣が組み込まれた手袋越しに女子生徒の手を引つ張り立ち上がらせる。

呆然としながら為されるがままの彼女に、ハジメが笑顔で声をかけた。

「早く前へ。大丈夫、冷静になればあんな骨どうってことないよ。うちのクラスは僕を除いて全員チートなんだから！」

自信満々で背中をバシッと叩くハジメをマジマジと見る女子生徒は、次の瞬間には「うん！　ありがとう！」と元気に返事をして駆け出した。

ハジメは周囲のトラウムソルジャーの足元を崩して固定し、足止めをしながら周囲を見渡す。

誰も彼もがパニックになりながら滅茶苦茶に武器や魔法を振り回している。このままでは、いずれ死者が出る可能性が高い。騎士アランが必死に纏めようとしているが上手くいっていない。そうしている間にも魔法陣から続々と増援が送られてくる。

「ハジメ、ヤバイぞー！このままじゃ死人が出る」

「なんとかしないとね……必要なのは……強力なリーダー……道を切

り開く火力……天の河くん！」

「よし、いくぞ！ハジメ！」

シヨウ達は走り出した。光輝達のいるベヒモスの方へ向かって。

ベヒモスは依然、障壁に向かって突進を繰り返していた。

障壁に衝突する度に壮絶な衝撃波が周囲に撒き散らされ、石造りの橋が悲鳴を上げる。障壁も既に全体に亀裂が入っており砕けるのは時間の問題だ。既にメルド団長も障壁の展開に加わっているが焼け石に水だった。

「ええい、くそ！ もうもたんぞ！ 光輝、早く撤退しろ！ お前達も早く行け！」

「嫌です！ メルドさん達を置いていくわけには行きません！ 絶対、皆で生き残るんです！」  
「くっ、こんな時にわがままを……」

メルド団長は苦虫を噛み潰したような表情になる。

この限定された空間ではベヒモスの突進を回避するのは難しい。それ故、逃げ切るためには障壁を張り、押し出されるように撤退するのがベストだ。

しかし、その微妙なさじ加減は戦闘のベテランだからこそ出来るのであって、今の光輝達には難しい注文だ。

その辺の事情を掻い摘んで説明し撤退を促しているのだが、光輝は「置いていく」ということがどうしても納得できないらしく、また、自分ならベヒモスをどうにかできると思っているのか目の輝きが明

らかに攻撃色を放っている。

まだ、若いから仕方ないとは言え、少し自分の力を過信してしまっているようである。戦闘素人の光輝達に自信を持たせようと、まずは褒めて伸ばす方針が裏目に出たようだ。

「光輝！ 団長さんの言う通りにして撤退しましょう！」

雫は状況がわかっているようで光輝を諫めようと腕を掴む。

「へっ、光輝の無茶は今に始まったことじゃねえだろ？ 付き合うぜ、光輝！」

「龍太郎……ありがとな」

しかし、龍太郎の言葉に更にやる気を見せる光輝。それに雫は舌打ちする。

「状況に酔ってんじゃないわよ！ この馬鹿ども！」  
「雫ちゃん……」

苛立つ雫に心配そうな香織。

その時、一人の男子が光輝の前に飛び込んできた。

「天之河くん！」

「おい、天之河！」

「なっ、南雲!? と・蒼!？」

「南雲くん!？」

驚く一同にハジメは必死の形相でまくし立てる。

「早く撤退を！ 皆のところに！ 君がいないと！ 早く！」  
「いきなりなんだ？ それより、なんでこんな所にいるんだ！ ここは君がいていい場所じゃない！ ここは俺達に任せて南雲達は……」  
「そんなこと言っている場合かつ！」ど阿呆！

シヨウ達を言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、シヨウはともかく、ハジメは今までにない乱暴な口調で怒鳴り返した。

いつも苦笑いしながら物事を流す大人しいイメージとのギャップに思わず硬直する光輝。

「あれが見えないの!？」

「あれが見えねえのか？」

「みんなパニックになってる！ リーダーがいないからだ！」

「しかも見ろ！ 数が多くて苦戦もしている!!」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差すハジメ。

光輝の頭を掴み首を視線をみんなの方に向けるシヨウ。

その方向にはトラウムソルジャーに囲まれ右往左往しているクラスメイト達があった。

訓練のことなど頭から抜け落ちたように誰も彼もが好き勝手に戦っている。効率的に倒せていないから敵の増援により未だ突破できないでいた。スペックの高さが命を守っているが、それも時間の問題だろう。

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ！ 皆の恐怖を吹き飛ばす力が！ それが出来るのはリーダーの天之河くんだけでしょ！ 前ばかり見てないで後ろもちやんと見て！」



「わかったら、さっさと動け！」

呆然と、混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見る光輝は、ぶんぶんと頭を振るとハジメとシヨウに頷いた。

「ああ、わかった。直ぐに行く！　メルド団長！　すいませ——」  
「下がれえー！！」

“すいません、先に撤退します”——そう言おうとしてメルド団長を振り返った瞬間、その団長の悲鳴と同時に、遂に障壁が砕け散った。

暴風のように荒れ狂う衝撃波がシヨウ達を襲う。咄嗟に、ハジメが前に出て錬成により石壁を作り出すがあっさり砕かれ吹き飛ばされる。多少は威力を殺せたようだが……

舞い上がる埃がベヒモスの咆哮で吹き払われた。

そこには、倒れ伏し呻き声を上げる団長と騎士が三人。衝撃波の影響で身動きが取れないようだ。光輝達も倒れていたがすぐに起き上がる。メルド団長達の背後にいたことと、ハジメの石壁が功を奏したようだ。

「ここは俺とハジメが何とかする。お前らはあっちを何とかしろ！」

「無茶だ！シヨウ！お前も下がるんだ！」

メルド団長が静止する中、俺はブルー・ファングを構える。

ベヒモスは低い唸り声を上げ、此方を睨みつける。スツと頭を掲げ、頭の角が甲高い音を立てながら赤熱化していく。そして、遂に頭部の兜全体がマグマのように燃えたぎる。

「逃げろおおおっ！」

メルドさんの叫びにハジメ達は身構える。ベヒモスは突進を始

め、私達のかなり手前で跳躍する。そして、赤熱化した頭部を下に向けて隕石のように落下した。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

そう言いながらシヨウは反魔力をブルー・ファングに纏わせて巨大な剣を形作った。

そして、その巨大な剣でベヒモスをぶっ叩く。

ベヒモスは体を地面に打ち付け、ズシィィィン!!と大きな音になった。

「なっ!？」

「見てのとおり！ 少しの間だけなら時間を稼げる！」

場合によっては、俺一人で倒せる。

「……やれるんだな？」

「もちろん……」

でも、今ここであれがバレたらあとがヤバイ。だから……

「ハジメ」

「どうしたの？」

「手伝って」

「分かったよ。僕にもできることがある。皆を助けられるなら……」

「……ありがとう」

――別に勝たなくていいんだとにかく、時間を稼ぐ――

――『偽装』解除 存分にお力をお振るい下さい。――

――イヤ、勝つ気はないぞ、あくまで時間稼ぎを……――

—シヨウ様のお気持ち、察してますよ。それに皆さん薄々気づいて  
いますし—

—マジでツ!!まあいい、とりあえずアイツを倒す—

—せつかくなので名乗りを挙げて見ては?—

—そうだな。せつかくだしおもいつきり!—

そして、シヨウは堂々と大きな声で名乗りを挙げる。

「異世界からの救世主、蒼 翔（アオイ シヨウ）。目標をぶつ殺す!!!」

## 離別と復讐

「シヨオウラアアアアッ！」

そう気合いを入れながら反魔法の巨大な剣を叩きつけるシヨウ。ベヒモスの頭が地面に沈む。

「ハジメ！今だ！」

シヨウの声にあわせてハジメ君も詠唱した。名称だけの詠唱。最も簡易で、唯一の魔法！

「——錬成！」

石中に埋まっていた頭部を抜こうとしたベヒモスの動きが止まる。周囲の石を砕いて頭部を抜こうとしても、ハジメが錬成して直してしまふからだ。ベヒモスは足を踏ん張り力尽くで頭部を抜こうとするけど、今度はその足元が錬成され、ずぶりと一メートル以上沈み込む。更にダメ押しとばかりに、シヨウは巨大剣でさらに地面にめり込ませ、ハジメは、その埋まった足元を錬成して固める。ベヒモスのパワーは凄まじく、直ぐ周囲の石畳に亀裂が入り抜け出そうとするけど、これだけ時間を稼いでくれれば十分だ。

「死にな」

ベヒモスの頭に目掛けて空間切断を加えた剣で頭を絶ち斬る。

「坊主！ 準備が出来たぞ!! 走れ!!」

振り向くと、骸骨の兵隊は消え、撤退時と判断した

「走るぞ、ハジメ！」

シヨウとハジメは、殿を果たしてクラスメイト達の元に走る。



ハジメと香織が、ベヒモスと共に奈落の底に消えた……………

クラスメイト達が俯き、沈黙する中、シヨウはフアングの銃口をクラスメイトに向け、発砲した

「ぎゃああああ!!」

「「キヤアアア!!」」

撃たれて踞る一人と、悲鳴をあげる女子達

シヨウはツカツカと撃たれた奴に近付く

「あ、蒼……………」

「何で……………って言うまでも無いか。なあ、檜山!!」

シヨウはハジメを撃った犯人——檜山の前に立つと、フアングを振るった

「ああああああ!!」

右耳を切り、のたうち回る檜山の腹を、重力魔法で重くした足で蹴る。

「ち、違う! 手元が狂ったんだ!!」

「よくもまあ上手に手元が狂う魔法が撃てたな!?!しかもハジメを的確に狙って!!」

尚も否定する檜山に、今度は顔面に蹴りを見舞い、黙らせる。

「俺の恩人を狙い、殺そうとした! テメエは……………ここで死ね!!!」

俯せに転がし、左手の甲を踏み、フアングで切る。

「ぎゃああああああああああああああ!!!」

斬撃と共に、檜山の左腕が飛んだ。

シヨウが放った斬撃は、檜山の左腕を肩からぶった切った。さらに飛んだ左腕の切り口に弾丸を三発撃ち、回復魔法でも直せないようにぐちゃぐちゃにした。

目の前の凄惨な光景に、クラスメイト達が悲鳴をあげる。その内の数人はその場で嘔吐していた……

「楽には死なせない。さんざん苦しんだ挙げ句に、地獄へ堕ちろ——  
『黒食』」

魔法名と共に現れた黒色の球体の特に意味のあるブラックホールが檜山の体を足から飲み込んで行く

「あああああああああああああああああああああああ——」

『『その汚い口を閉じろ』』

「——」

『『神言』』の様な魔法で檜山を黙らせ、そのまま親指を下に向け——  
「死にな。この世の汚物」

その一言を笑顔で送ったとたん

「すまない……今は眠ってくれ」

メルド団長の声が後ろからした直後、シヨウの意識は途絶えた  
……

## 出陣

気が付くと、シヨウは王宮の自身に宛がわれている部屋のベッドの上に寝ていた

「王宮の部屋……どれ位寝てた……？」

「三日よ」

横から声のした方向に顔を向ける。其処に居たのは雫だった。

「八重樫はん。奴はどうした……！」

「……………死んだわ。でも、光輝は彼を赦し、教会の人が貴方を異端者として、罰する事にはなったわ。メルド団長のお陰で猶予はできたけど」

「やはりそうか」と思いながら、シヨウは尋ねる

「俺の荷物はあるか？」

「え、ええ……此処にある。銃を作ろうとしたらしいけど、王国の連中は造れなかったみたい。しかも、あの人達、ハジメが死んだと思ってる！ 光輝じゃなくて良かったなんて言ってるんだよ!!」

「!!」

雫の言葉に、シヨウは激しく狼狽した。そして、決めた

ベッドから起き上がると、シヨウは雫に告げる

「八重樫はん、俺は王国から抜ける。俺は俺個人でハジメ達を助けに行く」

「何言ってるのよ！ 一人で出来るものじゃ——」出来るさ。 俺達  
「ならばな」!？」



俯いていた雫が顔を上げると、そこには目の色が左右で違うシヨウがいた。右目はいつもの黒だが、左の目は、ハイライトのない深い青色……………いや、蒼色だった。

「蒼君……………貴方は……………一体……………?」

「さあな?でもこれだけは言える。俺は幼なじみ一人救えない、クソツタレだ」

そう言うとシヨウは空中に、立った。雫は目の前の光景を疑った。

「じゃあな八重樫はん!俺は失った幼なじみを助けるついでで白崎はんも助けてくる!」

そう言うとシヨウは夜空をかけ走っていった。

「何としてもハジメを助ける。しかし、俺の脱走は直ぐに知らされる筈だ……………【ステータスプレート】で身元がばれる……………とでも思ってるだろうな、残念だか俺は『偽装』で姿もステータスプレートも変えられる。最悪、空間魔法で侵入は容易だ」

月夜の空をシヨウは走り、考える……………

—アシスト、俺一人でオルクス大迷宮を攻略できる可能性は?—

—およそ30%です—

「ちんぷんぷん」

そう言うとそのままオルクス大迷宮に向かう。その途中、シヨウの目の前に無数の何かが降り立った。

白を基調としたドレス甲冑の様なものを纏った銀髪碧眼の女がいた。

ノースリーブの膝下まであるワンピースのドレスに、腕と足、そし

て頭に金属製の防具を身に付け、腰から両サイドに金属プレートを吊るしている。どう見ても戦闘服だ。まるでワルキューレの様である。それが1000体

そんなことを考えていると、銀色の女は、感情を感じさせない声音でシヨウに告げる。

「統率を担当している『サウザ』と申します。 〃神の使徒〃として、主の盤上より不要な駒を排除します」

サウザと名乗った女と他の使徒は、そう言うと、背中から銀色に光り輝く一対の翼を広げ、ガントレットが一瞬輝き、次の瞬間には、その両手に白い鍔なしの大剣が握られていた。 銀色の魔力光を纏った二メートル近い大剣を装備していた。

シヨウはよくわからなかったが、自分の、ハジメ達を助ける邪魔になるということだけはわかった。

「よくわからんがとにかく！俺の邪魔をするなら——死ね」

こうして神の使徒1000体と救世主の死闘が幕を開けた。

## シヨウの本気

戦いが始まってから二週間、彼らはまだぶつかり合っていた。

上空に舞う銀色の羽、地面に倒れる使徒の山、血に染まった赤い大地

剣と剣がぶつかり合う度に、分解魔法と反魔力がぶつかり、火花と魔力が散り合う。

サウザ達が距離を取り、魔法を放つがすべて、反魔力を纏ったファングで打ち返す。

「あ、あり得ない！な、なんなんですか？その力は!？」  
とサウザが打ち返された魔法を避けながら問いかけ、

「そんなこと、俺が知るかボケ！」  
と辛辣に返すシヨウ。

—「いや、知らないじゃねえだろ。一人一人が一騎当千の化け物相手にそつちが一騎当千してるんだから」って作者さんが言ってますよ

—ほっとけ。それよりもさっさと終わらせる—

—了解—

そんな会話をしながらラスト五人と言うところで、シヨウは技能『武器召喚』を使い、武器を召喚した。

—オートバトル オールレンジソード スカイセイバー—  
を× 1000本

―オートバトル オールレンジスピア ヴレイブランサー―  
を×1000本

―オートバトル オールレンジシールド ガードウォール―  
を×1000枚

―オートバトル オールレンジ実弾ライフル メテオバレット―  
を×1000丁

一人軍隊、ここに極まり。

あのサウザの無機質な表情がまるで「ウソデショ！」と言っているような表情に、なっていた。

ちなみに、これを普通操作しようとしたら、莫大な情報量が脳を襲い、一瞬で死んでしまうが、シヨウはこれらの操作をアシストに手伝ってもらって操作の負担を分散している。

アシストがいなかったら、例えば（＋瞬光）を使ったとしても、せいぜい合計500機くらいだった。間違いなくアシストはシヨウにとって最強の相棒だ。

「じゃあな。銀色の人達」

そう言うのと剣からは斬撃が、槍からは刺突が、盾からはビームが、銃からは弾丸が、まるで豪雨のように大量に、そして、流星のように高速で降ってきた。サウザ達は分解魔法でできた羽でガードしようとしたが、反魔力が籠められた攻撃が分解魔法を無効化し、サウザ達にすべて直撃する。

使徒の体は穴だらけとなり、地面に落ちていった。空気に溶け込むように霧散していく銀翼の中から覗く瞳は機械的な冷たさの中に悔

しさが混じっているように感じた。

サウザが落つこちたあと、シヨウは地面に降り立ち、サウザの遺体？に近づいた。

「さてと、それじゃあ」

シヨウは空間魔法を使い別の空間、俗に言う異空間を開いて使徒の遺体を仕舞った。

—お疲れ様、アシスト—

—お疲れ様です、シヨウ様。ところでシヨウ様、そちらをどうする気ですか？—

—それはあとでのお楽しみ♪—

そう言うとシヨウは再び飛び立った。



|| || || ||

完全に化物でしかない。他にも用意してある。例えば……

「どうだ？アシスト。体の調子は？」

と声を出して聞いた。なぜかと言うと……

「問題ありません。ですが、倒した敵の体に私が入ることになるとは……」

そう、今アシストはサウザの体の中に入っている。俺が魂魄魔法でアシストの人格？をサウザの体に移したからだ。

なぜかと言うとこの先、大迷宮の攻略は何日もかかるだろう。だから人手の確保にサウザの体を利用した。

さらに！変成魔法で様々な能力を付け足し万が一ボディが破壊されてもアシストは俺の中に帰って来るだけと、安全にも配慮している。

「使える物は全て使う。でないと、ヤバイかも知れない」

「まあ、そうですね……」

シヨウは「それに」と続けてアシストの頭に手を置き言う。

「アシストはアシストだ。例えどんなに変わっても俺はお前がお前であることを知っているし、間違えもしない。あと、ずっとお前とこうやってお前と並びたったり触れたりしたかった」

その言葉を聴いてアシストは照れる。

「そ、そうですか。じ、じゃあ……このままで」

こうして準備に合計3日間かかったが、その代わり完璧な準備がで

きた。

「さあ、準備は整った。それじゃあ出発だあ！」

そう言いシヨウ達は宿を出て、空間魔法でオルクス大迷宮の65階層まで転移した。

65階層に転移した俺達、背後からはトラウムソルジャーの群れが、正面にはベヒモスが現れるが、

「邪魔」

—空間魔法 千断—

空間魔法一つで一瞬で細切れにする。

「さてと、じゃあ行きますか」

「待って下さいシヨウ様」

橋から飛び降りてハジメを追おうとするシヨウだったが、アシストが呼び止める。

「ん、どうした？」

「あ、あの、て、手を……」

そう言っ、アシストが手を俺の方に伸ばした。

俺はことばの意味を理解してアシストの手をとった。

「よし！じゃあ行くぞ！」

「はい!!」

そう言っ、シヨウは不敵の笑みを浮かべ、アシストは満円の笑みで奈落へと落ちていった。



奈落へと飛び込み、間欠泉の様な水流を辿って降り立った場所は、地下洞窟だった。川が流れ、辺りは緑光石でうっすらと明るい。「ん？」

眼を凝らして薄闇の先に居る物を観る

そこに居たのは、白い毛に赤い眼をした脚が妙に大きい兎だった。「キュイイイイ!!」

シヨウを視認した兎は、強靱な脚の筋力でシヨウに迫る。普通なら、只の人間では勝てない魔物だが……相手が悪かった

ドウンツ!!

シヨウの持つリボルバーが弾丸を吐き出して、兎の眉間をぶち抜く。兎は、シヨウの足元でこと切れた

「その程度では俺達は殺せない」

言うや否や、踵を反して剣を振るう

二つの尻尾を持つ狼二匹を滅多切りにする

「ベヒモスより強いな……」

そう呟くやシヨウは一步跳び下がる

さつきまで居た場所に、白い毛並みに赤い眼の巨熊が爪を振るっていた

「グルルルルル……」

「さて、アシスト！初陣に丁度良い相手が出たぞ！」

「グアアアアアア!!」

「うるさいです」

ザシユツ

巨熊は、叫びと同時に首を落とされた。

使徒のスペック、オソルベシ！

その後、シヨウ達はこの辺りを探索した。

「ハジメなら、此処の鉱石を判別出来る。それに………此処には、火薬の代わりまで有るし」

そう言つてシヨウは己が右手に握る石を見る

アシストに周りを解説してもらい、【燃烧石】や【タウル鉱石】が見つかった。材料には事欠かない。そして何より

ここ周辺に、無数の空葉莢が転がっているのだ

大きさから察するに44マグナム弾の基準の物で、これは……ハジメが使っていた銃と同じ経口だ

「間違いなくハジメは生きている」

そう言くと、シヨウはニヤリと笑った。

---

シヨウ達は探索が終わったあと、『武器召喚』で呼び出したドリルで壁に穴を開けてそこを拠点として飯の仕度をした。

「神代魔法って本当に便利だよな。特に異空間収納とか、食材を保存しておけばずっと新鮮なままだし」

「確かに、そんな風にお手軽に使われてるところを見たら、説得力があります。」

そんな話をしながら、ホルアドで調達した食材を剣と魔法で調理した。

「アシスト、上手だな。どこかで習ったか？」

「いえ、ですが食材の解説に料理のレシピがあつたのでその通りに行ったら、できました。」

アシストさん、それはもはや解説とは言わないよby作者

「うん、凄く美味しいな。これなら良い嫁さんになれるんじゃないか？」

何故か聴こえる作者のツツコミをスルーしてアシストを誉めると

「い、いえ！まさか貴方の奥方なんておこがましい……………あ」

シヨウは「良い嫁さんになれるんじゃないか？」とは言ったが、自分のとは言っていない。つまり、アシストさんはうっかり自爆をしてしまったのだ。思いつきりシヨウ大好きさんだったのだ！

「あうう……………」

顔を真っ赤にして、それを両手で隠すアシストさん、シヨウは重力魔法で手元まで落として抱き締める

「まあ、取りあえず聞いてちゃったから言っちゃうな。アシスト、俺の嫁になってくれるかい？」

後ろから耳元に囁く様に聴く。まあ、答えは読者の予想通り……………

「……………これからよろしくお願いします」

との事で一つの夫婦が誕生した

## 新婚さんの快進撃

シヨウとアシストが夫婦になってから3日、二人は奈落の底を進んでいった。

「そいー！」

ドパンツ

「えいー！」

ザシユツ

「よっこらしよ!!」

ズドオオオオオオオン!!!

奈落の底に似合わない明るい掛け声を掛ながら魔物達をサクサク蹂躪するシヨウとアシスト

「魔物がすごく可哀想だ。」

「今日で30階層、このペースなら来週には100階層まで行ける」

「そうですね。ですが、50階層でゴールだったら助かるのですが……」

「それもそうだな。それじゃあここで晩御飯にでもするか」

何て会話をしながらシヨウは異空間収納に仕舞ってあった。作りおきのカレーシチューを取り出し、二人で食べた。やっぱ、旨いわ。

---

「それじゃあ、一仕事してくるわ。」

「行ってらっしゃい、ア・ナ・タ。うふふ」

「おうー！」

そう言っつてシヨウは鉱物などの資源を回収しに行った。見送るア

シストは完全に新妻だった。

ちなみに、アシストがシヨウを「アナタ」と呼んでいたがそれは、シヨウが「嫁になったんだし、様付けしなくても良いんじゃない」と言うことで、アシストはシヨウを呼び捨てか、「アナタ」と呼ぶようになった。

そんなこんなで二人は魔物を蹂躪し、鉱物資源を回収しながらどんどん下の階へと進んでいった。

50層目で、神殿の様な場所では、何かに頭を撃ち潰された巨人の死体があった

「どうやらハジメ達は此処を突破したようだな」

「やはりゴールは100階層ですかね？」

「どうやら、そのようだな」

アシストと今後について話ながら辺りを調べる。

床に転がる空葉莢を見つけ、扉を抉じ開けると中は【聖教教会】の大聖堂にも似た場所だった

其処には、装甲に覆われた巨大な蠍の死骸があった

「何か人口的な魔物だな……」

蠍の装甲をファンングでひっ剥がし、異空間収納に仕舞う。

「それにしても……此処には何が居た……?」

部屋の中央に、ドロドロに溶けた金属がある。おそらく、ハジメが『錬成』で何かの封印を解いたのだろう。取り敢えずハジメ達が生きている証拠をまた一つ手に入れた。

「待つてろハジメ、絶対に助けてやる！」  
シヨウの不敵の笑みが薄暗い奈落に浮かんだ。

---

おまけ

「ハツくん？どうしたの？」

「いや、何か急にシヨウの声がした気がした。」

「…シヨウ？」

「ああ、『蒼 翔』俺の幼なじみだ。こんなところに居るはず無いのにな」

「たぶん疲れてるんだよ！今日のはのんびりしよ」

「……………異議なし」

「ああ、そうだな」

—数時間後—

「ああ——————！！」

とある奈落での一時でした

もはや、何でもアリ

奈落の底に降りたって丁度10日。

今はその100層目

「(´▽´)は………」

「推測するに、どうやらゴールのようです」

辿り着いた巨大な空間

その奥には巨大な扉があった。

「おそらく、ハジメ達はあの扉の向こうだな」

扉に向かって踏み出す

すると、部屋の中央に巨大な魔方陣が現れ、有るものを召喚した。

「まあ、そう簡単には行かないだろうな……」

それは、全長が30mはあろうかという六首の龍だった

それはまさしく多頭龍の怪物——【ヒュドラ】

「ニククルウウアアアン!!!」

「邪魔」

そう言いながら、シヨウは赤い頭と青い頭の首を、アシストは緑の頭と黄色い頭の首を切り落とした。

しかし、白い頭が吼えると、逆再生でもする様に頭が戻る。

(チツ、メンドイな)

すかさず回復魔法を行使した頭を狙って撃つ。だが、他の頭が魔力の盾を発生させて弾を弾く。

(なら、あれを試すか)

シヨウが何かを思いつき、それを実行するために、アシストを呼んだ。

「来い！アシスト！」

「はい」

その呼び掛けに答えるかのように、アシストは残像が現れるくらいの早さでシヨウの元に駆けつけ、シヨウに抱きついた。

「行くぞ、アシスト！——『融合』！」

そう言うと、シヨウ達の周りを魔力で出来た膜が包み込む。

ヒュドラの多数の属性のブレスを放つが、ものともしない。

ヒュドラのブレスが終わった途端、その膜は霧散し、空气中に消えた。消えた膜の中からは銀髪蒼眼のシヨウが現れたその左目には蒼白い光が、炎のようにただよっている。

—そちらに解説を入れます—

—変成・魂魄・昇華複合派生魔法 融合魔法—

—これは変成魔法と魂魄魔法と昇華魔法を『複合魔法』の派生技能『派生魔法』で作ったシヨウのオリジナル属性の魔法です—

—その効果は名前の通り二つのものを一つに融合させる魔法です—



—さらに、融合した者のステータスは融合する前の者のステータスを合計したものとなり。さらに、両方の技能を全て使え、解除後の後遺症がないという親切設計なのです—

—ですが、デメリットもあります。それは使用中の間、術者の魔力を消費し続ける事です—

—ですが、シヨウの魔力は—∞ですので、今は常にそれを反転して  
る状態なので実質ただの∞なのです—

「それじゃあ、一気に」

「いくか！」

「いきましよう」

—全武器一斉召喚 攻撃開始—

するとスカイセイバーとヴレイブランスとガードウォールと  
メテオバレットを1000機つつ召喚して一斉攻撃を開始した。

するとものの3分くらいで白い頭の回復が追い付かなくなり、全て  
頭が消滅した。……だが、その体は倒れない。

その時だった！ 胴体から新しい首が生え、白い光のブレスを吐い  
た!!

「しつこい」

そう言いながら反魔力の障壁を展開して防いだあと、そのまま反魔  
法の大剣を作り、首を跳ねた。

「弱………」

そう言いながらシヨウは異空間収納にヒュドラモドキを仕舞った。

シヨウは魔法を解いてアシストと二人で扉に向かった。

「さあ、いよいよだ。ここまで1ヶ月、長かったな」

「そうですね。でも私にとっては楽しい1ヶ月でした」

「そうか。じゃ、いくぞ！アシスト！」

「はい、シヨウ！」

こうして二人は最深部のその先へ進んだ。

## 再会、そして驚愕

扉を開いた先で最初に待ち構えていたのは、まぶしい光だった。まぶしい光にシヨウ達は最初はまぶしかったがすぐに視界が馴れた。その馴れた視界に入ってきたものは

「ヤベー！スゲー!!ものスゲー!!!」

「同意です」

俺達の語彙は死んだ。ただただ、周囲の光景に圧倒され呆然とした。まず、目に入ったのは太陽だ。勿論、此処が地下迷宮である以上本物の太陽じゃない。頭上には円錐状の物体が天井高く浮いており、その底面に煌々と輝く球体が浮いている。僅かに温かみを感じる上、人工物のような無機質さを感じない。だからこそ、思わずそれを「太陽」と称したんだ。あの疑似太陽一つを見ても、此処を作った者が如何に規格外の存在かよく分かる。多分、俺と同じ様に神代魔法が使える者が空間魔法と再生魔法を使つて作ったのだろう

「……水の音?」

次に、注目するのは耳に心地良い水の音。扉の奥のこの場所はちよつとした球場くらいの大きさがあるんだが、この空間の奥の壁は一面が滝になっており、天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川を形成している。滝の傍特有のマイナスイオン溢れる清涼な風が疲れた体と荒んだ心を癒やしてくれる。よく見れば川の中には魚が泳いでいる。もしかしたら、地上の川から魚も一緒に流れ込んでいるのかもしれない。

「……畑まである」

川から少し離れたところには大きな畑まである。

今は何も植



やっとだ、やっとここまですり着いた。1ヶ月と4日、やっと幼なじみを助けにこれた

そう感動に浸っていると、ハジメの後ろから二人の美少女が出てきた。

「ハツくん、外の人って誰だった?」

「…ハジメ。外の人、誰?」

片方は白髪ロングに紅眼の少女…白崎はんだわ。もう一人は金髪に紅眼の少女…いや、幼JY「…ハジメ、この人失礼」

…心でも読めんのかよ。そう思いながら白崎はんに軽く挨拶したあと、金髪の少女に自己紹介をした。

「初めまして、俺は『アオイ ショウ』。ハジメの幼なじみだ。」

「私も自己紹介を。初めまして皆様。『アシスト』と申します」

「私は『ユエ』…ハジメの女。はじめまして」

その自己紹介に俺は驚いた。白崎はんに片思いしてた相手が別の女にとられたのだから。でも白崎はんの顔には嫉妬の表情が見られない。むしろ、当たり前だと言う表情だった。

「白崎はん、いいのか?ハジメ取られてますよ?」

そう言ったらまさかの返しが来た

「大丈夫、私もハツくんの女だから」

—ん?ハツくん?それとハジメが二股状態と言うことですか?それとも異世界名物のハーレムと言う奴か?—

「えーっと、ハジメ、あの後、何があった?」

「ああ、説明するから、取り敢えず中に入れ」  
俺達はハジメに招かれハジメ達の住居に入っていった

## 回想其の壺 ハジメ達に何があつたのか

さかのぼる事、約1ヶ月前。これはハジメ達が奈落の底に落ちた後の話

なぐ、も、くん…

誰かが僕を呼んでいる。

頬を伝う あたたかい何かに身体全体を包み込む体温。そして自分の名前を呼ぶ香織がいた。

「うっ、…白崎さん？」

ハジメが眼を醒ましたことに気づいた香織はハジメの事を強く抱き締めた。

「ちよっ、…白崎さん!？」

「…よかった…ぐす、よがっだよおお。南雲くんが目覚めなかつたら私、…ワタシ…うう、」

香織の体温にドキドキしながら周りを見ると薄暗い洞窟だった。所々、鉱石のお陰で光が見える以外は光が存在しない。どうやら自分達はベヒモスと一緒に落ちたらしいと考えて香織を見る。服は所々ボロボロだったがその他の場所には特に目立つ傷もなく、自分の少し上には水が流れていた。どうやら自分達は吹き出す水に命を救われたらしい。そこまで香織がなぜ、ハジメと一緒にここにいるのか？と疑問に思った。香織は後方で支援をしてたはずなのに前線のそれも魔法飛び交う場所を走ってきたことに疑問を浮かべる。と香織がまだ少し、涙目になりながらハジメの疑問に答えた。

「南雲君がベヒモスを足止めしてるって聞いて…それで何でかわからないけど…行かなくちゃってなってそのまま…」

どうやら直感的な何かで自分のところに来てくれたらしい。そう思うとハジメとて男で、そういう想いを嬉しくないわけではないので少し照れくさかった。

大分、落ち着いた香織と共に改めて状況確認をする。

「ここって、…迷宮だよね？」

「うん。その筈だけど…」

「でも、それにしても雰囲気が違うような…」

ベヒモスが出現した罾部屋はいわば最高階層の65層。それよりも下に落ちたということは65層よりも下の階層になる。いわば未階層にハジメ達が居ることになる。つまりは…

「僕達が居た場所は65層の罾部屋で、そこから落ちたってことは…それよりも強力な階層になるってことだよ。…」

「それじゃあ、…私達が生き残るには…」

「うん。進むしか…ないよ」

香織は一瞬だけ不安そうな顔をしたがすぐにハジメを見つめて力強い瞳で前を見る。

—例え、私が死んでも…彼だけは…—

対するハジメも無能の自分一人なら更に絶望的だったと思うと失礼ながら香織が居て助かったと思う。魔力の回復は必要だけど治療師の香織が居れば回復だけはなんとかなる。そう、最悪は自分を犠牲にすれば彼女だけは守れると

—ドンナーは有るけど樂觀視はできない。でも彼女だけは、僕が守らないと、無能でも彼女の盾になることぐらいなら…—

薄暗い洞窟を二人で慎重に進みながら上に上がれる道を探してハ



ジメを前にしながらゆっくり確実に進む。慎重すぎることはない。ここは迷宮最高到達点65層よりも下なのだから。どんな危険な魔物が居るかわからないのだから。

「あれは？ウサギ？」

香織の眩きにハジメは目の前にウサギが居るのを見た。ウサギにしては足がでかく、気持ちの悪いラインを身体中に走らせていた。そのウサギが此方を見た。

ドン!!

「ッ!？」

ハジメは驚いた先程まで居たウサギが一瞬でハジメの近くまで居た。砲撃と間違えるような強力な音を鳴らしてハジメ達の眼で追えない速度で近くまで来たのだから。

「わあ!!」

ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！グシャ！

—何とかドンナーでウサギを撃ち抜けたけど、これでわかった。この魔物はベヒモスと同等かそれ以上の強さと速さだ—

—でも銃弾が効いた。これなら何とかなるかもしれない—

そう思いながら白崎さんの方を向こうとすると…

「南雲君!!逃げて!!」

「え!？」

白崎さんの悲鳴ともにつかない警告を聞いて視線を白崎さんの向いてる方にあわせた。

そこには、大きなクマの魔物が先程のウサギを捕食していた。









ハジメも自然と口にしてた。自分が死ぬかもしれないとわかってるからこそ、彼女を一人残してしまうことをわかってるからこそ彼は自分の弱さを自覚してそう言って儂く笑った。  
強く強く、抱き締める。

口づけを交わした。初めての口づけの味は血と涙の味がした。

そこで二人の意識は闇に沈んだ。

---

ピチヨ

ポタポタ

—水?—

ハジメの意識が急激に戻る。失った血が戻るような感覚を覚える。身体が動く。

「生きてる?…」

「ハジメくん?」

ハジメが意識を取り戻すとハジメを抱き締めていた香織も意識を戻していた。

「これは?…一体…」

上を見ると水が垂れていた。どうやら何か特殊な物らしく体力どころが魔力まで戻っていた。

「まだ、生きれる…」

思わずそう呟くハジメだが魔物の声が響いた。

—まさか!?!僕達を探してる!?!—

—ムリだ。…僕達だけでアイツを倒すのは…—

—誰か、…助けて…—

母に泣きつく子供のようにハジメは目の前の香織に抱きついた。恐怖で心が折れてしまったハジメにはこうするしかなかった

香織も同様に生きてることに安堵するがあのかのクマの魔物の雄叫びを聞いて忘れてた恐怖心が顔を出す。自分が心を奮い立てたのはハジメのお陰だ。そのハジメが心を折れてしまったら香織ではどうすることもできなかった。ただ、目の前のハジメを抱き締めて受け入れるしか自分には残されてなかった。

—あれから、どのくらいたったのだろうか…—

—一日か二日か、あるいは一週間?—

もう、時間の感覚がなくなっていた。隣の体温だけが自分が生きてる証拠になっていた。

天井付近から垂れてくるこの不思議な水は癒しの力があるようだ。ほんの少し口に含むだけで体力は癒え、何も食べなくても死なずにすんでる。おまけに失った血をつくる効果があるらしい。

しかし…失った腕の痛みと尋常じゃないほどの空腹感が消えることはなかった。

「どうして?…僕がこんな目に…」

もはや、言葉を話すことすら辛いのか、香織はそんな言葉を受けて強く抱き締めてくれた。それだけがハジメの支えだった…

—時間の感覚がなくなっていた。隣のハジメくんの体温だけが自分が生きてる証拠だった—

天井付近から垂れてくる水のお陰で体力は癒えて何も食べなくても死なずにすんでる。けど、空腹感が消えることはなかった。…油断すると意識が飛びそうになることも何回もある—

—ハジメくんを誰か助けて…私はいいから…ハジメくんを…—

—飛びそうになる意識を繋ぎ止める。最近ハジメくんも同じなのか声が聞こえなかった。時々、失った腕の痛みや空腹感に我慢する

声が聞こえてその度に意識を繋ぎ留めて彼を抱き締める――

――どうして?…どうして? 私達がこんな目に…私達が…ハジメくんが私が…何かしたわけでもないのに…どうして? この世界は彼に辛いのか?――

「どうして?…僕がこんな目に…」

――ああ、ダメだ。私が彼を助けないと――

ハジメを抱き締める香織。もはや、これだけが香織に出来る唯一の癒し、ハジメが居なければ香織は既に死んでたことだろう。

――こんな苦しみが続くならいつそ…

ああ、早く死にたい。…――

――死にたい／死にたくない――

――死にたい／死にたくない――

――死にたい／死にたくない――

――死にたい／死にたくない…

早く、死に…まだ――

――何もかもがずっと昔のように感じる…――

――なんでまだ生きてるんだろう。――

――もう生きる気力なんてないのに…――

――違う――

――本当は…やっぱり死にたくない。――

――何故? 何故?――

――ナゼ? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故?

何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故?

何故? 何故? ナゼ? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故?

何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故?

何故? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故? ナゼ? 何故? 何故? 何故? 何故? 何故?





何故？何故？何故？何故？ナゼ？何故？何故？何故？何故？何故？  
何故？何故？ナゼ？何故？何故？何故？何故？何故？何故？何故？  
何故？何故？何故？ナゼ？何故？何故？何故？何故？何故？何故？  
何故？何故？何故？何故？何故？何故？何故？何故？何故？何故？  
ナゼ？何故？何故？——

——こんな状況になつて——

——“俺”は——

——私は——

——何故…「生」を望む？——

——死なせたくないから…隣の体温を温もりを——

——俺の——

——私の——

——大切な人を死なせたくないから…——

——そうだ。…死なせたくないんだ…——

——異世界も神の使命もバカらしい。クラスメイトのことも——

——もはやすべてどうでもいいこと「二人で生きてく」そのためな

ら…——

——それを邪魔する者はなんであろうと敵だ——

——理不尽を強要する。すべてを——

「俺は

「私は

殺す!!!  
」

---

「そして、俺達は魔物を殺して食って、死にかけて、神水でなおしたら、  
こうなつてい…おいおい、どうしたシヨウ！アシスト！」

ハジメはシヨウ達に落ちた後の事をしていたら、シヨウは泣いてい

た。アシストも涙を流していた。

「ズ、は、ハジメが、ハジメダチが、そんなズライどきにダズゲられながつだ自分ガニググて…」

「シヨウ、それは私も同じです。私が貴方をもっと支える事ができれば！」

「アシストのせいじゃない、俺が使徒をもっと早く片付けられれば……！」

などとハジメ達の事に責任を感じてるシヨウとアシスト。その時、シヨウ達の言葉にハジメは疑問が請じる。

—ん？アシストってあの時、居たっけ？—

当時アシストはまだシヨウの中に居たため、ハジメ達はもちろん、誰もアシストの存在には気付いていない。

そのためハジメと香織は首をかしげていた。

「あのうちよつとすまんが、あの時ってアシストって居たか？」

「ああ、そんなとき、アシストはまだ俺の中にいたからな。ハジメ達が知らなくて当然だろう」

シヨウのカミングアウトにハジメ達は驚いた。

「まてまてまて！お前の中に居たってどうゆう事だよ!!」

「これに関してはスツゴく複雑な事情があるからハジメの説明が終わった後でね。続きお願い」

「図々しいやつだな。じゃあ、次はユエのところか？」

そう言ってハジメが語ろうとしたら、ユエからの止めが入った。

「……待って、ハジメ。ソコは私に語らせて。シヨウ、とくと聴くがい

い！ハジメ達と私の出会いを！」  
そう言ってユエはあの時の事を語り始めた。

## 回想其の弐 “ユエ”の誕生

物音一つない。圧倒的な静寂。光の一筋り差さない、塗り流されたような暗間。

—時間の感覚など、とうの昔に消え去った生きる気力も落散した。抱いていた憎悪は暗闇に溶け込んでしまい、もはや絶望という言葉の意味すら思い出せない。それでも、私は狂うことすらできない。昔は誇れた、でも、今はただ呪いとしか思えない自身の能力故に—

その暗間に存在する“何か”が存在していた。

不歴に、音が聞こえた気がした。

—そんなはずはないのに、ここは奈落の底。信頼していた叔父家臣が、私を封じ込めた場所化け物たな私が、万が一にも這い出ないように。封印を施しているのだから—

—私は、どうしてまだ、生きているのだろうか—

—答えなど、分かり切った疑問。ただ、死ねないから生きている。それだけ。分かっている分かっているのにふとした時に考えてしまう。まるで、別の答えがあるのでは？と、ありもしない希望とも言えない何かに縋っているみたいに—

と、暗間の“何か”は自嗤していた。

—馬鹿らしい。絶望も希望も、もう私の中には存在しないの—

—ドパンツ

「っ……………あ?—」

自虐的な内心に見切りをつける。何か、再び意識を問の底に沈めようとした私の耳は、どうやら幻聴さえるようになったみたい。

—ドパンツ!ドパンツ!

—ズドオーンツ!!

—気のせいじゃ……………ない?—

“何か”が、閉じていた瞳開く。心の中で二つの声が木霊する。ただの幻聴だと吐き捨てるような冷めた声と、まさかと何かを期待するような声。

一筋の光が差した。縦に割れた壁から、まるで暗間を切り裂くように。

— 幻覚だ、逆に気が狂ったんだ、希望を持つな!—

そんな時だった。光の中から彼らが現れた。警戒心と疑問を表情に張り付けた、片腕に白髪の男の子と白髪ロングの女の子、ハジメと香織だ。

目が合った。それなりに距離があつたが、何故か暗間の“何か”ははつきりと見えた。ハジメの瞳を。その瞬間、何かの心臓が跳ねた。理由はない。あの裏切りの日から、凍てついていたはずの心臓がドクンツと存在を示し、まるで鉄をくべられた溶鉱炉のように熱を生んだ。目が離せない。ただひたすら、何かは光の中から現れたハジメ達を見つめ続け、ハジメと香織は一拍おいて……

「すみません、間違えました」

—そうやって、彼らは扉を閉め始めた。うん、意味が分からない。これは、きつとあるはずのない奇跡だ。もう二度とは訪れない救い、少しずつ閉められ、再び暗闇が支配し始める空間は、最後の光が消えた勝間、私に未来永劫の暗闇を約束する。 —

“何か”はもう、死に物狂いだ。だから、忘れてしまった声の出し方を必死に思い出しながら、碌に動いてくれない舌をどうにか動かし叫んだ。

「お、お願い……ここから出して!!」

「嫌です」

「嫌よ」

なんとという即答。“何か”は最上級魔法の直撃に匹敵する衝撃を受けた。

—彼が行ってしまふ。彼に会えなくなる。彼の記憶から、この些細な出会いが消えてしまふつ。それは嫌だつ。どうしようもなく嫌だった。この暗闇に未来永劫囚われるよりも、ただ死ねないが故に生き続けるだけの拷問のような時を過ごすことよりも、彼を見失うことが何より嫌だつ—

必死に言葉を紡ぎ、気がつけばは再び開け放たれ、ハジメ達が日の前にいた。

ハジメが語りかけているが、“何か”はずっと近くなったハジメの瞳に捕らわれて碌に返事もできない。

“何か”は今、感じている。ドクツドクツ と書く心臓の音を、生

き返ったかのように駆け巡る熱い血潮を！

そうやっていたらイラついたハジメに怒られた。

“何か”は自分でも持て余す感情をどうにか抑えつけて、自分のことを話した。魔力があれば死なない事。陣や詠唱無しで魔法を使える事。本当に、ただ、自分のことを知って欲しいと全てを話した。

―彼は、私を見捨てるだろうか？化け物だと、そう罵るだろうか？魔力さえあれば決して死なない不死の吸血鬼を、彼は恐れるだろうか？―

「クツソ、ついてねえな！」

「ハジメくん？」

「香織……悪い」

ハジメは香織が少女を助けるのに反対とわかっていたのでそう言う。香織はハジメが奈落の底で変わっても本質は変わってないことを知ってるので薄々はそうなると思ってたのでハジメの考えに特には反対はなかった。だが恋人のハジメが下手に出てる故に香織は…

「貸し一つだよ。」

と、さりげなくハジメを好き勝手できる権利を手に入れるためにそう言った。

「ああ、わかった。」

ハジメはまだ知らなかった、この貸しが後にハジメのハーレムの始まりになることを。そうとは知らないハジメは四角のブロックに触れる。

「錬成」

ハジメの魔力がスパークする。

―私は、その時の光景を、生涯、忘れないだろう。きっと、世界で



一番鮮烈で、力強い紅色の魔力。脈打ち、波紋を広げ、燦然と輝くそれに、私は問答無用に魅せられた――

遂に解放され、私が万感の想いを込めて礼を言うと、彼は――ハジメは、一瞬、言葉に出来ない複雑な色を瞳に浮かべ、僅かに微笑んだ。私の心臓は一瞬で決壊寸前へと追い込まれる。

更なる追撃。ハジメが名前をつけてくれた。過去と決別する新たな名前、『ユエ』と言う名前を。お月様を意味するらしい。暗闇の中の私が、夜空に輝く月に見えたからって。

――誰か、私に回復魔法をください。自動再生が無効化されています。心臓があ――

そして、ユエは、ハジメの隣にいる今気付いた。香織の方にようやく向いて、？マークを浮かべる。香織は苦笑いを浮かべるもここまです、猛スピードで話が進んでたら助けにくれた方じゃない方なんて見ないよねっと仕方なく自己紹介を始める。

「私は香織。白崎香織。ハジメくんの「女」!!」

だからと言って香織さんの怒りが収まるわけではないのでしつかりとハジメの大切だと主張する。

少女はむっと顔をして香織を睨み――瞬火花が散った気がするがハジメは気にしないことにした。

---

「なるほど、やっぱりユエはんは50階層の人だったんですね」

「…ん、そうゆうこと。ちなみにハジメに助けられた後大きなサソリと戦った」

「ああ！あれか！にしてもよく倒せたな。ハジメは魔力枯渇状態だし、ユエはんは封印から解かれたばつかなのに、いったいどうやって

「？」

そう言っつてシヨウはユエに質問したらこう帰ってきた。

「ハジメの血のお陰」

「あ！そっか、ハジメは神水があるし、それなら納得」

そう言っつた後、シヨウは次の話とお願いした。

「じゃあ最後、ヒュドラの話。お願い」

「じゃあ次は私ね」

そう言っつて香織はヒュドラ戦の話をはじめた。

## 回想其の参 ヒュドラ

ここはオルクス大迷宮の100階層

100層目はその扉以外になにもなくまさに最後の戦いという感じの雰囲気放つてた。

「ハジメくん…」

「最高じゃねえか…ようやくゴールにたどり着いたってことだろ？」

ハジメは不敵な笑みを浮かべて香織、ユエを見た。

「何が待ってようとやるしかねえ」

「うん！」 「んっ！」

ハジメはそこで目を閉じて息を吸って吐いた。心を落ち着かせ…目を開く

「行くぞ！香織！ユエ！」

オルクス大迷宮最後の戦いへと三人は進む。

豪華な作りの部屋に出た。ハジメ達は油断せずに前を睨む。やがて目の前に召喚の魔法陣が形成される。

「来るぞ！」

巨大な魔法陣から生まれたのは六つの首を持つ竜。その姿にハジメは神話に出てくる怪物を思い出して不敵な笑みを浮かべる。

神話の怪物を倒すのが最後とか…上等だ!!

竜の首が放つ攻撃をかわす。ハジメはそのままドンナーの弾丸を首に当てる。

—よし…ドンナーでも殺れる—

「ユエ!!真ん中の奴を頼む！」

「んっ！——緋槍」

炎の槍が真ん中の首に直撃する瞬間に横にいた別の首が前に出て受け止める。さらにそのまま別の首が受け止めた首を回復する。

「攻撃に盾に回復に…首ごと役割が違うってことか…ちっ、バランスがいいこった…だが、うちも中々のバランスの良さだぜ」

盾の首目掛けて香織のドンナーが放たれる。回復しようと別の首が動くがユエの魔法で別の首を攻撃して妨害。

「ハッ!!一度で回復しようとするならその首ごと撃ち抜くまでだ!!」

ハジメは二人のおかげで比較的命中しやすくなった回復役の首目掛けてドンナーを放つ。だが、他の攻撃を無視して首達は回復役を守る。

「チツ、捨て身の守りか…」

そのまま回復役が回復しようとするが竜達はミスをおかした。というのも忘れてはいけけないのはハジメの放った銃の技量をここ最近で超えてる者がいることを竜達は知らなかっただけのこと…否、気づけなかったのだ。

少女、白崎香織の力は異世界召喚時のチートステータスに加えて、ハジメと共に喰らい力を手に経験を積んだ。更にハジメの錬成で現代兵器を作り出し。寝る間を惜しんで一人訓練してた。その存在を…

「やっちまえ!!香織!!」

香織のドンナーの弾丸は他の首の守りを抜け回復役にヒット。さらに彼女の弾は別々の首を牽制しつつ素早くリロードを行い回復役に致命的なダメージを与える。

「ごめん!!…ハジメくん!!倒しきれなかった」

「いや、十分だ。…香織のおかげで魔物の動きが少しは鈍るはずだ。」

倒せなくても香織がまた同じ事をすると思わせるだけで相手の動きが鈍る。ハジメはそう考え他の首を見ると黒首の竜の目が怪しく光りユエを見つめる。

「いやああああ!!」

「!? ユエー」

咄嗟とつさにユエに駆け寄ろうとするが、それを邪魔するように赤頭と緑頭が炎弾と風刃を無数に放ってくる。未だ絶叫を上げるユエに、歯噛みしながら一体何がと考えるハジメ。そして、そういえば黒い文様の頭が未だ何もしていないことを思い出す。

(違う、もし既に何かしているとしたら！)

ハジメは『縮地』と『空力』で必死に攻撃をかわしながら黒頭に向かってドンナーを発砲した。射撃音と共に、ユエをジツと見ていた黒頭が吹き飛ぶ。同時に、ユエがくたりと倒れ込んだ。その顔は遠目に青ざめているのがわかる。そのユエを喰らおうというのか青頭が大口を開けながら長い首を伸ばしユエに迫っていく。

「させるかああ!!」

ハジメはダメージ覚悟で炎弾と風刃の嵐を“縮地”で突っ込んで行く。致命傷になりそうな攻撃だけドンナーの銃身と『風爪』で切り裂き、ギリギリのタイミングでユエと青頭の間に入ることに成功した。しかし、迎撃の暇はなく、ハジメは咄嗟に『金剛』を発動する。『金剛』は移動しながらは使えない。そのため、どっしりとユエの前に立ち塞がる。魔力がハジメの体表を覆うのと青頭が噛み付くのは同時だった。

「クルルルッ！」

「ぐうう！」

低い唸り声を上げながら、青頭がハジメを丸呑みにせんと、その顎門を閉じようとするが、ハジメは前かがみになりながら背中と足で踏ん張り閉じさせない。そして、ドンナーの銃口を青頭の上顎に押し当て引き金を引いた。

射撃音と共に噴火でもした様に青頭の頭部が真上に弾け飛ぶ。力を失った青頭をハジメは「豪脚」で蹴り飛ばす。次いでに、「閃光手榴弾」と「音響手榴弾」をヒュドラに向かって投げつけた。

「香織！少しの間頼む！」

「任せて！」

二つの手榴弾が強烈な閃光と音波でヒュドラを怯ませ、香織が時間稼ぎをし、その隙にハジメはユエを抱き上げ柱の陰に隠れた。

「おい！ユエ！しっかりとしろ！」

「……」

ハジメの呼びかけにも反応せず、青ざめた表情でガタガタと震えるユエ。黒頭のヤツ一体何しやがった！と悪態を付きながら、ペシペシとユエの頬を叩く。「念話」でも激しく呼びかけ、神水も飲ませる。しばらくすると虚ろだったユエの瞳に光が宿り始めた。

「ユエ！」

「……ハジメ？」

「おう、ハジメさんだ。大丈夫か？一体何された？」

パチパチと瞬きしながらユエはハジメの存在を確認するように、その小さな手を伸ばしハジメの顔に触れる。それでようやくハジメがそこにいと実感したのか安堵の吐息を漏らし目の端に涙を溜め始めた。

「……よかった……見捨てられたと……また暗闇に一人で……」

「ああ？そりゃ一体何の話だ？」

ユエの様子に困惑するハジメ。ユエ曰く、突然、強烈な不安感に襲

われ気がつけばハジメに見捨てられて再び封印される光景が頭いっぱいには広がっていたという。そして、何も考えられなくなり恐怖に縛られて動けなくなったと。

「チツ、バッドステータスか…」

「……ハジメ」

敵の厄介さに悪態をつくハジメに、ユエは不安そうな瞳を向ける。よほど恐ろしい光景だったのだろう。ハジメと香織に見捨てられるというのは。何せ自分を三百年の封印から命懸けで解放してくれた人物であり、吸血鬼と知っても変わらず接してくれるどころか、日々の吸血までさせてくれるのだ。心許すのも仕方ないだろう。

そして、ユエにとってはハジメの隣が唯一の居場所だ。一緒にハジメの故郷に行くという約束がどれほど嬉しかったか。再び一人になるなんて想像もしたくない。そのため、植えつけられた悪夢はこびりついて離れず、ユエを蝕む。ヒュドラが混乱から回復した気配にハジメは立ち上がるが、ユエは、そんなハジメの服の裾を思わず掴んで引き止めてしまった。

「……私……」

泣きそうな不安そうな表情で震えるユエ。ハジメは何となくユエの見た悪夢から、今ユエが何を思っているのか感じ取った。そして、普段からの態度でユエの気持ちも察している。今更、知らないフリをしても意味がないだろう。

—ただ、いつまでもユエの相手をしている時間はない—

慰めの言葉でも掛けるべきなのだろうが、今は時間がない。それに生半可な言葉では、再度黒頭の餌食だろう。ハジメがやられる可能性もあるのだから、その時はユエにフォローしてもらわねばならない。

そんなことを一瞬のうちに、まるで言い訳のように考えると、ハジメは、ガリガリと頭を掻きながらユエの前にしやがみ視線を合わせる。

そして……

「? ……!?!」

首を傾げるユエを抱き締めた

ほんの少しだけだったが、ユエの反応は劇的だった。マジマジとハジメを見つめる。

ハジメは若干恥ずかしそうに視線を逸らしユエの手を引いて立ち上がらせた。

「ヤツを殺して生き残る。そして、地上に出て故郷に帰るんだ。……三人で」

「んっ!」

ハジメは咳払いをして気を取り直し、ユエに作戦を告げる。

「ユエ、シユラーゲンを使う。連発できない

から援護を頼む」

「任せて!」

「香織! 援護を頼む!!」

「うん! わかった!」

香織とユエはそれぞれドンナーと魔法により竜を牽制。ハジメは背負った袋から錬成により作り出した。新たな武器 電磁加速式対物ライフル「シユラーゲン」を構える。

「くらいやがれ!!」

真紅の魔力をスパークさせて放たれた弾丸は首達の守りを抜け回



復役ごと貫く。

「…『天灼』」

ユエの雷の魔法を追加で放ち六つ合った首は完全に消え去った。

「はあはあ…やった?」

ユエは魔力を使いきったのかその場に座り込み息を整える。香織もそんなユエに労いの言葉をかけ。ハジメも思わずそんな二人のやり取りを見て気を抜いた。

だからこそ六つ首からもう一つの首が出てくることに気づくのが遅れてしまった。竜の首は口に光を溜めて放った。狙いはハジメや香織ではなく。魔力を使いきって座っていたユエだった。香織はユエの前に立ち魔物から手に入れた技能を使い魔力を全身に流して防御力を上げる。光属性魔法の結界を使用する暇がないために香織はダメージを覚悟でユエを守ろうとする。…だが、香織に光が届くことはなかった。ハジメが香織やユエを庇う位置に香織と同じ方法でシユラーゲンを盾に前に立った。

「ハジメくん!!」

光が収まると全身に酷い火傷を浴びたハジメが倒れた。あの固かったサソリの魔物の鉋石を使用して出来た「シユラーゲン」はボロボロでハジメの右目は沸騰したように焼け落ちてた。

「は、…ハジ、メ…くん?」

「ハジ、メ?…ハジメ!」

呆然とする二人に竜首は光のレーザーを弾幕のように放つ。香織は光属性魔法の結界を使用してその攻撃を防ぐ。

「ユエー!今のうちにハジメくんを!!」

「わ、わかった!」

ユエはハジメの肩をつかみ自身の肩に担いで運ぶ、身長差もあるせいでゆっくりだが一つの柱にハジメと共に避難する。それを見届けた香織は技能「縮地」でユエ達の元に続く。

「ハジメくん…飲んで」

神水をハジメの口に入れるが直ぐに吐き出してしまい。香織は自身の口に神水を含みハジメにそのまま口移しをする。

「香織…ハジメは？」

「…傷がヒドイ…神水の回復も何かに邪魔されてるのかいつもより回復が遅い…それに…ハジメくんの右目は…もう、…」

ハジメの右手を握り回復魔法も行使する香織にいつもの明るい姿はなく。ユエはそれだけでどれだけ絶望的なのかわかってしまった。さらに竜首の攻撃は続いている。誰かが引き止めないと全員全滅だと、  
「香織…ハジメをお願い」

ユエは覚悟を決める。自分を助けてくれた二人に代わり、竜首を倒す覚悟を…

「ユエ…でも!!」

ユエはただでさえ魔力がほとんど残ってなく、その状態であの激しい攻撃のなか動くのは不可能に近かった。ユエもそんなことはわかってた。それでも彼女にとって大切なのは二人の命でそれを守るためなら自分の命も厭わない。それに…

「んっ。…私は香織達よりもお姉さんだから…二人を守るのは…当然」

そのユエの言葉に香織は思わず涙を流した。ユエを止めるまもなくハジメのドンナーを片手にユエは竜首に向かっていった。

—ああ、…ただ…また…私は…ハジメくんを守れなかった…—

—それだけじゃなく…ユエを…大切な仲間も止めることが出来なかった…—

—私は…なんて…弱いんだろう…—

—守るって誓ったのに大切な人を！—

—私は…私は…—

「…泣いて、るのか？」

ハツと香織は自身の涙を拭う手の持ち主を見る。意識がまだ不完全なのか呆然とこちらを見るハジメ

「…ハジメくん？」

「…泣くな、香織…お前を泣かす…ヤツは…俺が…す…約束…した、  
…香織が俺を…俺が…香織を…」

—守るって—

その言葉を最後にハジメはまた意識を失った。

言葉に意味はない。それでも、その言葉一つで人は立ち上がれる。香織は回復魔法の行使をやめてドンナーを握りしめてユエが戦つてる戦場を見据える。

「そう…だよね…私が…ハジメくんを…ユエを守らないと、嘘つきになつちやうよね。私達は…最強なんだから。」

香織も再び、戦場に降り立つ。約束を守るために…

ユエは身体強化でなんとか攻撃をしのいでいた。それでも時間がたつにつれて自分の体に攻撃が当たるのをわかった。ハジメのドンナーは魔物の技能で力を上げてたがユエにはそれはない。なので少ない魔力を使い雷の魔法をドンナーの弾丸に流し込み放つ。

「効いてない!？」

確かに弾は竜に当たったが当たる前に竜自身の攻撃が放つ光の弾幕にかき消されのだ。もう一度、攻撃をしようと構えるユエ。だがそれよりも早く竜の攻撃がユエに入る。始めは右肩、次に左腕…一度の攻撃がどんどんユエに入っていくついには倒れてしまう。

「う、…」

止めをさすように竜が大きな溜めのモーションを始める。ユエは

もはや、動くことが出来ずにその攻撃を睨み付けるしかなかった

—ごめん…香織…ごめん…ハジメ—

悔しくて涙を浮かべるユエに竜は容赦なく光のレーザーを放った。

「泣くにはまだ早いよ。…ユエ」

光の膜がレーザーを受け止める。香織の放った光魔法の結果だ。ユエはそれを確認すると同時に自分が香織に持ち上げられてることに気づく。

「…香織?…」

「うん。」

香織が此処に居ることに唾然として直ぐに治療してたハジメはどうなったのか香織に問う。

「…まだ、完全ではないけど…やるだけ回復はしたよ。」

「それなら…私を置いてハジメと逃げて」

「ううん。それは出来ないよ。…だって、ハジメさんと約束したから守るって…だから…ハジメさんの…ううん。私達の大切な仲間を守らないと」

いままでに此処に来るまでに香織とユエは喧嘩をしたりした。それはユエがハジメを好いてるとお互いに自覚してたからだ。だからこそ香織はユエに嫉妬から意地悪をするし喧嘩もする。だが、だからこそ、ユエにはそれが一つの絆の形であり自分を認めてる証明だった…そして、…ユエは香織をライバルであると同時に大切な仲間と思ってた。そんな想いがあるからこそ香織が…ハジメ以外に興味がない顔をしてたあの、香織が自分を仲間と認めてくれた。大切だと言ってくれた。それが何よりもユエには嬉しかった。

「もう、…また…泣いてるの?」

どことなく優しい香織の問いにユエは目をぬぐい。自身か好いてる男と同じ不敵な笑みを浮かべる。

「…泣いてない。…これは、汗」

そんなユエに香織も自身の最愛の恋人と同じように不敵な笑みを浮かべて…

「…そっか…じゃあ…もう一汗かこうか?」

自らの殺すべき敵を見据える。

—香織…ユエ…?—

—何してるんだ…?—

—戦ってるのか…?—

—俺は…何をしてる?—

—こんなところでくたばるのか?—

—一緒に帰るって…誓ったじゃねえか…—

—一緒に連れて帰るって…約束したじゃねえか…—

—だから…

いつまでも…寝てるわけにはいかねえんだ!!!—

香織はユエを庇いながら光線を捌きユエも香織の持ってた神水で魔力を回復させて香織のサポートをした。光線の弾幕のせいで攻撃が届かずさらには光線の速さと量により防御するしかなかった。

「この…光線を越えれば…」

香織は後少し何か変化があれば敵の命まで届くとわかってるもののその後少しが届かなかった。

ユエに巨大な魔法を行使するにしても私一人じゃ…あの弾幕から逃げることは出来ない。…かと言って、結界を張ろうにも この攻撃回数だとユエの魔法発動までにこちらに届いてしまう…

何度目かの光線をしのいでる時に香織は攻撃の余波で発生した瓦礫の破片が後頭部に当たる。：普段の香織なら気にしなかったダメージだが今の香織はユエを担ぎ敵への攻撃を考え、なおかつハジメに被害がいかないようにすべて計算して考えてた。故にその少しの刺激が香織の集中力を解いてしまった。

「しま…!!」

光線の弾幕が香織とユエに届く瞬間に香織は愛しい人の気配を感じとり。安堵のため息をはいた。

「…おかえり、…ハジメくん」

いくつもの光線をくぐり抜け、香織とユエの元にたどり着いたハジメは彼女達を抱えて後方に移動してた。

「二人とも…待たせたな」

「ハジメくん!!」「ハジメ!!」

ハジメはいつものように不敵な笑みを浮かべる。

「この戦いはお前達の勝ちだ。」

光線がハジメ達に放たれる。ハジメはユエを右手に香織を背中に担いですべての光線を避ける。

全てが色あせて見える。何もかもがゆっくり動いてる。

『天歩』最終派生技能『瞬光』

知覚能力を最大まで上げて肉体の限界を超えた動きを可能にする。

「天歩」の最終派生技能「瞬光」香織達のピンチの土壇場でハジメが目覚めさせた最終派生技能である。

「勝つぞ。俺達三人で」

グオオオオオオオオ!!

竜首は六つ首すべてから光線があふれでる。先程の攻撃の倍以上の魔力。敵の方も本気だとハジメ達にはわかった。

「ぐっ…」

ハジメは倒れそうになるが香織が支えてくれてなんとか保つ。

「ハジメくん…大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。」

復活したとはいえ長くは持たねえか…

ハジメは香織から離れてユエに向き合う。

「…ユエ…魔力は?」

「あと少しだけなら…」

「なら、あのサソリを倒した魔法…『蒼天』は?」

「…足りない…」

ユエは落ち込んだ、と思ったら次の瞬間、目を丸くした。

「ならユエ、血を吸え」

静かな目、静かな声でユエに促す。ユエはただでさえ血を失っているのにと躊躇ためらう。ひらりひらりと光弾を交わしながら、ハジメはユエをきつく抱きしめ首元に持ち上げる。

「最後はお前の魔法が頼みの綱だ。……やるぞ、ユエ。俺達三人が勝つ!」

「……んっ!」

ハジメの強烈な意志の宿った言葉に、ユエもまた力強く頷いた。ハジメを信じて首元に顔を埋め牙を立てる。ハジメの力が直接流れ込むかのようにユエの体を急速に癒していく。二人は光弾の嵐の中を抱き合いながらダンスを踊るようにくるくると動く。

やがて、ユエが吸血を終え完全に力を取り戻した。

「ユエ、奴の攻撃は俺が全て避ける。…ユエは『蒼天』の準備を。…俺の合図で奴にぶちかませ。…香織は足止めを」

「…んっ」

「うん、わかった!」

「頼む、…行くぞ!!」

香織を背中に、ユエは左側から首に抱きつき「瞬光」を発動。香織は「縛光刃」を敵に発動。光の十字架を飛ばして対象を捕縛する光属性の魔法である。だがそれだけでは敵を止めることが出来ないのをわかってる香織は更に「縛煌鎖」を使用する。無数の光の鎖を伸ばして対象を捕縛する光属性の魔法。それらを使用して数秒敵を止める香織。

「今だ!!ユエ」

「んっ!!——蒼天!!」

蒼い炎の塊を竜首に当て放つ。ハジメは自分に向かってくる光線を避け。ユエの魔法でわずかに閃光が消え去ってる間に狙いをつけドンナーで最後の首目掛けてうち放つ!

「ここで…終わっどけ!!!」

今度こそ、辺りに静寂が満ちる。ハジメ達は揃って床に座り込み。一緒に倒れた。

「今度こそ…もう、限界…」

三人とも気絶するように眠りについた。だが三人ともどこかやり遂げた顔であった。

「ハジメ、マジ主人公だな!にしてもヒュドラってそんなに強かったのか?」

「強いだろ、そうゆうお前はとうやって倒したんだよ」

「アシストと『融合』したあと、斬撃と弾丸とレーザーと槍の雨を降らせた」



「……………は？…すまんが言ってる意味がわからん。特に『融合』？レ―ザ―？…一体何があった！」

「ああそっか、そういうえば説明していなかったな。それはだな……………」  
こうして俺はハジメ達に事の説明をした。ハジメ達のツツコミが吹き荒れたのは言うまでもない……………

おまけ

「ところで、白崎はん、話に出てこなかったが、『ハツくん』って呼び方はいつからなん？」

「ハツくんと一夜を越えて1日過ごした後だよ♪」

「ハス、イメ……………」

「やり過ぎた。反省はしているが後悔はしていない」

「……………ハジメ、意外と気に入っている？」

「あ、ああ」

「さいですか……………」

奈落でのとある会話でした

## 神代魔法を越えてゆけ

「シヨウ、アシスト」

「ん？」

「はい」

あれから三日経った

現在、シヨウ達はオルクスの住み家である建物の外の庭で、異空間収納にしまっていた魔物の素材の加工や、鉱石の分別、新しい魔法の開発等々。

その作業中に、後ろから話し掛けられ、振り向く。

其処には、ユエが立っていた

---

シヨウ達はユエに建物の三階の部屋に招かれた

其処は、8 m程の精巧で繊細な魔法陣が床に刻まれていた

「こいつに乗れと？」

シヨウがそうユエに尋ねるとユエは「んっ」と答えた。

恐る恐る陣の中に足を踏み入れる。すると、魔法陣が光り出し、シヨウ達の目の前に一人の青年が現れた

「試練を乗り越え、よく辿り着いた 私の名は『オスカー・オルクス』。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えればわかるかな？」

目の前に居た黒髪に、眼鏡をかけた青年——彼こそが、「オルクス大迷宮」の創設者である『オスカー・オルクス』だった

「は？え、ちよつ、作ったってどういう……」

「ああ、質問は許して欲しい。これは唯の記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所に辿り着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メッセーヂを残したくてねこのような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい……我々は反逆者であつて、反逆者ではないということを」

そしてオルクスが語った世界の真実は、要約するとこうだ。

神代の少し後の時代、世界は争いで満たされていた。人間と魔人、様々な亜人達が絶えず戦争を続けていた。争う理由は様々だ。領土拡大、種族的価値観、支配欲、他にも色々あるが、その一番は「神敵」だから。今よりずっと種族も国も細かく分かれていた時代、それぞれの種族、国がそれぞれに神を祭っていた。その神からの神託で人々は争い続けていたのだ。

だが、そんな何百年と続く争いに終止符を討たんとする者達が現れた。それが当時、「解放者」と呼ばれた集団である。

「解放者」のリーダーは、ある時偶然にも神々の真意を知ってしまった。何と神々は、人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたのだ。「解放者」のリーダーは、神々が裏で人々を巧みに操り戦争へと駆り立てていることに耐えられなくなり志を同じくするものを集めたのだ。

しかし、その目論見は戦う前に破綻してしまう。何と、神は人々を巧みに操り、「解放者」達を世界に破滅をもたらそうとする神敵であると認識させて人々自身に相手をさせたのである。その過程にも紆余曲折はあつたのだが、結局、守るべき人々に力を振るう訳にもいか

ず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇なした「反逆者」のレットテルを貼られ「解放者」達は討たれていった。

解放軍の中心たる七人は、それぞれに大迷宮を造り、其処を攻略した者に自分達の先祖たる神々が遺した力【神代魔法】を授ける事にしたのだ

長い話が終わり、オスカーは穏やかに微笑む。

「君が何者で、何の目的で此処に辿り着いたのかは解らない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。我々が何の為に立ち上がったのか……………」

「君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たす為には振るわないで欲しい。話は以上だ、聞いてくれて有難う。君のこれからが、自由な意志の下にあらんことを」

そう言つてオスカーの姿は消え、魔法陣の光も消えた。それと共に、シヨウの脳に頭痛と、何かを書き込まれた感じを経験する。その時、

「ぐう!? があああつ!!」

「…………つ、うううううつ!!」

苦悶に満ちた悲鳴が上がった。シヨウとアシストが激しい頭痛を堪えるように頭を抱えながら膝をつく。

「…………シヨウ!? アシスト!?!」

ユエが驚愕の声を上げる。その直後。

「っあ…………」

「…………んっ」

脂汗を大量に浮かべたシヨウとアシストは、正体不明の苦痛から解放されたのか、ガクツと体から力を抜き、そのまま倒れ込んだ。様子を見てみれば、二人共気絶しているようだった。

チートを通り越してバグレベルに至っている二人が気を失うほどの負荷……一体、何が起こったのかと静寂の戻った部屋に呆然とした空気が流れる。

「……取り敢えず、ハジメを呼ばないと」

「……ん……だあ……何処だ？ 此処は………？」  
意識がハッキリしていく……目を開けると、知らない天井が見えた上半身を起こして周りを見る。其処は、オルクスの住居の部屋の一つらしい

「なんつー痛みだよ……まるで頭の中にある物を組み合わせ繋げられた様な感覚だ。概念そのものを物理法則に変換する魔法、本来なら大迷宮を攻略しなきゃいけないが、俺はほとんどの神代魔法を会得していたからあんなったのか。――」

シヨウは先ほど生成魔法の後に刻まれた概念魔法についての確認と会得条件の推測をたてた。

「アシストも同じだろう。アイツと俺は繋がっているから……いや、俺達は元々1つだ、だから知識は俺だけに刻まれ、後で共有されるはずなのに………もしかしたら俺はアシストに助けられたかもしれない――」

シヨウの推測通り、アシストはリアルタイムで共有させるようにして、シヨウにかかる概念魔法の負担を軽減させたのだ。そもそも神代魔法は”理”に干渉する魔法だが、その正確な力の根本をシヨウは理解しきれていなかった。概念魔法を習得する絶対条件として、全ての神代魔法に対する完全な理解が必要だ。

さらに、理解するには深淵すぎて、全ての試練を攻略できるレベルでないと、まず心身が負荷に耐えられず壊れてしまう。が、アシストがリアルタイムで共有することでその負荷を分散させたのだ。だから、全ての試練を攻略していないシヨウが壊れなかった理由だ。

—アシストに礼を言わないとな。つてあれ？アシストはどこだ？一緒に倒れたはずなのに…—

そう考えていると、下から声がした。そこにアシストがいると思ったシヨウはベットから降りて下の階へ向かった。

部屋を出て、廊下を見渡すと、近くの部屋から喧騒が聞こえる。行ってみると、アシストとハジメ達が居た。どうやらアシストが事の説明をしているらしい。

「……要するに、私達は神代魔法を越える魔法、概念魔法の知識を理解させられたのです」

「なるほど、じゃあその魔法があれば故郷に帰る魔法も作れるってこと？」

「いや、残念だが俺達じゃあ作れない」

「シヨウ！起きたのか」「ああ、迷惑かけたな」

「シヨウ、遅かったですね」

「ちよつと頭の中を整理してた。それとアシスト、あん時助けてくれてありがとな。お前がいてくれて良かった」

そうお礼を言うとアシストは照れながら、答えた。

「気にしないでください、『私の全てを使って貴方を守る』それがシヨウの嫁である私の役目だから」

「じゃあ俺は、『俺の全てを使ってお前を守る』だな！」

そうやってイチヤついているとハジメから質問が入った。

「そういうええだがさつき故郷に帰る魔法が作れないってどういう事だ？」

「それはね、概念魔法は創る元に『極限の意思』というのが必要なんだけど、俺ではそこまで届かないんだよ」

つまり少なくともシヨウは、今は故郷に帰りたいと思っていないという事だ。

「おいおいまてまて、シヨウお前は帰りたくないのかよ」

「ああ、俺達をこの世界に呼び出した神……いや、神（笑）をぶち殺すまではね」

「神か……そんなにか？」

「ああ、解放者の話が本当なら、この世界に飽きたら次は俺達の世界が狙われる可能性が高い」

そう言うのとハジメ達は納得した表情で「なるほど」と言った。

「そこでだ。俺達は今後、ハジメ達が概念魔法を会得できるようにサポートをしたいんだけど、どうかな？」

「俺は構わないが……」

そう言いながら、ハジメは香織達の方を向いた。

「私はダイジョブだよ。アシストちゃんと話すの楽しいし」

「……んっ、私も大丈夫。香織と同意見」

「そうか。じゃあ、あらためてよろしくなショウ」

「おう！よろしく、ハジメ」



## 出発

—皆さんこんにちわ、アシストです—

—あれから数週間、シヨウとハジメはいろんな装備を創ったり、私と香織とユエは女子会をしたりと充実した日々を送っていました—

—例えばハジメの失った左腕と右目、これをシヨウは治そうとしましたが、右目は再生魔法で直せても、左腕はハジメが変質する前の腕になってしまったため左右のバランスが悪くなるため、断念し、義手と義眼となりました—

—その後、シヨウとハジメは1日三時間、工房に籠って装備作りに明け暮れてました。何故3時間かと言うと、2人が熱中すると何日も籠っているため、私達が拗ねたら機嫌取りもかねて、あちらから提案してきました—

—ですが私は知っています。2人は、再生魔法を使った「アーティファクト」で工房内の時間を引き延ばし、こちらでの3時間を向こうでは30時間と上手いことやっているそうです。ちなみにアーティファクト名は『ビルダーズ・Lab（ラボ）』だそうです。そうして沢山の「アーティファクト」を生産し、準備は万全を期しました—

「いよいよ出発だな、ハジメ」

「ああ、我ながら強くなったと思うよ」

「んっ！装備も整った」







ちなみに、勇者である天之河光輝の限界は全ステータス1500と  
いったところである。限界突破の技能で更に三倍に上昇させること  
ができるが、それでも約三倍の開きがある。しかも、ハジメ達も魔力  
の直接操作や技能で現在のステータスの三倍から五倍の上昇を図る  
ことが可能であるから、如何にチートな存在になってしまったかが分  
かるだろう。

— あるいは技能も増えに増えたのでいくつかをそちらをアシスト  
に解説してもらおう。

— それではシヨウの技能に着いて簡単に説明いたします—

— 『魔力反転』派生技能 「魔力武装」—

— 魔力、反魔力問わず魔力を鎧のように纏う事が出来る。さらに、  
武器や装備に纏わせることも可能—

— 魔力だとさまざまな属性を纏う事ができ、纏った属性に応じた効  
果を獲られますが、相性によっては不利になることがあります。一方  
で反魔力を纏うと全ての魔法を無効化出来ませんが、魔法の効果が半減  
したり、物理防御が不利になります—

— 『戦闘術』派生技能 「唯我独尊」—

— 限界突破の効果が有り、限界突破のように爆発的に力が跳ね上が  
るわけではなく、発動中、少しずつ全スペックが強化されていきます

— しかも、限界突破と異なり、この技能には使用後の強い虚脱感と  
いうものがない。まさに、破格の能力と言えます—

— しかし発動中は視界が簡素化されてしまい、味方は白、敵は黒、そ  
の他は灰色の3色に分かれ、障害物や建物等は映らないと割りと重い  
デメリットがあります。このせいで何回オスカ―宅が壊れたか

……

—『天歩』派生技能「革新者」—

—こちらは発動中は敏捷と知覚能力が二倍となり、五感と第六感を超強化する事が出来ます—

—更に『瞬光』と併用すれば、シヨウ一人で、各オートバトル オールレンジ兵器を千機つつ操作出来ます。ちなみに発動中は瞳が虹色に変わるのも特徴です—

—『成長補足』派生技能「技能習得」—

—こちらは少し変わった技能で、本来は習得出来ない筈の技能を習得する事が出来る技能です。—

—つまり、シヨウはまだ強く成れます。シヨウに限界は無いのです！—

とまあチート能力が増えに増えた。

ちなみに、ハジメの方も何か技能が増えているがそこは触れないでおく。うん、触らぬ神に祟りなしだ。

「で、お前達は何でその格好なんだ？」

ハジメはシヨウとアシストの方を向いて尋ねた。それは、シヨウは白い執事服、アシストは白いメイド服を着ていた。

何故、そんな格好をしているのかと言うと。

「これかっこいいし、執事とメイドのコンビとか面白そうじゃん」  
とのことである。

「それよりハジメの方は大丈夫なのか？」  
「ウグッ」

ハジメがダメージを食らった。何故かと言うと、今のハジメの格好は丈の長い黒コートに紅い珠が埋った義手と義眼を隠す眼帯を装備。

加えて白髪……重度の中二患者の完成形だった。鏡で自分の姿を見たハジメが絶望して膝から崩れ落ち四つん這い状態になった拳、丸一日寝込むことになり、香織とユエにあの手この手で慰められるのだが……みなまで語るまい。

「大丈夫だよ、ハツくん。私もお揃いだから」

そう香織も丈の長い黒コートにサングラスを頭にかけている。ちなみに、ハジメとの差分のためにネクタイがリボンになっていたり、下がクールホットパンツだったり、靴がサイハイブーツとかなり差分がついていた。

「安心しろ、ハジメ。似合っている」

「右に同じく」

「んっ間違い無い」

シヨウとアシストとユエはそうやってフオロー入れたあと装備を確認して、いよいよ出発の時

三階の魔法陣を起動させながら、ハジメはユエと香織、シヨウ達に静かな声で告げる。

「…俺達の力は地上では異端だ。教会や国の奴らが黙っていることはないだろう。それだけならまだしも黒幕の神を自称する狂人と敵対するかもしれない。…命がいくつあっても足りないぐらいのヤバイ旅だ。…大丈夫か?」

ハジメは最後の確認を皆にする。香織は強い眼差しでハジメを見つめ返す。

「問題ないよ。この命と体は最後までハジメくんの為にあるから。」

ハツくんと一緒なら誰が相手でも負けないよ。」

ユエも同じく強い眼差しでハジメを見る。

「んっ…問題ない。ハジメと香織が一緒だから…大丈夫」

シヨウとアシストが強い眼差しでハジメを見る。

「大丈夫 だ／です ！」

ハジメは嬉しそうに頷いた。

「そうか…俺が二人を二人が俺を守る。三人で世界を越えよう。」

「うん！」 「んっ！」

「俺達も居るぞ。忘れんなよ」「右に同じく」

そんなやり取りをして出発しようとしたその時。

「それとハジメ、ちょっといいか？」

シヨウがハジメに声をかけた。

「どうした？」

「一つ忠告……というよりお願いがあつて」

「お願い？何だ」

シヨウは静かな声で告げた。

「敵意や悪意を向ける者をいくら殺してもかまわない。けど、善意や好意を向けてくれる人には優しくしてやってくれ」

「……わかった」

ハジメはシヨウの言葉を心に仕舞った。それはたった一人の幼なじみの言葉だったからか、それともそれが必要になる時が来るかもしれないとおもったからか

そして、魔方陣が起動して、5人は「オルクス大迷宮」を後にした

……



## お外と初チエンジン

魔法陣の光に満たされた視界、何も見えなくとも空気が変わったこととは実感した。奈落の底の澱よどんだ空気とは明らかに異なる、どこか新鮮さを感じる空気にハジメの頬が緩む。

やがて光が収まり目を開けたハジメの視界に写ったものは……

空中だった

「なんでやねん」

魔法陣の向こうは地上だと無条件に信じていたハジメは、あり得ない光景に思わず半眼になってツツコミを入れてしまった。正直、めちゃくちゃ驚いている。

「いや、ツツコミより着地着地！」

そう言いながらシヨウとハジメと香織は空力で、ユエは魔法で、アシストはシヨウにお姫様抱っこされて着地した。

---

地上の人間にとって、そこは地獄にして処刑場だ。断崖の下はほとんど魔法が使えず、にもかかわらず多数の強力にして凶悪な魔物が生息する。深さの平均は一・二キロメートル、幅は九百メートルから最大八キロメートル、西の【グリュエーエン大砂漠】から東の【ハルツィナ樹海】まで大陸を南北に分断するその大地の傷跡を、人々はこう呼

ぶ。

「ライセン大峡谷」と。

ハジメ達は、そのライセン大峡谷の谷底にいた。地の底とはいえ頭上の太陽は燦々さんさんと暖かな光を降り注ぎ、大地の匂いが混じった風が鼻腔をくすぐる。

たとえばどんな場所だろうと、確かにそこは地上だった。呆然と頭上の太陽を仰ぎ見ていたハジメとユエの表情が次第に笑みを作る。無表情がデフォルトのユエでさえ誰が見てもわかるほど頬がほころんでいる。

「……戻って来たんだな……」

「うん」

「……んっ」

「だな！」

「ですな」

みんなは、ようやく実感が湧いたのか、太陽から視線を逸らすとお互い見つめ合い、そして円陣を組むように、思いつきり抱きしめ合った。

「よっしやあああー!! 戻ってきたぞ、この野郎おおー!!」

「オー!!」

「んっー!!」

「YEEEEES!!」

「いえーい!!」

シヨウ達はしばらくの間、人々が地獄と呼ぶ場所には似つかわしくない笑い声が響き渡っていた。途中、地面の出っ張りに躓つまずき転倒するも、そんな失敗でさえ無性に可笑しく、二人してケラケラ、クスクスと笑い合う。

ようやく全員の笑いが収まった頃には、すっかり……魔物に囲まれていた。

「はあく、全く無粋なヤツらだな。……確かここつて魔法使えないんだっけ？」

ドンナー・シユラークを抜きながらハジメが首を傾げる。座学に励んでいたハジメには、ここがライセン大峡谷であり魔法が使えない場所であると理解していた。

「……でも力づくでいく」

ライセン大峡谷で魔法が使えない理由は、発動した魔法に込められた魔力が分解され散らされてしまうからである。もちろん、ユエの魔法も例外ではない。しかし、ユエはかつての吸血姫であり、内包魔力は相当なものであるうえ、今は外付け魔力タンクである魔晶石シリーズを所持している。

つまり、ユエ曰く、分解される前に大威力を持って殲滅すればよいということらしい。

「力づくつて……効率は？」

「……十倍くらい」

どうやら、初級魔法を放つのに上級レベルの魔力が必要らしい。射程も相当短くなるようだ。

「あく、じゃあ俺がやるからユエは身を守る程度にしとけ」

「うっ……でも」

「いいからいいから、適材適所。ここは魔法使いにとつちや鬼門だろ？ 任せてくれ」

「ん……わかった」

ユエが渋々といった感じで引き下がる。せつかく地上に出たのに、最初の戦いで戦力外とは納得し難いのだろう。少し矜持が傷ついたようだ。唇を尖らせて拗ねている。

——ドパンツ！ドパンツ！ザジュ！ザジュ！

ハジメとユエが話している間にシヨウ、アシスト、香織が片手間で片付けた。

魔物達は撃ち抜かれたり、焼き切られたりと無惨に倒れていった。

ドンナー・シユラークを太もものホルスターにしまった香織は、首を僅かに傾げながら周囲の死体の山を見やる。

その傍に、トコトコとユエが寄って来た。

「……………どうしたの？」

「いや、あまりにあっけなかつたから……………ライセン大峡谷の魔物って相当凶悪って話だったから、もしかや別の場所かな？と思って」

「確かに弱いな。アシストここが何処だか解説できるか？」

「まごう事なき、【ライセン大峡谷】です」

「……………みんなが化物」

「ひでえ言い様だな。まあ、奈落の魔物が強すぎたってことでいいよな。ハジメ」

「ああ、そうだな」

そう言っつて肩を竦めたハジメは、もう興味がないという様に魔物の死体から目を逸らした。

「さて、この絶壁、登ろうと思えば登れるだろうか……………どうする？ ライセン大峡谷と言えば、七大迷宮があると考えられている場所だ。せつかくだし、樹海側に向けて探索でもしながら進むか？」

「……………なぜ、樹海側？」

「いや、峡谷抜けて、いきなり砂漠横断とか嫌だろ？ 樹海側なら、町にも近そうだし。」

「……確かに」

「わかったよ」

「賛成だ」

「左に同じく」

ハジメの提案に、皆も頷いた。魔物の弱さから考えても、この峡谷自体が迷宮というわけではなさそうだ。ならば、別に迷宮への入口が存在する可能性はある。ハジメ達の「空力」やユエの風系魔法を使えば、絶壁を超えることは可能だろうが、どちらにしろライセンス大峡谷は探索の必要があったので、特に反対する理由もない。

ハジメは、「宝物庫」からバイクを取り出す。別パーツでサイドカーが付けられるが特に使う機会はないので倉庫入りもとい【宝物庫】入りだ。

シヨウは異空間収納からカードの様な物を取り出し、それを空へ投げける。

するとカードは大きくなり、シヨウを通って、そのまま下に降りて通り過ぎる。

するとシヨウの姿は一新、白い執事服から黒いスーツに蒼いラインが入った大きな機械の翼が付いたバックパックと右腕に継ぎ目が入った両刃の剣——所要、蛇腹剣の「アーティファクト」を装備し、左腕には魔法吸収と空間魔法が付与された八角形のシールドを装備。バックパックの翼から桃色の羽のエフェクトが舞い上がった。

—アシスト、解説よろ！—

—はい！—

—プレート型アーティファクト フォームチェンジャー—

—このアーティファクトは、シヨウとハジメの合同制作アーティファクトで、このように装備の瞬間変更——フォームチェンジが出来る

るといえるロマン六割、実用性三割の変更アイテム的なアーティファクトです。そして、このフォームチェンジシリーズは全12種で豊潤な戦闘スタイルを生みます―

―そしてこれがシヨウの12のフォームの内の一つ、『デステイバーンフォーム』です！―

「祝え！邪神を駆逐し、ハジメ等を故郷へ導く我らがメシア！その名もアオイ シヨウ デイステイバーンフォーム！運命灼熱の救世主がこの地に降り立った瞬間です！」

と、某預言者の如く祝ってもらった所で

「よし！じゃあ移動するよ。アシスト」

「はい！」

そうしてシヨウとアシストは飛んで、ハジメ達はバイクで移動を始めた。

ハジメが運転するバイクの前にユエ、後ろに香織を乗せて走行する。こころなしかユエはハジメに寄りかかり鼻をひくひくさせたり、香織はハジメの身体をさわさわして固く抱き締めて首筋に顔を埋めてるがハジメはここ最近上がったスルースキルでスルーした。

――グルアアアア!!

「あ！魔物の声」

「さっきのザコよりかはマシな感じだな」

後ろから気配を感じたハジメ達はその大きな魔物をすぐに見つける。

「おーおーデカいデカい」

「ハジメ、何かいるか？」

「なに？アレ？」

それはなんか色々危うい格好のウサミミ少女だった…。どうやら後ろの大きな魔物から走って逃げてるらしい。

「やっどみづけまじだく!!だずげでくだぎくい!!」

全員はお互いに顔を合わせて 知り合いか確認する。目と目で会話を終わらせた皆の結論は見なかったことにしてスピードをあげてその横を通り過ぎる。だった…

何故なら関わったら面倒なタイプ!!つという奇跡の一致により少女をスルーしたのだ。その様子に魔物もおろかウサミミ少女も呆然と固まった。

「えーーーーー!?!」

ウサミミ少女の運命やいかに。

This is ウサギ but 残念

「お願いですく見棄てないでく!!」

ウサミミ少女は助けを求め。それを聞いて、ハジメは舌打ちしてバイクを止め、ホルスターからドンナーを取り出す。

刹那

——ドパンツ!! ドパンツ!!

二発の銃声が峡谷に響いた……

ドンナーの銃弾が双頭テイラノの頭をぶち抜き、地に沈む。ウサミミ少女は、下敷きに成らぬ様に逃げる

振り向くと、双頭テイラノが頭から血を流して息絶えていた……

「死んでる……ダイヘドアを一撃で倒すなんて……」

そう言うと、近付いてきたハジメに抱きつかんと飛び出す

「助けていただき有難うございます! では私の話をきいてk」「ハジメくんが誰を助けたって?」あだだだだだ!」

香織は少女の頭にアイアンクローを見舞った。

「ハジメくんは敵が居たから倒しただけだよ。勘違いしないでね」

香織がそう言うと香織は少女から手を離す。少女はというと、アイアンクローの痛みに地面でゴロゴロ転がっている。

「お前ら……あのく、ウサミミはん、さつき、やつと見つけた」言つてたけど? 詳しく聞かせてもらえるかな?」

シヨウの言葉に、ハジメ達は驚く。シヨウがこう言うのにはちゃんとした理由がある。取敢えず、話を聞く事に決めた



このウサミミ少女こと——『シア・ハウリア』が言うにはだ……彼女達、兎人族の一つ【ハウリア族】は亜人の国家【フェアベルゲン】のある樹海で暮らしていた。しかし、彼女の存在がハウリア族が追放される原因となった……

亜人族は本来魔力を持たない。しかし、彼女は魔力を持ち、直接操作出来た。更に、固有の魔法である【未来視】——仮定した先の未来を視る力を持っていたのだ。これは魔物と同じ力と見られ、一族の存亡に関わる事になる……ハウリア族は樹海を追われ、北の山脈に移住する事にしたのだが……その途中で、人間族至上主義の軍事国家【ヘルシャー帝国】の兵に見つかってしまった

ハウリア族は争いを苦手とする一族……半数以上が捕らえられてしまい、苦肉の策でライセン大峡谷へ逃げ込んだのだ。しかし、今度は魔物に襲われてしまった……

「お願いです！ 私達を——私の一族を助けてください!!」

「断る!!」

「嫌よ!!」

ハジメと香織はそれをバツサリ切り捨てた。

「この、バカ夫婦!!」

そしてシヨウはハジメと香織に拳骨を喰らわせた

「何すんだテメエ!!」

「何するのよ!!」

「お前ら、シアはんが『見棄てないで』と聞いて、助けるの決めただろ。それは、お前らが奈落到落ちて、死にかけて、一番言いたかった言葉だろう!」

「!!」

「なのにお前らは……変わっちゃまったのか!? 真正正銘の化物に……誰かの為に強かった自分を捨てて、自分達の為だけに一切を切り捨てて生きるのか!? そんな生き方、故郷で出来るのか?」  
ハジメと香織は黙りこんでしまった。

次にウサミミ少女に振り返って

「シアはんは『未来視』でそれを見なかったのか? 何故そんな事になっちゃったんですか?」

「……貴方の言う通りです」

少女——シアは悔しそうに拳を握る。そして

「頑張りが足りなくて変えられなかった未来もありました。でも、私は今度こそ……貴方達との未来を諦めたくないんです……!」

シアの決意に、ハジメと香織もぐうの音も出ない。それは、何かなんでも生きて帰ると決めた時の決意と同じだったからだ。

「ハジメ。連れて行こう」

ユエもハジメ達に言う

「樹海には案内人が必要。元住人ならちようど良い」

それに、と続け

「私達は最強」

「……まあ、お前がそう言うなら」

「私も……ハジメくんが言うなら」

ハジメは溜め息を吐いて、決めた。

「という訳や。助ける代わりにハウリアさん等を樹海の案内に雇うと  
言うことでもいい?」

「それで文句はないな?」

「はい! 勿論です!」

ハジメは【宝物庫】からバイクの追加パーツサイドカーを付ける。  
その日のうちにまさか追加パーツを使うとはと、ハジメは心中でそう

もらす。

「よし、それじゃあ乗れ」

ここでハジメは自分達が名乗ってなかったことに気づいたので名乗ることにした。

「南雲ハジメだ」

「白崎香織」

「…………ユエ」

「アオイ ショウだ、よろしく!」

「アシストです。以後お見知りおきを」

「はい!よろしくお願いします!」

シアは嬉しそうに返事をした。

## 兎とフォームチェンジと

「それじゃあ、お二人とも魔力を直接操れたり、固有魔法が使えると……？」

大峡谷を疾走する二台のバイク。ハジメ達の乗る「シユタイプ」に、ウサミミの少女——『シア・ハウリア』は居た。ハジメが操縦し、その前にユエが座り、後に香織が座り、サイドカーにシア座っていた。

「ああ、そうなるな。この乗り物や俺の武器はアーティファクトみたいなもんだが」

それに、と

「俺よりも、シヨウなんかそれ以上の存在だ」

そう言つてハジメは視線を、隣を飛行するシヨウとアシストに向ける。

シヨウは桃色の羽のエフェクトを広げ、バックパックに取り付けた“重力石”で飛行している。

アシストは“ノイント”が使っていた分解魔法の翼で飛んでいる。

「それつてつまり、私と皆さんつて——」

「魔物と同じ力を持つて点では同類だね」

「……そうだったんですね……」

それを聞いてシアが泣き出す。自分だけじゃなかった……泣かずにいられないだろう……

「そろそろです」

アシストが目的地への到着を知らせる。

「魔物の群……ハジメさん！　もしかしたら……!!」

「騒ぐな。わかつてる 飛ばすから確り掴まってる！」  
シアが慌て、ハジメはそう言うのと「シユタイプ」のスピードをあげ、

全長3m〜5mの、尾に刺付き鉄球の様な気管を持つワイバーン  
『ハイベリア』……………コイツらが兎人族を襲っていた

その内の一匹が子供を庇う兎人族の女性を尾で叩き潰そうとする

刹那、ハイベリアは無数の鉛弾に頭をズタボロにされて死んだ

「……………え？」

「はあああああ!!!」

彼女は見た

ハイベリアの群を襲う、ヒトの形をした“何か”を

桃色の羽を煌めかせながら、燃え上がる剣を鞭の様にしなせながら  
ハイベリアを焼き切る蒼い髪の少年……………シヨウだ。

「ハアアアアアアアアアア！」

そう掛け声をあげながら蛇腹剣を振るうとどんどん伸びる伸びる。  
それがこのアーティファクトの特徴だ

―装着型蛇腹剣アーティファクト

アグレッツシブ・ブレイド―

刃の根本部分に小さな“宝物庫”がついており、そこに収納されている  
最大百キロメートルの長さの刃が魔力を注ぐことで自在に出し  
入れ出来るのだ。一見すると無限に伸びる蛇腹剣である。

そこに「+魔力武装」で火属性を纏わせて斬ると同時に焼き尽くし  
ている。

それを振るうシヨウと共に、自分達の前に何かが止まり、白髪に黒い服装の少年少女……ハジメと香織が何かを持って、シヨウと共にハイベリアの群を駆逐していく……

「みんな！ 助けを呼んできましたよ!!」

少年と共に居たのは、シアだった

『シア!!』

兎人達は、シアが連れてきた助けに安堵した。それと同時に、ハイベリアの群も皆死に絶えた……

「ハジメ殿で宜しいか？ 私は、カム。『カム・ハウリア』シアの父にしてハウリアの族長をしております。この度はシアのみならず我が一族の窮地をお助け頂き、何とお礼を言えはいいか…… しかも、脱出まで助力くださるとか……父として、族長として深く感謝致します」

そう言つて、カムと名乗ったハウリア族の男性は深々と頭を下げた。濃紺の短髪の初老の男性は、確かに何処と無くシアに似ていた。後ろには同じように頭を下げるハウリア族一同が居る

「礼は受け取っておく。だが、樹海の案内と引き換えつて事は忘れるなよ?。」

「勿論ですとも」

ハジメとカムが話す間、シヨウは魔物を解体して異空間収納に仕舞った。

「ハジメ、魔物の回収終わったよ」

「よし！グズグズしてつとまた魔物が集まってくる。此処を出るぞ」

そう言つてハジメ達を峡谷の出入り口である峡谷の階段に誘導し

た

峡谷の出入り口である階段を登る中、シアが口を開く

「あの……ハジメさん。本当にいいんですか？」

「何がだ？」

「この先には帝国兵が居ます。このままだと同じ人間族と戦う事に……」

「それがどうかしたのか？」

おずおずと言うシアにハジメはそう応える

「えっと……私達を守る為に同族と敵対する事になるのでは……と……」

「何勘違いしてるのかな」

「言つとくがな。お前らを守るのは樹海の案内が終わるまでだ。邪魔するヤツは魔物だろうが人間だろうが、殺す！それだけだ」

冷酷にハジメと香織は言い、腿のホルスターに仕舞っている“ドンナー&シュラーク”を抜いた。

一方でシヨウは、

「早めに殺りたいから別のフォームになるよ」

そう言いながらシヨウは“フォームチェンジャー”でフォームチェンジをする。

黒いスーツから白いスーツに赤黒いコートをはおり、首にチョーカーのようなアーティファクトを装備。

それでは新フォームの祝福をしてもらおう。

「祝えー！邪神を駆逐し、ハジメ等を故郷へ導く我らがメシア！その名もアオイ ショウ

ヴィランキングフォーム！悪党皇の救世主がこの地に降り立った瞬間です！」

『……………』

ハウリア一同は状況がわからず黙るしかなかった。

「恒例行事だ。気にするな」

「いや、今日から始めただろ!？」

「細かい事は気にするな。さ、行くぞ」

とりあえずではぐらかし、先を急ぐように促す

「何だか、忙しい人ですね」

シアの言葉に一部を除いた一同は賛成せざる得なかった。



敵に回したくないタイプ

「おいおい、マジかよ。生き残ってやがったのか 隊長の命令だから仕方なく残ってただけなんだがなあこりゃあ、いい土産ができそうだ」

三十人の帝国兵がたむろしていた。周りには大型の馬車数台と、野営跡が残っている。全員がカーキ色の軍服らしき衣服を纏っており、剣や槍、盾を携えており、ハジメ達を見るなり驚いた表情を見せた

だが、それも一瞬のこと。直ぐに喜色を浮かべ、品定めでもするよ  
うに兎人族を見渡した

「小隊長！ 白髪の兎人もいますよ！ 隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りには別にいいが、あれは絶対殺すなよ？」

「小隊長お、女も結構いますし、ちよつとくらい味見してもいいつすよねえ？ こちとら、何もないとこで三日も待たされたんだ。役得の一つや二つ大目に見てくださいいよお」

「ったく。全部はやめとけ。二、三人なら好きにしろ」

「ひゃつほ、流石、小隊長！ 話がわかる！」

帝国兵は、兎人族達を完全に獲物としてしか見ていないのか戦闘態勢をとる事もなく、下卑た笑みを浮かべ舐めるような視線を兎人族の女性達に向けている。兎人族は、その視線にただ怯えて震えるばかりだ

帝国兵達が好き勝手に騒いでいると、兎人族にニヤついた笑みを浮かべていた小隊長と呼ばれた男が、漸くハジメの存在に気がついた

「ああ？ お前誰だ？ 兎人族……じゃあねえよな？」

ハジメは、帝国兵の態度から素通りは無理だろうなと思いつながら、一応会話に応じる

「ああ、人間だ」

「はあ？　なんで人間が兎人族と一緒にいるんだ？　しかも峡谷から。ああ、もしかして奴隷商か？　情報掴んで追っかけたとか？　そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いいや。そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

勝手に推測し、勝手に結論づけた小隊長は、さも自分の言う事を聞いて当たり前、断られることなど有り得ないと信じきった様子で、そうハジメに命令した

当然、ハジメが従うはずもない

「断る」

「……今、何て言った？」

「聞こえなかったのかな？　ハジメくんは断ると言ったんだよ」

香織が帝国兵を煽ったあとハジメが続けて言った

「こいつらは今は俺のもの。アンタ等には一人として渡すつもりはない。諦めてさっさと国に帰ることをオススメする」

聞き間違いかと問い返し、返って来たのは不遜な物言い。小隊長の額に青筋が浮かぶ

「……小僧達、口の利き方には気をつけろ。俺達が誰かわからないほど頭が悪いのか？」

「俺達はテメエらの様に脳ミソが小さくて下半身に付いている訳じゃねえんだよ。そんなこともわからねえのか？」

「愚かにもほどがあります」

シヨウとアシストの言葉にスッと表情消す小隊長。周囲の兵士達

も剣呑な雰囲気でハジメを睨んでいる

その時、小隊長が、剣呑な雰囲気には背中を押されたのか、ハジメの後ろから出てきたユエと先ほどからしやべっている香織とアシストに気がついた途端、下碑た笑みを浮かべた

「ああなるほど、よおくわかった。テメエが唯の世間知らず糞ガキだつてことがな　ちよいと世の中の厳しさつてヤツを教えてやる。くつくつく、そつちの嬢ちゃん達えらい別嬪じゃねえか。てめえの四肢を切り落とした後、目の前で犯して、奴隷商に売っぱらつてやるよ」その言葉にハジメは眉をピクリと動かし、ユエは無表情でありながら誰でも分かるほど嫌悪感を丸出しにしている。目の前の男が存在すること自体が許せないと言わんばかり、ユエが右手を掲げようとした

だが、それを制止するハジメ。訝しそうなユエを尻目にハジメが最後の言葉をかける

「つまり、敵つてことでもいいよな？」

「ああ!?　まだ状況が理解できてねえのか!　てめえは、震えながら許しを「うっせえから『黙って跪け』!?!」

シヨウの言葉と同時に帝国兵達は言葉通りに喋るの止めて、跪いた。

——ドパンツ!ドパンツ!ドパンツ!ドパンツ!

「何で俺達が、テメエらの言うことなんざ聞かなきゃなんねえんだよ?　俺がテメエの指図を受けるわけねえだろ?」

——ドパンツ!ドパンツ!ドパンツ!ドパンツ!

「そもそも何で、テメエらは誰の許可を得て俺達に話しかけているんだ?　身の程をわきまえやがれ!」

——ドキユンツ!ドキユンツ!ドキユンツ!

「で?　さっきの威勢はどうした?　ずいぶんと楽に殺されてるじゃねえ

か？」

シヨウがそう言っている間にハジメと香織とアシストは帝国兵をチマチマと片付けていった。

そして、帝国兵は一人だけとなった

(ひい、く、来るなあ！ い、嫌だ。し、死にたくない。だ、誰か！  
助けてくれ！)

帝国兵は命乞いをしたいがすることが出来ない。シヨウの『言霊魔法』によって黙らされている。

「シヨウ、そいつに聞きたいことがある。喋らせてくれ」

「……わかった。『おいテメエ、ハジメの質問に嘘偽りなく答えろ』」  
そう言い帝国兵を質問に答えられる様にした。

「おい、他の兎人族がどうなったか教えてもらおうか。結構な数が居たはずなんだが……全部、帝国に移送済みか？」

ハジメが質問したのは、百人以上居たはずの兎人族の移送にはそれなりに時間がかかるだろうから、まだ近くにおいて道中でかち合うようなら序でに助けてもいいと思っただけだからだ。帝国まで移送済みなら、わざわざ助けに行くつもりは毛頭なかったが

「……多分、全部移送済みだと思う。人数は絞ったから……」

“人数を絞った”それは、つまり老人など売れそうにない兎人族は殺したということだろう…… 兵士の言葉に、悲痛な表情を浮かべる兎人族達。ハジメは、その様子をチラッとだけ見やる

直ぐに視線を兵士に戻すともう用はないと瞳に殺意を宿した  
ハジメの殺意に気がついた兵士は只々怯え、そして……

——ドパンツ！

一発の銃声が響いた。

息を呑む兎人族達

あまりに容赦のないハジメ達の行動に完全に引いている様であるその瞳には若干の恐怖が宿っていた。それはシアも同じだったのか、おずおずとハジメに尋ねた

「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは……」

「はあ?」

「何言ってるんだ?」

という呆れを多分に含んだ視線を向けるハジメとショウウに「うつ」と唸るシア 自分達の同胞を殺し、奴隷にしようとした相手にも慈悲を持つようで、兎人族とはとことん温厚というか平和主義らしい……

ハジメが言葉を発しようとしたが、その機先を制するようにユエが反論した

「……一度、剣を抜いた者が、結果、相手の方が強かったからと言って見逃してもらおうなんて都合が良すぎ」

「そ、それは……」

さらに香織も反論する

「そもそも、守られているだけのあなた達がそんな目をハジメくんに向けるのはお門違いだよ」  
「……」

ユエと香織は静かに怒っているようだ 守られておきながら、ハジメに向ける視線に負の感情を宿すなど許さないと言わんばかりである 当然といえば当然なので、兎人族達もバツ悪そうな表情をしている

「ハジメ殿、ショウウ殿、申し訳ない…… 別に、貴方に含む所がある訳では無いのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんので…… 少々、驚いただけなのだ」

「ハジメさん、すみません」

シアとカムが代表して謝罪するが、ハジメは気にしてないという様

に手をヒラヒラと振るだけだった

「ハジメ、片付け終わったぞ」

そう言うところへは、無傷の馬車や馬の所へ行き、兎人族達を手招きする。樹海まで徒歩で半日くらいかかりそうなので、折角の馬と馬車を有効活用しようというわけだ。

ハジメは魔力駆動二輪を「宝物庫」から取り出し馬車に連結させる。馬に乗る者と分けて一行は樹海へと進路をとったシヨウはデステイバーンフォームに変わってアシストと共に目的地に飛翔した。

数日後、様子を見に来た帝国兵が死体の無い血溜まりに驚いた事は言うまでもない……………

## ハルツイナ樹海

道すがらシヨウはハジメと香織に何故敵を殺すのに手を出したのか問う

「俺とアシストだけでもよかったのに、何で参加したんだ？【纏雷】も使わずに？」

「まあ一言で言えば実験だな…これからは街中で戦う場面も出てくるかもしれない。」

「敵をレールガンで殺すのはいいけど背後の民家や住人までふっ飛ばすわけにはいかないでしょ？」

2人は「それに」と続け、

「人間を殺しても何も感じなかった『が／けど』無差別の殺人鬼になるつもりはない（からね）。」

ハジメ達の後半の台詞には心配そうにするが先程の会話を聞いてたユエは何も言わずに戻ろうとする。

「あ…あのっ…皆さんのこともつと教えてくれませんか？…旅の目的とか今までしてきたこととか、ハジメさんや香織さんとユエさん達のこと…もつと知りたいです！」

「う…うう…つらい…つらすぎます…皆さんに比べたら私なんて恵まれて…自分が情けないですう！」

すべてを話し終えた結果

シアは号泣してた。ハジメはその勢いに軽くドン引きしてるとシアが覚悟を決めた顔をしてこちらを見る。

「私決めました!!このシア・ハウリア。皆さんの旅のお供をさせていただきますます!!…私たちはたった六人の同類…いや仲間!共に苦難を乗り越えましょう!」

現在進行形で守られてるシアがそんなことを言ってるハジメ達は呆れた顔を浮かべる。

「なんて凶太いウサギ…というかお前、安全が確保できたら一族から離れるつもりだからだろ?」

ハジメの言葉にシアは凶星をつかれた顔を浮かべるが変にごまかさずに開き直った顔でハジメの言葉に頷く。

「そのつもりですが…私は本当に皆さんを…」

変に期待を待たせないように香織はその続きを遮る。

「理由はなんだっていいのよ。だが変な期待はしないで。私達の目標は七大迷宮の攻略よ。貴方じゃ瞬殺されて終わりね…同行を許すつもりは毛頭ないわよ」

香織の言葉にシアはシユンとし、耳も下がっていた

「……………」

だが、シヨウは目の前の少女に何かしらの力を感じていた……だが、確証は無いので確認した。

—アシスト、シアはんってダイヘドアから逃げられるくらいの早さや白崎はんのアイアンクローに耐えられてたけど、兎人族はそこまでスペックが高いの?—

—いえ、そんなはずは無いです。もしかしたらシアは、魔力操作の派生技能か何かで身体強化の魔法を使えるのかもしれない。—

—化物レベルの攻撃に耐えられて、早くて、未来が見える。鍛えれば間違い強くなるな。—

確証を得たシヨウはそう考えながらニヤついた。



それから数時間して、遂に一行はハルツィナ樹海と平原の境界に到着した。ハジメはシユタイフを仕舞い、シヨウは執事姿に戻った

樹海の外から見る限り、ただの鬱蒼とした森にしか見えないのだが、一度中に入ると直ぐさま霧に覆われるらしい

「では行き先は森の深部…大樹のもとでよろしいですか？」

森の入口近くでカムは確認の為にハジメに聞く。ハジメは前を見据えて頷く

「ああ、おそらくそこが迷宮の入口だ」

「そうだね」

「だな」

「…樹海が迷宮じゃないの…？」

「ああ、俺達もそう思っていたんだがオルクス大迷宮にいたような魔物が樹海にいたとしたら…亜人たちが住める場所にはならない…族長から聞いたのだが最深部にある巨大な樹、大樹ウーア・アルト。そこは聖地として近づく者は滅多にいないらしい。迷宮があるとしたら多分そこだ。」

「お話中のところ申し訳ない。これより先はできる限り気配を消してもらえますかな。我々はお尋ね者の身。フェアベルゲンの者に見つかる厄介です。」

カムの申し訳ない言葉にハジメ達は頷き迷宮で訓練して取得した【気配遮断】を発動する。かなりのレベルの【気配遮断】にカム達は驚きの声をあげる。

「我々、策敵や隠密行動はかなりと得意と自負していたのですが…ハジメ殿…できれば我々くらいにしてもらえますかな？そのレベルだところちらが見失いかねません。」

ハジメ達の実力に再び感心するカム

「いやはや兎人族の立つ瀬がありませんな」

「いや…もうその必要はないみたいだぞ」

ハジメ達の視線が鋭くなっていることに気づいた兎人族達はすぐにハジメの台詞の意味に気づいた。

「そんな…！まさか感づかれていたのか…!?」

「ううん。多分、運悪く見つかっちゃったみたいだよ。」

「これは少々面倒だな」

もうスピードでこちらにくる気配の正体に兎人族達はざわめく。

「そんな…よりによってなんで…」

武器を持つてた亜人族の男達が姿を見せる。隊のリーダーであるう亜人族がこちらを鋭く睨み大声を上げる。

「動くな！なぜここに人間がいる!!」

冷や汗をかきながらカムは周りの兎人族を庇うように前に出る。

「あ…あの、私たちは…」

言い訳を口にする前に亜人族のリーダーはめざとくシアの存在に気づく。

「白髪の兎人族の女…貴様ら、報告にあったハウリア族か!…忌み子を匿い続けた亜人族の面汚し共め!今度は人間を招き入れるとは…生きては帰さんぞ!!全員この場で処刑して…」

——ドパンツ!!

亜人族のリーダーのすぐ横を何かが通りすぎ、その後には大きな音を立てて後ろの木が抉れる。亜人族達はその木を確認し、音の発生源と見慣れないモノを持つ白髪の少年を見る。少年、ハジメは冷めた目で亜人族達を睨み付ける。

「こいつらを殺るといふのなら容赦はしない。ただの一人でも生き残れると思うなよ。」

ハジメの宣言に亜人族のリーダーは絶句した。それは先ほどの宣言にではなくその圧倒的なまでの力と瞳に…

「…今、何をした…？いや…それよりも…この力…コイツ、本当に人間か…?!」

思考が定まらないうちにさらにハジメは選択を迫る。

「敵対して無意味に全滅するか、大人しく家に帰るか、…好きな方を選び。こいつらの命は俺が保証している。」

ドンナー&シュラークを亜人族達に向けるとリーダーは舌打ち混じりにハジメ達を睨み殺気を納める。

「貴様ら…何が目的だ？」

「…目的は七大迷宮の攻略。『大樹ウーア・アルト』にその入口があるかもしれない。」

「…何を言ってる？…この樹海そのものが七大迷宮の一つであるはずだ。」

「いや、それはおかしい。」

「なんだと？」

「大迷宮ってのは『解放者』たちが残した『試練』なんだよ。亜人族は簡単に深部へ行けるんだろ？それじゃあ試練になっていない」

『解放者』？『試練』？一体なんのことかわからんが…

「…つまり国や同胞に危害を加えるつもりはないのだな」

「ああ」

亜人族のリーダー…虎族の男は目をつむりすぐに決断した。

「であれば大樹へ向かうのは構わないと私は判断する。」

「隊長！そのような異例は…」だがこれは部下の命を考えた私の独断。本国からの指示を仰ぎたい」

部下の言葉を被せるように言う虎族の男は続けて言う。

「お前の話も長老方なら知っておられるかもしれん。伝令が行くまで私とこの場で待機しろ。」

「…ちゃんと言った通りに伝えろよっ。」

エルフ族の男が数人こちらにきた。若いエルフ族の中心に落ち着いた雰囲気の方がハジメ達の前に出る。

「私はアルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。：お前さんの話は聞かせてもらった。：一つ、話の前に聞いておきたい。：「解放者」という言葉。どこで知った？」

ハジメは【宝物庫】から指輪を取り出す。

「手を出してくれ：オスカー・オルクスの指輪だ。」

アルフレリックは指輪を持ち中の紋章を見つけた。

「：なるほど、この紋章はまさしく：信じがたいがオスカー・オルクスの隠れ家に辿り着いているようだ。」

指輪をハジメに返すとアルフレリックはもときた村の道を向き話し出す

「よかろう。フェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。」

「ちよつと待て」

ハジメは勝手に決めてくる男に待ったをかける。

「俺たちは大樹に用があるだけでフェアベルゲンに興味はない。問題ないならこのまま向かわせてもらう。」

「いや、それは無理だ」

「なんだと？」

アルフレリックはハジメ達：特に兎人族達を見てため息を吐きハジメの疑問に答える。

「大樹の周囲は特に霧が濃くて亜人族でも方角を見失う。一定周期で訪れる霧が弱まった時でなければならん。：亜人族なら誰でも知っているはずだが…」

シヨウ、アシスト、ハジメ、香織、ユエは後ろの兎人族達：ハウリア族を見る。全員が青白い顔で冷や汗を流し出した。

「おい、どういうことだ？」ウサギさん達」

「あつ…」

ハジメとシヨウの威圧に思わず後ろに下がる兎人族達。カムは言い難そうに頬を掻きながら視線を反らす。

「え…いや…なんと言いますか…色々ありましたし。つい忘れていたというか…その…ええいお前たち！なぜ途中で教えてくれなかったのだ！」

「な…父様、逆ギレですか!? 私は父様が自信たっぷりだったからちようど周期なのかと…」

「そうですね僕たちもおかしいとは思っていたけど族長が…」

「お前たちそれでも家族か!? これはそう…連帯責任だ!!」

「父様汚い!」 「あんたそれでも族長か!!」

「そうだ! そうだ!」

ワイワイガヤガヤ

ハウリア族達の互いに互いが悪いなどというそんな責任転換の押し付け合いにハジメのイライラが限界を突破した。

## フェアベルゲン 前編

ハジメ達と頭に大きなたんこぶを作ったハウリア族達はアルフレリック達エルフ族に案内されてフェアベルゲンの道を進んで行った。「父様、私たちまで巻き込まないでくださいよお〜」

涙目のシアと対称的にどこか開き直ってるカムは満面の笑顔であった

「わっはっは、我らハウリア族はどんな時も一緒だ！」

第二次ウサギバトルまで後数秒というところでハジメは目線を斜め前のアルフレリックに戻す。

「それで…霧が弱まるまで本当に十日もかかるのか？」

「こればかりは我々でもどうしようもないな。」

アルフレリックはそう言葉を返して立ち止まる。ハジメ達も立ち止まり前を見る。そこには木々で出来た綺麗な国が広がっていた。

「さあ、着いたぞ。我々の故郷：『フェアベルゲン』だ。」

シヨウ達はそのあまりの綺麗さに言葉が出なかった。…それはまさしく村ではなく亜人族達の国が広がっていた。ゴホンツと咳払いが聞こえた。どうやら、気がつかない内に立ち止まっていたらしくアルフレリックが正気に戻してくれたようだ

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

アルフレリックの表情が嬉しげに緩んでいる。周囲の亜人達やハウリア族の者達も、どこか得意げな表情だ。ハジメ達は、そんな彼等の様子を見つつ、素直に称賛した

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空気も美味しい。自然と調和した見事な街だな」

「うん、元の世界じゃあ、こんなこと出来ないよ」

「ん……綺麗」

「二右に同じく」

掛け値なしのストレートな称賛に、流石に、そこまで褒められるとは思っていなかったのか少し驚いた様子の亜人達。だが、やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている

「では、我々長老会議に説明をさせてもらおうか」

そう言っただけでアルフレリックは長老達の会議場へとハジメ達を案内した

「……………なるほど。この世界は神の遊戯盤であつたか……………」

会議場で、ハジメとショウはアルフレリックに自分達の知る限りの事を話した。この世界の裏で人間族・亜人族・魔族を操り、戦争を引き起こす神を名乗る狂人、それに抵抗した【解放者】達の遺した遺産たる【神代魔法】。試練の場である【七大迷宮】。自分達が異世界の人間であり、七大迷宮を攻略すれば故郷へ帰るための神代魔法が手に入るかもしれない事等だ

アルフレリックは、この世界の神の話しを聞いても顔色を変えたりはしなかった。不思議に思っただけでハジメが尋ねると、「この世界は亜人族に優しくはない、今更だ」という答えが返ってきた。神が狂っているように見えないが、亜人族の現状は変わらないという事らしい。【聖教会】の権威も無いこの場所では信仰心もない様だ。あるとすれば、自然への感謝の念だという

「でも、何で貴方が【解放者】の事を知っているの？」

「詳しくは何も知らんよ。古くから伝わる、長老達に引き継がれる言ひ伝えだ」

香織の問いに、アルフレリックはそう言っただけで続ける

「【七大迷宮】は【解放者】達の創ったもの。曰く『迷宮の紋章を持つ者には敵対しないこと』、『その者を気に入ったのなら望む場所へ連れていくこと』 お前さんの持っている指輪はその紋章の一つだった。故に敵対せず案内しただけだ」

【ハルツィナ樹海】の創設者『リユーティス・ハルツィナ』が生み出した樹海。彼女は自身が【解放者】である事を【フェアベルゲン】の祖先達に話し、この口伝を遺した。他の大迷宮を攻略した者と敵対するのはならないと遺したのも理解できる。その実力は彼等を圧倒出来るからだ

そして、オルクスの指輪の紋章にアルフレリックが反応したのは、大樹の根元に七つの紋章が刻まれた石碑があり、その内の一つと同じだったからだそうだ

「それで、俺達は資格を持っているというわけか……」

アルフレリックの説明により、人間を亜人族の本拠地に招き入れた理由が解った。しかし、全ての亜人族がそんな事情を知っているわけではない筈なので、今後の話をする必要がある

「しかし、知っていてもそれを守らない者もいるのも事実だ」

そうアルフレリックが呆れる様なため息を吐いた時だった。会議場の扉を蹴破って、誰かが入ってきた

「アルフレリック!! 貴様、どういうつもりだ! なぜ人間を招き入れた? こいつら兎人族もだ! 忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によっては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ!!」

2 m半はあろう巨体の熊の亜人が、怒りを露に此方を睨んでいた。「なに、口伝に従ったまでだ。お前も長老の座に在るならば事情は理解できる筈だ」

当のアルフレリックは柳に風と熊人の巨漢にピシヤリと言う



「何が口伝だ！ そんなもの眉唾物ではないか！ フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけの事だ お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」

「なら、こんな人間族の小僧達が資格者だとも言うのか！ 敵対してはならない強者だと！」

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリックに熊の亜人は信じられないという表情でアルフレリックを、そしてハジメとシヨウを睨む

「フェアベルゲン」には、種族的に能力の高い幾つかの各種族を代表する者が長老となり、長老会議という合議制の集会で国の方針などを決めるらしい 裁判的な判断も長老衆が行う。今、この場に集まっている亜人達が、どうやら当代の長老達らしい。だが、口伝に対する認識には差があるようだ

アルフレリックは、口伝を含む掟を重要視するタイプのようだが、他の長老達は少し違うのだろう……アルフレリックは森人族であり、亜人族の中でも特に長命種だ 二百年くらいが平均寿命だったとハジメは記憶している。だとすると、眼前の長老達とアルフレリックでは年齢が大分異なり、その分、価値観にも差があるのかもしれない。ちなみに、亜人族の平均寿命は百年くらいだ

そんな訳で、アルフレリック以外の長老衆は、この場に人間族や罪人がいることに我慢ならない様だ

「……ならば、今、この場で試してやろう!!」

いきり立った熊の亜人が突如、ハジメに向かって突進した。あまりに突然のことで周囲は反応できていない アルフレリックも、まさかいきなり襲いかかるとは思っていなかったのか、驚愕に目を見開いている

一瞬で間合いを詰め、身長二メートル半はある脂肪と筋肉の塊の様な男の豪腕が、ハジメに向かって振り下ろされた

亜人の中でも、〔熊人族〕は特に耐久力と腕力に優れた種族だ。その豪腕は、一撃で野太い樹をへし折る程で、種族代表ともなれば他と一線を画す破壊力を持っている。シア達ハウリア族と傍らのユエ以外の亜人達は、皆一樣に、肉塊となったハジメ達を幻視した

しかし、次の瞬間には、有り得ない光景に凍りついた

——グシャ！

折れる音と共に振り下ろされた拳は、ハジメに届く前に、割り込んだシヨウにあっさりとは掴んだ途端にぎりつぶす。

「ギャアアア 『黙れ』!!」

そう言つて、シヨウはヴィランキングフォームにチェンジし、熊の亜人を黙らせる。驚愕の表情を浮かべながらも恐怖を覚え、必死に逃げようとする熊の亜人。必死に腕を引き戻そうとするが、体長が半分程度しかないにもかかわらず、シヨウはビクともしない。当たり前だ。筋力『アノス』とんでも無いことになってんだからそりやそうよ。そんなことは知らない熊の亜人からすれば、シヨウを不動の大樹の様に感じただろう

『『大気の弾丸』』

——ドスン

“言霊魔法”を発動し、シヨウは大気に命令をした。その途端空気の塊が遠慮容赦無く熊の亜人族の腹に突き刺さり、その場に衝撃波を発生させ、文字通り猛烈な勢いで吹っ飛ばす

熊の亜人は、悲鳴一つ上げられず、体をくの字に折り曲げながら最後の壁を突き破り虚空へと消えていった。暫くすると、地上で悲鳴が聞こえだす

誰もが言葉を失い硬直していると、シヨウが長老達に殺意を宿らせた視線を向けた

「で？ お前らもああなりたいか？」

ハジメの言葉に、頷ける者は居なかった……

## フエアベルゲン 後編

シヨウが熊の亜人を吹き飛ばした後、アルフレリックが何とか執り成し、シヨウによる蹂躪劇は回避された

熊の亜人は内蔵破裂、ほぼ全身の骨が粉碎骨折という危険な状態であったが、何とか一命は取り留めたらしい 高価な回復薬を湯水の如く使ったようだ。もつとも、もう二度と戦士として戦う事は出来ない様だが……………

現在、当代の長老衆である虎人族の『ゼル』、翼人族の『マオ』、狐人族の『ルア』、土人族（ドワーフらしい）の『グゼ』、そして森人族の『アルフレリック』が、ハジメと向かい合って座っていた ハジメの傍らには香織とユエとカム、シアが座り、その後ろにシヨウとアシストとハウリア族が固まって座っている

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた 戦闘力では一・二を争う程の手練だった熊の亜人（名前はジン）が、文字通り手も足も出ず瞬殺されたのであるから無理もない……………

「で？ あんた達は俺等をどうしたいんだ？ 俺は大樹の下へ行きただけで、邪魔しなければ敵対することもないんだが……………亜人族としての意思を統一してくれないと、いざつて時、何処までやっていいか解らないのは不味いだらう？ あんた達的に殺し合いの最中、敵味方の区別に配慮する程、俺はお人好しじゃないぞ」

ハジメの言葉に、身を強ばらせる長老衆 言外に、亜人族全体との戦争も辞さないという意志が込められていることに気がついたのだらう

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……………それで友好的になれるとでもっ？」

グゼが苦虫を噛み潰したような表情で呻く様に呟いたが、香織が反論した。

「何言ってるの？ 先に殺意を向けてきたのは、あの熊でしょ？ 蒼くんは返り討ちにしたただけだ 再起不能になったのは自業自得つてやつだよ」

「ぎ、貴様！ ジンはな！ ジンは、いつも国のことを思ってる！」

「それが、ハジメくんを問答無用に殺していい理由に成ると思ってるの？」

「そ、それは！ しかし！」

さらにハジメからも反論した。

「勘違いするなよ？ 俺が被害者で、あの熊野郎が加害者 長老つてのは罪科の判断も下すんだろ？ なら、そこどころ、長老のあんたが履き違えるなよ？」

おそらくグゼはジンと仲が良かったのではないだろうか。その為、頭ではハジメの言う通りだと分かっているも心が納得しないのだろう。だが、そんな心情を汲み取ってやるほど、ハジメも他の皆もお人好しでは無い

「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼の言い分は正論だ」

アルフレリックの諫めの言葉に、立ち上がりかけたグゼは表情を歪めてドスンツと音を立てながら座り込んだ。そのまま、むっつりと黙り込む

「確かに、この少年達は、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言うだけのことはあるね。僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」

そう言ったのは狐人族の長老ルアだ。糸のように細めた目でハジメを見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す

その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはある様だが、同意を示した。代表して、アルフレリックがハジメに伝える

「南雲ハジメ。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。故に、お前さんと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える……しかし……」

「絶対じゃない……か？」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があつたからな……」

「それで？」

アルフレリックの話しを聞いてもハジメの顔色は変わらない。すべき事をしただけであり、すべきことをするだけだという意志が、その瞳から見取れる

アルフレリックは、その意志を理解した上で、長老として同じく意志の宿った瞳を向ける

「お前さんを襲った者達を殺さないで欲しい」

「……殺意を向けてくる相手に手加減しろと？」

「そうだ。お前さんの実力なら可能だろう？」

「あの熊野郎が手練だというなら、可能か否かで言えば可能だろうなだが、殺し合いで手加減をするつもりはない。あんたの気持ちは解るけどな、そちらの事情は俺にとって関係の無いものだ。同胞を死なせたくないなら死ぬ気で止めてやれ」

奈落の底で培った、「敵対者は殺す」という価値観は根強くハジメの心に染み付いている。殺し合いでは何が起こるか解らないのだ。手

加減などして、窮鼠猫を噛むように致命傷を喰らわないとは限らない……その為、ハジメがアルフレリックの頼みを聞く事は無かった

しかし、そこで虎人族のゼルが口を挟む

「ならば、我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」

その言葉に、ハジメは訝しそうな表情をした。もとより、案内はハウリア族に任せるつもりで、フェアベルゲンの者の手を借りるつもりはなかった。そのことは、彼等も知っている筈である。だが、ゼルの次の言葉で彼の真意が明らかになった

「ハウリア族に案内してもらえとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える 何があつて同道していたのか知らんが、此処でお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なことだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」

ゼルの言葉に、シアは泣きそうな表情で震え、カム達は一様に諦めたような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのだから情の深さは折紙付きだ

「長老様方！ どうか、どうか一族だけにご寛恕を！ どうか！」

「シア！ 止めなさい！ 皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わないハウリア族の皆で何度も何度も話し合って決めた事なのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様！」

土下座しながら必死に寛恕を請うシアだったが、ゼルの言葉に容赦はなかった

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲン

を謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれんのにな」

ワツと泣き出すシア。それをカム達は優しく慰めた。長老会議で決定したというのは本当なのだろう。他の長老達も何も言わなかった。おそらく、忌み子であるという事よりも、そのような危険因子をフェアベルゲンの傍に隠し続けたという事実が罪を重くしたのだろう。ハウリア族の家族を想う気持ちが事態の悪化を招いたとも言える。何とも皮肉な話だ

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだが？ どうする？ 運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

それが嫌なら、こちらの要求を飲めと言外に伝えてくるゼル。他の長老衆も異論はないようだ。しかし、そこで事態は急変する

「いや、お前らのルールなんて知らないよ。ハジメ達を故郷に帰して、神（笑）を殺す。その邪魔をするなら、どこの誰でも関係ない、俺が潰す！どこの、誰でもだ！」

——ゾクツ!!!

まるで極寒の地に放り出されたかの様な寒気を、長老達は感じる。その根源である者を見やる。そこに居たのは……

ショウがメカチックなイヌミミと黒いラバースーツに紺の塗装が入った白い鎧を身につけ、両腕には10mmバルカン砲、胸部サイドと肩部と膝部には超小型マイクロミサイルポット、背部にはスラスターを装備し、腰部には大型のメイスを携帯し、その両手には直径80cmの実弾式のバスターライフルレールガンを握り絞めている

「ハウリアは、ハジメが雇った案内人だハジメが雇っている間は手出しさせない。それでもと言うなら、『フェアベルゲン』ごと霧を吹き飛ばすこともできる」



「は、ハツタリを言うな！ 人間!!そんなこと出来るわけが「できます!」!?!」

ゼルの言葉を遮る様にシヨウの背後からアシストが声を上げた。そこには凶悪な兵器を大量に詰め込み、人が乗り込めるほど巨大な物体が浮いていた……………

「これは「エクステンド」って言ってな。こいつで派手に射てば、爆破の勢いでお前らも霧もまるごとフツ飛ぶ。案内がないのなら邪魔するものを全て蹴散らせばいい!ただそれだけだ」

「わかったらその汚い口を閉じなさい。あなたの前にいるのは只の人間ではありません。暴乱狼王の救世主、アオイ シヨウ ランページ ルプスレクスフォームですよ」

長老達は固まったシヨウの力に驚いたただけではなくアシストの言葉の意味が分からなかったのだ。……………当たり前や

それにハジメが口を挟んだ

「俺はお前らの事情なんて関係無いんだよ。このままコイツ等を処刑するって事は俺達の邪魔をするって事だろうが」

そして、ハジメは左手でシアの頭を撫でる

「俺の行く道を拒もうってんなら、覚悟を決めてもらおうか?」

「……………本気かね?」

「当然だ。俺達の案内人は「ハウリア」だ」

「何故そこまで拘る? 大樹に行きたいだけなら案内は誰でも良い筈だ。案内人を変えるだけで我々と争わずに済むのだ。問題なからう」  
アルフレリックの問いに、ハジメは何の迷いもなく

「問題大有りだ。案内するまで助けてやるって約束したんだ。途中で良い条件が出てきたからって鞍替えなんざ格好悪いだろ?」

続けてシヨウが、

「ハジメが惚れた女の前では格好良くありたいって望んだ。俺が動くにはそれだけで十分だ」

そう答えた。

ハジメとシヨウに引く気がないと悟ったのか、アルフレリックが深々と溜息を吐く。他の長老衆がどうするんだと顔を見合わせた。暫く、静寂が辺りを包み、やがてアルフレリックがどこか疲れた表情で提案した

「仕方無い……ならば、お前さんの奴隷ということにでもしておこう【フェアベルゲン】の掟では、樹海の外に出て帰ってこなかった者、奴隷として捕まった事が確定した者は、死んだものとして扱おう。樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼ無い。故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬように死亡と見なして後追いを禁じているのだ……既に死亡と見なしたものを処刑はできまい」

「アルフレリック！ それでは！」

完全に屁理屈である。当然、他の長老衆がギョツとした表情を向ける。ゼルに到っては思わず身を乗り出して抗議の声を上げた

「ゼル。解っているだろう。この少年が引かない事も、その力の大きさも。ハウリア族を処刑すれば、確実に敵対する事に成る。その場合、どれだけの犠牲が出るか……長老の一人として、そのような危険は断じて犯せん」

「しかし、それでは示しがつかん！ 力に屈して、化物の子やそれに与するものを野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は地に落ちるぞ！」

「だが……」

ゼルとアルフレリックが議論を交わし、他の長老衆も加わって、場は喧々囂々の有様となった。やはり、危険因子とそれに与するものを見逃すという事が、既になされた処断と相まって簡単には出来ない様だ。悪しき前例の成立や長老会議の威信失墜など様々な思惑があるのだろう

だが、そんな中、ハジメが敢えて空気を読まずに発言する

「ああ、盛り上がっているところ悪いが、シアを見逃す事については今更だと思うぞ？」

ハジメの言葉に、ピタリと議論が止まり、どういうことだと長老衆がハジメに視線を転じる

ハジメはおもむろに右腕の袖を捲ると魔力の直接操作を行った。すると、右腕の皮膚の内側に薄らと赤い線が浮かび上がる。さらに、  
“纏雷”を使用して右手にスパークが走る

それと同じくして香織も左手を翳す。途端、虚空に電気の塊がスパークし現れる

それに便乗してショウが右手から魔力の、左手から反魔力の塊を作る。

長老衆は、三人のその異様に目を見開いた。そして、詠唱も魔法陣もなく魔法を発動したことに驚愕を表にする

ジンを倒したのはショウの筋力だけのせいだと思っていたのだが「俺達も、シアと同じ様に、魔力の直接操作ができるし、固有魔法も使える。次いでに言えばこっちのユエもな。あんた達のいう化物って事だ。だが、口伝では『それがどのような者であれ敵対するな』ってあるんだろ？ 掟に従うなら、いずれにしろあんた達は化物を見逃さなくちゃならないんだ。シア一人見逃すくらい今更だと思っけどな」  
暫く硬直していた長老衆だが、やがて顔を見合わせヒソヒソと話し始めた。そして、結論が出たのか、代表してアルフレリックが、それはもう深々と溜息を吐きながら長老会議の決定を告げる

「はあく、【ハウリア族】は忌み子『シア・ハウリア』を筆頭に、同じ

く忌み子である『南雲ハジメ』・『アオイ ショウ』の身内と見なす。そして、資格者『南雲ハジメ』・『アオイ ショウ』に対しては、敵対はしないが、『フェアベルゲン』や周辺の集落への立ち入りを禁ずる。以降、南雲ハジメの一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だ。何かあるか?」

「いや、何度も言うが俺は大樹に行けばいいんだ。こいつらの案内でな。文句はねえよ」

「……そうか。ならば、早々に立ち去ってくれるか。漸く現れた口伝の資格者を歓迎できないのは心苦しいが……」

「気にしないでくれ。全部譲れないこととは言え、相当無茶言ってる自覚はあるんだ。むしろ理性的な判断をしてくれて有り難いくらいだよ」

「しようがないよ。そっちにもそっちの事情があるし」

ハジメ達の言葉に苦笑いするアルフレリック。他の長老達は渋い表情が疲れたような表情だ。恨み辛みというより、さっさとどっか行ってくれ! という雰囲気である。その様子に肩を竦めるハジメはユエやシア達を促して立ち上がった

しかし、シア達ハウリア族は、未だ現実を認識しきれていないのか呆然としたまま立ち上がる気配が無い。ついさつきまで死を覚悟していたのに、気がつけば追放で済んでいるという不思議。「えっ、このまま本当に行っちゃっていいの?」という感じで内心動揺しまくっていた

「おい、何時まで呆けているんだ? さっさと行くぞ」

ハジメの言葉に、漸く我を取り戻したのかあたふたと立ち上がり、さっさと出て行くハジメの後を追うシア達。アルフレリック達も、ハジメ達を門まで送る様だ

シアが、オロオロしながらハジメに尋ねた

「あ、あの、私達……死ななくていいんですか?」

「？ さっきの話し聞いてなかったのか？」

「い、いえ、聞いてはいましたが……その、何だかトントン拍子で窮地を脱してしまったので実感が湧かないといえますか……信じられない状況といえますか……」

周りのハウリア族も同様なのか困惑したような表情だ。それだけ、長老会議の決定というのは亜人にとって絶対的なものなのだろう。どう処理していいのか分からず困惑するシアにユエが呟くように話しかけた

「……素直に喜べばいい」

「ユエさん？」

「……ハジメに救われた。それが事実。受け入れて喜べばいい」

「……」

ユエの言葉に、シアはそつと隣を歩くハジメに視線をやった。ハジメは前を向いたまま肩を竦める

「まあ、約束だからな」

「ッ……」

シアは、肩を震わせる。樹海の案内と引き換えにシアと彼女の家族の命を守る。シアが必死に取り付けたハジメとの約束だ

元々、“未来視”でハジメが守ってくれる未来は見えていた。しかし、それで見える未来は絶対ではない。シアの選択次第で、いくらでも変わるものなのだ。だからこそ、シアはハジメの協力を取り付けるのに“必死”だった。相手は、亜人族に差別的な人間で、シア自身は何も持たない身の上だ。交渉の材料など、自分の“女”か“固有能力”しかない。それすら、あつさり無視された時は、本当にどうしようかと泣きそうになった

先程、一度高鳴った心臓が再び跳ねた気がした。顔が熱を持ち、居ても立ってもいられない正体不明の衝動が込み上げてくる。それは家族が生き残った事への喜びか、それとも……

シアは、ユエの言う通り素直に喜び、今の気持ちを衝動に任せて全力で表してみることにした。すなわち、ハジメに全力で抱きつく！

「ハジメさくくん！　ありがとうございませう〜！」

「どわっ!?!　いきなり何だ!?!」

「むっ」

泣きベそを掻きながら絶対に離しません！　とでも言う様にヒシツとしがみつ顔をグリグリとハジメの肩に押し付けるシア。その表情は緩みに緩んでいて、頬はバラ色に染め上げられている

それを見た香織とユエが不機嫌そうに唸るものの、何か思うところがあるのか、ハジメの反対の手と背中を取るだけで特に何もしなかった

喜びを爆発させハジメにじゃれつくシアの姿に、ハウリア族の皆も漸く命拾いしたことを実感したのか、隣同士で喜びを分かち合っていた

「素直じゃない……………けど、今はそれで良いか」

四人を少し後ろからシヨウはそう呟いて見、フツと微笑んだ

## ハウリアの特訓

「さて、お前等／あなた達 には戦闘訓練を受けてもらおうと思う  
(わ)」

「フェアベルゲン」を追い出されたハジメ達が、一先ず大樹の近くに拠点を作って一息ついた時の、ハジメと香織の第一声がこれだった。拠点といっても、ハジメがさり気なく盗ん……貰ってきたフェアドレン水晶を使って結界を張っただけのものだ。その中で切り株などに腰掛けながら、ウサミミ達はポカンとした表情を浮かべていた

「え、えつと……ハジメさん、香織さん。戦闘訓練というのは……」  
困惑する一族を代表してシアが尋ねる

「そのままの意味だ。どうせ、これから十日間は大樹へはたどり着けないんだろ？ ならその間の時間を有効活用して、軟弱で脆弱で負け犬根性が染み付いたお前等を一端の戦闘技能者に育て上げようと思ってるな」

「な、なぜ、そのようなことを……」

ハジメの据わった目と全身から迸る威圧感にふるふる震えるウサミミ達。シアが、あまりに唐突なハジメ達の宣言に当然の如く疑問を投げかける

「あなた達は弱い。悪意に対して逃げる事しか出来ない そんな中  
「フェアベルゲン」という隠れ家を失った。逃げ場の無いあなた達は魔物や人の格好の餌だし、このままだと間違いなく全滅するし。折角拾った命も無駄になるし。それで良いの？」

香織の言葉に皆、俯く。彼等には、もう故郷すら無くしたのだ……  
「そんなの……良いわけ……ありません！」

シアが怖がりながらも答える

「なら答えは簡単だ。強くなれば良い。約束までの十日間なら手助けくらいしよう」

それを待っていたという表情でハジメはカム達に言い、更に続け

る

「俺はかつての仲間から『無能』と呼ばれていた」

「え?」

「『無能』だ『無能』。ステータスも技能も平凡極まりない一般人。仲間内の最弱 戦闘では足でまとい以外の何者でもない。故に、かつての仲間達は俺を『無能』と呼んでいたんだよ。実際、その通りだった」

「そんなこと無いよ!蒼くんや雫ちゃんの武器作ったりベヒモスを一人で足止めしてたじゃない」

「そう言えば俺も無能呼ばわりされてたっけ?」

「いや、あんたは偽装してただろ!ぶっちゃけ勇者より強かったんじゃないか?」

ハジメの告白にハウリア族は例外なく驚愕を表にする。ライセン大峡谷の凶悪な魔物を苦もなく一蹴したハジメが『無能』で『最弱』など誰が信じられるというのか

「だが、奈落の底に落ちて俺は強くなる為に行動した。出来るか出来ないか何て頭に無かった。出来なければ死ぬ、その瀬戸際で自分の全てをかけて戦った……気がつけばこの有様さ」

「ハジメくん、そこは『俺達』でしょ」

淡々と語られる内容に、しかし、あまりに壮絶な内容にハウリア族達の全身を悪寒が走る。一般人並のステータスということは、兎人族よりも低スペックだったという事だ。その状態で、自分達が手も足も出なかったライセン大峡谷の魔物より遥かに強力な化物達を相手にして来たというのだ

実力云々よりも、実際生き残ったという事実よりも、最弱でありながら、そんな化け物共に挑もうとしたその精神の異様さにハウリア族は戦慄した。自分達なら絶望に押しつぶされ、諦観と共に死を受け入れるだろう。長老会議の決定を受け入れたように

「俺達も手助けする。それなりにきついけど、確実に強くなるぞ」



「私もお手伝いします」

二人の言葉に、カム達は覚悟を決めて頷く

「やります!! 私達に戦い方を教えてください!!」

訓練開始の一日目

「シアはユエによる魔法訓練がある。なので残りの内半分にして片方は俺と香織が、あとはシヨウとアシストが担当する。まずは武器を支給するから全員取りに來い」

そう言つてハジメは宝物庫から手習いの一貫として錬成した小太刀を渡す

手渡された小太刀を見てカム達が顔を青くしていた

「どうした?」

「いえ……この鋭さ……こんなので斬られたら痛いに決まってるじゃないですか……」

ゴチン!!

「それが一族の生死がかかっている時に出てくる台詞か?」

途端にハジメの拳骨がカムの脳天に落ちた

「申し訳ない……」

「お前らなあ、これはお前らの戦いだ! お前ら自信が強くなる事では解決出来ない! お前らは今まで、帝国兵や他の亜人どもに大切な家族が目の前で敵に蹂躪されて悔しくなかったのか」

「……悔しいに……決まってるだろ!」

ハウリアの一人が叫ぶ。彼も同じ境遇なのだろう

「だったら殺せ。強くなきや何も護れない。お前達の強みは索敵や隠密行動だ。ならば、敵より早く敵を見つけて殺せ! どんな手段でもかまわない!! 敵に容赦はするな! 容赦すれば仲間が死ぬ!! 死なせたくなくば、敵を殺せ!!」

シヨウは煽動する様にハウリア達に告げる。敵は自分達を搾取するのが普通だと思っている……ならば、此方は敵の首を刈る獣の群と成れば良い

訓練開始から五日目

「……………96、97、98、99、100！皆々五分間休憩だよー！」

「はい！先生」

シヨウの掛け声でハウリア達は休憩に入る。ちなみに、ここ六日間でハウリア達は命のやり取りに抵抗感がなくなったり戦い方や、トランプのアドバイス、メンタルケアに洗濯に料理等を教え、この樹海で生きる術を叩き込んだ。

もちろん、これらはシヨウの素の技術だけでなく、新フォームのお陰である。

黒に赤いラインの入った鎧に緑のマントを身につけ、かわいいアホ毛が踊っている。

彼こそシヨウの四つ目のフォーム、シールド・オブ・ガーディアンフォームだ。

—あとは応用術を教えれば問題無いだろう—

「さて、ハジメ達は……………」

そう言いながらハジメ達の方を見ると、ハジメと香織はハートマン式の教導をしていた。罵詈雑言は当たり前前、銃声が飛び交い、狂戦士が量産されていく！

「あれは、……………やり過ぎだな」

「間違い無くやり過ぎです。」

『ウワア……………』

その有り様にシヨウとアシストだけでなく、シヨウ達が担当しているハウリア達もドン引きしていた……………

一方その頃、シアさんは

ズガンツ！ ドギャツ！ バキツバキツバキツ！ ドグシャツ！

樹海の中、凄まじい破壊音が響く。野太い樹が幾本も半ばから折られ、地面には隕石でも落下したかのようなクレーターがあちこちに出来上がっており、更には、燃えて炭化した樹や氷漬けになっている樹まであった。

この多大な自然破壊はたった二人の女の子によってもたらされた。そして、その破壊活動は現在進行形で続いている。

「でえやあああ!!」

裂帛の気合とともに撃ち出されたのは直径一メートル程の樹だ。半ばから折られたそれは豪速を以て目標へと飛翔する。確かな質量と速度が、唯の樹に凶悪な破壊力を与え、道中の障害を尽く破壊しながら目標を撃破せんと突き進む。

「……………緋槍」

それを正面から迎え撃つのは全てを灰塵に帰す豪炎の槍。巨大な質量を物ともせず触れた端から焼滅させていく。砲弾と化した丸太は相殺され灰となって宙を舞った。

「まだですー!」

“緋槍”と投擲された丸太の衝突がもたらした衝撃波で払われた霧の向こう側に影が走ったかと思えば、直後、隕石のごとく天より丸

太が落下し、轟音を響かせながら大地に突き刺さった。ボックスステップで衝撃波の範囲からも脱出していた目標は再度、火炎の槍を放とうとする。

しかし、そこへ高速で霧から飛び出してきた影が、大地に突き刺さったままの丸太に強烈な飛び蹴りをかました。一体どれほどの威力が込められていたのか、蹴りを受けた丸太は爆発したように砕け散り、その破片を散弾に変えて目標を襲った。

「ッ！——城炎」

飛来した即席の散弾は、突如発生した城壁の名を冠した炎の壁に阻まれ、唯の一発とて目標に届く事は叶わなかった。

しかし……

「もらいましたあー！」

「ッ！」

その時には既に影が背後に回り込んでいた。即席の散弾を放った後、見事な気配断ちにより再び霧に紛れ奇襲を仕掛けたのだ。大きく振りかぶられたその手には超重量級の大槌が握られており、刹那、豪風を伴って振り下ろされた。

「——風壁」

大槌により激烈な衝撃が大地を襲い爆ぜさせる。砕かれた石が衝撃で散弾となり四方八方に飛び散った。だが、目標は、そんな凄まじい攻撃の直撃を躲すと、余波を風の障壁により吹き散らし、同時に風に乗って安全圏まで一気に後退した。更に、技後硬直により死に体となっている相手に対して容赦なく魔法を放つ。

「――凍極」

「ふえ！・ちよつ、まつー！」

相手の魔法に気がついて必死に制止の声をかけるが、聞いてもらえない訳もなく問答無用に発動。襲撃者は、大槌を手放して離脱しようとするも、一瞬で発動した水系魔法が足元から一気に駆け上がり……頭だけ残して全身を氷漬けにされた。

「づ、づめたいいく、早く解いてくださいよおく、ユエさくん」

「……私の勝ち」

そう、問答無用で自然破壊を繰り返していたこの二人はユエとシアである。二人は、訓練を始めて十日目の今日、最終試験として模擬戦をしていたのだ。内容は、シアがほんの僅かでもユエを傷つけられたら勝利・合格というものだ。その結果は……

「ううう、そんなら、つて、それ！ ユエさんの頬っぺ！ キズです！

キズ！ 私の攻撃当たってますよ！ あははく、やりましたあ！

私の勝ちですう！」

ユエの頬には確かに小さな傷が付いていた。おそらく最後の石の礫が一つ、ユエの防御を突破したのだろう。本当に僅かな傷ではあるが、一本は一本だ。シアの勝利である。それを指摘して、顔から上だけの状態で大喜びするシア。体が冷えて若干鼻水が出ているが満面の笑みだ。ウサミミが嬉しさでピコピコしている。無理もないだろう。何せ、この戦いには訓練卒業以上にユエとした大切な約束事がかかっていたのだ。

そして、その約束事はユエにとってあまり面白いものではない。故に、

「……傷なんてない」

“自動再生”により傷が直ぐに消えたのをいい事にしらばっくれた。拗ねたようにプイツとそっぽを向く。

「んなっ?! 卑怯ですよ! 確かに傷が……いや、今はないですけどお! 確かにあったでしょう! 誤魔化すなんて酷いですよお! ていうか、いい加減魔法解いて下さいよお。さつきから寒くて寒くて……あれっ、何か眠くなってきたような……」

先ほどより鼻水を垂らしながら、うつらうつらとし始めるシア。寝たら死ぬぞ! の状態になりつつある。その様子をチラツチラツと見て、深々と溜息を吐くとユエは心底気が進まないと言う様に魔法を解いた。

「ぴくちっ! ぴくちい! あうう、寒かったですう。危うく帰らぬウサギになるところでした」

可愛らしくしゃみをし、近くの葉っぱでチーン! と鼻をかむと、シアは、その瞳に真剣さを宿してユエを見つめた。ユエは、その視線を受けて物凄く嫌そうな表情をする。無表情が崩れるほど嫌そうな表情だ。

「ユエさん。私、勝ちました」

「……………ん」

「約束しましたよね?」

「……………ん」

「もし、十日以内に一度でも勝てたら……ハジメさん達の旅に連れて行ってくれるって。そうですね?」

「……………ん」

「少なくとも、ハジメさんに頼むときシヨウさんも一緒に味方してくれるんですよね？」

「……………今日のごはん何だっけ？」

「ちよつとおー。 何いきなり誤魔化してるんですかあ！ しかも、誤魔化し方が微妙ですよ！ ユエさん、ハジメさんの血さえあればいいじゃないですか！ 何、ごはん気にしているんですか！ ちゃんと味方して下さいよお！ 二人が味方なら、七割方OK貰えるんですからあ！」

ぎゃーぎゃーと騒ぐシアに、ユエは心底鬱陶しそうな表情を見せる。

シアの言う通り、ユエは、彼女と一つの約束をした。それは、シアがユエに対して、十日以内に模擬戦にてほんの僅かでも構わないから一撃を加えること。それが出来た場合、シアがハジメ達の旅に同行することを二人が認めること。そして、ハジメに同行を願い出た場合に、二人はシアの味方をして彼女の同行と一緒に説得することである。

シアは、本気でハジメ達の旅に同行したいと願っている。それは、これ以上家族に負担を掛けたくないという想いが半分、もう半分は単純にハジメ達の傍にいたい、もっと皆と仲良くなりたいたいという想いから出たものだ。

しかし、そのまま同行を願い出てもすげなく断られるのが目に見える。今までのハジメ達の態度からそれは明らかだ。そこで、シアが考えたのが、先の約束という名の賭けである。

シアとしては、ハジメは何だかんだでユエに甘いということを見抜いていたので、外堀から埋めてしまおうという思惑があった。何より、シアとて女だ。ユエや香織のハジメに対する感情は理解してい



る。自分も同じ感情を持っているのだから当然だ。ならば、逆も然り。ユエもシアの感情を理解し同行を快く思わないはずである。だからこそ、まず何としてもユエに対してシア・ハウリアという存在を認めてもらう必要があった。

シアは、何も香織達からハジメの隣を奪いたいわけではない。そんなことは微塵も思っていない。ハジメへの想いとは別に、香織達に対しても近しい存在になりたいと本気で思っているのだ。それは、この世界でも極僅かな「同類」であることが多分に影響しているのだろう。つまり、簡単に言えば「友達」になりたいのだ。想い人が傍にいて、同じ人を想う友も傍にいる。今のシアにとって夢見る未来は、そういう未来なのだ。

一方、ユエは何故、シアとそのような約束を交わしたのか。ユエ自身には何のメリットもない約束である。その理由の二割は、やはりシンパシーを感じたことだろう。ライセン大峡谷で初めてシアの話を聞いた時、自分とは異なり比較的に恵まれた環境にあることに複雑な感情を覚えつつも、心のどこかで「同類」という感情が湧き上がったことは否定できない。僅かなりとも仲間意識を抱いたことが、シアに対する「甘さ」をもたらした。

そして、八割の理由は……女の意地だ。シアとの約束をユエはこう捉えていた。すなわち「私が邪魔なら実力で排除してみて下さい。出来なかったら私がハジメさんの傍にすることを認めて下さい」と。惚れた男をかけて勝負を挑まれたのだ。これがその辺の女ならどうとも思わなかっただろう。だが、シアは曲がりなりにも「同類」と思ってしまった相手であり、また、凄まじい集中力と鬼気迫る意気込みで鍛錬に励む姿に、その想いの深さを突きつけられ黙ってはいられなくなったのだ。

ちなみにシヨウは見込み五割、ハーレム見物による愉悦四割、遊び

一割、と半分は悪意による推薦だ

そして、約束をかけた勝負の結果がシアの勝利だったのである。

「……はあ。わかった。約束は守る……」

「ホントですか!?! やっぱり、やくめたあとかなしですよ! ちやんと援護して下さいよ!」

「……………」

「何だか、その異様に長い間が気になりますが……ホント、お願いしますよ?」

「……………」

渋々、ほんとくに渋々といった感じでユエがシアの勝ちを認める。シアは、ユエの返事に多少の不安は残しつつも、ハジメ同様に約束を反故にすることはないだろうと安心と喜びの表情を浮かべた。

そろそろ、ハジメのハウリア族への訓練も終わる頃だ。不機嫌そうなユエと上機嫌なシアは二人並んでハジメ達がいるであろう場所へ向かうのだった。

ユエとシアがハジメ達のもとへ到着したとき、ハジメは腕を組んで近くの樹にもたれたまま瞑目しているところだった。側には香織もいる

二人の気配に気が付いたのか、ハジメはゆっくり目を開けると二人の姿を視界に収める。全く正反対の雰囲気を纏わせているユエとシアに訝しそうにしつつ、ハジメは片手を上げて声をかけた。

「よっ、二人共。勝負とやらは終わったのか？」

ハジメも、二人が何かを賭けて勝負していることは聞き及んでいる。シアのために超重量の大槌を用意したのは他ならぬハジメだ。シアが、真剣な表情で、ユエに勝ちたい、武器が欲しいと頼み込んできたのは記憶に新しい。ユエ自身も特に反対しなかったことから、何を賭けているのかまでは知らなかったし、聞いても教えてもらえなかったが、ユエの不利になることもないだろうと作ってやったのだ。

実際、ハジメは、ユエとシアが戦っても十中八九、ユエが勝つと考えていた。奈落の底でユエの実力は十二分に把握している。いくら魔力の直接操作が出来るといっても今まで平和に浸かってきたシアとは地力が違うのだ。

だがしかし、帰ってきた二人の表情を見るに、どうも自分の予想は外れたようだと思心驚愕するハジメ。そんなハジメにシアが上機嫌で話しかけた。

「ハジメさん！香織さん！聞いて下さい！私、遂にユエさんに勝ちましたよ！大勝利ですよ！ いや、ハジメさんにもお見せしたかったですよ、私の華麗な戦いぶりを！負けたと知った時のユエさんたらもへぶっ！」

身振り手振り大はしやぎという様相で戦いの顛末を語るシア。調子に乗りすぎて、ユエのジャンピングビンを食らい錐揉みしながら吹き飛びドシャと音を立てて地面に倒れ込んだ。よほど強烈だったのかピクピクとして起き上がる気配がない。

フンツと鼻を鳴らし更に不機嫌そうにそっぽを向くユエに、ハジメが苦笑いしながら尋ねる。

「で？ どうだったの？」

勝負の結果というより、その内容について質問する香織。正直、どんな方法であれユエに勝ったという事実は信じ難い。ユエから見たシアはどれほどのものなのか、気にならないといえは嘘になる。

ユエは話したくないという雰囲気を感じてもせず醸し出しながら、渋々といった感じでハジメの質問に答えた。

「……魔法の適性はハジメと変わらない」

「ありやま、宝の持ち腐れだな……で？ それだけじゃないんだろ？」

あのレベルの大槌をせがまれたとなると……」

「……ん、身体強化に特化してる。正直、化物レベル」

「そんなに？ ハツくんとは比べると？」

ユエの評価に目を細めるハジメ。正直、想像以上の高評価だ。珍しく無表情を崩し苦虫を噛み潰したようなユエの表情が何より雄弁に、その凄まじさを物語る。ユエは、香織の質問に少し考える素振りを見せると二人に視線を合わせて答えた。

「……強化してないハジメの……五割くらい」

「ホントに？……最大値だよね？」

「ん……でも、鍛錬次第でまだ上がるかも」

「おおう。そいつは確かに化物レベルだ」

香織とハジメは、ユエから示されたシアの化物ぶりに内心啞然としながら、シアに何とも言えない眼差しを向けた。強化していないハジメの五割と言えば、本気で身体強化したシアはほとんどステータスが6000を超えるということだ。これは、本気で強化した勇者の二倍の力を持っているということでもある。まさに“化物レベル”というに相応しい力だ。曲がりになりもユエに土をつけることが出来た

わけである。泣きべそをかきながら頬をさすっている姿からは、とても想像できない。

シアは、ハジメが呆れ半分驚愕半分の面持ちで眺めている事に気がつく。いそいそと立ち上がり、急ぐ気持ちを必死に抑えながら真剣な表情でハジメのもとへ歩み寄った。背筋を伸ばし、青みがかった白髪をなびかせ、ウサミミをピンツと立てる。これから一世一代の頼み事をするのだ。いや……むしろ告白と言っていいだろう。緊張に体が震え、表情が強ばるが、不退転の意志を瞳に宿し、一步一步、前に進む。そして、訝しむハジメの眼前にやって来るとしつかり視線を合わせて想いを告げた。

「ハジメさん。私をあなたの旅に連れて行って下さい。お願いします！」

「断る」

「即答!？」

「だよね」

まさか今の雰囲気で、悩む素振りも見せず即行で断られるとは思っていなかったシアは、驚愕の面持ちで目を見開いた。その瞳には、「いきなり何言ってるんだ、こいつ？」という残念な人を見る目でシアを見つめるハジメの姿が映っている。

シアは憤慨した。もうちよつと真剣に取り合ってくれてもいいでしよ! と。

「ひ、酷いですよ、ハジメさん。こんなに真剣に頼み込んでいるのに、それをあつさり……」

「いや、こんなになって言われても知らんがな。大体、カム達どうすんだよ? まさか、全員連れて行くって意味じゃないだろうな?」

「ち、違いますよ! 今のは私だけの話です! 父様達には修行が始

まる前に話をしました。一族の迷惑になるからってだけじゃ認めないけど……その……」

「その？　なんだ？」

何やら急にモジモジし始めるシア。指先をツンツンしながら頬を染めて上目遣いでハジメをチラチラと見る。あざとい。実にあざとい仕草だ。ハジメが不審者を見る目でシアを見る。傍らの香織とユエがイラツとした表情で横目にシアを睨んでいる。

「その……私自身が、付いて行きたいと本気で思っているなら構わないって……」

「はあ？　何で付いて来たいんだ？　今なら一族の迷惑にもならないだろ？　それだけの実力があれば大抵の敵はどうとでもなるだろうし」「で、ですからあ、それは、そのお……」

モジモジしたまま中々答えないシアにいい加減我慢の限界だと、香織はドンナーを抜きかける。それを察したのかどうかは分からないが、シアが女は度胸！　と言わんばかりに声を張り上げた。思いの丈を乗せて。

「ハジメさんの傍に居たいからですう！　しゅきなのでえ！」

「……は？」

言っちゃった、そして噛んじゃった！　と、あわあわしているシアを前に、ハジメは鳩が豆鉄砲でも食ったようにポカンとしている。まさに、何を言われたのか分からないという様子だ。しかし、しばらくしてようやく意味が脳に伝わったのか思わずといった様子でツツコミを入れる。

「いやいやいや、おかしいだろ？　一体、どこでフラグなんて立ったん

だよ？ 自分で言うのも何だが、お前に対してはかなり雑な扱いだったと思うんだが……まさか、そういうのに興奮する口か？」

自分の推測にまさかと思いつつ、シアを見てドン引きしたように一歩後退るハジメ。だが、シアがハジメに猛然と抗議する。

「誰が変態ですか！ そんな趣味ありません！ っていうか雑だと自覚があったのならもう少し優しくしてくれてもいいじゃないですか……」

「いや、何でお前に優しくする必要があるんだよ……そもそも本当に好きなのか？ 状況に釣られてやしないか？」

ハジメは、未だシアの好意が信じられないのか、いわゆる吊り橋効果を疑った。今までのハジメのシアに対する態度は誰がどう見ても雑だったので無理もないかもしれない。だが、自分の気持ちを疑われてシアはすこぶる不機嫌だ。

「状況が全く関係ないとは言いません。窮地を何度も救われて、同じ体質で……長老方に啖呵切って私との約束を守ってくれたときは本当に嬉しかったです……ただ、状況が関係あるうとなかろうと、もうそういう気持ちを持ってしまったんだから仕方ないじゃないですか。私だって時々思いますよ。どうしてこの人なんだろうって。ハジメさん、未だに私のこと名前で呼んでくれないし、何かあると直ぐ撃ってくるし、鬼だし、返事はおざなりだし、魔物の群れに放り投げると、容赦ないし、鬼だし、優しくしてくれないし、香織さんユエさんばかり鼻屑するし、鬼だし……あれ？ ホントに何で好きなんだろう？ あれえ〜？」

話している間に、自分で自分の気持ちを疑いだしたシア。首を傾げるシアに、青筋を浮かべつつも言っていることは間違いがないので思わずドンナーを抜きかけるも辛うじて堪えるハジメと香織。

「とにかくだ。あなたがどう思っついていようと連れて行くつもりはないよ」

「そんなー！さっきのは冗談ですよ？ちゃんとハジメさんが好きですから連れて行つて下さい！」

「あのなあ、お前の気持ちは……まあ、本当だとして、俺には香織とユエがいるって分かっているだろう？　というか、よく本人目の前にして堂々と告白なんざ出来るよな……前から思っていたが、お前の一番の恐ろしさは身体強化云々より、その凶太さなんじゃないか？　お前の心臓って絶対アザンチウム製だと思っうんだ」

「誰が、世界最高硬度の心臓の持ち主ですか！　うう、やっぱりこうなりましたか……ええ、わかってましたよ。ハジメさんのことです。一筋縄ではいかないと思ってました」

突然、フフフと怪しげに笑い出すシアに胡乱な眼差しを向けるハジメ。

「こんなこともあろうかと！　命懸けで外堀を埋めておいたのです！

ささっ、ユエ先生！　お願いします！」

「は？　ユエ？」

完全に予想外の名前が呼ばれたことに目を瞬かせるハジメ。してやったり！　というシアの表情にイラツとしつつ、傍らのユエに視線を転じる。

ユエは、やはり苦虫を百匹くらい噛み潰したような表情で、心底不本意そうにハジメに告げた。

「……………ハジメ、連れて行こう」

「いやいやいや、なにその間。明らかに嫌そう……もしかして勝負の



賭けつて……」

「……無念」

「ちなみに、シヨウさんからの許可をとってますですう！」

ガツクリと肩を落とすユエに大体の事情を察したハジメは、もはや呆れやら怒りを通り越して感心した。きっと、シアは、直接ハジメに頼んだところで望みを聞いてもらえるとは思えず、自分の力だけでは本気は伝わらないと考えたのだろう。また、ハジメが納得してもユエや香織の一言が優先されることを危惧したということも考えたはずだ。それ故に、ユエを味方につけるという方法をとった。『命懸け』というのもあながち誇張した表現ではないはずだ。生半可な気持ちでユエを納得させることなど不可能なのだから。この十日間、ほとんど見かけなかったが文字通り死に物狂いでユエを攻略しにかかったに違いない。つまり、それだけシアの想いは本物ということだ。シヨウはアレだが

—アイツ、絶対楽しんでるだろ—

頭の中に、綺麗な笑顔でサムズアップするシヨウの姿が映った

そう悪態をつきハジメは、ガリガリと頭を掻いた。別に、ユエが渋々とはいえ認めたからといって、シアを連れて行かなければならぬ理由はない。結局のところ、ハジメの気持ち次第なのだから。

ユエは、不本意そうではあるが仕方ないという様に肩を竦めている。この十日間のシアの頑張りを誰よりも近くで見ているからこそ、そして、その上で自分が課した障碍を打ち破ったからこそ、旅の同行は認めるつもりのようなのだ。元々、シアに対しては、ハジメの事を抜きにすれば、其処まで嫌いというわけではないという事もあるのだから。

一方、シアの方は、ユエに頼んだときの得意顔が一転し不安そうで

ありながら覚悟を決めたという表情だ。シアとしては、まさに人事を尽くして天命を待つ状態なのだろう。

ハジメは、一度深々と息を吐くとシアとしつかり目を合わせて、一言一言確かめるように言葉を紡ぐ。シアも静かに、言葉に力を込めて返した。

「付いて来たって応えてはやれないぞ?」

「知らないんですか? 未来は絶対じゃあないんですよ?」

それは、未来を垣間見れるシアだからこそその言葉。未来は覚悟と行動で変えられると信じている。

「危険だらけの旅だ」

「化物でよかったです。御蔭で貴方について行けます」

長老方にも言われた蔑称。しかし、今はむしろ誇りだ。化物でなければ為すことのできない事があると知ったから。

「俺の望みは故郷に帰ることだ。もう家族とは会えないかもしれないぞ?」

「話し合いました。それでも」です。父様達もわかってくれました」

今まで、ずっと守ってくれた家族。感謝の念しかない。何処までも一緒に生きてくれた家族に、気持ちを打ち明けて微笑まれたときの感情はきつと一生言葉にできないだろう。

「俺の故郷は、お前には住み難いところだ」

「何度でも言いましょう。それでも」です」

シアの想いは既に示した。そんな「言葉」では止まらない。止められない。これはそういう類の気持ちなのだ。

「……」

「ふふ、終わりですか？　なら、私の勝ちですね？」

「勝ちってなんだ……」

「私の気持ちが勝ったという事です。……ハジメさん」

「……何だ」

もう一度、はつきりと。シア・ハウリアの望みを。

「……私も連れて行って下さい」

見つめ合うハジメとシア。ハジメは真意を確認するように蒼穹の瞳を覗き込む。その時。ふとシヨウの言葉を苦笑いしながら思い出し

—どうやら、俺はとんでも無いものを背負ったかもな—

そして……

「……………はあく、勝手にしろ。物好きめ」

ハジメは溜息をつきながら事実上の敗北宣言をした。

樹海の中に一つの歓声と、不機嫌そうな鼻を鳴らす音が響く。その様子に、ハジメは、いろんな意味でこの先も大変そうだと苦笑いするのだった。

お巡りさん、こいつらです

「えへへ、うへへへ、くふふふ〜」

同行を許したことで上機嫌になったシアは——はつきり言ってキモかった。奇怪な笑い声を発しながら緩みっぱなしの頬に両手を当て、クネクネと身を振らせる。ハジメと問答した時の真剣な表情はなんだったのか。だから、お前は残念ウサギなんだ。

「……キモい」

見かねたユエがボソリと呟く。全くもって同意見だ。だが、言われた人からすれば受け入れ難い言葉だったらしく、無駄に優秀なウサミミでユエの呟きを捉えたシアは、猛然と抗議のような惚気のような何かを口にする。

「……ちよつ、キモイって何ですか！ キモイって！ 嬉しいんだからしようがないじゃないですかあ。何せ、ハジメさんの初デレですよ？ 見ました？ 最後の表情。私、思わず胸がキュンとなりましたよ〜、これは私にメロメロになる日も遠くないですねえ〜」

——……ウザい。完全に調子に乗ってるな、コイツー

「二……ウザウサギ」

「んなつ?! 何ですかウザウサギって！ いい加減名前で呼んでくださいよお〜、旅の仲間ですよお〜、まさか、この先もまともに名前を呼ぶつもりがないとかじゃあないですよね？ ねっ？」

「二……」

「何で黙るんですかつ？ ちよつと、目を逸らさないで下さいい〜。ほらほらっ、シアですよ、シ・ア。りぴーとあふたみー、シ・ア」

シアを放置してハジメは今後の予定について香織とユエと話し合うとするか。まず、下僕共の帰還を待つ。ハジメの課した訓練卒業の課題を突破したか確認する。次に、シヨウとアシストが担当するハウリア二班との合流。が鍛えた成果も確認しておきたい。

「無視しないでえ、仲間はずれは嫌ですう」

雑音を無視して話し合いを進めていると、数人のハウリア族が霧を掻き分け、俺が課した課題をクリアした証拠となる魔物の部位を片手に戻ってきた。よく見れば、そのうちの一人はカムだ。なかなかやるじゃないか。

久しぶりに再会した家族に頬を綻ばせるシア。本格的に修行が始まる前、十日前から家族に会っていない筈だ。早速、シアは父親であるカムに話しかけようとした。だが、話しかける寸前に発しようとした言葉を呑み込む。……気付いちまったか。歩み寄ってきたカムはシアを一瞥すると僅かに笑みを浮かべる。そして、直ぐに視線をハジメに戻す。

そう、ハウリア達は……

「ボス。お題のハイベリアの尻尾、きっちり狩って来やしたぜ」  
完全に出来上がった……

ハジメが鍛えたハウリアは、完全にバーサーカー状態になっていた……

「ハジメ!!おまつ、やりやがったな!!」

丁度、合流したシヨウは盛大に声を荒らげた。ハウリアは変わっていた、争いを嫌っていた最弱種族は完全に血を求める戦争狂の様なモノに変わっている。あまりの変貌ぶりに、盛大なツツコミが出てきた。

「ハジメ!香織!……お前、これはさすがにやり過ぎだろ!!」

「うん、やり過ぎた……シヨウは……どうしたんだ?あれ」

「まるで……雫ちゃんの道場の門下生みたい……」

「まあ、戦いに関する事だけじゃなくて精神面や、料理に洗濯など教えてたからな。ハジメ達の鍛えた方をドン引きしてるぞ」

やり過ぎたと反省しているハジメと香織にはそう言う。その時、ハウリアの一人が木陰から出てきた



「うわあ〜ん、私の家族が半分死んでしまったですう〜」

崩れ落ちるシアの泣き声が虚しく樹海に木霊する。流石に見かねたのかユエがポンポンとシアの頭を慰めるように撫でている。それを見たハジメと香織は、どことなく気まずそうに視線を彷徨わせている。ユエは、ハジメ達に視線を転じるとボソリと呟いた。

「……流石ハジメと香織、人には出来ないことを平然とやってのける」「ユエさん、何でそのネタ知ってるの……」

「……闇系魔法も使わず、洗脳……さすが二人とも、すごい」

「……正直、ちよっとやり過ぎたとは思ってる(わ)。反省も後悔もないけど(ね)」

「いや、反省しろ!!この似た者夫婦!!!」

しばらくの間、ハウリア族が去ったその場には、シヨウのツツコミとシアのすすり泣く声と、微妙な空気が漂っていた。

## 先生

『レギン・バントン』は熊人族最大の一族であるバントン族の次期族長との噂も高い実力者だ。現長老の一人であるジン・バントンの右腕的な存在でもあり、ジンに心酔にも近い感情を抱いていた。

もつとも、それは、レギンに限ったことではなくバントン族全体に言える事で、特に若者衆の間でジンは絶大な人気を誇っていた。その理由としては、ジンの豪放磊落な性格と深い愛国心、そして亜人族の中でも最高クラスの実力を持っていることが大きいだろう。

だからこそ、その知らせを聞いたとき熊人族は夕チの悪い冗談だと思つた。自分達の心酔する長老が、一人の人間に為す術もなく再起不能にされたなど有り得ないと。しかし、現実には容赦なく事実を突きつける。医療施設で力なく横たわるジンの姿が何より雄弁に真実を示していた。

レギンは、変わり果てたジンの姿に呆然とし、次いで煮えたぎるような怒りと憎しみを覚えた。腹の底から湧き上がるそれを堪える事もなく、現場に居た長老達に詰め寄り一切の事情を聞く。そして、全てを知つたレギンは、長老衆の忠告を無視して熊人族の全てに事実を伝え、報復へと乗り出した

長老衆や他の一族の説得もあり、全ての熊人族を駆り立てる事はできなかつたが、バントン族の若者を中心にジンの特に慕っていた者達が集まり、憎き人間を討とうと息巻いた。その数は五十人以上。仇の人間の目的が大樹であることを知つたレギン達は、もつとも効果的な報復として大樹へと至る寸前で襲撃する事にした。目的を眼前に果てるがいい！ と 相手は所詮、人間と兎人族のみ。例えジンを倒し



ただとしても、どうせ不意を打つなど卑怯な手段を使ったに違いないと勝手に解釈した。樹海の深い霧の中なら感覚の狂う人間や、まして脆弱な兎人族など恐るるに足らずと レギンは優秀な男だ。普段であるならば、そのようなご都合解釈はしなかつただろう。深い怒りが目を曇らせていたとしか言い様がない

だが

だとしても

己の目が曇っていたのだとしても……

「これはないだろう!？」

レギンは堪らず絶叫を上げた。何故なら、彼の目には亜人族の中でも底辺という評価を受けている兎人族が、最強種の一角に数えられる程戦闘に長けた自分達熊人族を蹂躪しているという有り得ない光景が広がっていたからだ

「ほらほらほら！ 気合入れろや！ 刻んじまうぞお！」

「アハハハハハ、豚のように悲鳴を上げなさい！」

「汚物は消毒だあ！ ヒヤハハハハッハ！」

ハウリア族の哄笑が響き渡り、致命の斬撃が無数に振るわれる。そこには温和で平和的、争いが何より苦手な兎人族の面影は皆無だった。必死に応戦する熊人族達は動揺もあらわに叫び返した。

「畜生！ 何なんだよ！ 誰だよ、お前等!!」

「こんなの兎人族じゃないだろうっ！」

「うわあああ！ 来るなっ！ 来るなああ！」

奇襲しようとしていた相手に逆に奇襲された事、亜人族の中でも格

下のはずの兎人族の有り得ない強さ、何処からともなく飛来する正確無比な弓や石、認識を狂わせる巧みな気配の断ち方、高度な連携、そして何より嬉々として刃を振るう狂的な表情と哄笑！

その全てが激しい動揺を生み、スペックで上回っている筈の熊人族に窮地を与えていた

実際、単純に一对一で戦ったのなら兎人族が熊人族に敵う事はまず無いだろう……だが、この十日間、ハウリア族は、地獄というのも生ぬるい特訓のおかげでその先天的な差を埋める事に成功していた

元々、兎人族は他の亜人族に比べて低スペックだ。しかし、争いを避けつつ生き残るために磨かれた危機察知能力と隠密能力は群を抜いている。何せ、それだけで生き延びてきたのだから。

そして、敵の存在をいち早く察知し、気づかれないよう奇襲出来るという点で、彼等は実に暗殺者向きの能力をもった種族であると言えるのだ。ただ、生来の性分が、これらの利点を全て潰していた。

ハジメ達が施した訓練は彼等の闘争本能を呼び起こすものと言っている。いいひたすら罵り追い詰めて、武器を振るう事や、相手を傷つける事に忌避感を感じる暇も与えない。

ハートマン専任軍曹のセリフを思い出し、十日間ぶっ通しで過酷な訓練を施した結果、彼等の心は完全に戦闘者のそれに成った。若干、やりすぎた感は否めないが……

それに対してショウ達は、“○ヤンプ”や“サ○デー”、“○ロ○ロ”等の少年漫画の名台詞で、ハウリア達の中にある家族を護る心と闘争心を呼び起こし、火を着けたのだ。結果、彼等の心の内に秘めた

闘争心が燃え上がり、其処に現地の植物や、木の枝等を使った武器やトラップ等の制作技術と実践訓練を行い、比較的まともな戦士が出来上がった。

躊躇いの無い攻撃性を身に付けた彼等は、中々の戦闘力を発揮した一族全体を家族と称する絆の強い一族というだけあって連携は最初からかなり高いレベルだった。また、気配の強弱の調整が上手く、連携と合わせる事で絶大な効果を発揮した。

更に、非力な彼らの攻撃力を引き上げるハジメ製の武器の数々もハウリア族の戦闘力が飛躍的に向上した理由の一つだ。

全員が常備している小太刀二刀は、精密錬成の練習過程から生まれた物で、極薄の刃は軽く触れるだけで皮膚を裂く。タウル鉱石を使っているので衝撃にも強い。同様の投擲用ナイフも配備されている。

他にも、奈落の底の蜘蛛型の魔物から採取した伸縮性・強度共に抜群の糸を利用したスリングショットやクロスボウも非常に強力だ。特に、ハウリア族の中でも未だ小さい子供達に近接戦は厳しい。子供でも先天的に備わっている索敵能力を使った霧の向こう側からの狙撃は、思わずハジメでさえも瞠目したほどだ。

パルに至っては、すっかりクロスボウによる狙撃に惚れ込み、一端のスナイパー気取りである。

「二撃必倒！ド頭吹き飛ばしてやりませあ。『必滅』の名にかけて！！」

パル……必滅のバルトフェルドの最近の口癖である。ちなみに、『必滅』は彼の自称だ。

あと、最初は「狙い撃つぜ！」が口癖だったがハジメと香織、さら

にシヨウが止めさせた。すぐく不満そうだった

そんな訳で、パニック状態に陥っている熊人族では今のハウリア族に抗する事など出来る訳もなく、瞬く間にその数を減らし、既に当初の半分近くまで討ち取られていた。

「レギン殿！ このままではっ！」

「一度撤退を！」

「殿は私が務めっクペツ!？」

「トントオ!？」

一時撤退を進言してくる部下に、ジンを再起不能にされたばかりか部下まで殺られて腸が煮えくり返っていることから逡巡するレギン。その判断の遅さをハウリアのスナイパーは逃さない 殿を申し出て再度撤退を進言しようとしたトントと呼ばれた部下のこめかみを正確無比の矢が貫いた。

それに動揺して陣形が乱れるレギン達。それを好機と見てカム達が一斉に襲いかかった。

霧の中から矢が飛来し、足首という実にいやらしい場所を驚くほど正確に狙い撃つてくる。それに気を取られると、首を刈り取る鋭い斬撃が振るわれ、その斬撃を放った者の後ろから絶妙なタイミングで刺突が走る。

しかも、その矢には即効性の麻痺毒を塗っている為、頑強な熊人族でも忽ちの内に身体の自由が効かない。其処を逃す事等無く、矢継ぎ早に矢や鎖付き棘鉄球が襲う……

レギン達は戦慄する　これが本当に、あのヘタレで惰弱な兎人族なのか!？ と

暫く抗戦は続けたものの、混乱から立ち直る前にレギン達は満身創

痕となり武器を支えに何とか立っている状態だ。連携と絶妙な援護射撃を利用した波状攻撃に休む間もなく、全員が肩で息をしている。一箇所に固まり大木を背後にして追い込まれたレギン達をカム達が取り囲む。

「何か言い残す事はあるかね？ 最強種殿？」

つい十日前の姿とはまるで変わったカムの姿にレギンは戦慄した。これが……あの兎人族だと!?

「俺はどうなつてもいい……全ては同族を駆り立てた俺の責任だ……部下達だけは見逃してくれ……頼む……!」

震えながらも、レギンはカムの前で跪いて懇願する。しかし、カムはそれを断った。

「貴様らは敵なのだ。敵は殺す。それがボスの教え何より……」

カムは一息置いて言う。

「貴様等を殲るのは楽しい!!」

嘲笑うカムが小太刀を振り上げる！刹那!!!

カムの目の前を一枚の盾が走り、小太刀の行方を阻んだ。

「どういうおつもりですか？ 先生……否、シヨウ殿？」

樹海から出てきた『守護之盾』フォームのシヨウはカムの前に立ち、答える。

「そんなの決まってる。主の教え子の間違いを止めるのも、先生の役目だ!」

「間違い？」

訳がわからないという表情のカムにシヨウは訪ねる。

「今、お前達がどんな顔しているかわかるか？」

「顔？ いや、どんなと言われても……」

シヨウの言葉に、周囲の仲間と顔を見合わせるハウリア族。シヨウは、ひと呼吸置くと静かな、しかし、よく通る声ではつきりと告げた。

「君たちの顔、帝国兵そつくりだよ」

その途端、カムは冷水をぶっかけられた様に顔を青くし、握っている小太刀を落とし、膝をついた。

「……先生……私達は……いったい何を……？」

「でも初めての対人戦だし、今気付けたならもう大丈夫だよね」

そう言っただけでシヨウは盾をしまいハウリア達に告げた。

「強くなきゃ、生きていけない。でも、誰かを守る力で、殺し合いを楽しんじゃダメだ」

そう言っただけで、カムに手を差し伸べる。そうして立たせた後、カムの後に居るハウリア達を見る。それは、シヨウが教導した者達だった皆、カムが危うく帝国兵と同じ外道に墮ちる所だったのを半分安堵、半分ハラハラして見ていたのだ。

と、その時、突如として銃声が響いた。

シヨウ達は驚いて銃声のする方を向いた。そこにはすっかり存在を忘れていた、額を抑えてのたうつレギンの姿があった。

「なにドサクサに紛れて逃げ出そうとしてんだ？」

「ハジメくんからは逃げられないよ」

霧の奥からハジメ達が現れる。どうやら、シヨウ達が話し合っているうちに、こっそり逃げ出そうとしたレギン達に銃撃したようである。但し、何故か非致死性のゴム弾だったが。

「おい、熊人族のお前」

ハジメがボロボロのレギンを見やり、続ける

「今なら全員見逃してやってもいいぞ。ただし、フェアベルゲンの長老共にこう伝える『貸し一つ』ってな」

そう言ってハジメはレギンの肩に左手を置いて更に一言。

「伝言は正確に伝えろ、今回の詳細もな。もし取り立てに行った時、惚けでもしたら……その日がフェアベルゲンの最期だと思え」

最後に底冷えする様な声で脅し、レギンは生き残りを連れて森へと消えた……………

それを見送ったシヨウは、ハジメを見る

カム達がハジメ達に深々と頭を下げた詫び、ハジメ達もまた、バーサーカー養成の様な苛烈な教導を詫びていた。

それにカム達がハジメが乱心でもしたのかと青ざめて騒いでいる。

「ハジメ、これは自業自得だよ」

ハジメがそれに頭を抑えて、シヨウは苦笑いを浮かべていた。

## ウサギと大樹

「へー、やっぱりシアはんは身体強化に特化してるのか」

「ああ、しかも俺の五割、つまり約6000以上。マジで化物レベルだ」

「正直言つて、ライセン大迷宮で一番有利かも」

ハジメ達からシアとユエ勝負の事やこれからの旅に連れていく事とかを聞きながら、シヨウはハジメに聞いた

「にしてもハジメ、もしかしてハーレム要員増加するのか？個人的にはおいし——大歓迎だけど」

「しねえよ！俺は香織とユエだけで十分だ」

「うちの妹は？」

「イヤそれは………つてまだ中1だろ！お前の妹は！俺はロリコンじゃないぞー！」

「でもアイツ、お前の事好きだぞ。今のお前を好きかどうかは知らんが」

「ハツくん？どういうことかな？かな？」

「……ハジメ、もしかして、増える？」

「増えるも何もお前達のように『特別』な存在だと思っではないぞ。……大切だとは思うが」

「ホくそそうか、じゃあ今はそれでいいや、今はな」

シヨウはニヤつきながらそういった。

「……シヨウ、嬉しそう」

「ああ、そうかもな」

「でもその子、ここにはいないよ」

「ああ、そうだな」



シヨウはずつとニヤニヤしながらそう答えた。

「シヨウ、お前気持ち悪いぞ」

「さすがにそれは酷いな」

---

雑談しながら進むこと十五分。一行は遂に大樹の下へたどり着いた。

大樹を見たハジメの第一声は、

「……なんだこりゃ」

という驚き半分、疑問半分といった感じのものだった。香織とユエも、予想が外れたのか微妙な表情だ。シヨウも、その有り様を呆然と見上げる。

三人は、大樹について「フェアベルゲン」で見た木々のスケールが大きいバージョンを想像していたのである。

しかし、実際の大樹は……見事に枯れていたのだ。

大きさに関しては想像通り途轍もない。直径は目算では測りづらいほど大きい。直径五十メートルはあるのではないだろうか。明らかに周囲の木々とは異なる異様だ。周りの木々が青々とした葉を盛大に広げているのにもかかわらず、大樹だけが枯れ木となっているのである。

「大樹は、フェアベルゲン建国前から枯れているそうです。しかし、朽ちることはない。枯れたまま変化なく、ずっとあるそうです。周囲の霧の性質と大樹の枯れながらも朽ちないという点からいつしか神聖

視される様になりました。まあ、それだけなので、言ってみれば観光名所みたいなものですが……」

ハジメとユエの疑問顔にカムが解説を入れる。それを聞きながらハジメは大樹の根元まで歩み寄った。そこには、アルフレリックが言っていた通り石板が建てられていた

「これは……オルクスの扉の……」

「……ん、同じ文様」

石版には七角形とその頂点の位置に七つの文様が刻まれていた。オルクスの部屋の扉に刻まれていたものと全く同じものだ。ハジメは確認のため、オルクスの指輪を取り出す。指輪の文様と石版に刻まれた文様の一つはやはり同じものだった。

「やっぱり、ここが大迷宮の入口みたいだな……だが……こつからどうすりゃいいんだ？」

ハジメは大樹に近寄ってその幹をペシペシと叩いてみたりするが、当然変化などあるはずもなく、カム達に何か知らないか聞くが返答はNOだ。アルフレリックにも口伝は聞いているが、入口に関する口伝はなかった。

「隠していた可能性もない訳ではないから、これは早速貸しを取り立てるべきか？」と悩み始めるハジメ。

その時、石板を観察していたユエが声を上げる。

「ハジメ……これ見て」

「ん？ 何かあったか？」

ユエが注目していたのは石板の裏側だった。そこには、表の七つの文様に対応する様に小さな窪みが開いていた。

「これは……」

ハジメが、手に持っているオルクスの指輪を表のオルクスの文様に

対応している窪みに嵌めてみる。

すると……石板が淡く輝きだした。

何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も集まってきた。暫く、輝く石板を見てみると、次第に光が収まり、代わりに何やら文字が浮き出始める。そこにはこう書かれていた。

—四つの証—

—再生の力—

—紡がれた絆の道標—

—全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう—

「……どういう意味だ？」

「……四つの証は……たぶん、他の迷宮の証？」

「……再生の力と紡がれた絆の道標は？」

頭を捻るハジメにシアが答える

「うくん、紡がれた絆の道標は、あれじゃないですか？ 亜人の案内人を得られるかどうか。亜人は基本的に樹海から出ませんし、ハジメさん達みたいには、亜人に樹海を案内して貰える事なんて例外中の例外ですし」

「……なるほど。それっぽいな」

「あとは再生と来たら、ただ一人……」

………俺だ

！

シヨウが自分の神代魔法「再生魔法」を連想し自分を指差す。試しにと、再生魔法を使ってみるが……特に変化はない。

「再生魔法が効かない!？」

「……ん〜もしかして、最低でも、七大迷宮の半分を攻略した上で、再生魔法を手に入れて来いってことじゃないかな？」

目の前の枯れている樹を再生する必要があるのでは？ と推測する香織。ハジメもユエも、そうかもと納得顔をする。

「はあ、ちくしょう。今すぐ攻略は無理って事か……面倒くさいが他の迷宮から当たるしかないな……」

「だね……」

「ん……」

「だな……」

ここまで来て後回しにしなければならぬ事に歯噛みするハジメ。ユエも残念そうだ。しかし、大迷宮への入り方が見当もつかない以上、ぐだぐだと悩んでいても仕方ない。気持ちを切り替えて先に三つの証を手に入れる事にする。

ハジメはハウリア族に集合をかけた

「今聞いた通り、俺達は、先に他の大迷宮の攻略を目指す事にする。大樹の下へ案内するまで守るという約束もこれで完了した。お前達なら、もうフェアベルゲンの庇護がなくても、この樹海で十分に生きていけるだろう。そういう訳で、ここでお別れだ」

そして、チラリとシアを見る。その瞳には、別れの言葉を残すなら、今しておけという意図が含まれているのをシアは正確に読み取った。いずれ戻ってくるとしても、三つもの大迷宮の攻略となれば、それに時間がかかるだろう。当分は家族とも会えなくなる。

「とうさ」「ボス！ お話があります」……あれえ、父様？ 今は私のターンでは……」

シアの呼びかけをさりりと無視してカムが一步前に出た。ビシツと直立不動の姿勢だ。横で「父様？ ちょっと、父様？」とシアが声をかけるが、まるで自衛官のように真っ直ぐ前を向いたまま見向きもしない。

「あ、何だ？」

「我々も共にボスの旅に同行させていただけませんか？ 我々は最早ハウリアであってハウリアでない存在です！ ならば、ボスに助けられた恩を返したいのです!!」

「我々もです！ 先生!!」

カムだけでなく、シヨウが鍛えたハウリア達も続く。彼等も恩に報いたいと告げる。しかし、ハジメはそれをバツサリと断る。

それもそうだ。彼等が集団で行動すれば、目を引く。神を騙る狂人のシンパである【聖教教会】の干渉を受けるのは確実だし、なにより【ヘルシャー帝国】が狙っている……あの軍事国家の事だ、【フェアベルゲン】を狙うのは目に見えている。

「じゃあ、あれだ。お前等はここで鍛錬してろ。次に樹海に来た時に、使える様だったら部下として考えなくもない」

「……そのお言葉に偽りはありませんか？」

「無い無い」

「嘘だったら、人間族の町の中心でボスの名前を連呼しつつ、新興宗教の教祖のごとく祭り上げますからな？」

「お、お前等、タチ悪いな……」

「そりゃ、ボスの部下を自負してますから」

とても遅くなった部下達？ に頬を引きつらせるハジメ。香織がぽんぽんと慰める様にハジメの頭を撫でる。ハジメは溜息を吐きながら、次に樹海に戻った時が面倒そうだと天を仰ぐのだった。

「ぐすつ、誰も見向きもしてくれない……旅立ちの日なのに……」

傍でシアが地面にのの字を書いていじけている……それをが慰める様に肩をポンポンと叩いていた。

樹海の境界でカム達の見送りを受けたハジメ、香織、ユエ、シアは再び魔力駆動二輪に乗り込んで平原を疾走し、シヨウ『デイスティバーンフォーム』、アシストは低空飛行で飛んでいた。バイクの位置取りは、ユエ、ハジメ、香織の順番でサイドカーにシアである

横からシアが質問する。

「ハジメさん。そう言えば聞いていませんでしたが目的地は何処ですか？」

「あ？ 言ってなかったか？」

「聞いてませんよ！」

「私は知ってるよ」

「……私も知っている」

得意気な香織ユエに、むつと唸り抗議の声を上げるシア。

「わ、私だって仲間なんですから、そういうことは教えて下さいよ！」

「コミュニケーションは大事ですよ！」

「悪かったって。次の目的地はライセン大峡谷だ」

「ライセン大峡谷？」

ハジメの告げた目的地に疑問の表情を浮かべるシア。現在、確認されている七大迷宮は、「ハルツィナ樹海」を除けば、「グリューエン大砂漠の大火山」と「シユネー雪原の氷雪洞窟」である。確実に期すなら、次の目的地はそのどちらかにするべきでは？ と思ったのだ。その疑問を察したのかハジメが意図を話す。

「二応、ライセンも七大迷宮があると言われていたからな。シユネー雪原は魔人国の領土だから面倒な事になりそうだし、取り敢えず大火山を目指すのがベターなんだが、どうせ西大陸に行くなら東西に伸びるライセンを通りながら行けば、途中で迷宮が見つかるかもしれないだろう？」

「つ、ついででライセン大峡谷を渡るのですか……」

「大迷宮なら有るよ。なあ、アシスト」

「はい。良ければ、大迷宮までナビゲートしますか？」

「じゃあ、先行く？」

「いや、まずは町だ。出来れば、食料とか調味料関係を揃えたいし、今後の為にも素材を換金しておきたいからな。前に見た地図通りなら、この方角に町があったと思うんだよ」

ハジメとしてはいい加減、まともな料理を食べたいと思っていた所だ。それに、今後、町で買い物なり宿泊なりするなら金銭が必要になる。素材だけなら腐る程持っているので換金してお金に替えておき

たかった。

それにもう一つ、ライセン大峡谷に入る前に落ち着いた場所で、やっておきたい事もあったのだ。

「はあくそうですか……よかったです」

ハジメの言葉に、何故か安堵の表情を見せるシア。香織が訝しそうに「どうしたの？」と聞き返す

「いやあく、ハジメさん達の事だから、ライセン大峡谷でも魔物の肉をバリバリ食べて満足しちゃうんじゃないかと思ってまして……ユエさんはハジメさんの血があれば問題ありませんし……どうやって私用の食料を調達してもらえるように説得するか考えていたんですよ、杞憂で良かったです。ハジメさんもまともな料理食べるんですね！」

「そりやそうだ。俺、魔物食えないし」

「当たり前だろ！ 誰が好き好んで魔物なんか喰うか！ ……お前、俺を何だと思ってるんだ……」

「プレデターという名の新種の魔物？」

「OK、シア、町に着くまで車体に括りつけて引きずってあげるよ」

「ちよ、やめえ、どっから出したんですかつ、その首輪！ ホントやめてえくそんなの付けないでえく、ユエさん見てないで助けてえ！」

「……自業自得」

ある意味、非常に仲の良い様子で騒ぎながら草原を進む四人。

「ほどほどにな」

シヨウは苦笑いしながら飛行していた。

## 町とギルド

「ステータスプレートを」

「ああ」「はい」「どうぞ」

町の少し離れた所でシユタイプとを宝物庫に仕舞い、俺は執事に戻り、町の門の前で、門番にステータスプレートを見せる。

「この町に来た目的は？」

「食料の補給がメインだ。あと素材の換金もしたい」

ハジメがそう言う

「ああ、それなら冒険者ギルドに行くといい 町の簡単な地図をくれるから役立つ筈だ」

「そいつは親切だな」

門番がステータスプレートに表記されているのを確認して驚く。

「全ステータス値一万超えに何だこの記号…？ 技能もいったい幾つ有るんだこれ…！…」

(ヤベ…：隠蔽すんの忘れてた…：)

慌てるハジメ。それを香織がフォローする。

「ちよつと前に魔物に襲われちゃって、…：その時に壊れちゃったみたいなんだよ」

「…：そんな壊れ方、聞いたこと無いが…：…」

「壊れてなきやそんな表示可笑しいでしょ？ まるで化け物みたいじゃない」

半ば壊れ気味に笑う香織に、門番も笑う

「そうだよな、こんなんじや指一本で町が滅ぼされちゃう。で、そつちの三人のプレートは？」

そう言つて門番はハジメ達の背後にいるユエとアシストとシアを見る



「連れは、…………魔物の襲撃で無くしちまってな………… こつちの兎人族はステータスプレートを持ってない。理由は……………解るだろ？」

「俺の連れもそんな感じですよ。」

「成る程、綺麗所を手に入れたな。まあいい、通って良いぞ」

そう言つて門番はハジメ達にステータスプレートを返して続ける

「冒険者ギルドは中央の道を真っ直ぐだ。ようこそ『ブルック』へ」

ハジメ達は門をくぐり町へと入って行く。門の所で門番が言っていたが、この町の名前は「ブルック」というらしい。町中は、それなりに活気があった。かつて見たオルクス近郊の町ホルアド程ではないが露店も結構出ており、呼び込みの声や、白熱した値切り交渉の喧騒が聞こえてくる。

こういう騒がしきは訳もなく気分を高揚させるものだ。ハジメだけでなく、ユエも楽しげに目元を和らげている。しかし、シアだけは先程からふるふる震えて、涙目でハジメを睨んでいた。

怒鳴る事もなく、ただジツと涙目で見てくるので、流石に気になつて溜息を吐くハジメ。楽しい気分には水を差しやがって、と内心文句を言いながらシアに視線を合わせる。

「どうしたんだ？　せつかくの町なのに、そんな上から超重量の岩盤を落とされて必死に支えるゴリラ型の魔物みたいな顔して」

「誰がゴリラですかっ！　ていうかどんな倒し方しているんですか！

ハジメさん達なら一撃でしょうに！　何か想像するだけで可哀想じゃないですか！」

「…………脇とかツンツンしてやったら涙目になつてた」

「面白かつたよね」

「まさかの追い討ち!?　酷すぎる！　ってそうじゃないですよ！」

「シアはん、落ち着いて、ハジメ君達も例えが例えだよ」

怒つて、ツツコミを入れてと大忙しのシア。手をばたつかせて体全体で「私、不満ですよ！」と訴えて、シヨウが宥める。ちなみに、ゴ

リラ型の魔物のエピソードは圧縮錬成の実験台にした時の話だ。決して、虐めて楽しんでいた訳ではない。ユエと香織はやたらとツンツンしていたが。ちなみに、この魔物が「豪腕」の固有魔法持ちである。

「これです！ この首輪！ これのせいで奴隷と勘違いされたじゃないですか！ ハジメさん、わかっていて付けたんですね！ うう、酷いですよ、私達、仲間じゃなかったんですかあ〜」

シアが怒っているのは、そういう事らしい。旅の仲間だと思つていたのに、意図して奴隷扱いを受けさせられたことが相当ショックだった様だ。勿論、ハジメが付けた首輪は本来の奴隷用の首輪ではなく、シアを拘束するような力はない。それは、シアも解っている。だが、だとしても、やはりショックなものはショックなのだ。

そんなシアの様子にハジメはカリカリと頭を掻きながら目を合わせる

「あのなあ、奴隷でもない亜人族、それも愛玩用として人気の高い兎人族が普通に町を歩けるわけないだろう？ まして、お前は白髪の兎人族で物珍しい上、容姿もスタイルも抜群。断言するが、誰かの奴隷だと示してなかったら、町に入つて十分も経たず目をつけられるぞ。後は、絶え間無い人攫いの嵐だろうよ。面倒……つてなにクネクネしてるんだ？」

言い訳あるなら言ってみろやという感じでハジメを睨んでいたシアだが、話を聞いている内に照れたように頬を赤らめイヤンイヤンし始めた。ユエが冷めた表情でシアを見ている。

「も、もう、ハジメさん。こんな公衆の面前で、いきなり何言い出すんですかあ。そんな、容姿もスタイルも性格も抜群で、世界一可愛くて魅力的だなんてえ、もうっ！ 恥かしいでっばげら!？」

調子に乗つて話を盛るシアのここに、香織の黄金のデコピンを放つ。可愛げの欠片もない悲鳴を上げて倒れるシア。身体強化していなかったのも、別の意味で赤くなつた額をさすりながら起き上がる。

「調子に乗っちゃだめ。だよ」

「……ずびばせん、香織さん」

冷めた香織の声に、ぶるりと体を震わせるシア。そんな様子に呆れた視線を向けながら、ハジメは話を続ける。

「あく、つまりだ。人間族のテリトリーでは、むしろ奴隷という身分がお前を守っているんだよ。それ無しじゃあ、トラブルホイホイだからな、お前は」

「それは……わかりますけど……」

理屈も有用性もわかる。だがやはり、納得し難いようで不満そうな表情のシア。仲間というものに強い憧れを持っていただけに、そう簡単に割り切れないのだろう。そんなシアに、今度はユエが声をかけた

「……有象無象の評価なんてどうでもいい」

「ユエさん？」

「……大切な事は、大切な人が知っていてくれれば十分。……違う？」

「……………そう、そうですね。そうですね」

「……ん、不本意だけど……シアは私が認めた相手……小さい事気にしちやダメ」

「……ユエさん……えへへ。ありがとうございますう」

曾て大衆の声を聞き、大衆の為に力を振るった吸血姫。裏切りの果に至った新たな答えは、例え言葉少なでも確かな重みがあった。だからこそ、その言葉はシアの心にストンと落ちる。自分がハジメ達の大切な仲間であるということとは、ハウリア族の皆も、ハジメや香織にシヨウ、アシストとユエも分かっている。いらぬトラブルを招き寄せてまで万人に理解してもらう必要はない。もちろん、それが出来るならそれに越したことはないが……

「あとな、その首輪だが、念話石と特定石が組み込んであるから、必要なら使え。直接魔力を注いでやれば使えるから」

「念話石と特定石ですか？」

念話石とは、文字通り念話ができる鉱物のことだ。生成魔法により“念話”を鉱石に付与しており、込めた魔力量に比例して遠方と念話

が可能になる。もつとも、現段階では特定の念話石のみと通話ということはできないので、範囲内にいる所持者全員が受信してしまい内緒話には向かない とどの詰りはトランシーバーだ。

特定石は、生成魔法により“気配感知「+特定感知」”を付与したものだ。特定感知を使うと、多くの気配の中から特定の気配だけ色濃く捉えて他の気配と識別しやすくなる。それを利用して、魔力を流し込むことでビーコンのような役割を果たすことが出来るようにしたのだ。ビーコンの強さは注ぎ込まれた魔力量に比例する。魔力式のリーダーと言っても良い。

ハジメの説明に、感心の声を上げるシア

「ちなみに、その首輪、きつちり特定量の魔力を流す事で、ちゃんと外せるからな？」

「なるほどお、つまりこれは……いつでも私の声が聞きたい、居場所を知りたいというハジメさんの気持ちという訳ですね？ もうつ、そんなに私の事が好きなんですかあ？ 流石にい、ちよつと気持ちが悪いつていうかあ、あつ、でも別に嫌ってわけじゃなくツバベルンツ!」

「……調子にのるな」

「ぐすつ、ずみません」

今度は美しい曲線を描いて飛来したユエの蹴りが後頭部に決まり、奇怪な悲鳴を上げ乍倒れるシア。ユエから、冷ややかな声がかけられる。近接戦苦手だったんじゃ……と言いたくなるくらい見事なハイキックを披露するユエに、シアは涙目で謝る。旅の同行は許しても、ハジメへのアプローチはそうそう許してもらえないらしい。それは香織も同じだ。もつとも、シアの言動がアプローチになっているかは甚だ疑問ではあるが

そんな風に仲良く？ メインストリートを歩いていき、一本の大剣が描かれた看板を発見する。かつてホルアドの町でも見た冒険者ギルドの看板だ。規模は、ホルアドに比べて二回りほど小さい

ハジメ達は看板を確認すると重厚そうな扉を開き中に踏み込んだ。

ギルドは荒くれ者達の場所というイメージから、ハジメは、勝手に薄汚れた場所と考えているのだが、意外に清潔さが保たれた場所だった。入口正面にカウンターがあり、左手は飲食店になっているようだ。何人かの冒険者らしい者達が食事を取ったり雑談したりしている。誰一人酒を注文していない事からすると、元々、酒は置いていないのかもしれない。酔っ払いたいなら酒場に行けと言う事だろう。

ハジメ達がギルドに入ると、冒険者達が当然のように注目してくる。最初こそ、見慣れない六人組という事で細やかな注意を引いたに過ぎなかったが、彼等の視線が香織とユエとアシストとシアに向くと、途端に瞳の奥の好奇心が増した。中には「ほう」と感心の声を上げる者や、門番同様、ボーと見惚れている者、恋人なのか女冒険者に殴られている者もいる。平手打ちでないところが冒険者らしい。

テンプレ宜しく、ちよつかいを掛けてくる者がいるかとも思ったが、意外に理性的で観察するに留めているようだ。足止めされなくて幸いとハジメはカウンターへ向かう。

カウンターには大変魅力的な……笑顔を浮かべたオバチャンがいた。恰幅がいい。横幅がユエ二人分はある。どうやら美人の受付というのは幻想のようだ。地球の本職のメイドがオバチャンばかりという現実と同じだ。世界が変わっても現実はいつも非情だ。ちなみに、ハジメは別に、美人の受付なんて期待していない。していないっただけだ。

だから、ユエとシアは、冷たい視線を向けるのは止めて欲しいと思うハジメ。先程から視線が突き刺さっている。香織からは生暖かい視線を感じる、冷たい視線よりも心が痛い。シヨウとアシストはそれを少しニヤリと見ていた。

「冒険者ギルド、ブルック支部にようこそ！ご用件はなんだい？  
そっちの兄ちゃんを抱えきれないほどとびきりの華を持つてるのに  
足りかなかったかい？残念だったね、美人の受付じゃなくて」  
そう言つて笑うオバチャン。シヨウはよく大阪にいるオバチャン  
を連想した。かなり好感の持てる人の様だ。

「素材の買取りと冒険者登録をお願いしたい」  
「あいよ」

そう言つてシヨウはあらかじめ取り出しておいた魔物の素材を渡  
す。

「これは……！とんでもないものを持ってきたね。これは………樹  
海の魔物かい？」

「ああ、買い取つてくれますか？」

「勿論さ。此処での買取りで良いかい？ もっと大きい町ならもう少  
し高く売れそうだけどね」

それにハジメが答える。

「いや気遣いは有り難いが此処で構わない」

そう言つてハジメも樹海の魔物の素材を出す。換金の値段も計算  
して硬貨を出した。

「はい、お待たせ。眼帯の子が全部で四十八万七千ルタだよ。茶髪の子  
のが四十七万九千ルタだよ」

冒険者登録もしいたからねとオバチャンは言う。

この世界「トータス」の貨幣はルタと呼ばれる硬貨で、青、赤、黄、  
紫、緑、白、黒、銀、金の種類があり、左から一、五、十、五十、百、  
五百、千、五千、一万ルタとなっている。驚いた事に貨幣価値は日本  
と同じだ。

「あと町の簡素な地図もサービスでつけとくよ」

そう言つてオバチャン——キャサリンはハジメ達に町の地図を渡す。

「お薦めの宿や店も書いてあるから参考にでもしなさいな」

ハジメは手渡された地図に目をやる

「！」

これが簡素？ 簡単どころか立派なガイドマップだ。

「お婆ちゃん、本当に良いの？ 十分金が取れるレベルだよ？」

「構わないよ。あたしが趣味で書いてるだけなんだから。それよりも良い宿に止まりなよ！ その二人を見て暴走する男連中が出そうだからね！」

シヨウ達は、キャサリンにお礼をすると、ギルドを出た。

## 宿屋で一悶着

宿を探す中、シヨウはステータスプレートを見る  
項目に職業：冒険者が追加されており、青い点がかれている。

これはルタ硬貨と同じ様にその色でランクをつけている様だ。上昇するにつれ赤、黄、紫、緑、白、黒、銀、金と変化する。……お気づきだろうか。そう、つまり、青色の冒険者とは「お前は一ルタ程度の価値しかねえんだよ、ペっ」と言われているのと一緒ということだ。きつと、この制度を作った初代ギルドマスターの性格は捻じ曲がっているに違いない。

ガイドマップを見て、決めたのは「マサカの宿」という宿屋だ。紹介文によれば、料理が美味しく防犯もしっかりしており、何より風呂に入れるという。最後が決め手だ。その分少し割高だが、金はあるので問題ない。若干、何が「まさか」なのか気になったというのもあるが……

宿の中は一階が食堂になっている様で複数の人間が食事をとっていた。ハジメ達が入ると、お約束の様にユエとシアに視線が集まる。それらを無視して、カウンターらしき場所に行くと、十五歳くらい女の子が元気よく挨拶しながら現れた。

「いらつしやいませー、ようこそ「マサカの宿」へ！ 本日はお泊りですか？ それともお食事だけですか？」  
「宿泊だ。このガイドブック見て来たんだが、記載されている通りでいいか？」

ハジメが見せたキャサリン特製地図を見て合点がいったように頷く女の子



「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか？」

女の子がテキパキと宿泊手続きを進めようとするが、ハジメは何処か遠い目をしている。ハジメ的に、あのオバチャンの名前がキャサリンだったことが何となくショックだったらしい。女の子の「あのお客様？」という呼び掛けにハッと意識を取り戻した

「あ、ああ、済まない。一泊でいい。食事付きで、あと風呂も頼む」「はい。お風呂は十五分百ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが」

女の子が時間帯表を見せる。なるべくゆっくり入り入りたいので、男女で分けるとして二時間は確保したい。その旨を伝えると「えっ、二時間も!？」と驚かれたが、日本人たるハジメとしては譲れない所だ。

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか？ 二人部屋と三人部屋が空いてますが……」

ちよつと好奇心が含まれた目で俺達を見る女の子。

—そういうのが気になる年頃なのは分かるが、周囲の食堂にいる客達まで聞き耳を立てるのは勘弁してもらいたい。4人共美人だとは思っているが、想像以上に4人の容姿は目立つみたいだな。ハジメと共に幻覚効果を持つアーティファクトを作るべきかもしれない

そう考えるシヨウを置いてハジメは尋ねる。

「四人部屋は空いてないのか？」

「すみません」

「なら、三人部屋で頼む。シアは床で眠ればいいだろうし」

「ちよつ、私の扱いが酷すぎませんか!？」

「ハジメ!もうちよつとシアはんに優しくしよう!」

何やら雑音が聞こえるが無視するハジメ。同様に周囲のざわつきも無視だ。女の子が少し頬を赤らめているのも気にしない。だが、そ

んなハジメの言葉に待ったをかける人物がいた。

「……駄目。三人部屋と二人部屋二つで」

ユエだ。周囲の客達、特に男連中がハジメとシヨウに向かって「ざまあー!」という表情をしている。ユエの言葉を男女で分けろという意味で解釈したのだろう。だが、そんな表情は次のユエの言葉で絶望に変わる。

「……私と香織とハジメで一部屋。シヨウとアシストでもう一部屋。シアは別室」

「ちよつ、何ですか! 私だけ仲間はずれとか嫌ですよ! 二人部屋三つでいいじゃないですかっ!」

猛然と抗議するシアに、ユエはさらりと言う。

「……シアがいると気が散る」

「気が散るって……何かするつもりなんですか?」

「……何って……ナニ?」

「ぶっ!? ちよつ、こんなところで何言ってるんですか! お下品ですよ!」

ユエの言葉に絶望の表情を浮かべた男連中が、次第にハジメに対して嫉妬の炎や宿った眼を向け出す。宿の女の子も顔を赤くしてチラチラとハジメ達を交互に見ていた。……いい加減、これ以上羞恥心を刺激される前に止めるべきかと、ハジメは口を挟もうとしたが、ハジメの目論見は少しだけ遅かった。

「だ、だったら、ユエさん達こそ別室に行つて下さい! ハジメさんと私で一部屋です!」

「……ほう、それで?」

指先を突きつけるシアに、冷気を漂わせた眼光で睨みつけるユエ。あまりの迫力にシアは訓練を思い出したのかプルプルと震えだすが、「ええい、女は度胸!」と言わんばかりにキツと睨み返すと大声で宣言した。

「そ、それで、ハジメさんに私の初めてを貰ってもらいますう!」

その瞬間、誰一人言葉を発する事無く、物音一つ立てない。今や、宿の全員がハジメ達に注目、もとい凝視していた。厨房の奥から、女の

子の両親と思しき女性と男性まで出てきて「あらあら、まあまあ」「若いっていいね」と言った感じで注目している。

ユエが瞳に絶対零度を宿してゆらりと動いた

「……今日がお前の命日」

「うっ、ま、負けません！ 今日こそユエさんを倒して正ヒロインの座を奪ってみせますう！」

女の戦いが始まるうとしているのを、香織は二人に拳骨を落とす。

「時と場合を考えようね。まったく、二人共子供なんだから。あ！部屋は二人部屋二つで」

「俺とアシストも二人部屋で」

「……………」この状況で二人部屋……………つ、つまり二人で？ す、すごい……はっ、まさかお風呂を二時間も使うのはそういうこと!? お互いの体で洗い合ったりするんだわ！ それから……………あ、あんなことやこんなことを……………なんてアブノーマルなっ！」

女の子はトリップしていた。見かねた女将さんらしき人がズルズルと女の子を奥に引きずっていく。代わりに父親らしき男性が手早く宿泊手続きを行った。部屋の鍵を渡しながら「うちの娘がすみませんね」と謝罪するが、その眼には「男だもんね？ わかってるよ？」という嬉しくない理解の色が宿っている。絶対、翌朝になれば「昨晚はお楽しみでしたね？」とか言うタイプだ。

何を言っても誤解が深まりそうなので、急な展開に呆然としている客達を尻目に、未だ蹲っているユエとシアを肩に担ぐと、ハジメと香織は、そのまま二階の部屋に逃げるように向かった。

「二人部屋の鍵だよ。大変だね、君達も」

何ぞ「ごゆっくり」といった目で誰も彼も見てくる。大きなお世話だ

「はあ……………ハジメ達が御迷惑おかけしました。あの調子ですので」

そう言ってシヨウは二階に登る。二人部屋に鍵を刺して回して扉を開けて二人で部屋に入る。

「なんか、どっと疲れた」

そんな弦きが静かに響いた。

## 痛い二つ名

次の日の朝、ハジメは、ユエとシアに金を渡し、旅に必要なもの  
買い出しを頼んだ。チェックアウトは昼なのでまだ数時間は部屋を  
使える。なので、ユエ達に買い出しに行ってもらっている間に、部屋で  
済ませておきたい用事があったのだ。

「用事ってなんですか？」

シアが疑問を素直に口にする。しかし、ハジメは、

「ちよつと作っておきたいものがあるんだよ。構想は出来ているし、  
数時間もあれば出来るはずだ。ホントは昨夜やろうと思っていたん  
だが……何故か妙に疲れて出来なかつたんだよ」

「……そ、そうだ。ユエさん。私、服も見ておきたいんですけどいいで  
すか？」

「……ん、問題ない。私は、露店も見てみたい」

「あつ、いいですね！ 昨日は見ていただけでしたし、買い物しながら  
何か食べましょう」

サツと視線を逸らし、きやいきやいと買い物話をし始めるユエと  
シア。自分達が原因だと分かっているが、心情的に非を認めたくな  
いので、阿吽の呼吸で話題も逸らす。

「……お前等、実は結構仲良いだろう」

そんなハジメの呟きも虚しくスルーされるのだった。

「ハジメくん、あとでマッサージする？」

「……………頼む」

「じゃあ俺も仕入れて来るわ」

「同行します」

「私も行ってくるね」

そうして香織、ユエ、シア、シヨウ、アシストは買い出しに出掛けた。

---

現在、シアとユエと香織は町に出ている。昼ごろまで数時間といったところなので計画的に動かなければならない。目標は、食料品関係とシアの衣服、それと薬関係だ。武器・防具類はハジメやシヨウがいるので不要である

町の中は、既に喧騒に包まれていた。露店の店主が元気に呼び込みをし、主婦や冒険者らしき人々と激しく交渉をしている

道具類の店や食料品は時間帯的に混雑しているようなので、二人はまず、シアの衣服から揃えることにした

オバチャン改め『キャサリン』さんの地図には、きちんと普段着用の店、高級な礼服等の専門店、冒険者や旅人用の店と分けてオススメの店が記載されている。やはりオバ……キャサリンさんは出来る人だ。痒い所に手が届いている

二人は、早速、とある冒険者向きの店に足を運んだ。ある程度の普段着もまとめて買えるという点が決め手だ

その店は、流石はキャサリンさんがオススメするだけあって、品揃え豊富、品質良質、機能的で実用的、されど見た目も忘れずという期待を裏切らない良店だった

ただ、そこには……

「あらくん、いらつしやい♥ 可愛い子達ねえん。来てくれて、おねえさん嬉しいわあ、たくぷりサービスしちゃうわよくん♥」

……化け物がいた。身長二メートル強、全身に筋肉という天然の鎧を纏い、劇画かと思うほど濃ゆい顔、禿頭の天辺にはチョココンと一房の長い髪が生えており三つ編みに結われて先端をピンクのリボンで纏めている。動く度に全身の筋肉がピクピクと動きギシミシと音を立て、両手を頬の隣で組み、くねくねと動いている。服装は……いや、言うべきではないだろう。少なくとも、ゴン太の腕と足、そして腹筋が丸見えの服装とだけ言っておこう

香織とユエとシアは硬直する。シアは既に意識が飛びかけていて、ユエは奈落の魔物以上に思える化物の出現に覚悟を決めた目をしている

「あらあらあくん？ どうしちやったの二人共？ 可愛い子がそんな顔してちやだめよくん。ほら、笑って笑って？」

どうかしているのはお前の方だ、笑えないのはお前のせいだ！ と盛大にツッコミたいところだったが、三人は何とか堪える。人類最高レベルのポテンシャルを持つ三人だが、この化物には勝てる気がしなかった

しかし、何とか物凄い笑顔で体をくねらせながら接近してくる化物に、つい堪えきれずユエは呟いてしまった

「……人間？」

「ちよつ、ユエ!？」

その瞬間、化物が怒りの咆哮を上げた

「だあくれが、伝説級の魔物すら裸足で逃げ出す、見ただけで正気度がゼロを通り越してマイナスに突入するような化物だゴラアアア!!」  
「い、ごめんなさい……」

ユエがふるふると震え涙目になりながら後退る。シアは、へたり込

み……少し下半身が冷たくなってしまった。香織は驚いて呆けてしまった。ユエが、咄嗟に謝罪すると化物は再び笑顔？ を取り戻し接客に勤しむ

「いいのよ〜ん。それでえ？ 今日、どんな商品をお求めかしらあ〜ん？」

シアは未だへたり込んだままなので、ユエが覚悟を決めてシアの衣服を探しに来た旨を伝える。シアは、もう帰りたいのか、ユエの服の裾を掴みふるふると首を振っているが、化物は「任せてえ〜ん」と言うやいなやシアを担いで店の奥へと入っていつてしまった。その時の、ユエや香織を見つめるシアの目は、まるで食肉用に売られていく豚さんの様だった

ユエとシアは、『クリスタベル』店長にお礼を言い店を出た。その頃には、店長の笑顔も愛嬌があると思える様になっていたのは、彼女の人の徳ゆえだろう

「いや〜、最初はどうなることかと思いましたが、意外にいい人でしたね。店長さん」

「ん……人は見た目によらない」

「ですな〜」

「だね〜。じゃあ私はこれから薬草とかのお店見てくるね」

「ん」

「了解です〜」

そう言つて香織は、ユエとシアとは別行動で薬屋へ向かった

「よし、このくらいでいいかな」

そう呟きながら戻ろうとする香織。しかし、唯でさえ目立美少女だ。すんなりとは行かず、気がつけば数十人の男達に囲まれていた。冒険者風の男が大半だが、中にはどこかの店のエプロンをしている男



もいる。

その内の一人が前に進み出た。香織は覚えていないが、この男、実はハジメ達がキャサリンと話しているとき冒険者ギルドにいた男だ。

「香織ちゃんで名前あつてるよな？」

「あつてるけど……」

何のようだと訝しそうに目を細める香織。香織の返答を聞くとその男は、後ろを振り返り他の男連中に頷くと覚悟を決めた目で香織を見つめた。他の男連中も前に進み出て、香織の前に出る。

そして……

「「「「「香織ちゃん、俺と付き合ってください!!」」」」」」

で、告白を受けた香織はというと……

「お断りします」

「ぐう……」

正面から断られて、男は呻き、何人かは膝を折って四つん這い状態に崩れ落ちる。だけど、諦めが悪い奴は何処にでもいた。まして、香織の美貌は他から隔絶したレベルだ。多少、暴走するのも仕方ないといえれば仕方ないかもしれない。

「なら、なら力づくでも俺のものにしてやるうー!」

暴走男の雄叫びに、他の連中の目もギンツと光を宿す。香織を逃さないように取り囲み、ジリジリと迫ってくる。そして遂に、最初に声をかけてきた男が、雄叫びを上げながら香織に飛びかかった。

—— ……フツ、見事な某怪盗式ダイブね。『感動的だな。だが、無意味だ』だよ——

——ド。パンツ!!

直後、男の顔面にゴム弾が激突する。

「グペツ!」

情けない悲鳴を上げて地面に転がる某怪盗式ダイブの男。周囲の男共は、魔法も使わず一撃で意識を刈り取った私に困惑と驚愕の表情を向ける。そして、それ以外の人達はヤンヤヤンヤの歓声を上げる。

「これどうしようかな?」

香織がダイブした男の処遇を考えていると、聞き慣れた声で、聞きなれない呼び方をした一組のカップルが現れた。

「香織様、ここにいましたか」

「へ?……アオイ……くんと……アシストちゃん?」

そう、シヨウとアシストだ。敬語を使い、香織の前で左膝を付き、右手を胸に当てて頭を下げている。

「はい。そうですが、どうしました?」

「どうしたもなにも、え!?え!」

香織は訳が解らず、戸惑ったけどシヨウが魂魄魔法、『心導』で意図を伝えた

『その男はこちらで処理する。この姿でいることとこの態度は後々の為だ。堂々として任せろ』

そう伝えると香織はにこやかな笑顔で任せた。

「アオイくん、アシストちゃん、そこにいる男の人達を頼めるかな?」

「仰せのままに」

そう言うのと香織は宿に戻ろうとして、他の男達が追いかけてようとするが……

——ズドンツ!!

と響いた。人達が音の方を向くとそこには——

「ハアツ!!」「グヘツ!!」「セイツ!!」「グハアツ!!」

切れのいいコンビネーションで男を蹴るシヨウとアシストと空中を舞う男がいた。

周囲の男は、囲んでいた連中も、関係ない野次馬も、近くの露店の店主も関係なく、あまりの仕打ちに絶句していた。

やがて永遠に続くかと思われたリレーは、男の意識の喪失と同時に終わりを告げた。

リレーが終わった後、シヨウとアシストは香織に告白した男達に向かってこう言った。

「貴方達が手を出そうとした香織様はンツ我が主の奥方です。香織様の心には我が主しか居りません。それでもと言うなら……致し方ありませんがそれなりの覚悟をお願いします」

そう言い残し、二人は、宿屋に向かった。

その後、香織には『漆黒の姫君』、シヨウとアシストには『白執事と白メイド』の二つ名がつけられた……………

---

シヨウとアシストが宿に戻ると、ハジメ達がちょうど準備を終えたところのようだった。

「お疲れさん、何か、町中が騒がしそうだったが、何かあったか？」

「どうやら、先の騒動を感知していたようである。」

「いや、何もなかったよ。」

「正確には、『何も無かったに等しい』ですがね」

「……………そうか」

ハジメは聴かなかった事にするかの様に、話題を変えた。

「こっちの準備は出来たが、そっちはどうだ？」

「フツ、準備万端。いつでもいいぜ」

その返答にハジメはニヤリと笑いながら、出発の声をかけた

「よし、じゃあ行くか！」

「うん！」

「ん！」

「ですう！」

「ああ！」

「はい！」

それに答える様にそれぞれが返事する。

外に出ると太陽は天頂近くに登り燦々と暖かな光を降らせている。それに手をかざしながらハジメは大きく息を吸った。振り返ると、香織とユエとシアが頬を緩めて、シヨウとアシストが不敵の笑みを浮かべながらハジメを見つめている。

ハジメは五人に頷くと、スつと前に歩みを進めた。皆も追従する。

—さあ、旅の再開だ。—

## ライセンの大迷宮と無情？

「……ここか……」

「……ここですね。ですが……」

現在、ハジメ達は「ライセン大渓谷」にある大迷宮の入り口までやって来た。のだが、シヨウとアシストは何か納得しない様な口振りをしたそれは……

「おいでませ！ ミレデイ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪」

「♪ や ♪」のマークが妙に凝っている所が何とも腹立たしい。

「……なんじゃこりゃ」

「……なにこれ」

「……なんなのかしら」

「……何なんだ？」

「……ほんとに大迷宮？」

ハジメ達の声が重なる。その表情は、まさに「信じられないものを見た！」という表現がぴったり当てはまるものだ。二人共、呆然と地獄の谷底には似つかわしくない看板を見つめている。

「……お前ら。マジだと思っうか？」

「……うん」

「……ん」

「……ミートウー」

「同じく」

「長え間だな。根拠は？」

「……ミレデイ」ね」だ」です」

「やっぱそこだよな……」

「ミレディ」その名は、オスカーの手記に出て来たライセンのファーストネームだ。ライセンの名は世間にも伝わっており有名ではあるがファーストネームの方は知られていない。故に、その名が記されているこの場所がライセンの大迷宮である可能性は非常に高かった。

だがしかし、はいそうですかと素直に信じられないのは……

「何でこんなチャライんだよ……」

そう言う理由である。ハジメとしては、オルクス大迷宮の内での数々の死闘を思い返し、きつと他の迷宮も一筋縄では行かないだろうと想像していただけに、この軽さは否応なくハジメを脱力させるものだった。ユエ達（二人を除いて）も、大迷宮の過酷さを骨身に染みて理解しているだけに、若干、まだ誰かのいたずらではないかと疑わしそうな表情をしている。

「でも、入口らしい場所は見当たりませんか？ 奥も行き止まりですし………おわあ！」

シアがベタベタ岩を触ると回転ドアがぐるんと周り向こうへシアが行く。

「忍者屋敷かよ………」

シヨウのツツコミに皆が賛成し、沈黙する………

「………続くか」

「あ、ああ」

そういつて、ハジメ達はシヨウを先頭に大迷宮へと入る。そこには………

「はっ。」

ハジメ達の一言だ。だがシアは、トイレに行きたかったと言っていた、でも行ってない。つまり

「で、出ちゃった」

これである。

香織とユエが言う

「シアちゃん、事後処理は自分でするんだよ」

「お漏らし兎」

「みないてくださいいよおーーーーー」

とりあえずシアの処理をして戦闘態勢を取り、シヨウは新フォームにチェンジする。

見た目は蒼髪虹眼に変わり、白いラバースーツに蒼と緑をベースに金と黒のラインが入った鎧と千本の剣——ソードビットを纏う。

そして、アシストの定例の祝福。

「祝えー！邪神を駆逐し、ハジメ等を故郷へ導く我らがメシア！その名もアオイ シヨウ カオスイノベーシヨンフォーム！混沌革新の救世主がこの地に降り立った瞬間です！」

「いつもありがとう、アシスト」

そう言いながら、シヨウはアシストの頭をなでる。

「いえ、全ては貴方の為ですよ」

アシストは笑顔でそう答え、二人で笑いあっている。……………甘っ！

「おい、そろそろ行くぞー」

「わかった」

ハジメの呼びかけに、すぐ答えて向かう

アシストの祝福が終わったところで、シアが開けた道を歩くと、落とし穴にシアが落ちた。

「なんですかあー」

「前を見てばかりいるな気で感じろ」

「無理を言うな、シアからしたら初めての大迷宮だ」

そして今度はシヨウの元へ金ダライが落ちてくるが秒で分解される。

「古典的だね」

「古くさいです」

今度はアシストが白いのをかけられて

「ああんっ!!」

「大丈夫か、アシスト?」

俺はアシストの顔を拭く

「あ、はい。害はありませんでした」

またある時はシヨウに岩がゴロゴロと

「分か——あっ!」

「上から」

「落ちた」

「悲運ですね」

またまたある時は水をかけられ、そのまたある時は粘着トラップに引つ掛かり、さらにある時は爆竹が飛んで来たりと e t c. そして





そして浮いた岩にのって上へ行く。すると

「ヤッホー!!!、みんな大好きミレディちゃんだ『マテリアルセイバー』発動」ぎゃーいじめだー」

シヨウがミレディのゴーレムを攻撃する。最初からクライマックス!!

「ミレディ・ライセン——テメエは今日ここで死ね」

シヨウはミレディへの死刑宣告をする。

ミレディちゃんの攻略あっさり終わる予定となった。



—再生しない?!、どうして—

「再生しないと思ってるだろ?」

「!!、何でそれを!」

「ああ、それ永遠に再生しないと思うよ、俺が塞いだからな」

ミレディが自身の腕を見るとそこには何故か魔石が壊れた部位をコーティングし、再生を阻害している

「どうゆうこと?、あなたまるで分かったような発言「いや、わかってない。だから予測した」え?」

「もしかしたら、魔法が使えないところで、魔法でしか倒せない敵が出てくるかもしれない。もしかしたら、ラスボスのお約束は通じないかもしれない。もしかしたら、ラスボスがモンスターでは無いかもしれない。もしかしたら、あのウザさからしたら相手が絶望するような仕掛けがあるかもしれない。——等々いろいろと予測した」

そう、只の予測。だが、一つだけでは無い。考えられる無数の可能性を全て予測したのだ!

「でも、そんな素振りを見たこと」当たり前前だ、同時作業で行った。脳を並列に動かし、攻略と同時進行で行った」……あり得ない……そんなこと、普通じゃ出来るわけが「お前ごときの物差しで図るな。てめえごときが勝てるわけねえだろ」ッ……

ミレディは絶句した。普通ならそんな事はあり得ない。ありえる筈がない。だが、シヨウはそれを可能にした。

「これは余談だが、その魔石は俺の無限の魔力を構築で固めた物だ。」

そう、固めただけなのだ。

—お久しぶりです、皆さん。アシストです—

—今日は『構築』魔法の解説をいたします。—

—生成・変成・昇華 複合派生魔法 『構築』—

—これもシヨウオリジナル属性でその名の通り、物体を構築する

『分解』と対となる魔法です――

――後は皆様の想像通りこれでミレデイの傷口に合う様に魔石を構築し、再生を阻害したのです。――

「ところでハジメ、俺だけで大丈夫？」

そうハジメ達もいる。ハジメ達は、シアやユエは特攻、香織は全員へのバフを与え、ハジメとシヨウとアシストは臨機応変に対処する。

この作業は今一分経つか立たないかだ。

そしてシヨウとハジメがミレデイの核を察知しそこを攻撃する。天井を落としてもシヨウに分解され。ゴーレムを出してもユエにボロボロにされた。

はつきり言つてミレデイは無理ゲー所ではなくただの欠陥ゲームなのだ。

「さあ、お前の罪を数えろ」

「そんなのわからないよー！」

「一つ、俺を落とし穴にかけたこと」

「二つ、ハジメ達を煽ったり、苦勞をかけたこと」

「三つ、アシストに変な液をぶっつけたことだー！」

そして原作みたいにパイルバンカーからのシアにとどめを刺された。

「うわーん!!、痛いよー！ー！ー」

「御託はいい、さっさとしろ」

「ええー？、まあ、いいか、そこに入り口が開くよ。そこから出口だよ」

「そうか」

シヨウ一行は従い歩く、最後「あれ聞いてない？、私の名言は!？」とミレデイの声は聞かなかった。

歩くと何かがいる

「やつほーーー!!!、みんな大好きミレデイちゃんだよー」  
ミニミレデイだった。

『マテリアルセ』『ごめんなさい』『ごめんなさい』『ごめんなさい』『ごめんなさい』『ごめんなさい』  
シヨウがミレデイを消そうとしたがハジメに諫められる!!!

「これで赦して下さい  
!!!!!!」

ドアを開けたらあーら立派な金貨に宝石。(アシストを除く)女達は宝目がけて走る。おいおいといいハジメも歩く。残っているのはミレデイとシヨウとアシストの三人だ。

「聞きたい事があるの」

ミレデイは真剣な声で問う

「神殺しならやるぞ。勿論、個人的な怨みでな。」

「いや、私が聴きたいのはそれじゃない。何で神代魔法を全て会得しているの?」

「フム、それか。それは俺にも——」  
「知らぬ」

「は!?!」

「話は以上だ。さて、帰るぞ」

「あ、ちよつとま——」

ミレデイが止めようとする、シヨウの掛け声に合わせてハジメ達は集まり、一斉に転移した。

「……………ぐすん」

ミレデイはそう言って、(シヨウのせいで)ボロボロとなった大迷宮の修復を始める。

## 短縮と再会

広大な平原のど真ん中に、北へ向けて真っ直ぐに伸びる街道がある。街道と言っても、何度も踏みしめられることで自然と雑草が禿げて道となっただけのものだ。この世界の馬車にはサスペンションなどというものはないので、きつとこの道を通る馬車の乗員は、目的地に着いた途端、自らの尻を慰めることになるのだろう。

そんな、整備されていない道を有り得ない速度で爆走する影がある。黒塗りの車体に四つの車輪が付いた大きな箱の様な物が凸凹の道を苦もせず突き進む。

ハジメ御一行だ。かつてライセン大峽谷の谷底で走らせた時とは比べものにならないほどの速度で街道を疾走している。時速八十キロは出ているだろう。魔力を阻害するものがないので、魔力駆動四輪も本来のスペックを十全に発揮している。座席順は、いつもの通り、ハジメの隣に香織、その隣にユエ、後ろにシアとショウとアシストという形だ。

「このペースなら後一日つてところだ。ノンストップで行くし、休める内に休ませておこう」

ハジメ達は今、とある事情によりギルドの支部長直々の依頼で冒険者のウィル一行の搜索依頼を受け、北の山脈地帯に一番近い町まで後一日ほどの場所まで来ていた。このまま休憩を挟まず一気に進み、おそらく日が沈む頃に到着するだろうから、町で一泊して明朝から搜索を始めるつもりだ。急ぐ理由はもちろん、時間が経てば経つほど、ウィル一行の生存率が下がっていくからだ。しかし、いつになく他人のためなのに積極的なハジメに、ユエが、上目遣いで疑問顔をする。

ハジメは、腕の中から可愛らしく首を傾げて自分を見上げるユエに



苦笑いを返す。

「……積極的？」

「ああ、生きているに越したことはないからな。その方が、感じる恩はでかい。これから先、国やら教会やらとの面倒事は嫌ってくらい待ってそうだからな。盾は多いほうがいいだろう？ いちいちまともに相手なんかしたくないし」

「……なるほど」

報酬は日本組以外のメンバーのステータスプレートの秘匿や支部長が必要な時に便宜を図ってくれると盛り沢山で、ほんの少しの労力で獲得できるなら、その労力は惜しむべきではないだろう。

「それに聞いたんだがな、これから行く町は湖畔の町で水源が豊かなんだと。そのせいか町の近郊は大陸一の稲作地帯なんだそうだ」

「……稲作？」

「おう、つまり米だ米。俺の故郷、日本の主食だ。こつち来てから一度も食べてないからな。同じものかどうかは分からないが、早く行って食べてみたい」

「うん、久しぶりのお米。楽しみだなー」

「あー、それは確かに。何か聞いたらはら減ってきたな」

「……ん、私も食べたい……町の名前は？」

遠い目をして米料理に思いを馳せるハジメ達に、微笑ましそうな眼差しを向けていたユエは、そう言えば町の名前を聞いてなかったとハジメに尋ねる。ハツと我に返ったハジメは、ユエの眼差しに気がついて少し恥ずかしそうにすると、誤魔化すように若干大きめの声で答えた。

「湖畔の町ウルだ」

ハジメが頑張った甲斐もあり、町についたハジメ達はウルの町の一番といわれる高級宿【水妖精の宿】に入った

この水妖精の宿は、一階部分がレストランになっており、ウルの町の名物である米料理が数多く揃えられている。内装は、落ち着きがあつて、目立ちはないが細部まで拘りが見て取れる装飾の施された重厚なテーブルやバーカウンターがある。また、天井には派手すぎないシャンデリアがあり、落ち着いた空気に花を添えていた。老舗”そんな言葉が自然と湧き上がる、歴史を感じさせる宿だった

「もうっ、何度言えばわかるんですか。〃香織〃さんはまだしも、私を放置してユエさんと二人の世界を作るのは止めて下さいよお。ホント凄く虚しいんですよ、あれ。聞いてます？　〃ハジメ〃さん」

「聞ってる、聞ってる。見るのが嫌なら別室にしたらいじやねえか」  
「んまつ！　聞きました？　〃香織〃さん、〃シヨウ〃さん、アシストさん、ユエさん。〃ハジメ〃さんが冷たいと言いますう」

「……〃ハジメ〃……メツ！」  
「へいへい」

「〃ハツくん〃もうちよつと優しくしてあげて？」

「前向きに検討する」

「〃ハズイメエ〃………」

「おい、〃シヨウ〃。それやめろ」

「まあ、良いじゃないですか。〃シヨウ〃の持ちネタなんですから」

そんなここ最近の日常ともいえる会話をしている時だった。すぐ近くのカーテンで仕切られた席からガタリと音がし、シャアアアアーと、カーテンを引いて誰かが姿を現した

「南雲君！白崎さん！蒼君！」

「ああ？ ……………先生？」

「え？何でここに先生が!？」

「あ……………お久です……………」

彼らの前に現れたのはこの世界に一緒に召喚された社会担当の教師。「畑山愛子」先生だった。

「……………やっぱり皆さんなんですね？ 生きて……………本当に生きて……………」

「いえ、人違いです。では」

「へ?」

ハジメが厄介ごとは勘弁と言わんばかりに誤魔化して立ち去ろうとした。

「ちよつと待って下さい！ 南雲君ですよ？ 先生のこと先生と呼びましたよね？ なぜ、人違いだなんて」

「いや、聞き間違いだ。あれは……………そう、方言で“チツコイ”て意味だ。うん」

「それはそれで、物凄く失礼ですよ！ ていうかそんな方言あるわけがないでしょう。どうして誤魔化すんですか？ それにその格好……………何があつたんですか？ こんなところで何をしているんですか？ 何故、直ぐに皆のところへ戻らなかつたんですか？ 南雲君！ 答えなさい！ 先生は誤魔化されませんよ！」

ハジメは尚も誤魔化そうとしているが、

「諦めろ、ハジメ。俺がいる時点でアウトや」

と、ハジメに告げる

「……………はあくくく、久しぶりだな、先生……………」

ハジメは苦笑いしながらそう答える。

「やっぱり、やっぱり南雲君なんですね……………生きていたんですね……………」

「まあな。色々あったが、何とか生き残ってるよ」  
「よかった。本当によかったです」

先生は心底ホツとしたように息を吐いた。すると、愛子先生はこちらに振り返り、

「蒼君と……髪と瞳の色が違いますが白崎さんですね？」

「はい。お久しぶりです」

「お久です。先生」

と挨拶をしたその時

「先生！蒼から離れて！」

先生が出てきた個室からクラスメイトの宮崎奈々が飛び出してキツと目付きを鋭くすると、俺を睨み付けながら先生を護るような立ち位置になると

「先生！彼は殺人者なんですよ！『なんの罪も無い檜山』を殺したんですよ！危険ですから下がって！」

その言葉を聞いて俺は遠い目になった。

「チツ、糞之河、どんな説明したんだよ。まあ、殺した事には間違い無いけど」

と、内心舌打ちしながらクラスメイトの方を見る。ドイツもこいつも糞之河の言葉を鵜呑みしてるらしい。仕方無い

「そうか。なら邪魔したな」

そう言って立ち去ろうとすると

「待て、シヨウ」

ハジメから制止の声がかかった。ハジメはクラスの奴らの方を向いて

「話しを聞いた限り、『罪の無い檜山』と聞こえたがそれは本当だと  
思うのか？」

ハジメの問いかけに個室にいた『愛ちゃん護衛隊』の一人、相川昇

が出てきて

「当たり前だろ！そうだって「天之河が言っていた。か？」!？」

言おうとしたことを当てられて黙る昇。だがハジメは続けて放つ。

「んなわけねえだろ俺を落としたのは檜山だ。落とされた俺が言うんだ。間違い無い」

すると『愛ちゃん護衛隊』の菅原妙子が

「で、でも「それが殺す理由にならないって言いたいのか？あるんだよ」!？」

香織の言葉に絶句する

「私たちは戦争に呼ばれたよ。つまり、人殺しをするために召還されたのよ。それに檜山くんはハツくんを殺そうとした。だから殺したんでしょ？シヨウくん」

「ああ、ハジメを殺した檜山が許せなかった。だからそうした」

「そう言うことだから。じゃ、私達はこれで。行こう、ハツくん。みんな。」

「ああ」

「……ん」

「ですう」

「御意」

そう言い残して俺達はその後を後にしようとした

## 愛子の質問

「まっってください」

「ああ？」

俺達を呼び止める様に先生が声を上げ、ハジメが答える。

「話しはまだ終わっていません。先ず、その三人は誰なんですか？」

先生はユエはん達の方を見てそう聞くと、

「ユエ。ハジメの側室」

「シア・ハウリアですう。ハジメさんの女ですう！」

何ともインパクトのある自己紹介をした。

「お、女？」

先生は衝撃を受けた様に震えた。

「おい！ ユエはともかくシアは違うだろ！」

ハジメはそう口を出す。

「そんなっ！ 酷いですよハジメさん。私の一族を狂信者にしといて！」

「いや、何時までそのこと引っ張るんだよ？ あれは……………」

その話を聞いていたクラスメイトの男子陣が、

「おい聞いたか？ 南雲の女って言ったぞあの子達」

「くっ……………何故だ!? 俺達には出会いがないのに何故南雲があんな美人の金髪のロリっ娘とウサ耳美少女に……………」

何やら悔しがっている。

「いやちよつと待てお前達。それ以前にあの子達は側室と女って言ったぞ？」

「ダニイ！」

「じゃあ正妻は……………」

その視線は自然と元からハジメを気に掛けていた少女へと向く。

その視線に気付くと、白崎さんはドヤ顔で、

「ハツ君の正妻、白崎香織です」

堂々といい放つ。

「嘘だろおおおおおつ!？」

「白崎さんがあああああああああああ」

「【二大女神】の1人があああああああつ!？」

血涙を流しそうな勢いで叫ぶ男子達。

すると、その叫びで愛子先生が我に返ったのか、

「南雲君……………」

「な、何だ先生……………」

「狂信者とはどういう事ですか!そ、それに三股なんて!直ぐに帰ってこなかったのは、遊び歩いていたからなんですか!？」

「先生。落ち着いて落ち着いて、どうどう」

俺は爆発する愛子先生を宥めようとする。

「蒼君も何か言っておやりなさい! 複数の女性と付き合う事など不純だと!」

「いや、先生。今の俺はあくまで『ただの執事』だからそれを言う権利も無いし、別にハジメが決めた事はそれをとやかく言う権利は俺には無い」

「い、いやそれでも……………」

「まって!今『執事』って言わなかった!？」

と、『愛ちゃん護衛隊』の園部優花が驚いた様に飛び出てくる。

「あ、そっか。言っていないっけ？じゃあ」  
すると俺は姿勢を整え、胸に手を当てて軽く頭を下げる

「改めまして。ハジメの執事を勤めさせてもらっている蒼 翔と言います。以後お見知りおきを」  
するとアシストも両手を前で組んで頭を下げる

「初めまして。蒼 翔を伴侶とし、ハジメのメイドを勤めているアシストと申します」

と、二人で自己紹介を済ましたら――

「南雲君……………」

重苦しい声でハジメの名を呼ぶ愛子先生。

「…………許しません！ ええ、先生は絶対許しませんよ！ お説教です！  
！そこに直りなさい、南雲君！」

宿の食堂の一室に雷が落ちた。

先生が一通り騒いだ後、質問を一個づつ返して行く

Q. 二人は橋から落ちた後、どうしてましたか？

ベストアンサー

香織・超頑張りました

Q. 蒼君は城を抜けた後、どうしてましたか？

ベストアンサー

シヨウ・ハジメ達を追いかけました。十日で攻略はキツかったです

Q. なぜ二人はその姿になったんですか？  
ベストアンサー



シヨウ・話しによると魔物を食べたり仕立てたりしたらしいです。

Q・蒼君は何故執事になったんですか？

ベストアンサー

シヨウ・機会があつておもいつきりジョブチェンジしました

Q・何故戻らないのですか？

ベストアンサー

シヨウ・俺達に戻る場所はない。けど辿り着く場所ならある。だから俺達は止まらない。止まる分けには行かない

「三人とも真面目に答えて下さい！何ですかベストアンサーって！」

と先生が机を叩いて吠えるが

「旨いな、この異世界カレー。ほとんど日本と変わらない」

「ああ、ほんと凄いやな。なあ、香織？」

「だねーハックくん♪ねえ、次これ食べない？」

と先生を無視して、飯を食べてると護衛騎士のデビットがこちらに来て睨みながら机を叩き

「おい、貴様ら！愛子様が質問しているんだぞ！真面目に答えろ！」

と突っ掛かって来るがハジメは、チラリとデビットを見ると、はあと溜息を吐いた。

「食事中だ。行儀悪いぞ」

と適当に返す。すると

「行儀が悪い？なら言わせてもらおう。貴様こそ獣風情を店に入れるのがマナー違反だ」

侮蔑をたっぷりと含んだ眼で睨まれたシアはビクツと体を震わせた。ブルツクの町では、宿屋での第一印象や、キャサリンと親しくしていたこと、ハジメの存在もあつて、むしろ友好的な人達が多かったし、フューレンでも蔑む目は多かったが、奴隸と認識されていたから

か直接的な言葉を浴びせかけられる事はなかった。

つまり、ハジメと旅に出てから初めて、亜人族に対する直接的な差別的言葉の暴力を受けたのである。有象無象の事など気にしないと割り切ったはずだったが、少し、外の世界に慣れてきていたところへの不意打ちだったので、思いの他ダメージがあつた。シユンと顔を俯かせるシア。

よく見れば、デビッドだけでなく、チエイイス達他の騎士達も同じような目でシアを見ている。彼等がいくら愛子達と親しくなろうと、神殿騎士と近衛騎士である。聖教教会や国の中枢に近い人間であり、それは取りも直さず、亜人族に対する差別意識が強いということでもある。何せ、差別的価値観の発信源は、その聖教教会と国なのだから。デビッド達が愛子と関わるようになって、それなりに柔軟な思考が出来るようになったといつても、ほんの数ヶ月程度変わる程、根の浅い価値観ではないのである。

「デビッドさん！」

「だが、愛子。教会から聞いているだろうコイツらは亜人なんだ」

先生が反論しようとするが、その前にシヨウが口を開く

「くだらない」

「なに？」

デビッドは眉を寄せて反応する

「亜人だの人間だのくだらないってんだ。おっさんの汚い面のほうが非常識だわ」

「貴様！神殿騎士にたてつくのか!？」

デビッドを、副隊長のチエイイスは諫めようとするが、それよりも早く、ユエの言葉が騒然とする場にやけに明瞭に響き渡った

「……………小さい男。絶対モテない（笑）」

とユエは嗤った。もちろん、デビットは完全にキレた

「……………異教徒め、なら今ここで『頭を垂れて這いつくばえ、平服せよ』ッ!!」

いつもの『言霊魔法』で、殺戮待機ポーズ（シヨウ命名）にして黙らせる

「デ、デビットさん!？」

デビットの土下座姿に慌てる愛子先生後ろではクラスメート達が

「お、おい、今のって」

「ああ、檜山にも使った何かだ」

「しかも前より強くなってるやない?」

「もしかしてアシストって人もアレで……………」

「何!ならここで助けたら俺達……………」

とアホな妄想を吐いてたので無視した。

「シア。『外』ではこれが当たり前なんだ。いちいち気にしていたら切りがないぞ」

「アレは『ブルック』が特殊だったからねー」

「はい、そうですね……………わかってはいるのですけど……………やっぱり、人間の方には、この耳は気持ち悪いのでしょうね」

自嘲気味に、自分のウサミミを手で撫でながら苦笑いをするシア。  
そんなシアに、ユエが真っ直ぐな瞳で慰めるように呟く

「まあ、そんなこともある。気にするなアイツらは洗脳じみた教育を受けてきたからそうなるだけだ」

とフオローするハジメ。

「そ、そうですねか?……………ハジメさんはどう思いますか?私のウサ耳?」

ハジメの言葉が慰めであると察して、少し嬉しそうなシアは、頬を染めながら上目遣いでハジメに尋ねる。ウサミミは、「聞きたいけど聞きたくない!」というようにペタリと垂れたまま、時々、ピコピコとハジメの方に耳を向けている。

「気味悪がつてたらいちいちモフモフしてない」

と誉めながらモフる

「ねー。とつても気持ちいいよね〜」

と、香織もモフる

「ん。触り心地はすごくいい」

さらにユエもモフる

「そ、そうですか!ならよかったですう!」

とウサミミをパタパタさせて喜ぶシアとそれを囲んでモフモフするハジメ達。たちまち、ラブコメ空間が展開され、空気中の成分が砂糖に変わる

「な、なんなんだあの甘い空気は……………」

「畜生、畜生!何で南雲ばかり!」

「しかもシヨウも、嫁さんとか爆ぜればいいのに」

「どうしてあいつらばかり」

と、嫉妬の怨嗟を放つ男子三人

「二」「ごちそう」さん「さま」さまですう」

「さ、今日はもう休んで明日頑張るぞ」

「だな」

「だね」

「はい」

「んっ」

「です」

と二階に向かおうとする一同

「ちよっと、南雲君!」

ハジメ達を止めようとする先生だが、『絶対的主人公』と『威圧』で

圧倒的なプレッシャーを放つハジメ。そして、自分の立ち位置と愛子達に求める立ち位置を明確に宣言する。

「俺はお前らに関わってほしいとも関わりたいとも思わない。俺達の邪魔をするなら殺す。例えば相手がクラスメートであってもな」

そう言い残して二階へと消えて行つた。

残された愛子達の間には、何とも言えない微妙な空気が流れる。

片方は死んだと思つていたクラスメイトが生きていたのは嬉しい。だが、当の本人は、自分達の事などまるで眼中になかった。しかも、以前とは比べ物にならないほど強者となつており、「無能」と呼んで蔑んでいた頃のように上から目線で話すなど出来そうもない。

もう片方は、ハジメの為なら人殺しを躊躇わない殺人者。しかも自ら無能を演じていた為、格下と思つて見下してたのが本来は足元にも及ばないと言う信じられない事実。

二つの出来事に考えさせられる中

「南雲……………生きてたんだ……………お礼、言えなかったな……………」

小さな部屋に呟かれた言葉に一同は顔を見合せた。ハジメや香織の変貌や、シヨウの殺人や謎の力など、そこに感心を向ける前に、自分達にはするべき事があつたのでは無いか……………優花の様にハジメに直接救われて無くても、あの時二人はクラスメートの為にベヒモスと真つ正面から立ち向かつたのは事実だ。

「南雲君……………」

一同は「ハジメが生きてる」事に深く考えさせられたのだった

## 伝えたい事、伝えておきたい事

夜中。深夜を周り、一日の活動とその後の予想外の展開に精神的にも肉体的にも疲れ果て、誰もが眠りついた頃、しかし、愛子は未だ寝付けずにいた。愛子の部屋は一人部屋で、それほど大きくはない。木製の猫脚ベッドとテーブルセット、それに小さな暖炉があり、その前には革張りのソファアが置かれている。冬場には、きつと揺らめく炎が部屋を照らし、視覚的にも体感的にも宿泊客を暖めてくれるのだろう。

愛子は、今日の出来事に思いを馳せ、ソファアに寝っ転がりながら三人の名前を呟く

「……………南雲君。蒼君。白崎さん」

「おう」

「ッ!」

ギョツとして声が出た方へ振り向く愛子。そこには、入口の扉にもたれながら腕を組んで立つハジメの姿があつた。驚愕のあまり舌がもつれながらも何とか言葉を発する愛子。

「ど、どうしてハジメ!」

「まあ、色々とな。それより話があつてな」

と話ながら扉を閉じて、先生の目の前に座る

「話……………ですか?」

「ああ。今から俺が話す事は世界を敵に回す様な物でな。だが、それを聞いてどうするかは先生に任せる」

そう言つてハジメは、オスカーから聞いた『解放者』と狂った神の遊戯の物語を話し始めた。

ハジメが、愛子にこの話をしようと思ったのは、もちろん理由がある。神の意思に従って、勇者である光輝達が盤上で踊ったとしても、彼等の意図した通り神々が元の世界に帰してくれるとは思えなかった。魔族から人間族を救う、すなわち起こるであろう戦争に勝利したとしても、それはそもそも神々が裏で糸を引いている結果だ。勇者などと言う面白い駒をそうそう手放す訳が無い。むしろ、勇者達を利用して新たなゲームを始めると考えた方が妥当である。

ただ、ハジメとしては、その事を、わざわざ光輝達を捜し出して伝えるつもりはなかった。クラスメイトの行く末には興味がなかったし、単純に面倒だったからだ。それに、仮に伝えたとしても、あの正義感と思い込みの塊のような男が、ハジメの言葉を信じるとは思えなかった。

たった一人の、しかも変貌した少年の言葉と、大多数の救いを求める声、どちらを信じるかなど考えるまでもない。むしろ、大勢の人たちが信じ、崇める「エヒト様」を愚弄したとして非難されるのがオチだろう。そう言う意味からも、ハジメは光輝に関わるつもりは毛頭なかったのである。

だが、偶然に偶然が重なって、何の因果か愛子と再会することになった。ハジメは、知っている。愛子の行動原理が常に生徒を中心にしていることを。つまり、異世界の事情に関わらず、生徒のために冷静な判断ができるということだ。そして、日本での慕われ具合と、今日のクラスメイト達の態度から、愛子が話したのなら、きっと彼女の言葉は光輝達にも影響を与えるだろう、とハジメは考えた。

その結果、彼等の行動にどのような影響が出るのかはわからない。だが、この情報により、光輝達が神々の意図するところとは異なる動きをすれば、それだけ神の光輝達への注意が増すはずだ。ハジメは、大迷宮を攻略する旅中で自分が酷く目立つ存在になると推測してお

り、最終的には神々から何らかの干渉を受ける可能性を考えている。なので、間接的に信頼のある人物から情報を伝えてもらうことで、光輝達の行動を乱し、神から受ける注目を遅らせる、ないし分散させることを意図したのである。

また、神に継る以外で、更にハジメとも異なる帰還方法を探っていくのではという意図も僅かにある。更に言えば、かつて「解放者」がされたように、本来味方であるはずの人々を操り敵対させるという方法を光輝達で再現されないように、神への不信感を植えつけることで楔を打っておくという意図もある。

もつとも、この考えは偶然愛子に再会したことからの単なる思いつきであり、ハジメ自身大して期待していない。ハジメとしては、クラスメイト達に対して恨みも憎しみもない。ただ、ひたすらに無関心である。利用できればそうするし、役に立ちそうになれば放置である。今回は、たまたま利用できそうなので情報を開示したに過ぎない。

ハジメから、この世界の真実を聞かされ呆然とする愛子。どう受け止めていいかわからないようだ。情報を咀嚼し、自らの考えを持つに至るには、まだ時間が掛かりそうである。

「話は以上だ、後は先生に任せる。信じて教会に反抗するのも、戯れ言と切り捨てるのも自由だ」

「で、では南雲君はそれをどうにかするため？」

「なわけねえだろ。俺は帰る、香織やユエ。後シアも一緒にな。そつちの件はショウとアシストで叩くらしいが」

「そ、そうですか……………」

「あ！まって下さい！白崎さんに伝えてほしい事が！」

「何だ？」

「八重樫さんは、まだ二人が生きてると信じて探していました」



「……………わかった伝えとこう」

と俺は答え、ドアから立ち去ろうとすると

「きゃー！」

「ん？」

ドアに何かがぶつかり、覗いて見ると

「あたたあ……………」

尻餅をついて、額に手を当てる少女——園部優花がいた

---

——約一時間前——

「はあ……………お礼、言えなかつたなー」

と気分転換に部屋を出て、廊下の窓から夜空を見上げ呟く優花

「ハジメにお礼を言いたいのかい？」

「うん——え？」

驚いて、自分に質問した声の方を向くとソコには何故かパーカー付きのモコモコパジャマで肩に顔を置くという、闇の仕草をしていたシヨウがいた。

優花はすぐに距離を取り、構えようとするが

「おっと、俺に敵意は無いよ。それより、ハジメにお礼が言いたいんだろ？アイツなら今、先生の部屋だぜ」

と両手を上げ、情報を伝える

「……………何でそれを私に？」

「ただの気紛れだよ。それと、ドア待ちの方が確率は上がる」

「……………そう、わかった」

「じゃ、俺はこれで。」

そう言つて立ち去ろうとしたが

「それよりさ……………何でモコモコなの？」

「まあ、そこツツコムわな」と思いながら振り向いて

「俺と嫁のお気にだ。しかもペアルック」

と、ドヤつて答えると「そう……………」とだけ返して、先生の部屋に向かつて行つた……………

「種は撒いた。後はこれがどう育つかだな」

と呟いた言葉と小さな笑みは闇へと消えてつた……………

---

「ここね……………」

園部は先生の部屋の前に立つてハジメを待とうとするが、そこでフと気づく。

ハジメは何故先生の部屋にいるのか。夜這いと言う言葉が一瞬よぎつたが、振り払う様に頭を振り、戸に耳を当てる。

「この世界は神のゲーム盤に過ぎない」  
「!？」

聞こえて来たのは、予想外の言葉。そして、世界の真実だった。園部は聞き耳を立てながら戦慄していた。

「話は以上だ、後は先生に任せる。信じて教会に反抗するのも、戯れ言と切り捨てるのも自由だ」

「で、では南雲君はそれをどうにかするため？」

「なわけねえだろ。俺は帰る、香織やユエ。後シアも一緒にな。そつちの件はショウとアシストで叩くらしいが」

「そ、そうですか……………」

「あ！まって下さい！白崎さんに伝えてほしい事が！」  
「何だ？」

「八重樫さんは、まだ二人が生きてると信じて探していました」  
「……………わかった伝えよう」

そして、ドアが開き

「きゃー！」

「ん？」

「あたたあ……………」

そして、現在に至る

---

「…………で、お前はこんなところで何をしているんだ？」

声をかけられ、我にとって気まずそうな表情をしながら立ち上がり

「な、南雲、今の話って……………」

「本当だ。…………それだけか？」

「いや、あんたにどうしても言いたかったことがあるのよ」

青白い表情をどうにか取り繕うと園部は真剣な眼差しをハジメに向けて、あの時言えなかったな言葉を伝える

「南雲、ありがとう。あの時、私の事を助けてくれて」

「助けた？俺が？」

「うん。覚えてる？トラウムソルジャーに殺されそうになっていた私を助けてくれたじゃない。本当は帰ってから改めてお礼を言うつもりだったのにあんな事になっちゃったから……………」

「…………ああ、あの時か。そんなときは『俺』になる前の俺は必死だから覚えてなかった」

「別に良いのよ。これは私の自己満足だから。どうしてもお礼を言いたかった、それだけよ」

「…………悪いな。だが、ありがとよ。俺としては嬉しかった。シヨウと先生以外で俺の死を悲しんでくれた奴がいてくれたことはな。……………」

俺の方こそ礼を言わないといけないな」

俺は園部に背を向けながら続ける。

「俺はもう戻れないし、戻るつもりもない。俺はアイツがいる限り止まれないし、止まらない。……だが、感謝していることは確かだ。俺にとつて、その言葉は救いになった。何かあつたら遠慮なく頼れ。もしもの時に助ける程度の事はしてやる」

園部の返答を聞かずに俺はその場を後にする。

「……………南雲の女つたらし。落としにかかつてんのよ？」

割りとは早く見つかった

明朝。ハジメ達六人は旅支度を終えて北門へと向かう。北門へ到着すると、門の傍に複数の気配——畑山と生徒六人の姿だった

「……………一応聴こうか。なにしてんだ？先生」

「私達も行きます。行方不明者の搜索ですよ？人数は多いほうがいいです」

「却下よ。一緒に行つて私達に何のメリットがあるの？」

「その様子から見ると、先生達の移動は馬だろ？単純に足の速さが違う。先生達に合わせてチンタラ進んでなんていられないんだ」

「はつきり言つて、足手まといを越えてお邪魔虫」

ハジメ達は、「こいつら乗馬出来るの？」と真つ先に疑問が思い浮かんだが、至極どうでもいいのでスルーする事にした。そんな二人の様子にカチンと来たのか、園部が強気で食つて掛かる

「ちよつと、そんな言い方ないでしょ？蒼が私達の事をよく思つてないからつて、愛ちゃん先生にまで当たらないでよ」

ハジメはため息を吐いて、宝物庫から魔力駆動二輪（サイドカー付き）を取り出し、シヨウは『デイスティバートフォーム』に変身する。突然、何もない所から大型のバイクが出現したり、SFアニメみたいに変身したりでギョツとなる畑山達

「理解したか？お前等の事は昨日も言ったが心底どうでもいい。だから、八つ当たりをする理由もない。そのままの意味で、移動速度が違うと言っているんだ」

マジマジと魔力駆動二輪を見ている畑山達の中の一人、バイク好きの相川が若干興奮したようにハジメに尋ねる

「こゝ、これも銃みたいになんか作ったのか？」

「ああ、シヨウの翼もな。それじゃ俺等は行くから、そこどいてくれ」

しかし、畑山はそれでもハジメに食い下がる。理由は色々であるが、一番の理由は現在失踪中の清水という生徒の安否だ

「南雲君、蒼君、白崎さん、先生は先生として、どうしても二人からもつと詳しい話を聞かなければなりません。だから、きちんと話す時間を貰えるまでは離れませんし、逃げれば追いかけます。二人にとって、それは面倒なことではないですか？移動時間とか搜索の合間の時間で構いませんから、時間を貰えませんか？ そうすれば、二人の言う通り、この町でお別れできますよ・・・一先ずは」

「・・・本当に先生って教師なんだな」

ハジメは尚も食い下がる畑山の視線から逃れる様に空を見上げると、徐々に明るくなってきていた。これ以上の門答は時間の無駄だと判断して、諦めて畑山に向き直る

「わかったよ。同行を許そう。といっても話せることなんて殆どないけどな・・・」

「構いません。ちゃんと二人の口から聞いておきたいだけですから」

「はあ、全く、先生はブレないな。何処でも何があっても先生か」  
「当然です！」

ハジメが折れたことに喜色を浮かべ、むんつ！と胸を張る畑山。どうやら交渉が上手くいったようだ、生徒達もホッとした様子だ

「・・・ハジメ、連れて行くの？」

「ああ、この人は、どこまでも”教師”なんだな。生徒の事に関しては妥協しねえだろ。放置しておく方が、後で絶対面倒になる」

「ほえ、生徒さん想いのいい先生なのですなえ」

ハジメが折れた事に驚くユエとシア

「でも、このバイクじゃ全員は乗れないでしょ？どうするの？」

園部がもつともな事実を口にする。しかし、ハジメは慌てる様子無く魔力駆動二輪一台を収納して魔力駆動四輪を取り出す

「それじゃあ、さっさと行くぞ。乗れない奴は荷台な」

呆然とする畑山達を傍目にして、そそくさと運転席に移動するハジメ。助手席には香織とユエ、後部座席にシアと畑山達女性陣で、男子は大人しく荷台へと座り、俺とアシストは自分で飛んで出発した。

前方に山脈地帯を見据えて真っ直ぐに伸びた道を、ハマーに似た魔力駆動四輪と蒼夫婦が爆走する。香織とユエとシアは女性陣同士でハジメの関係性について根掘り葉掘り聞かれたり、アシストは俺との関係を聞かれている。

「え？何でハーレムを容認しているか？」

「うん。長年南雲に片思いだったのに、何で認めたのか気になって！」  
ハジメのハーレムについて物凄く気になる男子達も聞き耳を立てる

「それなんだけどね〜ハツくん今モチ期でね。それに私一人じゃハツくん能耐えられなかったからよ」

「何があったの？」

「ハツくんのハツくんが化け物って事よ。いや、むしろ魔王ね。この呼び方もハツくんに沢山やられて一回壊れてからね〜」

「す、凄いわね……………南雲……………」

「一回壊れたって……………」

「皆さん!？」

「生々しすぎんだろっ！」





派生魔法」「＋派生魔法一覧：融合：構築：蘇生：捕食：浮力：時間：力：言霊：植物：分離」・戦闘術「＋我流流派」「＋唯我独尊」「＋透き通る世界」「＋超越者」・武器召喚「＋瞬間装備」「＋武器保管」「＋装備一式召喚」・地拳「＋豪腕」「＋金剛」「＋一拳」「＋飛撃」「＋五指強化」「＋無我」・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋爆縮地」「＋重縮地」「＋無拍子」「＋震脚」「＋豪脚」「＋破踏」「＋真速」「＋瞬光」「＋革新者」・演算領域「＋未来予測」「＋平行思考」「＋空間認識」・魔力変換「＋衝撃変換」「＋治癒力」「＋体力」「＋反魔力」・気配操作「＋幻踏」・全事象把握「＋魔力探知」「＋気配探知」「＋魂魄探知」「＋悪意探知」「＋熱源探知」「＋ベクトル探知」「＋特定関知」・限界突破「＋持続時間上昇」「＋戦鬼」「＋霸潰」「＋フイバー」・成長促進「＋技能習得」・家庭術「＋料理」「＋掃除」「＋洗濯」「＋修理」「＋時短術」「＋家庭の知恵」・アシスト「＋特定念話」「＋思考共有」「＋ステータス共通」「＋技能共有」「＋お楽しみ(意味深)」・偽装「＋外見変化」「＋力量操作」「＋光学迷彩」「＋隠業」「＋証拠隠滅」・作者使役・神代魔法「＋概念魔法」・言語理解「＋念話」

・もう全部コイツ一人でいいんじゃないかな？

|||||

「|||||……なにこれ？」

と疑問の眼で問いかけられたが、俺は笑って

「自分でもわからない事だらけだ。まあ、問題ない。俺がハジメの執事で有る限りな」

と、豪快に答えた

---

珍事もあったがハジメ達は、麓に四輪を止て、四輪を宝物庫にしま

い込んで千機の鳥型の模型を取り出した。それをシヨウに渡し、次々と空へ放つて行く

「あの、あれは・・・」

「無人偵察機よ。現代風に言うならドローンが良いわね」

「処理能力は俺よりもシヨウの方が良いから多く操れるんだよ」

と、シヨウの方を向くとシヨウの目が虹色に輝く。これは『革新者』の効果の副作用的な物だが、先生達からしたら未知との遭遇みたいな感じになっていたが…………

それはさておき。ハジメ達は、冒険者達も通ったであろう山道を進む。魔物の目撃情報があった山道の中腹より少し上、六合目から七号目の辺りをドローンを先行させて重点的に搜索する。ハジメ達は念の為に先頭を、シヨウ達は一番奥という感じで手分けをして探しながら尋常じゃない早さで山道を進んだ

約一時間程で六合目に到着したハジメ達は、一度そこで立ち止まった。理由は、そろそろ辺りに痕跡がないか調べる。そしてもう一つは…………

「はあはあ、きゅ、休憩ですか・・・けほっ、はあはあ」

「ぜえー、ぜえー、大丈夫ですか・・・愛ちゃん先生、ぜえーぜえー」

「うえつぶ、もう休んでいいのか？はあはあ、いいよな？休むぞ？」

「・・・ひゅうーひゅうー」

「ゲホゲホ、南雲達は化け物か・・・」

先生達の休憩の為だ。彼らがこの世界の一般人と比較すると、普通であればこの程度では息切れはしない。だが、ハジメ達の進行速度が予想以上に早かった為に、気がつけば体力を消耗しきってフラフラになっっていたのである。

一応、ついてきてもらう為に、アシストがバフをかけていたが。ま

あ、元々の差が理由だろう。

四つん這いで息を整えている彼等を放置して、周辺状況を確認をするハジメとシヨウと香織とアシスト。ユエとシアは、近くに流れている小川で軽く休憩を取っている。素足になってパチャパチャと遊んでいる。各自水分補給をすませ、先に進む。上流にたどり着くと

「これは・・・砕けた盾に鞆かしら？しかも、真新しいわね」

「当たり前だ」

「ああ」

一行はその場の物を集めていると、遺留品と思われるロケットペンダントが見つかった。

「遺留品で間違いないが、肝心の死体が見付からないって事は・・・生きている可能性は少なからずあるって事か」

「魔物との戦闘跡からして上流か下流に沿って移動したのかな？」

「体力や精神面から予想すると、下流の方ですかね？」

ハジメ達はドロロンを上流へと飛ばして、下流へと降りて行く。すると、大きな滝を発見した瞬間にアシストが反応した

「この滝壺の奥に気配がある。一人だけだけど」

滝横の崖を急いで降りて、シヨウに一言掛ける

「シヨウ、ユエ、頼む」

「了解」

「……………ん。『風壁』」

そう言つてファンングを振るうと滝と滝壺の水が、紅海におけるモーセの伝説のように真つ二つに割れ始め、更に、飛び散る水滴は風の壁によって完璧に払われた。ユエの魔力を無駄に消費させる訳にはいかないのです、呆然としている畑山達を促して中へ入り奥へ続く道を進んで行くと、横倒しになっている男を発見した

寝ているのか、ハジメ達が近づいても気付く様子がない。さつさと確認を取る為、ハジメは男の額にデコピンをしようとしたが、シヨウがそれを止め、回復魔法をかける

「んん……んあああ……」

回復魔法で意識を取り戻した男性。ハジメは、そんな事を気にせず近づいて尋ねる

「お前が、ウィル・クデタか？」

「いっつ、えっ、君達は一体、どうしてここに……」

「質問に答えろ」

「えっ、えっ!？」

「お前は、ウィル・クデタか？」

「えっと、うわっ、はい！そうです！私がウィル・クデタです！はい！」

どうやら、ハジメ達が探している張本人で間違いないようだ

「そうか。俺はハジメだ。南雲ハジメ。フューレンのギルド支部長イルワ・チャングからの依頼で捜索に来た。(俺の都合上)生きていてよかった」

「イルワさんが!？そうですか。あの人……また借りができてしまったようだ……あの、あなたも有難うございます。イルワさんから依頼を受けるなんてよほどの凄腕なのですね」

寝惚けも覚めたのか、ハキハキと答えるウィルに何があったのかを要約して聞き出す

彼等は五日前にハジメ達と同じ様に山道に入って、中腹辺りでブルータルというオークの様な魔物と遭遇して戦闘。倒しても倒しても増え続けるブルタルの群れ。包囲網を突破する際に二人の冒険者が犠牲になり、森を抜けた先に黒い竜が居たとの事。開幕早々のドラゴンブレスで一人が消されて、ウィルは川へと吹っ飛ばされた。残っ

た二人の冒険者は、挟撃される形で亡くなった。一人残されたウィルは、流されるままこの滝まで下り、この滝壺の奥へと身を隠したのだという

「わ、わだじはさいでいだ。うう、みんなじんでしまったのに、何のやぐにもただない、ひつく、わたじだけ生き残つて……それを、ぐす……よろこんでる……わたじはっ！」

誰も何も言えなかった。顔をぐしゃぐしゃにして、自分を責めるウィルにどう声をかければいいのか見当がつかなかった。生徒達は悲痛そうな表情でウィルを見つめ、先生はウィルの背中を優しくさする。ユエは何時もの無表情、シアは困ったような表情だ。だが、ここで意外な——ハジメが動いた

「生きたいと願うことの何が悪い？生き残ったことを喜んで何が悪い？その願いも感情も当然にして自然にして必然だ。お前は人間として、極めて正しい」

「だ、だが……私は……」

「それでも、死んだ奴らの事が気になるなら……生き続ける。これから先も足掻いて足掻いて死ぬ気で生き続ける。そうすりゃ、いつかは……今日、生き残った意味があったって、そう思える日が来るだろう」

「……生き続ける」

「誰しもが生きたいと思うのは当たり前前の事だ。死んだら最後——  
——生きて欲しいと願っている人達も傷つくぞ」

「そう……ですよね……」

ハジメは、ウィルの自らの生を卑下した言葉が、まるで「お前が生き残ったのは間違いだ」と言われているような気がして、つい熱くなってしまった。ハジメの心情に気付いた香織は

「大丈夫。ハックんの言った事は間違つて無いよ」

「香織……」

「生きて……最後まで……」

「……ああ。絶対にお前を一人にはしない」

少しばかり暗い雰囲気と桃色の甘い空気が漂うが、ずっと静観する訳にもいけないので早々に下山する事にした。ユエが再び魔法で滝壺から出ると、一行を熱烈に歓迎するものが居た

「グウルルルル」

漆黒の鱗で全身を覆い、翼をはためかせながら空中より金の眼で見つめる竜だった

ハジメ！ボルメテウス作ろうぜ！

「ハジメ！あれでボルメテウス作りたいいけどいいかな?」

とシヨウは興奮しながら指を指し、ハジメに問う。その竜の体長は七メートル程。漆黒の鱗に全身を覆われ、長い前足には五本の鋭い爪がある。背中からは大きな翼が生えており、薄らと輝いて見えることから魔力で纏われているようだ。

空中で翼をはためかせる度に、翼の大きさからは考えられない程の風が渦巻く。だが、何より印象的なのは、夜闇に浮かぶ月の如き黄金の瞳だろう。爬虫類らしく縦に割れた瞳孔は、剣呑に細められていながら、なお美しさを感じさせる光を放っている。

その黄金の瞳が、空中よりハジメ達を睥睨していた。低い唸り声が、黒竜の喉から漏れ出している。

その圧倒的な迫力は、かつてライセン大峡谷の谷底で見たハイベリアの比ではない。ハイベリアも、一般的な認識では、厄介なことこの上ない高レベルの魔物であるが、目の前の黒竜に比べれば、まるで小鳥だ。その偉容は、まさに空の王者というに相応しい。

蛇に睨まれた蛙のごとく、愛子達は硬直してしまっている。特に、ウィルは真っ青な顔でガタガタと震えて今にも崩れ落ちそうだ。脳裏に、襲われた時の事がフラッシュバックしているのだろう。

ハジメも、川に一撃で支流を作ったという黒竜の残した爪痕を見ているので、それなりに強力な魔物だろうとは思っていたが、実際に目の前の黒竜から感じる魔力や威圧感は、想像の三段は上を行くと認識を改めた。奈落の魔物で言えば、ヒュドラには遠く及ばないが、九十





ズブリと音を立てて勢いよく突き刺さった。と、その瞬間、

〈アツーーーーーなのじゃああああーーーーー!!!〉

くわつと目を見開いた黒竜が悲痛な絶叫を上げて目を覚ました。本当なら、半分ほどめり込んだ杭に、更に鉄拳をかましてぶち抜いてやろうと考えていたハジメだが、明らかに黒竜が発したと思われる悲鳴に、流石に驚愕し、思わず握った拳を解いてしまった。

〈お尻があゝ、妻のお尻があゝ〉

黒竜の悲しげで、切なげで、それでいて何処か興奮したような声音に全員が「一体何事!？」と度肝を抜かれ、黒竜を凝視したまま硬直する。

どうやら、ただの竜退治とはいかないようだった。

この黒竜は『竜人』らしく、こいつから語られる話はこうだ

異世界から来た人間達について調べる事だった。もしも、里に危害を及ぼす存在ならどうするべきか——話し合いの結果、調査する事が決定したらしい。山脈を超えて人化してからの情報収集を行おうとしたが、体調を万全に期する為にも休憩を挟む事にしたので、黒竜状態で睡眠していたという事だ。すると、睡眠状態に入った黒竜の前に一人の黒いローブを頭からすっぽりと被った男が現れて眠る黒竜に洗脳や暗示などの闇系魔法を多用して徐々にその思考と精神を蝕んでいった

普通ならそこで起きる筈なのだが、ここで竜人族の悪癖が出たの

だ。例の諺の元にもなったように、竜化して睡眠状態に入った竜人族は、まず起きない。それこそ尻を蹴り飛ばされでもしない限りだ。竜人族は精神力においても強靱なタフネスを誇るので、そう簡単に操られたりはしないのだが、何故、ああも完璧に操られたのか。それは

〈恐ろしい男じゃった。闇系統の魔法に関しては天才と言っているいいレベルじゃろうな。そんな男に丸一日かけて間断なく魔法を行使されたのじゃ。いくら妾と言えど、流石に耐えられんかった……〉

「……それってつまり、魔法をかけられても気付かないぐらい爆睡していたって事？」

黒竜は明後日の方向を向き、何事もなかったように話を続けた。何故丸一日かけたと知っているのかというと、洗脳が完了した後も意識自体はあるし記憶も残るところ、本人が「丸一日もかかるなんて……」と愚痴を零していたのを聞いていたからだ

その後は、ローブの男に従って魔物の洗脳のお手伝い。そして、ある日、洗脳をしたブルタールの魔物を移動させていた際に山に調査依頼で訪れていたウィル達と遭遇したのだ。目撃者は消せとの命令を受けていた為に追いかけていたのだ。で、気がつけばハジメ達にフルボッコにされており、ハジメの頭部への攻撃で意識を失い、尻に名状し難い衝撃と刺激が走って一気に意識が覚醒したのである

「……ふざけるな」

説明をし終えた黒竜に向けて、激情を押し殺した様な震える声——  
——ウィルが発した声だった

「……………操られていたから……ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんをクルトさんを！殺したのは仕方ないとも言おうつもりかっ！」

〈……………〉

「大体、今の話だって、本当かどうかなんてわからないだろう！大方、

死にたくなくて適当にでっち上げたに決まってる！」

「……………今話したのは真実じゃ。竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない」

言い募ろうとするウイルに、ユエが口を挟む

「……………きつと、嘘じゃない」

「ああ、そうだ。」

「っ、一体何の根拠があつてそんな事を……………」

「……………竜人族は高潔で清廉。私は皆よりずっと昔を生きた。竜人族の伝説も、より身近なもの。彼女は”己の誇りにかけて”と言つた。なら、きつと嘘じゃない。それに……………嘘つきの目がどういふものか私はよく知っている」

「俺は魂そのものを覗いた。コイツの話しには嘘は無い」

『ふむ、後者は後で聴くとして、この時代にも竜人族のあり方を知るものが未だいたとは……………いや、昔と言つたかの?』

「……………ん。私は、吸血鬼族の生き残り。三百年前は、よく王族のあり方の見本に竜人族の話を聞かされた」

『何と、吸血鬼族の……………しかも三百年とは……………なるほど死んだと聞いていたが、主がかつての吸血姫か。確か名は……………』

ユエから明かされる自分の種族に畑山や生徒やウイルは驚いていた

「ユエ……………それが私の名前。大切な人達に貰つた大切な名前。そう呼んで欲しい」

ユエの竜人族に向ける言葉の端々に敬意が含まれている。ウイルの罵倒を止めたのも、その辺りの心情が絡んでいるのかもしれない

だが、それでも親切にしてくれた先輩冒険者達の無念を思い言葉を零してしまう

「……………それでも、殺した事に変わりないじゃないですか……………どうしようもなかったってわかつてはいますけど……………それでもっ！ゲイル

さんは、この仕事が終わったらプロポーズするんだって・・・彼らの無念はどうすれば・・・」

頭では黒竜の言葉が嘘でないと分かっている。しかし、だからと言って責めずにはいられないし、心が納得しないのだ

するとハジメはため息を吐き、シヨウの方を向き

「シヨウ。少し無茶な「いいよー」……………まだ何も言っただけよ」

「でも、やってほしい事とそのメリットは分かるよ。それに俺はハジメの執事だ」

と告げ、シヨウは新たなる札を切る。

「フォームチェンジャー」が通過するとソコには白衣の様に長い黒パーカーに、右目には青い光が炎の様に揺らめき、左手を丸々覆う様なガントレット。それでは皆様。お祝い下さい我が新フォーム

「祝えー邪神を駆逐し、ハジメ等を故郷へ導く我らがメシア！その名もアオイ シヨウ マッドハックサイコ！狂侵精神の救世主がこの地に降り立った瞬間です！」

「いや、単語からしてもはや救世主とは言えないだろ」

ハジメのツツコミはスルーで、シヨウは作業を始める。

「あー、魂抜けてるな。じゃあ術式はこうしてあーして……………」

シヨウは完全集中でガントレットの指先から延びる。光の線や工具らしき物が術式を構築し、行使する。

『逆時魔送』『保魂』＋『秘匿』からの『絶象』あと」

ーアシスト解説ー

ー了解。皆様、現在シヨウが行っている事は簡単に言うとな過去の改変と蘇生になります。こちらの方法はまあ、矛盾が起きない程度に過

去を変えるため、魂魄を保管し秘匿。そのまま肉体を再生して復活させたのです――

と感じて蘇生された冒険者の皆さん。ウイルや先生達。黒竜の開いた口が塞がらない。

「ななななな南雲君?! あ、ああああ蒼君は一体何を?!」

「ん? 過去を変えたんじゃないかねえか?」

へそ、そんなことあるわけが――」

「ありえるのよ、うちの執事は。蒼くんには常識も限界も無いんだよねえ」

『ええ……………』

と香織の言葉に驚きを通り越して、呆れる一同と蘇生されて驚くゲイルさん達。

取りあえず事情を簡潔に説明して、ウイル達は黒竜の謝罪受け入れたのだった

願

「操られていたとはいえ、ましてや蘇生されたとしても。妾が罪なき人々の尊き命を摘み取ってしまったのは事実。償えというなら、大人しく裁きを受けよう。だが、それには今しばらく猶予をくれまいか。せめて、あの危険な男を止めるまで。あの男は、魔物の大群を作ろうとしておる。竜人族は大陸の運命に干渉せぬと掟を立てたが、今回は妾の責任もある。放置はできないのじゃ……勝手は重々承知しておる。だが、どうかこの場は見逃してくれんか」

と、黒竜は頭を下げ。懇願するがそのハジメの答えは、

「いや、お前の都合なんざ知ったことじゃないし。散々面倒かけてくれたんだ。詫びとして死ぬ」

そう言つて義手の拳を振りかぶった。

「待つつのじゃー！ お、お主、今の話の流れで問答無用に止めを刺すとかないじゃろ！ 頼む！ 詫びなら必ずする！ 事が終われば好きにしてくれて構わん！ だから、今しばらくの猶予を！ 後生じゃー！」

「殺しちゃうの？」

「え？ いや、そりゃあ殺し合いしたわけだし……」

「でも敵じゃない。殺意も悪意も、一度も向けなかった。それに、俺のお願いを忘れた？」

『敵意や悪意を向ける者をいくら殺してもかまわない。けど、善意や好意を向けてくれる人には優しくしてやってくれ』これはハジメが元の世界に帰って来てても人でいられる様に言ったショウの願いだ。この黒竜は操られてただけで敵でも何でも無い。だから、ハジメには殺してほしく無い。……ボルメテウスが作れないのは残念だけど。

結局ユエとショウにより救われた。が、ここで事態が急変する。黒竜の魔力が限界に近づいていて、このままだとパイルバンカーが刺

さったまま人間に戻ってしまおう！

「流石にそれはアカン！そんな方法で人殺したら間違ひなく黒歴史やんけ」

シヨウは、急いで手で黒竜の尻に刺さっている杭に手をかけた。そして、力を込めて引き抜いていく。

へはああん！ ゆ、ゆつくり頼むのじゃ。まだ慣れておらつあふううん。やつ、激しいのじゃ！ こんな、ああんっ！ きちやうう、何かきちやうのじゃ〜

「シヨウラー……！」

——スポーン！

と言う音と共に黒竜は新たな扉を開いた

へあひい……！！ す、すごいのじゃ……優しくつてお願いしたのに、容赦のかけらもなかったのじゃ……こんなの初めて……

そんな訳のわからないことを呟く黒竜は、直後、その体を黒色の魔力で繭のように包み完全に体を覆うと、その大きさをスルスルと小さくしていく。そして、ちようど人が一人入るくらいの大きさになると、一気に魔力が霧散した。

黒き魔力が晴れたその場には、両足を揃えて崩れ落ち、片手で体を支えながら、もう片手でお尻を押さえて、うっとり頬を染める黒髪金眼の美女がいた。

見た目は二十代前半くらいで、身長は百七十センチ近くあるだろう。

「ゴホン、面倒をかけた。本当に、申し訳ない。妾の名はティオ・クラルス。最後の竜人族クラルス族の一人じゃ」

ティオ・クラルスと名乗った黒竜は、次いで、黒ローブの男が、魔物を洗脳して大群を作り出し町を襲う気であると語った。その数は、

既に三千から四千に届く程の数だという。何でも、二つ目の山脈の向こう側から、魔物の群れの主にのみ洗脳を施すことで、効率よく群れを配下に置いていたのか。

何でも黒ローブの男は、黒髪黒目の人間族で、まだ少年くらいの年齢だったというのだ。それに、黒竜たるテイオを配下にして浮かれていたのか、仕切りに「これで自分は勇者より上だ」等と口にし、随分と勇者に対して妬みがあるようだったという。

黒髪黒目の人間族の少年で、闇系統魔法に天賦の才がある者。ここまでヒントが出れば、流石に脳裏にとある人物が浮かび上がる。愛子達は一樣に「そんな、まさか……」と呟きながら困惑と疑惑が混ざった複雑な表情をした。限りなく黒に近いが、信じたくないと言ったところだろう。

と、そこでハジメが突如、遠くを見る目をして「おお、これはまた……」などと呟きを漏らした。

聞けば、テイオの話聞いてから、無人探査機を回して魔物の群れや黒ローブの男を探していたらしい。

そして、遂に無人探査機の一機がとある場所に集合する魔物の大群を発見した。その数は……

「こりゃあ、三、四千ってレベルじゃないぞ？　桁が一つ追加されるレベルだ」

「あの、ハジメ殿なら何とか出来るのでは……」

その言葉で、全員が一斉にハジメの方を見る。その瞳は、もしかしたらという期待の色に染まっていた。ハジメは、それらの視線を鬱陶しそうに手で振り払う素振りを見せると、投げやり気味に返答する。



「そんな目で見るとよ。俺の仕事は、ウイルスをフューレンまで連れて行く事なんだ。仮に殺るにしても、こんな起伏が激しい上に障害物だらけのところでは殲滅戦なんてやりにくくてしょうがない。いいからお前等も、さつさと町に戻って報告しとけって」

ハジメのやる気なげな態度に反感を覚えたような表情をする生徒達やウィル。そんな中、思いつめたような表情の愛子がハジメに問い掛けた。

「南雲君、黒いローブの男というのは見つかりませんか？」

「ん？ いや、さつきから群れをチェックしているんだが、それらしき人影はないな」

愛子は、ハジメの言葉に、また俯いてしまう。

「さつきも言ったが、俺の仕事はウィルの保護だ。保護対象連れて、大群と戦争なんかやってられない。真つ平御免被るよ。それに、仮に大群と戦う、あるいは黒ローブの正体を確かめるって事をするとして、じゃあ誰が町に報告するんだ？ 万一、俺達が全滅した場合、町は大群の不意打ちを食らうことになるんだぞ？ ちなみに、あの車は俺じゃないと動かせない構造だから、俺たちに戦わせて他の奴等が先に戻るとか無理だからな？」

「まあ、ご主じ……コホンツ、彼の言う通りじゃな。妾も魔力が枯渇している以上、何とかしたくても何もできん。まずは町に危急を知らせるのが最優先じゃろ。妾も一日あれば、だいぶ回復するはずじゃしの」

押し黙った一同へ、後押しするようにテイオが言葉を投げかける。若干、ハジメに対して変な呼び方をしそうになっていた気がするが……気のせいだろう。愛子も、確かに、それが最善だと清水への心配は一時的に押さえ込んで、まずは町への知らせと、今、傍にいる生徒達の安全の確保を優先することにした。

結局一行は、背後に大群という暗雲を背負い、急ぎウルの町に戻る。

ウルのとりに着くと、悠然と歩くハジメ達とは異なり愛子達は足をもつれさせる勢いで町長のいる場所へ駆けていった。ハジメとしては、愛子達とここで別れて、さつさとウイルを連れてフューレンに行つてしまおうと考えていたのだが、むしろ愛子達より先にウイルが飛び出していつてしまったため仕方なく後を追いかけた。

「おい、ウイル。勝手に突つ走るなよ。自分が保護対象だつて自覚してくれ。報告が済んだなら、さつさとフューレンに向かうぞ」

「な、何を言っているのですか？ ハジメ殿。今は、危急の時なのですよ？ まさか、この町を見捨てて行くつもりでは……」

信じられないと言つた表情でハジメに言い募るウイルにハジメは、やはり面倒そうな表情で軽く返す。

「見捨てるものにも、どの道、町は放棄して救援が来るまで避難するしかないだろ？ 観光の町の防備なんてたかが知れているんだから……どうせ避難するなら、目的地がフューレンでも別にいいだろうが。ちよつと、人より早く避難するだけの話だ」

「そ、それは……そうかもしれませんが……でも、こんな大変な時に、自分だけ先に逃げるなんて出来ません！ 私にも、手伝えることが何かあるはず。ハジメ殿も……」

「ハジメ殿も協力して下さい」そう続けようとしたウイルの言葉は、ハジメの冷めきつた眼差しと凍てついた言葉に遮られた。

「……はつきり言わないと分からないのか？ 俺の仕事はお前をフューレンに連れ帰ること。この町の事なんて知つたことじゃない。いいか？ お前の意見なんぞ聞いてないんだ。どうしても付いて来ないというなら……手足を砕いて引き摺つてでも連れて行く」

「なつ、そ、そんな……」

ハジメの醸し出す雰囲気から、その言葉が本気であると察したウィルが顔を青ざめさせて後退りする。その表情は信じられないといった様がありありと浮かんでいた。ウィルにとって、ゲイル達ベテラン冒険者を苦もなく全滅させた黒竜すら圧倒したハジメは、ちよつとしたヒーローのように見えていた。なので、容赦のない性格であつても、町の人々の危急とあれば、何だかんだで手助けをしてくれるものと無条件に信じていたのだ。なので、ハジメから投げつけられた冷たい言葉に、ウィルは裏切られたような気持ちになつたのである。

言葉を失い、ハジメから無意識に距離を取るウィルにハジメが決断を迫るように歩み寄ろうとする。一種異様な雰囲気、周囲の者達がウィルとハジメを交互に見ながら動けないでいると、ふとハジメの前に立ちふさがるように進み出た者がいた。

愛子だ。彼女は、決然とした表情でハジメを真っ直ぐな眼差しで見上げる。

「南雲君。君なら……君なら魔物の大群をどうにかできますか？ いえ……できませんよね？」

愛子は、どこか確信しているような声音で、ハジメなら魔物の大群をどうにかできる、すなわち、町を救うことができるかと断じた。その言葉に、周囲で様子を伺っている町の重鎮達が一斉に騒めく。

愛子達が報告した襲い来る脅威をそのまま信じるなら、敵は数万規模の魔物なのだ。それも、複数の山脈地帯を跨いで集められた。それは、もう戦争規模である。そして、一個人が戦争に及ぼせる影響など無いに等しい。それが常識だ。それを覆す非常識は、異世界から召喚された者達の中でも更に特別な者、そう勇者だけだ。それでも、本当の意味で一人では軍には勝てない。人間族を率いて仲間と共にあらねば、単純な物量にいずれ呑み込まれるだろう。なので、勇者ですらない目の前の少年が、この危急をどうにかできるといふ愛子の言葉

は、たとえ「豊穰の女神」の言葉であつてもにわかには信じられなかった。

ハジメは、愛子の強い眼差しを鬱陶しげに手で払う素振りを見せると、誤魔化すように否定する。

「いやいや、先生。無理に決まっているだろ？ 見た感じ四方は超えているんだぞ？ とてもとても……」

「でも、山にいた時、ウイルさんの南雲君なら何とかできるのではという質問に『できない』とは答えませんでした。それに『こんな起伏が激しい上に障害物だらけのところだで殲滅戦なんてやりにくくてしようがない』とも言っていましたよね？ それは平原なら殲滅戦が可能という事ですよね？ 違いますか？」

「……よく覚えてんな」

愛子の記憶力の良さに、下手なこと言っちゃまったと顔を歪めるハジメ。後悔先に立たずである。愛子は、顔を逸らしたハジメに更に真剣な表情のまま頼みを伝える。

「南雲君。どうか力を貸してもらえませんか？ このままでは、きっとこの美しい町が壊されるだけでなく、多くの人々の命が失われることになります」

「……意外だな。あんたは生徒の事が最優先なのだと思っていた。色々活動しているのも、それが結局、少しでも早く帰還できる可能性に繋がっているからじゃなかったのか？ なのに、見ず知らずの人々のために、その生徒に死地へ赴けと？ その意志もないの？ まるで、戦争に駆り立てる教会の連中みたいな考えだな？」

ハジメの揶揄するような言葉に、しかし、愛子は動じない。その表情は、ついさっきまでの悩みに沈んだ表情ではなく、決然とした「先生」の表情だった。近くで愛子とハジメの会話を聞いていたウルの町の教会司祭が、ハジメの言葉に含まれる教会を侮蔑するような言葉

に眉をひそめているのを尻目に、愛子はハジメに一步も引かない姿勢で向き直る。

「……元の世界に帰る方法があるなら、直ぐにでも生徒達を連れて帰りたい、その気持ちは今でも変わりません。でも、それは出来ないから……なら、今、この世界で生きている以上、この世界で出会い、言葉を交わし、笑顔を向け合った人々を、少なくとも出来る範囲では見捨てたくない。そう思うことは、人として当然のことだと思えます。もちろん、先生は先生ですから、いざという時の優先順位は変わりませんが……」

愛子が一つ一つ確かめるように言葉を紡いでいく。

「南雲君、あんなに穏やかだった君が、そんな風になるには、きっと想像を絶する経験をしてきたのだと思います。そこでは、誰かを慮る余裕などなかったのだと思います。君が一番苦しい時に傍にいて力になれなかった先生の言葉など……南雲君には軽いかもしれません。でも、どうか聞いて下さい」

ハジメは黙ったまま、先を促すように愛子を見つめ返す。

「南雲君。君は昨夜、絶対日本に帰ると言いましたよね？ では、南雲君、君は、日本に帰っても同じように大切な人達以外の一切を切り捨てて生きますか？ 君の邪魔をする者は皆排除しますか？ そんな生き方が日本で出来ますか？ 日本に帰った途端、生き方を変えられますか？ 先生が、生徒達に戦いへの積極性を持つて欲しくないのは、帰ったとき日本で元の生活に戻れるのか心配だからです。殺すことに、力を振るうことに慣れて欲しくないのです」

「……」

「南雲君、君には君の価値観があり、君の未来への選択は常に君自身に委ねられています。それに、先生が口を出して強制するようなことは

しません。ですが、君がどのような未来を選ぶにしろ、大切な人以外  
の一切を切り捨てるその生き方は……とても「寂しい事」だと、先生  
は思うのです。きっと、その生き方は、君にも君の大切な人にも幸せ  
をもたらさない。幸せを望むなら、出来る範囲でいいから……他者を  
思い遣る気持ちをお忘れしないで下さい。元々、君が持っていた大切に尊  
いそれを……捨てないで下さい」

一つ一つに思いを込めて紡がれた愛子の言葉が、向き合うハジメに  
余すことなく伝わってゆく。町の重鎮達や生徒達も、愛子の言葉を静  
かに聞いている。特に生徒達は、力を振るってはしゃいでいた事を叱  
られていた様な気持ちになりバツの悪そうな表情で俯いている。そ  
れと同時に、愛子は今でも本気で自分達の帰還と、その後の生活まで  
考えてくれていたという事を改めて実感し、どこか嬉しそうな擦った  
ような表情も見せていた。

ハジメは、例え世界を超えても、どんな状況であつても、生徒が変  
わり果てていても、全くブレずに「先生」であり続ける愛子に、内心  
苦笑いをせずにはいられなかった。それは、嘲りから来るものではな  
い、感心から来るものだ。愛子が、その希少価値から特別待遇を受け  
ており、ハジメの様な苦難を経験していない以上、反論するのは簡単  
だ。「軽い」言葉だと切り捨ててしまってもいいだろう。

だが、ハジメには、そんな事は出来そうになかった。今も、真つ直  
ぐ自分を見つめる「先生」に、それこそそんな「軽い」反論をするこ  
とは、あまりに見苦しい気がしたのだ。それに、愛子は一度も「正し  
さ」を押し付けなかった。その言葉の全ては、ただハジメの未来と幸  
せを願うものだ。

ハジメは、愛子からすぐ傍にいる香織へと視線を転じる。香織は、  
懐かしいものを見るような目で愛子を見つめていた。しかし、ハジメ  
の視線に気がつくのと、真つ直ぐに静かな瞳を合わせてくる。その瞳に

は、ハジメがどんな答えを出そうとも付いていくという意志が見えた。

奈落の底で、「墮ちる」寸前であったハジメの人間性をつなぎ止めてくれた愛しい彼女の幸せを、ハジメは確かに願っている。そう出来るのが自分であればいいと思っているが、愛子の言葉を信じるなら、ハジメの生き方では香織を幸せにしきれないかもしれない。

更に視線を転じると、そこにはハジメを心配そうに見やる吸血姫とウサミミ少女がいる。香織とたった二人の狭い世界に、賑やかさをもたらした少女達。何度ハジメに邪険にされても、物好きなことに必死に追いかけて、今ではむしろ香織の方が、仲間として、友人として彼女を可愛がっている。それは、ハジメが二人を受け入れたことで、香織にもたらした幸せの一つではないだろうか？

そして、ハジメは二人組の執事とメイドに視線を向ける。あの日から自分達の為に全てを使って助けてくれる最強達。すると、二人はハジメの前に膝をつき、頭を下げて

「ご命令を我が主よ」

今まで事あるごとにツツコミを入れてた二人がハジメに判断を委ねた。それは、今のハジメなら大丈夫と思ったからだ。

ハジメにとって、この世界は牢獄だ。故郷への帰還を妨げる檻である。それ故に、この世界の人や物事に心を砕くようなことは極めて困難だ。奈落の底で、故郷へ帰るために他の全てを切り捨てて、邪魔するものには容赦しないと心に刻んだ価値観はそう簡単には変わらなない。だが、「他者を思い遣る」ことは難しくとも、行動自体はとれる。その結果が、大切な者……香織達に幸せをもたらすというのなら、一肌脱ぐのも吝かではない。

ハジメは、愛子の言葉の全てに納得したわけではなかった。だが、

それでも、「自分の先生」の本気の「説教」だ。戯言と切って捨てるのは、少々子供が過ぎると言うものだろう。今回暴れることで、ハジメの存在は公のものとなり面倒事が降りかかる可能性は一気に大きくなるが、そこは生徒思いの「愛子先生」に頑張ってもらえばいい。どっちにしろ、遅かれ早かれ目を付けられるのは分かりきっていたことだ。面倒事に対する布石はいくつか打ってあるわけだし、この世界に対して自重しないとも決めている。なら、派手に力を示すのも悪くはない。

そんな事を、ちよつと言いつい訳がましく考えながら、ハジメは愛子に再度向き合う。

「……先生は、この先何があつても、俺の先生か？」

それは、言外に味方であり続けるのかと問うハジメ。

「当然です」

それに、一瞬の躊躇いもなく答える愛子。

「……俺がどんな決断をしても？　それが、先生の望まない結果でも？」

「言つたはずです。先生の役目は、生徒の未来を決めることではありません。より良い決断ができるようお手伝いすることです。南雲君が先生の話を聞いて、なお決断したことなら否定したりしません」

ハジメはしばらく、その言葉に偽りがいないか確かめるように愛子と見つめ合う。わざわざ言質をとつたのは、ハジメ自身、できれば愛子と敵対はしたくなかったからだ。ハジメは、愛子の瞳に偽りも誤魔化しもないことを確かめると、おもむろに踵を返し出入口へと向かった。そして、ハジメは二人に言い放つ

「お前らの主が命ずる。ゴミ掃除手伝ってくれ」

「御意」



主の命を受けた給仕？達はすぐさま行動を始める。

「な、南雲君？」

そんなハジメ達に、愛子が慌てたように声をかけた。ハジメは振り返ると、愛子の「先生ぶり」には参ったとでもいうように肩を竦めて言葉を返す。

「流石に、数万の大群を相手取るなら、ちよつと準備しておきたいからな。話し合いはそつちでやってくれ」

「南雲君！」

ハジメの返答に顔をパーッと輝かせる愛子。そんな愛子にハジメは苦笑いする。

「俺の知る限り一番の『先生』からの忠告だ。まして、それがこいつ等の幸せにつながるかもってんなら……少し考えてみるよ。取り敢えず、今回は、奴らを蹴散らしておくことにする」

そう言つて、両隣の香織とユエの肩をポンつと叩くと再び踵を返して振り返らず部屋を出て行った。ユエとシアが、それはもう嬉しそうな雰囲気ホワホワと漂わせながら、小走りでハジメの後を追いかけてゆく。

パタンと閉まった扉の音で、愛子とハジメの空気に吞まれて口をつぐんでいた町の重鎮達が、一斉に愛子に事情説明を求めた。

愛子は、肩を揺さぶられながら、ハジメが出て行った扉を見つめていた。その顔に、ハジメに気持ち伝わった喜びは既がない。ハジメに語った事は、ハジメの生き方を悲しく感じた事は、まぎれもない愛子の本心だ。

だが、結果、大切な生徒に魔物の大群へ立ち向かうことを決断させたことに変わりはない。力を振るうことに慣れて欲しくないと言いながら、戦いに赴かせるといふ矛盾を愛子は自覚している。ハジメに

生き方を改めて考えて欲しいという思いと、ウル町の町の人々もできれば助けたいという思い。結果的に、両方とも叶いそうではあるが……もっとやりようはなかったのかと、愛子は、内心、自分の先生としての至らなさや無力感に肩を落としていた。

願わくば、生徒達が皆、元の心を失わないまま、お家に帰れますように……愛子のその願いは既に叶わぬものだ。愛子自身、昨夜のハジメの話を聞いて、その願いが既に幻想であると感じている。しかし、それでも願うことは止められない。

重鎮達の喧騒と敬愛の眼差しを向ける生徒達に囲まれて、愛子は悟られない程度に溜息をつくのだった。

ちなみに、ハジメ達と一緒に役場に來ていたテイオは、「妾、重要参考人のはずじやの……こ、これが放置プレイ……流石、ご主r y」と火照った表情で呟いていたが、ごく自然にスルーされていた。

## 七人の騎士

「我が主。避難と準備が完了しました」

「早いな。流石はシヨウ」

「お褒めに預かり光栄です」

現在、ハジメ達は魔物の大群を待ち構える為、即席で作った大きな外壁の上で待っていた。塀の後ろでは町の住人や冒険者達が待ち構えている。

「南雲君、蒼君、白崎さん、準備はどうですか？ 何か、必要なものはありますか？」

「いや、問題ねえよ、先生」

「問題無い」

「大丈夫だよ」

やはり振り返らずに簡潔に答えるハジメ達。その態度に我慢しきれなかったようでデビッドが食ってかかる。

「おい、貴様。愛子が…自分の恩師が声をかけているというのに何だその態度は。本来なら、貴様の持つアーティファクト類の事や、大群を撃退する方法についても詳細を聞かねばならんところを見逃してやっているのは、愛子が頼み込んできたからだぞ？ 少しは……」

『だからさ、黙ってるよ』

取りあえず言霊で黙らして話を続ける

「南雲君。黒ローブの男のことですが……」

どうやら、それが本題のようだ。愛子の言葉に苦悩がにじみ出ている。

「正体を確かめたいんだろ？ 見つけても、殺さないでくれってか？」

「……はい。どうしても確かめなければなりません。その……南雲君には、無茶なことばかりを……」

「取り敢えず、連れて来てやる」

「え？」

「黒ローブを先生のもとへ。先生は先生の思う通りに……俺も、そうする」

「南雲君……ありがとうございます」

愛子は、ハジメの予想外に協力的な態度に少し驚いたようだが、未だ振り向かないハジメの様子から、ハジメ自身にも思うところが多々あるのだろうと、その厚意を有り難く受け取ることにした。つくづく自分は無力だなあと内心溜息をつきながら、愛子は苦笑いしつつ礼を言うのだった。

愛子の話が終わったのを見計らって、今度は、テイオが前に進み出てハジメに声をかけた。

「ふむ、よいかな。妾もご主……ゴホンツ！ お主に話が……というより頼みがあるのじゃが、聞いてもらえるかの？」

「？………テイオか」

「忘れてたのかよ………」

「お、お主、まさか妾の存在を忘れておったんじゃ……はあはあ、こういうのもあるのじゃな……」

聞き覚えのない声に、思わず肩越しに振り返ったハジメは、黒地にさりげなく金の刺繍が入っている着物に酷似した衣服を大きく着崩して、白く滑らかな肩と魅惑的な双丘の谷間、そして膝上まで捲れた裾から覗く脚線美を惜しげもなく晒した黒髪金眼の美女に、一瞬、訝しそうな目を向けて、「ああそういえば」と思い出したように名前を呼んだ。シヨウは呆れてツツコミを入れたが華麗にスルーされた。

明らかに、存在そのものを忘却されていたテイオは、怒るところかむしろ、頬を染めて若干息を荒げている。彼女の言う“こういうの”

とは何なのか、聞かない方が身のためだろう。

「んっ、んっ！ えつとじゃな、お主は、この戦いが終わったらウィル坊を送り届けて、また旅に出るのじゃろ？」

「ああ、そうだ」

「うむ、頼みというのはそれでな……妾も同行させてほし……」  
「断る」

「……ハアハア。よ、予想通りの即答。流石、ご主……コホンツ！ もちろん、タダでは言わん！ これよりお主を『ご主人様』と呼び、妾の全てを捧げよう！ 身も心も全てじゃ！ どうぞ」

「帰れ。むしろ土に還れ」

「野生に帰るがいい」

両手を広げ、恍惚の表情でハジメの奴隷宣言をするティオに、ハジメは汚物を見るような眼差しを向け、ばっさりと切り捨てた。それにまたゾクゾクしたように体を震わせるティオ。頬が薔薇色に染まっている。どこからどう見ても変態だった。周囲の者達も、ドン引きしている。特に、竜人族に強い憧れと敬意を持っていたユエの表情は、全ての感情が抜け落ちたような能面顔になっている。シヨウもこれは流石に無理らしい。

「そんな……酷いのじゃ……妾をこんな体にしたのはご主人様じゃろ  
うに……責任とって欲しいのじゃ！」

全員の視線が「えっ!?!」というようにハジメを見る。流石に、とんでもない濡れ衣を着せられそうなのに放置する訳にもいかず、きつちり向き直ると青筋を浮かべながらティオを睨むハジメ。どういふことかと視線で問う。

「あう、またそんな汚物を見るような目で……ハアハア……ごくりっ  
……その、ほら、妾強いじゃろ？」

ハジメの視線にまた体を震わせながら、ハジメの奴隷宣言という突飛な発想にたどり着いた思考過程を説明し始めるティオ。

「里でも、妾は一、二を争うくらいでな、特に耐久力は群を抜いておつた。じゃから、他者に組み伏せられることも、痛みらしい痛みを感じること、今の今までなかったのじゃ」

近くにティオが竜人族と知らない護衛騎士達がいるので、その辺りを省略してポツポツと語るティオ。

「それがじゃ、ご主人様と戦って、初めてボッコボッコにされた拳句、組み伏せられ、痛みと敗北を一度に味わったのじゃ。そう、あの体の芯まで響く拳！ 嫌らしいところばかり責める衝撃！ 体中が痛みで満たされて……ハアハア」

「……つまり、ハジメが新しい扉を開いちゃった？」

「その通りじゃ！ 妾の体はもう、ご主人様なしではダメなのじゃ！」  
「……きめえ」

ユエが、嫌なものを見たとき表情を歪ませながら、既に尊敬の欠片もない声音で要約すると、ティオが同意の声を張り上げる。思わず、本音を漏らすハジメ。完全にドン引きしていた。

「ハジメ、これはしやあない。責任取る」

「うんうん。それがいいと思う。ハツくん、責任取ってハーレゲフンゲフン仲間に加えよう」

二人は諦めた様な顔でハジメにお願いする。香織は何か不穏な事を言った気がしたがスルー

「はく、わかった。なら作戦纏めるからちよつと来い」

「作戦……かの？」

ティオは首を傾げながら外壁に上がって作戦を聞いた

「……………来たか」

ハジメが突然、北の山脈地帯の方角へ視線を向ける。眼を細めて遠くを見る素振りを見せた。肉眼で捉えられる位置にはまだ来ていないが、ハジメの「魔眼石」には無人偵察機からの映像がはつきりと見えていた。

それは、大地を埋め尽くす魔物の群れだ。ブルタールのような人型の魔物の他に、体長三、四メートルはありそうな黒い狼型の魔物、足が六本生えているトカゲ型の魔物、背中に剣山を生やしたパイソン型の魔物、四本の鎌をもったカマキリ型の魔物、体のいたるところから無数の触手を生やした巨大な蜘蛛型の魔物、二本角を生やした真っ白な大蛇など実にバリエーション豊かな魔物が、大地を鳴動させ土埃を巻き上げながら猛烈な勢いで進軍している。その数は、山で確認した時よりも更に増えているようだ。五万あるいは六万に届こうかという大群である。

更に、大群の上空には飛行型の魔物もいる。敢えて例えるならプラノドンだろうか。何十体というプラノドンモドキの中に一際大きな個体がいる、その個体の上には薄らと人影のようなものも見えた。おそらく、黒ローブの男。愛子は信じたくないという風だったが、十中八九、清水幸利だ。

「さて、作戦開始だ」

そう言うところハジメは外壁の後ろで待機している住人や冒険者達に向かつて言い放つ

「聞け！ウルの町の勇敢なる者達よ！私達の勝利は既に確定している

！」

いきなり何を言い出すのだと、隣り合う者同士で顔を見合わせる住人達。ハジメは、彼等の混乱を尻目に言葉を続ける。

「なぜなら、私達には女神が付いているからだ！　そう、皆も知っている。『豊穡の女神』愛子様だ！」

その言葉に、皆が口々に愛子様？豊穡の女神様？とざわつき始めた。護衛騎士達を従えて後方で人々の誘導を手伝っていた愛子がギョツとしたようにハジメを見た。

「我らの傍に愛子様がいる限り、敗北はありえない！愛子様こそ！我ら人類の味方にして『豊穡』と『勝利』をもたらず、天が遣わした現人神である！私達は、愛子様の騎士、彼女の皆を守りたいという思いに応えやって来た！見よ！これが、愛子様により教え導かれた私の真の姿である！」

そう言つてティオを含めたハジメ達はそれぞれ、「フォームチェンジャー」を取り出し、空へと投げる。すると、その姿はチェンジャーが通過した頃には一変。

各々の姿が変化。色は違えど、皆ラインが入ったロングコートに男子は長ズボンで、女子はクールホットパンツ。耳にはインカムの様な飾りが施されている

先ず、ハジメが名乗りを上げた。

「閃紅の騎士　南雲ハジメ！」

紅に黒いラインの入ったコートを手でなびかせ、キメポーズを取る。続いてはショウが名乗る

「蒼穹の騎士　蒼翔！」

蒼に白いラインの入ったコートに「カオスイノベーシヨン」の装備を再利用した姿だが、様になるのがショウクオリティーだ。続いては



香織の番だ

「桃幻の騎士 白崎香織！」

こちらは桃色に紅のラインで割り可愛らしいポーズを取った。何処からか『ズキユン』という音が聴こえたが無視してティオさん

「黒鱗の騎士 ティオ・クラルス！のじゃ」

黒に金色のコートに、何処からか持ってきたか、扇子を開き背を向けて名乗るティオさん。老若男女問わず見とれていた。変態の部分さえ抜けたらいい人なのになー。さて、次はシアか

「白槌の騎士 シア・ハウリア！ですう」

白に水色のコートを纏い、愛用の戦槌『ドリユッケン』を、自分の前に突き刺し、騎士っぽさを醸し出している。何処からか「お姉さま」と言う声が聴こえた気がしたがほっとこう。そして、

「……………黄金の騎士 ……ユエ！」

金に黒のコート着て、後ろにユエはんのオリジナル魔法『雷龍』が咆哮を上げる。そして、とりはショウの嫁！

「銀剣の騎士 アシスト」

銀に蒼いコートに右手に持った剣を振るい、凜とした表情で名乗る。何処からか「ふつくしい」と言う声の一つ聴こえたかがそれは知らん。そして、ハジメがまとめ上げる。

「勝利をもたらす七色の騎士」

見事なポジションチェンジを繰り返しながら、住人達にわからない様に魔物の群れに手榴弾を七つ送り込み

「我ら、七光聖騎士団！」

その言葉に合わせて各々はポーズを取り、その後ろでは「七色の爆

破”が起きる。それにより、約半分の魔物は片付いた。そこには、啞然として口を開きっぱなしにしている人々の姿があった。

「愛子様、万歳！」

ハジメが、最後の締めにあい子を讃える言葉を張り上げた。すると、次の瞬間……

「三三三愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！三三三」

「三三三」

「三三三女神様、万歳！ 女神様、万歳！ 女神様、万歳！三三三」

ウルの町に、今までの様な二つ名としてではない、本当の女神が誕生した。どうやら、不安や恐怖も吹き飛んだようで、町の人々は皆一様に、希望に目を輝かせあい子を女神として讃える雄叫びを上げた。遠くで、あい子が顔を真っ赤にしてふるふる震えている。その瞳は真っ直ぐにあいメに向けられており、小さな口が「ど・う・い・う・こ・と・で・す・か！」と動いている。

ハジメは、しれつとして再び魔物の大群に向き直った。ハジメが、ここまであい子を前面に押し出したのは、もちろんこれも作戦の内である。

この先、ハジメの活躍により教会や国が動いたとき、彼等がハジメに害をなそうとすれば、あい子は確実に彼等とぶつかるだろうが、その時、「豊穰の女神”の発言権は強い方がいいというものだ。

町の危急をあい子様……の力で乗り切ったとなれば、市井の人々は勝手に噂を広め、「豊穰の女神”の名はますます人々の心を掴むはずだ。その時は、単に国にとって有用な人材というだけでなく、人々自身が支持する女神として、国や教会も下手な手出しはしにくくなり、より強い発言権を得ることになるだろう。

二つ目は単純に、大きな力を見せても人々に恐怖や敵意を持たれにくくするためだ。一個人が振るう力であっても、それが自分達の支持する女神様のもたらしたものと思えば、不思議と恐怖は安心に、敵意は好意に変わるものである。教会などから追われるようになっても、協力的な人がいる……といいなというものだ。

三つ目としては単純に、自分を矢面に立たせたのだから「ハジメ達の先生」なら諸共に矢面に立って見せろという意味表示である。

もつとも一番の理由は、単に町の住民にパニックになって下手なことをされなくなかっただけなので、咄嗟に思いついた程度の手である。後で、愛子に色々言われそうだが、愛子自身にもメリツトはあるし、彼女自身の選択の結果でもあるので大目に見てもらおうか……事が終わればトズラすればいい。

ちなみに、この方法を思い付いたのはアシストさんだ。理由は

「この方が面白いと思いました」らしい。

ハジメは、背後から町の人々の魔物の咆哮にも負けない愛子コールと、愛子自身の突き刺さるような視線と、「何だよ、あいつ結構分かっているじゃないか」と笑みを浮かべている護衛騎士達の視線をヒシヒシと感じながら、「宝物庫」からエクステンドを装備して、前に進み出る。

右にはメツエライを二門取り出し両肩に担いだ香織が、その隣には蒼夫婦が、左にはユエとハジメが貸与えたオルカンを担ぐシアが、更にその隣には、魔晶石の指輪をうっとり見つめるテイオが並び立った。地平線には、プテラノドンモドキが落とされたことなどまるで関

係ないと言う様に、一心不乱に突っ込んでくる魔物達が視界を埋め尽くしている。

ハジメは、香織を見た。香織は笑顔で頷く。ハジメは、ユエを見た。ユエもハジメを見つめ返しコクリと静かに頷く。ハジメは、シアを見た。シアは、ウサミミをピンツと伸ばし自信満々に頷く。その隣のテイオは……置いておこう。そしてハジメは、シヨウ達を見た。二人は親指を立ててサムズアップする。

ハジメは、視線を大群に戻すと笑みを浮かべながら、何の気負いもなく呟いた。

「じゃあ、やるか」



げながら突進する魔物達の種族、強さに関係なく、僅かな抵抗も許さずに一瞬で唯の肉塊に変えた。毎分一万二千発の死が無慈悲な「壁」となって迫り、一発で一体など生温いと云わんばかりに目標を貫通し、背後の数十匹をまとめて貫いていく。

穿たれた魔物達は、慣性の法則も無視してその場で肉体の大半を爆散させながら崩れ落ちた。咄嗟に左右に散開して死の射線から逃れようとする魔物達だったが、撃ち手の香織が当然逃がす訳もなく、二門のメツエライを扇状になぎ払う。解き放たれた「弾幕」は、まるでそこに難攻不落の城壁でもあるかのように魔物達を一切寄せ付けず、瞬く間に屍山血河を築き上げた。

数多のミサイルは火花の尾を引いて大群のど真ん中に突き刺さった弾頭は、大爆発を引き起こし周囲数十メートルの魔物達をまとめて吹き飛ばした。

爆心地に近い場所にいた魔物達は、その肉体を粉微塵にされ、離れていた魔物も衝撃波で骨や内臓を激しく損傷しのたうち回る。そして、立ち上がれないまま後続の魔物達に踏み潰されて息絶えていった。

全弾撃ち尽くしても、シアは、ハジメから配備され傍らに積み上げた弾頭を入れ替えて連射する。発射されたミサイルは魔物達の頭上まで来ると手榴弾と同様に時間差で爆発し、眼下へ燃え盛る大量の炎を撒き散らした。

焼夷手榴弾と同じ、フラム鉱石から抽出した摂氏三千度の燃え続けるタール状の液体が魔物達に豪雨の如く降り注ぎ、その肉体を焼き滅ぼしていく。悲鳴を上げ暴れれば暴れるほど、周囲の魔物を巻き込んで灼滅の炎が広がる。シアが担当する範囲の魔物は爆散するか灰燼に帰すか……二つに一つだった。

荒れ狂う炎の竜巻だけは地球における竜巻の等級で表すならF4クラス。直径数十メートルの渦巻く炎が魔物の群へと爆進し、周囲の魔物達をまとめて巻き上げた。宙へと放り出され足掻くすべを持たない魔物達は、そのまま火炎に自ら飛び込むように巻き込まれていく。そして、紅蓮の竜巻から放り出された時にはただの灰燼に変わり果て灰色の雪のように舞い散るのだった。そのまま全てを灰燼と帰す竜巻は、存分に戦場を蹂躪していく。

更に咆哮を上げる黄金の龍は口を開けると、何とその場にいた魔物の尽くが自らその顎門へと飛び込んでいく。そして、一瞬の抵抗も許されずに雷の顎門に滅却され消えていった。

更には、龍は魔物達の周囲をとぐるを巻いて包囲する。逃走中の魔物が突然眼前に現れた雷撃の壁に突っ込み塵となった。逃げ場を失くした魔物達の頭上で再び、落雷の轟音を響かせながら雷龍が顎門を開くと、魔物達は、やはり自ら死を選ぶように飛び込んでいき、苦痛を感じる暇もなく、荘厳さすら感じさせる龍の偉容を最後の光景に意識も肉体も一緒くたに塵へと還された。雷龍は、大量の魔物を呑み込むと最後にもう一度、落雷の如き雄叫びを上げてる。

そして、そこに押し寄せる刃の波。まるで生き物の様に群れを成し、津波のように魔物達を飲み込んで行く。飲み込まれた魔物達はズタズタに切り裂かれ、波が過ぎた頃には全て挽き肉の様な姿に成り果て、大地のシミへと変わる。

そんな地獄の様な状況に更なる地獄が舞い降りる。

キュアアアアアアアアア!

チユドドドドドドドドド!

バシユウウウウウウウ!

たった一つの場所から放たれているとは思えない程のレーザーとパイルバンカーとミサイルの数々が戦場を埋め尽くす。

すると地面には大きな穴や、あまりの高熱でガラス化した所が多数出来上がる

大地に吹く風が、戦場から蹂躪された魔物の血の匂いを町へと運ぶ。強烈な匂いに、吐き気を抑えられない人々が続出するが、それでも人々は、現実とは思えない「圧倒的な力」と「蹂躪劇」に湧き上がった。町の至るところからワアアアアアアアと歓声が上がります。

町の重鎮や護衛騎士達は、初めて見るハジメ達の力に吞まれてしまったかのように呆然としたままだ。生徒達は、改めてその力を目の当たりにし、自分達との「差」を痛感して複雑な表情になっている。本来、あのような魔物の脅威から人々を守るはずだった、少なくとも当初はそう息巻いていた自分達が、ただ守られる側として町の人々と同じ場所から、「無能」と見下していたクラスメイトの背中を見つめているのだ。複雑な心境にもなるだろう。

愛子は、ただひたすら祈っていた。ハジメ達の無事を。そして同時に、今更ながらに自分のした事の恐ろしさを実感し表情を歪めていた。目の前の凄惨極まりない戦場が、まるで自分の甘さと矛盾に満ちた心をガツンと殴りつけているように感じたのだ。

やがて、魔物の数が見えて減り、密集した大群のせいで隠れていた北の地平が見え始めた

既に、その数は一万を割り八千から九千と言ったところか。最初の大群を思えば、壊滅状態と言っているほどの被害のはずだ。しかし、魔物達は依然、猪突猛進を繰り返している。正確には、一部の魔物がそう命令を出しているようだ。大抵の魔物は完全に及び腰になって



おり、命令を出している各種族のリーダー格の魔物に従って、戸惑ったように突進して来ている。数が少なくなったことにより、ハジメはそのことに気がついた。

清水幸利がこの事件の犯人であったとして、例えチート持ちでも、果たして、これほどの大群をテイオにしたように洗脳支配出来るものなのだろうかという点は、ハジメ自身疑問に思っていたことだ。だが、どうやら、数万の魔物の全てを洗脳しているわけではなく、各種族のリーダー格のみを洗脳し、その配下の魔物はそのリーダーに従わせるという方法と取っているようである。中々、効率的だ。もつとも、それでもこの数を短期間で集められるのかという点は疑問が残るのだが……

取り敢えず、其の辺の疑問は置いておくとして、動きが鈍く単調なリーダー格と、動きに臨機応変さはあるが、命令に従って猪突猛進を繰り返す及び腰の魔物達という構成ならば、さつさとリーダー格だけを仕留めるのが妥当だろう。そうすれば、本能に忠実な魔物達は、ハジメ達との実力差をその身に刻んでいるがために北の山へと逃げ帰るはずだ。

ハジメは、香織の殲滅兵器メツエライを見やる。二つとも白煙を上げており、冷却が間に合っていないようだ。耐久限界である。これ以上撃ち続けければ、何処かにガタがくるだろう。もちろん、そうなつても修復は可能だが、モノが繊細なだけに瞬時にその場でというわけには行かない。時間をかけて精密作業を行う必要がある。そうなつたらそうなつたで面倒なので、攻撃方法を切り替えるのが妥当だろう。

「ユエ、テイオ、援護を頼む。アシストはそのまま回復役を」

「んっ」

「了解じゃ」

「YES」

ハジメの少ない言葉でも、委細承知と即行で領くユエ達。阿吽の呼吸だ。ハジメは、それに満足しながらシアに話しかける。

「シア、魔物の違いわかるか？」

「はい。操られていた時のテイオさんみたいな魔物とへっぴり腰の魔物ですよね？」

「へっぴり……うん、まあ、そうだ。おそらく、テイオモドキの魔物が洗脳されている群れのリーダーだ。それだけ殺れば他は逃げるだろう」

「なるほど、私の方も残弾が心許ないですし、直接殺るんですね！」

「……あ、ああ。何ていうかお前遅しくなったなあ……」

「当然です。皆さんの傍にいますから」

にぱっと笑みを見せるシアに、苦笑いしつつもどこか優しげな笑みを返すハジメ。だが、次の瞬間にはグツと表情を引き締めてメツエライを「宝物庫」にしまうと、ハジメと香織はドンナー・シユラークを抜いた。同時に、シアもオルカン置き、背中のドリユツケンに手をかける。

リーダー格と思われる魔物はおよそ百体。おそらく、突撃させて即行で殺されては、配下の魔物の統率を失うと思い、大半を後方に下げておいたのだろう。

「シヨウ。最初に『バースト』を頼む」

「分かった」

メツエライとオルカンによる攻撃が無くなってチャンスと思ったのか、魔物達が息を吹き返すように突進を始める。

ハジメとシアの突撃を援護するため、シヨウが魔法を発動した。

『『マテリアルバースト』発動』

シヨウが波打っている剣の一つをエネルギーに分解して、爆破。それにより魔物は約二千にまで減らされた。

——ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！

南雲夫婦は、“縮地”で大地を疾走しながらドンナー・シユラークを連射した。その眼には、群れの隙間から僅かに見えるリーダー格の魔物の姿が捉えられており、撃ち放たれた死の閃光は、その僅かな隙間を縫うようにして目標に到達、急所を容赦なく爆散させる。

前線の魔物には目もくれず、何故か背後のリーダー格ばかりが次々と爆ぜる奇怪さに、周囲の魔物が浮き足立った。と、不意に一体の魔物の頭上に影が差す。咄嗟に、天を仰ぎ見た魔物の眼には、ウサミミをなびかせ巨大な戦鎚を肩に担いだ少女が文字通り空から降ってくる光景が飛び込んできた。

その少女、シアは、魔物の頭を踏み台に、ウサギらしくびよんぴよんと群れの頭上を飛び越えていき、最後に踏み台にした魔物の頭を圧殺させる勢いで踏み込むと、自身の体重を重力魔法により軽くして一気に天高く舞い上がった。

そして、天頂まで上がると空中でぐるりと反転し、今度は体重を一気に数倍まで引き上げ猛烈な勢いで落下する。目標地点は、もちろんリーダー格が数体で固まっている場所だ。自由落下の速度をドリュッケンの引き金を引き激発の反動を利用して更に加速させ、最大限の身体強化をも加えて一撃の威力を最高にまで引き上げる。そして、全く勢いを減じることなく破壊の権化ともいうべき鉄槌を振り下ろした。

「りゃあああああ!!!」

ドオガアアアア!!!

可愛らしい雄叫びと共に繰り出されたその一撃は、さながら隕石の如く。直撃を受けたブルータル型の魔物のリーダー格は、頭から真っ直ぐ地面へと圧殺され、凄絶な衝撃に肉と血を爆ぜさせた。血肉は衝撃により吹き飛んだ大量の土石に紛れて肥料のごとく地へと還る。そして、その末路は、密集していた周囲の魔物にも等しく訪れた。ドリュッケンのもたらした圧倒的な衝撃と散弾の如く飛び散った土石により肉体を吹き飛ばされて同じく大地へと還っていく。

シアは、自らが作り出したクレーターの底で、地に埋もれたドリュッケンを、激発の反動を利用して引き抜くと同時に高速移動に利用して、更に各群れのリーダー格と思しき魔物へと襲いかかった。

流石に、懐に潜り込まれて好き勝手させるほど魔物も甘くはないように、数で圧殺するように肉の壁でシアを取り囲もうとする。シアは、ドリュッケンのギミックを展開して柄を更に一メートルほど伸ばし、激発を利用して独楽のように高速回転を行った。そして、遠心力をたっぷり乗せたドリュッケンで迫り来る肉の壁を一緒くたに吹き飛ばす。

放射状に吹き飛び宙を舞う無数のブルータル。見た目華奢な少女が、自分の数倍の巨軀を誇る魔物をピンポン玉のように軽々と吹き飛ばす。まるで冗談のような光景だ。シアは、回転運動から流れるように体勢を戻し、吹き飛んだブルータル達の隙間から見えた目標のリーダー格を潰そうと踏み込みの体勢に入った。

と、その瞬間、右後方より新手が高速で接近する音をウサミミが捉える。シアは、慌てずドリュッケンを最適のタイミングで体ごと回転させ迎撃しようとした。が、その新手、黒い体毛に四つの紅玉のよう

な眼を持った狼型の魔物は、それを予期していたように寸前で急激に減速すると、見事にシアの一撃を躲してみせた。

通常の魔物なら、武器が振りきられて死に体となったところを襲うのがセオリーだろう。実際、シアも眼前の魔物はそうするだろうと身体強化を足に集中し、踏み込んできた瞬間頭部を力チ上げてやるつもりだった。

しかし、シアのその予想は裏切られる。何と黒い四目の狼は、シアではなくドリユッケンに飛びかかり、その強靱な顎と全体重で地に押し付けるようにして封じたのである。もちろん、たかだか魔物の一体くらい、シアの身体強化を施された膂力ならどうということはない。しかし、それでも意表を突かれた事と、一瞬であれ動きを封じられたことに変わりはない。

そして、黒い四目の狼には、それで十分だった。完璧なタイミングでシアの後方から同じ魔物が鋭い牙の並ぶ顎門を開いて眼前まで迫っていたからだ。シアは眼を見開き、そして咄嗟に足に集中させた身体強化を解いて、全身に施した。それは、攻撃をくろうことを覚悟したからだ。

あわや、その鋭い牙がシアを血濡れにさせるかというその瞬間、何がシアと四目狼の間に割り込んだ。それは、縦六十センチ横四十七センチ、中心部分にラウンドシールドの様なものを取り付けられている金属製の十字架だった。その十字架が魔物の顎門に挟まりシアに喰いつくのを阻止しているのだ。

ギリギリと音を立て、魔物が必死に突如飛び込んできた異物を噛み砕こうと力を入れるが、薄く紅色に発光する十字架はビクともしない。そして次の瞬間、轟音と共に魔物の下顎が爆ぜて吹き飛んだ。

「グウルアアア!!!」

悲鳴を上げてのたうち回る魔物の頭上にスつと音もなく移動した十字架は、再度轟音と共に弾丸を吐き出し魔物の頭部を粉碎する。更に……

ズドンツ!!

発砲音が聞こえたと思うと、シアのドリユツケンを握る手が軽くなった。シアが、相棒を一時的に封じていた四目狼を振り返ると、そちらも腹部と頭部を空中に浮遊する二つの十字架に撃ち抜かれ崩れ落ちていた。

—シア、油断するな。魔物の中に、明らかに動きの違うやつがいる。洗脳支配されているわけでも、どこかの魔物の配下というわけでもなさそうだ。クロスビットを二百機付けておく。右の二十七体を殺れ。

シアが、やや自らのピンチとそれを脱した事に意識を囚われていると、ハジメから『念話』が届いた。それにハツと我を取り戻したシアは気を引き締め直し、首元のチョーカー（シア的に断じて『首輪』ではない）の念話石を通して返事をする。

—了解です！ それと、助かりました。有難うございます！—

—おう、気をつけてな—

「……ふふ、最近、ハジメさんの態度がドンドン軟化していますう。既成事実まで後一步ですね！」

シアは、通信が切れた事を確認すると、まるで自分を守るように周囲を浮遊する『クロスビット』に頬を綻ばせて、そんな独り言を呟いた。そして、気合を入れ直してドリユツケンを構え、先程の毛色の違う魔物に注意しながらリーダー格の殲滅に乗り出した。

「ふう、相変わらず、どっか危なかつしいんだよな、アイツ……」  
「そうね、後でまた鍛え直そうかしら……?」

そんな事を呟きながら、猛烈な勢いで魔物を駆逐していく南雲夫婦。二人の周囲にも三百機の十字架が浮遊している。

『クロスビット』ハジメがそう呼んだ浮遊する十字架は、無人偵察機やショウウのビットと同じ原理で動く攻撃特化タイプだ。内部にライフル弾や散弾が装填されており、感応石が七つ取り付けられた腕輪で操作する。また、表面を覆う鉱石には生成魔法により“金剛”を付与しており、感応石の魔力に反応して強固なシールドにもなる。

ハジメは、ガンⅡカタでドンナー・シユラークを縦横無尽に操りながら、クロスビットを併用して、隙のない嵐のような攻撃を繰り広げる。既に、リーダー格の魔物を四十体近く屠り、全開の“威圧”により逃亡する魔物も出始めている。

香織の方も粗方片付いてきており、かなりの早さで減っている。

と、二人の視界の端に遠くの方で逃げ出す魔物に向かって何やら喚いている人影が見えた。地面から頭だけを出しているのも、一瞬、誰かの生首かと見間違えるが、ハジメの“遠目”には確かに動いているのが見えている。その頭は黒いローブで覆われていた。

黒いローブの男、清水は、逃げ出す魔物に痼癢を起こす子供のように喚くと、王宮より譲り受けたアーティファクトの杖をかざして何かを唱え始めた。もちろん、そのまま詠唱の完了を待ってやる義理などないので、ハジメは片手間でドンナーを発砲し、その杖を半ばから吹き飛ばす。余波で、地面の穴の中に揉んどり打って倒れこむ清水。

すると、清水が何かしたのかどうかは分からないが、群れの陰に隠れてハジメに決定的な隙が出来るのを辛抱強く窺っていた黒い四目

の狼型魔物が一斉に飛び出して来た。やはり、周囲の魔物とは比べ物にならないポテンシャルと連携能力を持っている。かつての二尾狼を思い出す程だ。

実際、戦ったのなら二尾狼といい勝負をするだろうとハジメは感じていた。二尾狼のように雷を操る固有魔法は持っていない事から単体の攻撃力では劣るが、時々、ハジメの攻撃場所を知っていたかのようにはぐす事があるので、おそらく「先読」系の固有魔法があるのだろう。そして、連携に関しては二尾狼とタメを張るレベル……つまり、低層とは言え奈落にいても何らおかしくない魔物なのである。

なぜ、そんな魔物がここに？ という疑問はあるが、攻撃を受けている以上、今は、余計な思考だ。ハジメは、一時的にリーダー格の魔物駆逐から意識を逸らし、十二体の黒い四目狼の撃破に集中した。

前後左右、更には上方から波状攻撃を仕掛けてくる黒い四目狼に、体を独楽のように回転させながらドンナー・シユラークを連射する。

「先読」で回避するだろう位置を、ハジメもまた「先読」を使いながら未来位置に撃ち込んでいく。それでも、なお回避する個体もいるのだから驚きだ。二尾狼同様、仲間内でのテレパシーのような意思疎通の方法があつて、戦場をある程度俯瞰的に見られるのかもしれない。

ハジメの銃撃を掻い潜り、空中リロードの僅かな隙を突いて背後から踏み込んできた四目狼を、花卉のように展開させたクロスビツトの一機で吹き飛ばしつつ、その魔物を踏み台にして飛び込んできた別の四目狼を、即座に移動させたクロスビツトを盾にして防ぎ、義手の左肘から撃ち放ったショットガンで爆砕する。

血肉の雨が降り注ぐ中、包囲しようとする四目狼の一角に二機のクロスビツトで集中砲火し、無理やり包囲をこじ開けると、「縮地」で滑り込むように移動し、背後の四目狼をクロスビツトで撃ち殺しつ



つ、リロードの終わったドンナー・シユラークで通り抜けざまに更に二体を屠る。

と、その内の一体が、最初から捨て身だったのか、撃ち抜かれた魔物に体当たりしてハジメに向かって吹き飛ばした。ハジメは、横つ飛びに回避しながら、飛んでくる魔物の下方より発砲し、その後ろを疾駆してくる四目狼の頭部を吹き飛ばす。受身を取りながら、即座に立ち上がったハジメに、この瞬間を待っていたと言わんばかりの四目狼が大口を開けて、その牙でハジメを噛み砕こうとする。完璧なタイミングだ。傍から見れば、間違いなく四目狼の顎門がハジメの体に喰いついたように見えただろう。

しかし、その瞬間、ハジメの姿がゆらりと揺れると四目狼の顎門は何もない空でガチンツ！ と音を立てて閉じられた。ハジメの体はいつの間にか一歩進んだ場所にあったのだ。ハジメは、すれ違い様にシユラークでその四目狼の腹部を撃ち抜く。

更に、四目狼がハジメに飛びかかるが、何故か先程と同じように、一歩ズレた場所を攻撃してしまう。その度に、ハジメがすれ違い様の一撃を確実に撃ち込んでゆく。

黒い四目狼が、まるで目測を誤っているかのような一連の出来事は全くその通りで、これはハジメの“気配遮断”の派生技能「十幻踏」の効果である。効果は、気配を遮断する際に、ほんの数秒だけ元いた位置に遮断前の気配を残していくというものだ。本体の気配は遮断されているので、感覚的には一瞬前までの場所にいるように錯覚してしまう。もちろん、単に気配がズレているだけなので、注意深く観察すれば比較的簡単に看破できるのだが、コンマ数秒が勝敗を分ける戦いにおいて、惑わされないようにするのは中々に難しい。特に、優れた者ほど気配には敏感になるので有効性は増すのである。

当然、クロスビットを扱うために「瞬光」も使用しているハジメにとって、いくら黒い四目狼が奈落級の力を持った魔物であっても、やはり相手にはならないのは自然なことであった。結局、おそらくだが清水の切り札とも言うべき四目狼は、ハジメに攻撃を掠らせる事もできずに、ものの二分で殲滅されることになった。

ハジメは、クロスビットを飛ばして怒濤の勢いでリーダー格を仕留めにかかる。離れた場所にいるシアに付けたクロスビットからの情報では、向こうもあと数体で終わるようだ。町に向かつて突進していた前線の魔物も、ユエの雷龍が全く寄せ付けていないようだ。

それから約二分の内に、ハジメは確認していた限りの洗脳を受けた魔物の駆逐に成功した。そして、それを確認すると、スウーと大きく息を吸い「魔力放射」を併用して天地に轟けとばかりに咆哮を上げる。

「カアアアアアアアアアアアア!!」

戦場を特大の咆哮と魔力が波動となって駆け巡る。その圧倒的な威圧は、何より魔物達の精神に衝撃となつて襲いかかり多大な本能的恐怖を感じさせた。そして、自分達の群れのリーダーが既に存在していないことに気がつくのと、しばらくの硬直の後、一体、また一体と後退りし、遂には踵を返してハジメを迂回しながら北を目指して必死の逃亡を図り始めた。

魔物の群れという名の水流は、まるで川中の岩と同じようにハジメを避けて左右に分かれながら逃亡していく。その様子を、鋭い眼で確認していたハジメは、どきどきに紛れて、おそらく最後の一頭と思われる黒い四目狼にまたがり逃亡を計る清水の姿を発見した。

ハジメは、膝立ちになりドンナーを両手でしっかりと構えると、連続

して引き金を引く。絶妙なタイムラグをもって宙を駆けた弾丸は、不穏な気配を感じたのかチラリと振り返った黒い四目狼の「先読」により一撃目を避けられたものの、二撃目でその大腿部を撃ち抜き地に倒れさせた。その衝撃で、清水も吹き飛ぶ。身体スペックは高いので、体を強かに打ち付けつつも直ぐさま起き上がり、黒い四目狼に駆け寄って何か喚きながら、その頭部を蹴りつけ始めた。

おそらく、さつさと立てとか何とかそんな感じのことを喚いているのだろう。見るからにヒステリックな感じである。しまいには、暗示か何かで無理やり動かさうというのか、横たわる黒い四目狼の頭部に手をかざしながら詠唱を始めた。

ハジメは、その様子をみながら、問答無用でレールガンをぶっ放し、黒い四目狼に止めを刺す。余波で再び吹き飛んだ清水は、わたわたと手足を動かしながら、今度は自力で逃げようというのか魔物達と同じく北に向けて走り始めた。

ハジメは、魔力駆動二輪を取り出すと一気に加速し瞬く間に清水に追いつく。後ろからキイイイイ！ という耳慣れぬ音に振り返った清水が、異世界に存在しないはずのバイクを見てギョツとした表情をしつつ必死に手足を動かして逃げる。

「何だよ！ 何なんだよ！ ありえないだろ！ 本当なら、俺が勇者グペツ!？」

悪態を付きながら必死に走る清水の後頭部を、二輪の勢いそのままに義手で殴りつけるハジメ。清水は、顔面から地面にダイブし、シャチホコのような姿勢で数メートルほど地を滑って停止した。

「さて、先生はどうする気だろうか？ 、「こいつの事も……場合によっては俺の事も……」

ハジメは、そんな事を独りごちながら清水に義手から出したワイヤーを括り付けると、そのまま町へと踵を返した。荒れ果てた大地の砂埃と魔物が撒き散らした血肉に塗れながら二輪に引きずられる清水の姿は……正しく敗残兵と言った有様だった。

## 使徒、再来

アレから数分後、清水は目を覚ました。しかし、その姿は無様な物だった。

手足をハジメ特製のワイヤーで縛られ、うつぶせの状態となっていた。

「な、何だー！これは!？」

「清水君、落ち着いて下さい。あなたに危害をくわえた事はお詫びします……先生は、清水君とお話がしたいのです。どうして、こんなことをしたのか……どんな事でも構いません。先生に、清水君の気持ち聞かせてくれませんか？」

膝立ちで清水に視線を合わせる愛子に、清水のギョロ目が動きを止める。そして、視線を逸らして顔を俯かせるとボソボソと聞き取りにくい声で話……というより悪態をつき始めた。

「なぜ？そんな事もわかんないのかよ。だから、どいつもこいつも無能だっつうんだよ。馬鹿にしゃがって……勇者、勇者うるさいんだよ。俺の方がずっと上手く出来るのに……気付きもしないで、モブ扱いしゃがって……ホント、馬鹿ばっかりだ……だから俺の価値を示してやろうと思ったただけだろうが……」

「てめえ……自分の立場わかってんのかよ！ 危うく、町がめっちゃくちゃになるところだったんだぞー！」

「そうよ！ 馬鹿なのはアンタの方でしょ！」

「愛ちゃん先生がどんだけ心配してたと思ってるのよ！」

反省どころか、周囲への罵倒と不満を口にする清水に、玉井や園部など生徒達が憤りをあらわにして次々と反論する。その勢いに押されたのか、ますます顔を俯かせ、だんまりを決め込む清水。

愛子は、そんな清水が気に食わないのか更にヒートアップする生徒達を抑えると、なるべく声に温かみが宿るように意識しながら清水に質問する。

「そう、沢山不満があつたのですね……でも、清水君。みんなを見返そうというのなら、なおさら、先生にはわかりません。どうして、町を襲おうとしたのですか？ もし、あのまま町が襲われて……多くの人が亡くなっていたら……多くの魔物を従えるだけならともかく、それでは君の“価値”を示せません」

愛子のもっともな質問に、清水は少し顔を上げると薄汚れて垂れ下がった前髪の間から陰鬱で暗く澱んだ瞳を愛子に向け、薄らと笑みを浮かべた。

「……示せるさ……魔人族になら」

「なっ!？」

清水の口から飛び出したまさかの言葉に愛子のみならず、ハジメ達を除いた、その場の全員が驚愕を表にする。清水は、その様子に満足気な表情となり、聞き取りにくさは相変わらずだが、先程までよりは力の籠った声で話し始めた。

「魔物を捕まえに、一人で北の山脈地帯に行ったんだ。その時、俺は一人の魔人族と出会った。最初は、もちろん警戒したけどな……その魔人族は、俺との話しを望んだ。そして、わかつてくれたのさ。俺の本当の価値ってやつを。だから俺は、そいつと……魔人族側と契約したんだよ」

「契約……ですか？ それは、どのような？」

戦争の相手である魔人族とつながっていたという事実には愛子は動揺しながらも、きつとその魔人族が自分の生徒を誑かしたのだとフツフツと湧き上がる怒りを抑えながら聞き返す。

そんな愛子に、一体何がおかしいのかニヤニヤしながら清水が衝撃の言葉を口にする。

「……畑山先生……あんたを殺す事だよ」

「……え？」

愛子は、一瞬何を言われたのかわからなかったようでも思わず間拔けな声を漏らした。周囲の者達も同様で、一瞬ポカンとするものの、愛子よりは早く意味を理解し、激しい怒りを瞳に宿して清水を睨みつけた。

清水は、生徒達や護衛隊の騎士達のあまりに強烈な怒りが宿った眼光に射抜かれて一瞬身を竦めるものの、半ばやけくそになっているのか視線を振り切るように話を続けた。

「何だよ、その間拔面。自分が魔人族から目を付けられていないとでも思ったのか？ある意味、勇者より厄介な存在を魔人族が放っておくわけないだろ……『豊穰の女神』……あんたを町の住人ごと殺せば、俺は、魔人族側の『勇者』として招かれる。そういう契約だった。俺の能力は素晴らしいってさ。勇者の下で燻っているのは勿体無いつてさ。やつぱり、分かるやつには分かるんだよ。実際、超強い魔物も貸してくれたし、それで、想像以上の軍勢も作れたし……だから、だから絶対、あんたを殺せると思ったのに！何だよ！何なんだよっ！何で、六万の軍勢が負けるんだよ！何で異世界にあんな兵器があるんだよっ！お前は、お前らは一体何なんだよっ！」

最初は嘲笑するように、生徒から放たれた『殺す』という言葉に呆然とする愛子を見ていた清水だったが、話している内に興奮してきたのか、ハジメの方に視線を転じ喚き立て始めた。その眼は、陰鬱さや卑屈さ以上に、思い通りにいかない現実への苛立ちと、邪魔したハジメ達への憎しみ、そして、その力への嫉妬などが交ぜになってドロドロとヘドロのように濁っており狂気を宿していた。

もちろん、ハジメにそんな目を向けて彼が黙っている訳が無い

—よし、メよう—

そう、我らが救世主。シヨウさんだ

「まさか、俺に気づかないとは。無能は君じゃないか？」

そう言つてシヨウは変身を解き、元の姿へと戻る。すると清水は驚愕と共に声を荒らげる。

「お、お前は蒼！何でお前がいるんだよ」

「我が主の旅に動向してね。さて、僕の事が分かったら、この二人も分かるかな？」

そう言つてシヨウは南雲夫婦の後ろに跪く。すると清水は「ウソデシヨ」と言わんばかりの表情で二人の名前を言う。

「まさか……………南雲と白崎さんなのか……………いや、そんな筈は無い。だってあの日二人は……………」

と、ボソボソブツブツと呪詛の様に何かを呟く清水。そこに追い討ちが入る。

「貴様がどれほど否定しようと、この二人は正真正銘『南雲ハジメ』と『白崎香織』だ。テメエはこの二人に負けたんだ。認めろ」

「……………でだよ……………」

「ん？何だつて？」

次の瞬間、清水は荒れ狂う様に叫んだ

「何でだよ！何で『落つこちただけ』でそんなんになつてんだよ！何でそんな『簡単に』チートになれんツ」

「なれんだよ！」そう言おうとした途端、叩かれた。叩いたのは他でも無い、香織だ。



香織はそのまま、豆鉄砲を食らった鳩の様な表情をした清水の胸倉を掴み、言い放つ

「落っこちただけ？ 簡単に？ 本当にそう思うの？ そんなわけ無いでしょ！ ハツくんは、私を守る為に自分の身を置いて、生きるために戦い抜いた！ 左腕を失いながらも、右目を失っても戦った。だから強くなれた！ 私もその隣に立っていたいから私も強くなった！ 貴方に分かるわけ無いよね？ 絶望の底で誰も助けに來ない奈落の底での事なんて！」

「そ、それは……………」

香織の言葉にたじろく清水。そして、その話を聴いてうつむく愛ちゃん護衛隊と先生。

「生きるために戦い抜いた」その言葉が彼らの心に重く突き刺さる。あの「最弱」があそこまで強くなったのは落ちたからだ。「落ちただけで」強くなれた。そう勘違いしていた自分を反省するように。

「……………でも……………」

そんな中、清水は顔を上げる。ソコにはまるでもう後が無い様な顔をしていた。

「それでも……………俺はもう、止まれない……………止まる事が出来ねえんだよおおおおお！」

すると清水は口の中に隠していた“何か”を飲み込む。すると清水の魔力が爆発的に膨れ上がり、あのハジメが作ったワイヤーを自力で千切った。

「総員、退避！」

そう言ってシヨウは生徒を数人担ぎ、ハジメは拾い損ねた先生と園部を抱え、他の皆もそれぞれ下がった。

先生と護衛隊の皆が慌てふためく中。清水の方は立ち上がったかと思えば、髪の毛が汚い灰色へと変色し、背中には灰色の翼が生えた。両手にはそれぞれ大きな大剣が握られており、後ろにはそれに呼応するかの様に無数白く光る楕円形の輪っかが現れ、ソコから「アシストと同じ顔の美女」が大量に現れた……………

「え、あ、アシストさんがいっぱい!？」

「使徒……………!」

「先生は下がってろ。アレはアシストじゃない。前に話していた糞野郎の手駒みたいな奴だ」

ハジメが先生に簡単に説明して、下がらせようとしたその時。使徒が分解攻撃を繰り返して、退路を絶った。

「この前は同胞が世話になりましたね。私は『ミリオン』と申します。主の命により、イレギュラー。貴方を排除します。さあ、行きましょう!勇者様。貴方が正しい事をこの世界に示すのです!」

「ああ、そうだな。この俺が正しい事を示すんだ!」

清水はミリオンと名乗る女が『勇者様』と呼び、褒め称えると嬉しいいのか優越に浸っているのか気持ち悪い笑みを浮かべ、俺達に剣を向ける。

「アシストと白崎はん達は皆を守ってくれ。ハジメは俺と一緒に戦ってくれ」

「了解」

「分かったよ!」

アシスト達は即座に動いて結界を張り、皆を守る。

「俺って事は、アレを試すのか」

「ああ、こんだけ使徒がいるんだ。実践で試すには持ってこいだろ?」

そう言っただけハジメはシヨウの隣に立ち、義手の手の甲に紅く輝く宝玉を胸の前に寄せて、右手で勢い良く回転させる。シヨウは空間魔法

で異空間に仕舞っていた、蒼い宝玉が付いた大きめのブレスレットを右腕に着け、構える。そのまま左手で真ん中にある蒼い玉に触れると一気に振り下ろして回転させる。

二人は背中を合わせ、お互いに宝玉の付いた方の手をつきだして唱える。

「『融合』」

紅と蒼の光がぶつかり合い、まるで恒星の様な光が二人を包んでいった……………

やがて最強は一つになる

荒れ狂う様に溢れ出る光の奔流。その中心の大きな魔力の塊がまるで開花する華の様に開く。ソコには、鮮やかな“紫”のラインが入った白黒の左右色ちがいのロングコートに右腕には蒼いブレスレット、左手には紅いガントレットを身に付けた紅と蒼のオッドアイの青年が立っていた。

「ど、どちら様ですか……………?」

明らかに異常な事態に戸惑う愛子先生の疑問に答えるかの様に上げられたのは、二人からの祝福だった。

「祝え！ひれ伏せ！刮目せよ！彼等こそ最高にして最強！無敵にして不敵！私達の（魔）王にして（救世）主！その名はハジメXシヨウ！世界最強が降臨した瞬間である！」

そう。アシストと香織が祝福した通り、彼は『魔王』南雲ハジメと『救世主』蒼翔が一つになった。只の最強なのだ！

『……………ホントに何があったー！?』

一同の綺麗にハモったツツコミはほっといてシヨウとハジメの融合態は清水達の方を向いた。

「かかって来いよ、勇者（笑）俺達は強いよ?」

中指を立てて挑発する融合態。先ほどの事もあって、清水は敵意MAXで魔法を放つ。

「死ねえええ！『蒼天・十連』」

蒼い炎が迫って来るが融合態は右手に呼び出した「ブルーファング」で空間ごと切り捨てる。

「な!？」

「『紅雷龍』」

清水が驚愕するなか、彼等が左手を付き出し魔法名を唱える。すると紅い雷で形成された五体の龍が放たれ、使徒達を喰い荒らしていく。

更に、ブルーファングをシユラーゲンと交換し、『瞬光』と『革新者』を同時発動させ、クロスビット等のオールレンジ兵器とエクステンドを併用し、『マルチロック複数照準』からの『ピンポイント・クイックドロウ精確&神速射ち』で次々と使徒の核を破壊する。

この間約三秒。ほとんどの使徒を撃☆滅!し、更にソコへ『マテリアルセイバー』を清水に向かって放つ!

「うわあああああ!」

「危ない!」

残った使徒達が集まって結界を張るが、無☆意☆味♪だって核を越える程の威力持つ『マテリアルバースト』に指向性を持たせて、一点突破型にしたんだ。並みの結界で防げる訳が無い。

そうして、残りの使徒はそのままエネルギーに飲まれ、跡形も泣く消えて行った。

が、その時!後ろから清水が融合態の首を狙って大剣を振るう。

「これで俺が勇者だあああああ!」

と酷く淀んだ瞳の奥に殺意を滾らせ。勝った事を確信したのか、口元が三日月の様に割け笑みを浮かべている。

そして、首に刃が当たろうとするその時！

大剣が振るった方とは逆の方向に動き、勢いで骨が折れる。

「へ？は？え？………ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

あり得ない現実！に戸惑いながらも、折れた骨から伝わる痛み 현실を突き付けられ、叫ぶ。

「腕があ！何で腕がああああ！『黙れ』ッ！」

喧しい時に毎度お世話になっている『言霊』で黙らせて融合態は清水の疑問に答える。

「俺への攻撃は全て反射される。よくラノベとかにあるだろ？って、喋れないかw」

清水はその場でのたうち回りながら融合態を睨む。憤怒、嫉妬、憎悪、屈辱、様々な負の感情が入り交じった様な表情をしていた。

——駄目だなもう救い様が無い——

そう判断した融合態はブルーファンクを掲げる。愛子は融合態が何をするつもりなのか察したようだ。血相を変えて、止めようと飛び出した。

「ダメエー！」

が、融合態の方が圧倒的に早かった。

ザシユウン

「ッ!?!」

息を呑む音。それは誰のものだったのか。『纏雷』を纏わせて焼き切ったその首からは血は流れず、断面は焼き固まった血で見えず、清水に確実に覆しようのない死を与えた。

乾いた斬撃音の余韻が響く中、誰も言葉を発せず、リボルバーソードを片手に黙って物言わぬ死体を見下ろす融合態を、唯々呆然と見つめた。静寂が辺りを支配し、誰もが動けない中、ポツリと言葉がこぼれ落ちた。

「……どうして?」

それは先生だった。呆然と、死出の旅に出た清水の亡骸を見つめながら、そんな疑問の声を出す。融合態は二人に分かれ、元のハジメとシヨウに戻ると、清水から視線を逸らして愛子を見た。同時に、愛子もまた二人に視線を向ける。その瞳には、怒りや悲しみ、疑惑に逃避、あらゆる感情が浮かんでは消え、また浮かんでは消えていく。

「敵だから……ですよ、先生」

そんな愛子の疑問に対するシヨウの答えは実に簡潔だった。

「そんな! 清水君は……」

「悪いが、アイツは!……ハジメに殺意と敵意を向けた!その刃を向けた!俺が殺すには……十分な理由です」

「だからって殺す事なんて! 王宮で預かってもらって、一緒に日本に帰れば、もしかしたら……可能性はいくらだって!」

「生徒思いの貴方には納得出来ないかも知れません。それなら恨んでも構いません。憎んでも構いません。」

「……そんなこと」

「『寂しい生き方』。先生の言葉は昔のハジメを少しは取り戻させてもらった。でも、人の命が酷く軽いこの世界で、ハジメに敵対した者には容赦しないという考えは……変えられそうもない。『あの日』決めたんだ。二度とハジメを失いたくない。だから、俺はこの刃を振るう」

「蒼君……」

「これからも俺は、同じことをする。必要だと思ったその時は……いくらでも、何度でも破壊と殺戮を繰り返す。それが間違っていると思

うなら……先生も自分の思った通りにすればいい……ただ、覚えておいてくれ。例え先生でも、クラスメイトでも……敵対するなら、俺は全てを叩き潰す……それが罪と言うなら、俺はそれを背負って行きま  
す」

唇を噛み締め、俯く愛子。〃自分の話を聞いて、なお決断したことなら否定しない〃 そう言ったのは他でもない愛子なのだ。言葉が続かない。シヨウは踵を返し、先に皆と合流していたハジメと肩を並べてその場を去ろうとしたその時！ 『全事象把握』が何かをとらえた  
「!? しまっ——」

「しまった」そう言おうとしたが事態が動く方が早かった。

蒼色の水流が、先生の胸を貫通して、レーザーの如く通過した。

「先生！」

シヨウは何も言わずとも望んだ通りの行動をしてくれた南雲夫婦に内心で感謝と称賛を送りながら、転移で水流の出元の近くに向かう。ソコには黒い服を来た耳の尖ったオールバックの男が、大型の鳥のような魔物に乗り込む姿が見えた。

おそらく、あれが清水の言っていた魔人族なのだろうとシヨウは推測した。そしてシヨウは『マッドハックサイコ』にフォームチェンジし、ガントレットを前に突きだして、唱える

『ハック』

すると、ガントレットの指先からコードの様な物が伸び、魔人族の男に突き刺さる。

「ぐあああー！」

男が呻き声を上げるが、シヨウはそのまま作業を進める。

すると男の体が膨れ上がり、みるみるその姿を変えていく。顔は蜥



蛎の様に前に出て、蛙の様な三本指先。胴体は只の肉の塊と、一般人が見たらS A N値直葬の異形へと姿を変えた。そして、脳内と臓器を少し弄り、到着した頃には自爆するように設定した。

これは『ハック』と言い。変成魔法を使い、ガントレットから放たれたコードを通して、肉体構造に干渉し異形の化け物へと作り替えるマッドハックサイコの十八番とも言える技だ。

鳥の魔物は、自身の主がそんな事になっているとも気づかずにそのまま飛び去って行った……………

---

一仕事終えて戻ると、ハジメに抱き抱えられている先生が香織の回復魔法による治療が終わった所だ。

「先生。大丈夫か？」

「あ、はい！おかげさまでですが……………その……………そろそろ下ろしても  
らえませんか……………？」

「ああ、そうだったな」

ハジメが、先生を下ろすと先生は香織に向かって頭を下げる

「白崎さん、回復魔法ありがとうございました」

「大丈夫ですよ先生。このくらい何ともありません」

と、やりとりを見届けた後、俺は声をかける。

「ハジメ、戻った」

「おう。お疲れさん」

シヨウは全員が居ることを確認し今度こそ、フューレンへと出発  
「さ、行くか」

シヨウはゲートを開き、ウィル達を引き連れて移動するその時。ハ

ジメは、少し立ち止まると肩越しに愛子に告げる。

「……先生の理想は既に幻想だ。ただ、世界が変わっても俺達の先生であろうとしてくれている事は嬉しく思う……出来れば、折れないでくれ」

そして、今度こそ立ち止まらずゲートを越えて行く………

## 支部長、気絶

現在、俺達は冒険者ギルドにある応接室に通されていた。

出された如何にも高級そうなお茶と茶菓子をバリボリ、ゴクゴクと遠慮なく貪りながら待つこと五分。部屋の扉を蹴破らん勢いで開け放ち飛び込んだできたのは、俺達にウイル救出の依頼をしたイルワ・チャングだ。

「ウイル！ 無事かい!? 怪我はないかい!?!」

以前の落ち着いた雰囲気などかなぐり捨てて、視界にウイルを収めると挨拶もなく安否を確認するイルワ。それだけ心配だったのだろう。

「イルワさん……すみません。私が無理を言ったせいで、色々迷惑を……」

「……何を言うんだ……私の方こそ、危険な依頼を紹介してしまった……本当によく無事で……ウイルに何かあつたらグレイルやサリアに合わせる顔がなくなるところだよ……二人も随分心配していた。早く顔を見せて安心させてあげるといい。君の無事は既に連絡してある。数日前からフューレンに来ているんだ」

「父上とママが……わかりました。直ぐに会いに行きます」

イルワは、ウイルに両親が滞在している場所を伝えると会いに行くよう促す。ウイルは、イルワに改めて搜索に骨を折ってもらったことを感謝し、ついで、俺達に改めて挨拶に行くと約束して部屋を出て行った。俺はこれっきりで良かったのだが、きちんと礼をしないと気が済まないらしい。

ウイルが出て行った後、改めてイルワとハジメが向き合う。イルワは、穏やかな表情で微笑むと、深々と俺に頭を下げた。

「ハジメ君、蒼君、今回は本当にありがとう。まさか、ウイルだけじゃなくて他の冒険者も生きて連れ戻してくれるとは思わなかった。感謝してもしきれないよ」

「まあ、頑張ったのはショウウだから礼はショウウに言ってくれ」

「ふふ、そうかな？ 確かに、それもあるだろうが……何万もの魔物の群れから守りきってくれたのは事実だろう？ 女神の騎士団様？」

にこやかに笑いながら、俺らが大群との戦闘前にした演説の内容から文字った二つ名を呼ぶイルワ。俺は頬が引き攣らせる。どうやら、ギルド支部長には、割りと早い情報伝達方法があるようだ。

「……随分情報が早いな」

「ギルドの幹部専用だけだね。長距離連絡用のアーティファクトがあるんだ。私の部下が君達に付いていたんだよ。といっても、あのとんでもない移動魔法のせいで常に後手に回っていたようだけど……彼の泣き言なんて初めて聞いたよ。諜報では随一の腕を持っているんだけどね」

そう言って苦笑いするイルワ。最初から監視員がついていたらしい。ギルド支部長としては当然の措置なので、俺は特に怒りを抱くこともない。むしろ、支部長の直属でありながら、常に置いていかれたその部下の焦りを思うと、中々同情してしまう。

「それにしても、大変だったね。まさか、北の山脈地帯の異変が大惨事の予兆だったとは……二重の意味で君に依頼して本当によかった。数万の大群を殲滅した力にも興味はあるのだけど……聞かせてくれるかい？ 一体、何があつたのか」

「ああ、構わねえよ。だが、その前にユエとシアとアシストのステータスプレートを頼むよ……ティオは『うむ、二人が貰うなら妾の分も頼めるかの』……ということだ」

「ふむ、確かに、プレートを見たほうが信憑性も高まるか……わかった

よ」

そうやって、イルワは、職員を呼んで真新しいステータスプレートを四枚持ってこさせる。

結果、俺達のステータスも確認して、全員のステータスは以下の通りだった。

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル:???

天職:錬成師・(夜の)魔王・蒼シヨウの相棒

筋力:ムゲン

体力:無限

耐性:インフィニティ

敏捷:INFINITY

魔力:∞

魔耐:インフィニットウ!

技能:錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」「+圧縮錬成」「+高速錬成」「+自動錬成」「+イメージ補強力上昇」「+消費魔力減少」「+鉱物分解」「+集束錬成」「+想像構成」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・紅帝雷電「+纏雷」「+紅雷龍」・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+爆縮地」「+重縮地」「+震脚」「+無拍子」「+瞬光」・革新者「+ニュータイプ」「+ゼロシステム」「+SED」「+純粹種」「+Xラウンダー」「+阿頼耶識」・銃技「+命中率上昇」「+遠見」「+鷹の目」「+真眼」「+弾曲」「+銃格闘」「+空間認識」「+複数照準」「+透き通る世界」・風爪「+三爪」「+飛爪」・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・状態異常無効・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・絶対的主人公「+プレッシャー」

「十夜の魔王」「十主人公補正」・魔力変換「十体力」「十治癒力」「十精力」「十衝撃変換」・限界突破「十持続時間上昇」「十戦鬼」「十霸潰」・技能習得・力量操作・生成魔法・重力魔法・言語理解

|||||

|||||

南雲香織（旧姓：白崎） 17歳 女

レベル：???

天職：治癒師・南雲ハジメの嫁

筋力：109500

体力：131900

耐性：106700

敏捷：134500

魔力：147800

魔耐：147800

技能：回復魔法「十効果上昇」「十回復速度上昇」「十イメージ補強力上昇」「十浸透看破」「十範囲効果上昇」「十遠隔回復効果上昇」「十状態異常回復効果上昇」「十消費魔力減少」「十魔力効率上昇」「十連続発動」「十複数同時発動」「十遅延発動」「十付加発動」「十想像構成」・光属性適性「十発動速度上昇」「十効果上昇」「十持続時間上昇」「十連続発動」「十複数同時発動」「十遅延発動」「十想像構成」・高速魔力回復「十瞑想」・魔力操作「十魔力放射」「十魔力圧縮」「十遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「十空力」「十縮地」「十豪脚」「十爆縮地」「十重縮地」「十震脚」「十無拍子」「十瞬光」「十革新者」・風爪・夜目・遠見・気配感知「十特定感知」・魔力感知「十特定感知」・熱源感知「十特定感知」・気配遮断「十幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・魔力変換「十体力」「十治癒力」・限界突破「十持続時間上昇」「十戦鬼」「十霸潰」・力量操作・生成魔法・重力魔法・言語理解



洗濯」「＋修理」「＋時短術」「＋家庭の知恵」・アシスト「＋特定念話」「＋思考共有」「＋ステータス共通」「＋技能共有」「＋お楽しみ（意味深）」・偽装「＋外見変化」「＋力量操作」「＋光学迷彩」「＋隠業」「＋証拠隠滅」・作者使役「＋技能作成」・神代魔法「＋概念魔法」「＋想像構成」「＋効果向上」「＋複数同時構成」「＋遅延発動」「＋自動発動」「＋イメージ補強力上昇」・言語理解「＋念話」  
・もうコイツ一人でいいだろ!?

|||||

|||||  
|||||

南雲ユエ 323歳 女 レベル：75

天職：南雲ハジメの嫁

筋力：120

体力：300

耐性：60

敏捷：120

魔力：6980

魔耐：7120

技能：自動再生「＋痛覚操作」・全属性適性・複合魔法・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」「＋効率上昇」「＋魔素吸収」・想像構成「＋イメージ補強力上昇」「＋複数同時構成」「＋遅延発動」・血力変換「＋身体強化」「＋魔力変換」「＋体力変換」「＋魔力強化」「＋血盟契約」・高速魔力回復・生成魔法・重力魔法

|||||  
|||||

|||||  
|||||

シア・ハウリア 16歳 女 レベル：40





|| || || || || || || || || ||

蒼アシスト 0歳 女 レベル：100

天職：シヨウの嫁

筋力：[共有]

体力：[共有]

耐性：[共有]

敏捷：[共有]

魔力：[共有]

魔耐：[共有]

技能：アシスト「+特定念話」「+思考共有」「+ステータス共通」「+

技能共有」「+お楽しみ（意味深）」・ANW・支援魔法「+想像構成」

「+複数同時構成」「+遅延発動」「+自動発動」・解説

|| || || || || || || || || ||

「……………うぼお」

と、奇妙な声を上げながら支部長はその場に倒れた。

—————

イルワ支部長の直葬したSAN値を（シヨウが魂魄魔法で）回復させて、報酬を受け取った後、イルワと別れ、俺達はフューレンの中央区にあるギルド直営の宿のVIPルームでくつろいだ。途中、ウイルの両親であるグレイル・グレタ伯爵とサリア・グレタ夫人がウイルを伴って挨拶に来た。かつて、王宮で見た貴族とは異なり随分と筋の通った人のようなのだ。ウイルの人の良さというものが納得できる両親だった。

グレイル伯爵は、しきりに礼をしたいと家への招待や金品の支払いを提案したが、俺は辞退して、困ったことがあればどんなことでも力になると言い残し去っていった。

広いリビングの他に個室が四部屋付いた部屋は、その全てに天蓋付きのベッドが備え付けられており、テラスからは観光区の方を一望できる。俺は、ベットにゴロンと寝転びながら、リラックスした様子で深く息を吐いた。

香織が、俺の頭を持ち上げて何時ものように膝枕をする。ユエは、すぐ側に寝っ転がって俺の頭を撫でる。シアは、足元に腰掛けた。ティオは、キョロキョロと物珍しげに部屋を見渡している。ウチの給仕達は超大型ソファーに座ってお互いに肩を寄せあっていた。スペースが無駄に空いてやがる

「取り敢えず今日はもう休もう。明日は消費した食料とかの買い出しとかしなきゃな」

「それなら私とユエとティオでやっておくよ」

「ンツ！ティオとは少しお話したいし」

と、俺が、髪を撫でてくるユエの手の感触に気持ちよさそうに目を細めながら、翌日の予定を口にし、それを任せてと言う二人。何を話すのかは聴かないでおこう。多分二人……いや、蒼夫婦も含めて四人が画作している『ハーレム計画』とかそこの事だろう……

「あ、じゃあアシスト。明日デートしないか？」

「行きましょう」

向こうは向こうで即決だった。人の事を言えないがお熱い事だ。んで、俺はどうするか……いや、ホントは分かった。だって足元でウサミミが荒ぶっている少女がいて、ニヤニヤとコツチを見る夫婦が一緒……俺に逃げ場は無いようだ。

「シア、明日少し町を回らないか？」

あえて「デート」と言う言葉を使わなかったのは、只の僅かな抵抗だ。俺が心から欲しいと望むのは香織とユエの二人。そして、二人に

向けるのとは違う特別な感情——『相棒』何て思えるのは世界にただ一人、シヨウだけだ。でも、シアの事もそれなりには大切だと思ってる。それに、味方には優しくって事も納得はしている。だから、少しくらいは二人以外を甘やかしても良いと思ってる……………

「はい！色んな所を回りましたよ」

シアは満面の笑みで答えた。それはもう嬉しそうで、ウサミミが「わーい」と、言ってるかのようにみよんみよん動いていた。

その後、俺と皆で『ビルダーズ・Lab（ラボ）』で追加の装備を制作し、あれこれ雑談しつつ、その日の夜は更けていった。

デート……………って言ったのに！

「シヨウ、今日は何処に行きますか？」

「お前と一緒に何処でも行くぞ？」

とやり取りをしながら、俺達は町を歩く。取りあえず、何か食べ歩くのも悪くないだろう。

「では、アソコで鳥串を買って歩きますか？」

アシストの提案に賛成し、鳥串を六本ほど買って二人で訳ながら食べ歩く。中々旨かった。

「では、次はアソコに行きませんか？」

と、アシストは古本屋を指差す。そう言えば、この世界の本をあまり読んだこと無いような気がする。そう考えながら俺達は古本屋へ立ち寄る。

「そう言えば『言語理解』って本も分かるんだな。」

「そうですね……………所でこの本のこのページに面白い事が書いてあるのですが」

と、アシストが読んでいる歴史の本を覗き込むと、ソコには「吸血鬼」の絶滅について書かれていた。

『神の信託によって滅ぼされた』……………アシスト、ここ詳しく調べといてくれないか？ネットワークも使って」

「かしこまりました。さて、次は……………」

---

―服屋にて―

「コッチとコッチの服、どっちが似合いますか？」

「コッチもアリだぞ？」

「むむっそう来ましたか……………」

「つーか、アシストなら何着ても綺麗か可愛いのに二択だろ？」

「なら今回はセクシー系が良いですかね？」

「止めとけ。血溜まり沼が出来る」

ーアクセサリー店にてー

「あ、この指輪。オルクスで取れたグラントツ鉱石の指輪ですって！」

「懐かしいな……………」

「そうですね……………」

「俺達は強くなった。守ろう、今度こそ」

「はい。私達、二人で……………」

ー水族館にてー

「何か事件が起きてるね。ハジメかな？」

「どうでしょうか……………有り得そうですね……………他の所を回りましょう！」

「…………まるで雛に餌をやる親鳥の気分だ」

「でも、幸せな事には変わりませんよね」

俺達は店のテラスでパスタを食べている。上の台詞から察しの通り、現在「はい、あーん」しています。え？リア充爆発しろ？フツ、俺もそんな事を考えた時期がありました……………

と、楽しんでたのに、それに水を刺す様に遠くから爆破音が聴こえた。

「他のリア充さんが爆発しましたか？」

「……………なら良いんだけど……………良くないけど」

『おーい、蒼くん。聴こえるかな？かな？』

と、白崎はんから念話が入った。

『白崎はん、今のは一体……………』

『実はこんな事があってね……………』

白崎はんの説明を要約するところだ。

ハジメ達がデート中に「ミュウ」と言う海人族の少女を、保護して一通り介抱したら、妙になつかれてしまい、連れて行く事も出来ないので保安署へ半ば強引に預けることにしたがその後、「フリートホーフ」と言う組織が保安署を襲撃して、ミュウを攫った。

更に、そこには白髪の兎人族……………シアはんを連れてくるようにと壁に伝言が書かれていたのだ。

つまり、裏の組織はハジメに喧嘩を売った様な物だ。で、それを滅ぼすと

『で。指定された場所に行ってみれば、そこには武装したチンピラがうじゃうじゃいて、ミュウ自身はいなかったんだよ。たぶん、最初からハツくんを殺してシアだけ頂く気だったんだろうね。取り敢えず数人残して、皆殺しにした後、ミュウちゃんがどこか聞いてみたんだけど……………知らないらしくて。拷問して他のアジトを聞き出して……………それを繰り返している時に私達も合流したところなの。それで蒼くんの主からの命令だよ。「ミュウを探すの手伝え。ついでに裏組織を潰すのも。」だって』

『御意』

俺はそう返して、アシストの方を向く。

「話は分かりました。子供を食い物にする汚物の掃除ですね」

「フツ、つくづく良い女だよ。お前は」

そのまま俺とアシストは『融合』し、『全事象把握』で、ミュウはん

の居場所と、組織の関連施設全てを掴み、ハジメに『念話』を繋ぐ

『ハジメ、話は聴いたよ。見つけたから情報は直接頭に送るから』  
『分かった。ミュウや他の子供を保護次第、一気に潰す』

---

—三人称視点—

オークション会場は、一種異様な雰囲気にも包まれていた。

会場の客はおよそ百人ほど。その誰もが奇妙な仮面をつけており、物音一つ立てずに、ただ目当ての商品が出てくるたびに番号札を静かに上げるのだ。素性をバラしたくないがために、声を出すことも躊躇われるのだろう。

そんな細心の注意を払っているはずの彼等ですら、その商品が出てきた瞬間、思わず驚愕の声を漏らした。

出てきたのは二メートル四方の水槽に入れられた海人族の幼女ミュウだ。衣服は剥ぎ取られ裸で入れられており、水槽の隅で膝を抱えて縮こまっている。海人族は水中でも呼吸出来るので、本物の海人族であると証明するために入れられているのだろう。一度逃げ出したせいか、今度は手足に金属製の枷をはめられている。小さな手足には酷く痛々しい光景だ。

多くの視線に晒され怯えるミュウを尻目に競りは進んでいく。ものすごい勢いで値段が上がっていくようだ。一度は人目に付いたというのに、彼等は海人族を買って隠し通せると思っているのだろうか。もしかすると、昼間の騒ぎをまだ知らないのかもしれない。

ざわつく会場に、ますます縮こまるミュウは、その手に持っていた



黒い布をギュツと握り締めた。それは、ハジメの眼帯だ。ミュウと別れる際、ミュウを宥めることに忙しくてすっかりその存在を忘れていたハジメは、後になって思い出し、現在は予備の眼帯を着けている。

そのハジメの眼帯が、ミュウの小さな抛り所だった。母親と引き離され、辛く長い旅を強いられ、暗く濼んだ牢屋に入れられて、汚水に身を浸し、必死に逃げて、もうダメだと思ったその時、温かいものに包まれた。何だかいい匂いがすると目を覚ますと、目の前には片目に黒い布を付けた白髪の少年がいる。驚いてジツと見つめっていると、何か逸らしてなるものかとても言うように、相手も見つめ返してきた。ミュウも、何だか意地になって同じように見つめ返していると、鼻腔をくすぐる美味しそうな匂いに気が逸れる。

その後は聞かれるままに名前を答え、次に綺麗な紅い光が迸ったかと思うと、温かいお湯に入れられ、少年に似た、しかし、少し青みがかつた白髪のウサミミお姉さんに体を丸洗いされた、温かなお風呂も優しく洗ってくれる感触もとても気持ちよくて気がつけばシアと名乗るお姉さんを「お姉ちゃん」と呼び完全に気を許していた。

膝の上に抱っこされ、食べさせてもらった串焼きの美味しさを、ミュウは、きつと一生忘れないだろう。夢中になってあくんされるままに食べていると、いつの間にかいなくなっていたハジメと名乗る少年が帰ってきた。少し警戒心が湧き上がったが、可愛らしい服を取り出すと丁寧に着せてくれて、温かい風を吹かせながら何度も髪を梳かれているうちに気持ちよくなってすっかり警戒心も消えてしまった。

だから、保安署というところに預けられてお別れしなければならぬいと聞かされた時には、とてもとても悲しかった。母親と引き離され、ずっと孤独と恐怖に耐えてきたミュウにとって、遠く離れた場所で出会った優しいお兄ちゃんとお姉ちゃんと離れ、再び一人になることは耐え難かったのだ。

故に、ミュウは全力で抗議した。ハジメの髪を引つ張ってやったし、頬を何度も叩いたし、目に付けた黒い布だつて取ってやったのだ。返して欲しくばミュウと一緒にいるがいい！ と。しかし、ミュウと一緒にいたかつたお兄ちゃんとお姉ちゃんは、結局、ミュウを置いて行つてしまった。

ミュウは、身を縮こまらせながら考えた。やっぱり、痛いことしたから置いていかれたのだろうか？ 黒い布を取つたから怒らせてしまったのだろうか？ 自分は、お兄ちゃんとお姉ちゃんに嫌われてしまったのだろうか？ そう思うと、悲しくて悲しくて、ホロリと涙が出てくる。もう一度会えたら、痛くしたことをゴメンなさいするから、黒い布も返すから、そうしたら今度こそ……どうか一緒にいて欲しい。

「お兄ちゃん……お姉ちゃん……」

ミュウがそう呟いたとき、不意に大きな音と共に水槽に衝撃が走つた。「ひうー」と怯えたように眉を八の字にして周囲を見渡すミュウ。すると、すぐ近くにタキシードを着て仮面をつけた男が、しきりに何か怒鳴りつけながら水槽を蹴っているようだと思ふ。どうやら更に値段を釣り上げるために泳ぐ姿でも客に見せたかつたらしく、一向に動かないミュウに痺れを切らして水槽を蹴り飛ばしているらしい。

しかし、ますます怯えるミュウは、むしろ更に縮こまり動かなくなる。ハジメの眼帯を握り締めたままギュウと体を縮めて、襲い来る衝撃音と水槽の揺れにひたすら耐える。

フリートホーフの構成員の一人で裏オークションの司会をしているこの男は、余りに動かないミュウに、もしかや病気なのではと疑われ

て値段を下げられるのを恐れて、係りの人間に棒を持ってこさせた。それで直接突いて動かそうというのだろう。ざわつく客に焦りを浮かべて思わず悪態をつく。

「全く、辛気臭いガキですね。人間様の手を煩わせているんじゃないやありませんよ。半端者の能無しのごときが！」

そう言つて、司会の男が脚立に登り上から棒をミュウ目掛けて突き降ろそうとした。その光景にミュウはギュウと目を瞑り、衝撃に備える。

が、やってくるはずの衝撃の代わりに届いたのは……聞きたかった人の声だった。

「そのセリフ、そっくりそのまま返すぞ？　クソ野郎」

次の瞬間、天井より舞い降りた人影が、司会の男の頭を踏みつけると、そのまま脚立ごと猛烈な勢いで床に押しつぶした。ビシャアア！と司会の男から破裂したように血が飛び散る。まさに圧殺という有様だった。

衝撃的な登場をした人影、ハジメは、潰れて一瞬で絶命した男の事など目もくれず義手で水槽を殴りつけた。バリントツ！という破砕音と共に水槽が壊され中の水が流れ出す。

「ひゃうー」

流れの勢いで、ミュウも外へと放り出された。思わず悲鳴を上げるミュウだったが、直後ふわりと温かいものに受け止められて、瞑っていた目を恐る恐る開ける。そこには、会いたいと思っていた人が、声が聞こえた瞬間どうしようもなく期待し思い浮かべた人が……確か

にいた。自分を抱きとめてくれていた。ミュウは目をパチクリとし、初めて会った時のようにジツとハジメを見つめる。

「よお、ミュウ。お前、会うたびにびしょ濡れだな？」

冗談めかしてそんな事を言うハジメに、ミュウは、やはりジツと見つめたまま、ポツリと囁くように尋ねる。

「……お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんかどうかは別として、お前に髪を引つ張られ、頬を引つ搔かれた挙句、眼帯を取られたハジメさんなら、確かに俺だ」

ハジメが苦笑いしながらそう返すと、ミュウはまん丸の瞳をジワツと潤ませる。そして……

「お兄ちゃん!!」

ハジメの首元にギュツウと抱きついてひっぐひっぐと嗚咽を漏らし始めた。ハジメは困った表情でミュウの背中をポンポンと叩く。そして、手早く毛布でくるんでやった。

と、再会した二人に水を差すように、ドタドタと黒服を着た男達がハジメとミュウを取り囲んだ。客席は、どうせ逃げられるはずがないとでも思っているのか、ざわついてはいるものの、未だ逃げ出す様子はない。

「クソガキ、フリートホーフに手を出すとは相当頭が悪いようだな。その商品を置いていくなら、苦しまずに殺してやるぞ?」

二十人近くの屈強そうな男に囲まれて、ミュウは、首元から顔を離し不安そうにハジメを見上げた。ハジメは、ミュウの耳元に顔を近づ

けると、煩くなるから耳を塞いで、目を閉じていろと囁き、小さなぷくぷくしたミュウの手を取って自分の耳に当てさせる。ミュウは不思議そうにしながらも、焦燥感も不安感もまるで感じさせない余裕の態度をとるハジメに安心したように頷くと、素直に両手で耳を塞いで目を瞑り、ハジメの胸元にギュツと顔を埋めた。

完全に無視された形の黒服は額に青筋を浮かべて、商品に傷をつけるな！ ガキは殺せ！ と大声で命じた。その瞬間、

ドパンツ!!

そんな乾いた破裂音と共に、リーダー格と思われる黒服の頭部が爆ぜた。誰もが「えっ？」と事態を理解できないように目を丸くして後頭部から脳髓を撒き散らして崩れ落ちる黒服を見つめる。その隙に、ハジメは更に発砲。誰もが何をされているのかわからず硬直している間に、連続した発砲音が響き渡り、彼等が正気を取り戻す頃には十二体の頭部を爆ぜさせた死体が出来上がった。

その時になってようやく、目の前の少年を尋常ならざる相手だと悟ったのか、黒服たちは後退り、客達は悲鳴を上げて我先にと出口に殺到し始めた。

「お、お前、何者なんだ！ 何が、何で……こんなっ！」

混乱し、恐怖に戦きながらも、必死に虚勢を張って声を荒げる黒服の一人。奥から更に十人ほどやってきたがホールの惨状をみて尻込みしている。

そんな彼等をハジメは鼻で笑う。

「何で？ 見りゃわかるだろ？ 奪われたもんを奪い返しに来ただけ

だ。あとは……唯の見せしめだな。俺の連れに手を出すとこうなるっていう。だから、終わりは派手にいかせてもらおうぞ?。」

ハジメはそう言うと、『空力』を使ってホールの天井まで上がって行き、いつの間にか空いていた穴に飛び込んでそのまま建物の外まで空いた穴を通って地上へと出た。

『ユエ。ミュウは無事確保した。そっちはどうだ?』

『……ん、避難完了。後は、客がワラワラ出てくるところ』

『そうか、じゃあファイナーレは派手に行こう』

『んっ!』

ハジメは、*“空力”*で更に上空に駆け上がりながら、ミュウに話しかけた。律儀にハジメの言いつけを守り耳を塞いでハジメの胸元に顔を埋めていたミュウは、ハジメの「もういいぞ、ミュウ」という言葉に目をパチクリさせながら周囲を見渡し……「ふわっ!」という驚きの声を上げた。

それはそうだろう。目を開けてみれば、周囲は町を一望できるほどの上空なのである。地平の彼方には、まさに沈もうとしている夕日が真っ赤に燃え上がりながら空を赤く染め上げており、地上には人工の光が点々と輝きだし、美しいイルミネーションを作り上げていた。その初めて見る雄大な光景にミュウは瞳を輝かせてワーキヤー言いながらハジメの胸元を掴んではしゃいでいる。

「お兄ちゃん凄いの! お空飛んでるの!」

「飛んでるんじゃないやなくて跳んでるだけなんだが……まあいいか。それより、ミュウ、今から凄い物を見せてやる」

「凄い物?」

「ああ、行くぞ?」

「みゅ!」

ハジメはユエと『念話』でタイミングを合わせて放つ

『紅雷龍』

「……『雷龍』」

すると、黄金の龍頭4つと紅の龍頭5つが、まるで九頭竜の様な姿で現れる。九頭竜は雷鳴を轟かせながら「フリートホーフ」各拠点と同時に荷電粒子砲プラズマを放った。稲光で更に周囲と空を染め上げて、轟音と共に建物が崩壊する音がフューレンに響き渡る。爆炎と粉塵が至るところから上がっており、夕日と炎に照らされて赤く染まる今のフューレンは、まるで空爆にでもあつた戦時中の町のようなだった。

「…………お兄ちゃん凄すぎるの」

この時ミュウは若くして呆れと言う物を覚えた。

---

—シヨウ視点—

「倒壊した建物二十二棟、半壊した建物四十四棟、消滅した建物五棟、死亡が確認されたフリートホーフの構成員九十八名、再起不能四十四名、重傷二十八名、行方不明者百十九名……で？ 何か言い訳はあるかい？」

「カツとなつたので計画的にやった。反省も後悔もない」

「後始末お願いします」

「はあ~~~~~」

冒険者ギルドの応接室で、ハジメと白崎はんがイルワ支部長に報告していた。

そのハジメの膝にはミュウはんが座っている。

「まさかと思うけど……メアシユタツトの水槽やら壁やらを破壊してリーマンが空を飛んで逃げたという話……関係ないよね？」

「…………ミュウ、これも美味いぞ？ 食ってみろ」

「あ〜ん」

—アレもお前らだったんかい……………  
と、俺は遠い目で明後日の方向を見つめる。

「それで、そのミュウ君についてだけど……………」

そうしている間に話は進み、イルワがはむはむとクツキーを両手で持ってリスのように食べているミュウに視線を向ける。ミュウは、その視線にビクツとなると、またハジメ達と引き離されるのではないかと不安そうにハジメやユエ、シアを見上げた。テイオに視線がいかないのは…………子供が有害なものを見ないようにするのは年長者の役目ということだ。

「こちらで預かって、正規の手続きでエリセンに送還するか、君達に預けて依頼という形で送還してもらうか…………二つの方法がある。君達はどっちがいいかな？」

誘拐された海人族の子を、公的機関に預けなくていいのかと首を傾げるハジメに、イルワが説明するところによると、ハジメの「金」と今回の暴れっぷりの原因がミュウの保護だったという点から、任せてもいいということになったらしい。

「ハジメさん…………私、絶対、この子を守ってみせます。だから、一緒に…………お願いします」

シアが、ハジメに頭を下げる。どうしても、ミュウが家に帰るまで一緒にいたいようだ。ユエとテイオは、ハジメの判断に任せるようで沈黙したままハジメを見つめている。

「お兄ちゃん…………一緒…………め？」

自分の膝の上から上目遣いで「め？」とか反則である。というより、



ミュウを取り返すと決めた時点で、本人が望むなら連れて行ってもいいかと考えていたので、結論は既に出ている。

「まあ、最初からそうするつもりで助けたからな……ここまで情を抱かせておいて、はいさよならなんて真似は流石にしねえよ」

「ハジメさん！」

「お兄ちゃん！」

満面の笑みで喜びを表にするシアとミュウ。【海上の都市エリゼン】に行く前に【大火山】の大迷宮を攻略しなければならぬが、そこでショウが「俺が預かるから行ってこい！」と、名乗り出てくれたのでミュウの同行を許す。

「ミュウ。そのお兄ちゃんってのは止めてくれないか？ 普通にハジメでいい」

ハジメがそう言うと、ミュウは少し考えて、

「……じゃあパパー！」

「………な、何だって？ 悪い、ミュウ。よく聞こえなかったんだ。もう一度頼む」

「パパー！」

「……そ、それはあれか？ 海人族の言葉で『お兄ちゃん』とか『ハジメ』という意味か？」

「ううん。パパはパパなの！」

「うん、ちよつと待とうか」

ハジメが目元を手で抑えると、

「何で『パパ』なんだ？」

「ミュウね、パパいないの……ミュウが生まれる前に神様のところにいつちやったの……キーちゃんにもルーちゃんにもミーちゃんにもいるのにミュウにはいないの……だからお兄ちゃんがパパなの」

「何となくわかったが、何が『だから』なんだとツッコミたい。ミュウ。頼むからパパは勘弁してくれ。俺は、まだ17なんだぞ?」

「やつ、パパなの!」

「わかった。もうお兄ちゃんがいい! 贅沢はいわないからパパは止めてくれ!」

「やつー!! パパはミュウのパパなのー!」

その後、あの手この手でミュウの「パパ」を撤回させようと試みるが、ミュウ的にお兄ちゃんよりしつくり来たようでも意外なほどの強情さを見せて、結局、撤回には至らなかった。こうなったら、もう、エリセンに送り届けた時に母親に説得してもらおうしかない、奈落を出てから一番ダメエージを受けたような表情で引き下がったハジメ。

イルワとの話し合いを終え宿に戻ってからは、誰がミュウに「ママ」と呼ばせるかで紛争が勃発し、取り敢えず、ハジメはミュウに悪影響が出そうなテイオだけは縛り付けて床に転がしておいた。当然、興奮していたが……

結局、「ママ」は本物のママしかダメらしく、ユエもシアも一応テイオも「お姉ちゃん」で落ち着いた。

ちなみに俺はと言うと

「ミュウはん、もし良かったら俺の事は叔父ちゃんって呼んでくれな  
いか?」

「?………シヨウ叔父ちゃん?」

「うんーよろしくね!」

この日、十七歳でパパになった魔王ハジメと十七歳で叔父になった救世主シヨウウ  
……これより子連れの旅が始まる!

## 魔人族

ーオルクス大迷宮ー

勇者（笑）が迷宮の探索を続けて約4ヶ月。

今迷宮の攻略を進めているのは光輝、龍太郎、鈴、恵里、雫の他、永山、重吾を含める5人及びくたばった檜山を除いた小悪党組達3人の13人。

香織が落っこちた影響で回復役が居なくなることを心配した私だったが、永山パーティーの中に香織と同じ『治癒師』の天職を持った子がいた。

お陰で迷宮の90階層に辿り着いた私達は、異常事態に頭を悩ませていた。

異常事態と言っても、魔物が大量発生しているとか、トラップが大量に仕掛けられてるとかじゃない。

その逆で魔物が一切見当たらない。

その事実にも、雫は嫌な予感が拭えなかった。

「……どうなってる?」

「……何で、これだけ探索しているのに唯の一体も魔物に遭遇しないんだ?」

他のメンバーもそれは思っていたようで、思わず口に出した。

「……………なんつうか、不気味だな。最初からいなかっただのか？」

龍太郎と同じように、メンバーが口々に可能性を話し合うが答えが見つかるはずもない。困惑は深まるばかりだ。

「……………光輝。一度、戻らない？ 何だか嫌な予感がするわ。メルド団長達なら、こういう事態も何か知っているかもしれないし」

雫が警戒心を強めながら、光輝にそう提案した。光輝も、何となく嫌な予感を感じていたので雫の提案に乗るべきかと考えたが、何らかの障碍があつたとしてもいずれにしろ打ち破って進まなければならぬ。

光輝が迷っていると、不意に、辺りを観察していたメンバーの何人かが何かを見つけたようで声を上げた。

「……………これ、魔物の血……………だよな？」

「薄暗いし壁の色と同化してるから分かりづらいけど……………あちこち付いているよ」

「おいおい……………これ……………結構な量なんじゃ……………」

次々に異変に気付くメンバー。

「天之河……………八重樫の提案に従った方がいい……………これは魔物の血だ。それも真新しい」

永山君がそう言う。

「そりゃあ、魔物の血があるってことは、この辺りの魔物は全て殺されたって事だろうし、それだけ強力な魔物がいるって事だろうけど……………いずれにしろ倒さなきゃ前に進めないだろう？」

光輝の反論に永山君は首を振った。

「天之河……………魔物は、何もこの部屋だけに出るわけではないだろう。」

今まで通って来た通路や部屋にも出現したはずだ。にもかかわらず、俺達が発見した痕跡はこの部屋が初めて。それはつまり……」

「……何者かが魔物を襲った痕跡を隠蔽したってことね？」

雫の言葉に永山君が頷く。

その言葉でようやく光輝にも事態の異常性が理解できたようだ。

「それだけ知恵の回る魔物がいるという可能性もあるけど……人であると考えたほうが自然ってことか……そして、この部屋だけ痕跡があつたのは、隠蔽が間に合わなかったか、あるいは……」

「……が終着点という事さ」

光輝の言葉を引き継ぎ、聞いた事の無い女の声が響いた。私達は警戒を最大限に引き上げてその声をした方を向いた。

コツコツと響く足音と共に、広い空間の闇の奥から肩に白い鳥を乗せた、赤い髪をした女が現れた。

しかも、その女の耳は僅かに尖っていて、肌も浅黒い。座学で散々聞かされた、魔族の特徴だった。

「………魔族」

その呟きに、魔族の女は冷たい笑みを浮かべる。

「そのアホみたいにキラキラした鎧着ているあんたが勇者でいいんだよね？ アタシらの側に来ないかい？」

魔族の女は光輝に視線を向けるとそう言った。

「何………？ どういう事だ!？」

「勧誘してんの」

光輝の問いかけにさも平然と答える魔族の女。

「断る!!」

しかし、光輝は即答する。

「お仲間も一緒にいいって言われてるけど?」

「答えは同じだ!」

光輝は考える素振りすら見せない。

「……………そういえば、1人私らの誘いに乗った御仲間がいたみたいだけど……………」

その言葉に生徒達は一瞬動揺するが、

「騙されないぞ! そんな奴はいない!」

光輝の言葉で我に返る。根拠の無い言葉だけど、今回は助かった。

「どうかしら……………」

女は含み笑いをする。その時、鈴が全員に障壁魔法を使った。それを戦闘の意志と判断したのか、

「あらそう……………勧誘できないなら用は無い」

すると、その女は目付きを鋭くして、

「魔物の餌にしてあげる!」

その時、空間が揺らぐと同時に何かの攻撃を受けて吹き飛ばれ、鈴も吹き飛ばされたが恵理に受け止められて事なきを得る。

「光の恩寵と加護をここに! 周天!」

治療師の女の子が周天という持続系回復魔法を辺り一帯に唱えた。この魔法は暫くの間自動で回復魔法がかかる代わりに光がまとわりつくという特性を持っている。その魔法によって見えない敵が露になった。それはライオンの頭部に竜のような手足と鋭い爪、蛇の尻尾と、鷲の翼を背中から生やす奇怪な魔物。所謂キメラと呼ぶに相応し

い魔物だった。そのキメラは雫に向かって爪を振った。

私は咄嗟にその場を飛び退く。その一撃は先程まで私が居た場所を砕いた。

「雫から離れろ！」

光輝が飛び込んで来て、龍太郎や恵理が拳圧や火の魔法で攻撃する。

だが、

「ルウガアアア!!」

「グウルウオオオ!!」

また別の3つの咆哮が上がったかと思うと、キメラとは違う別の影が光輝達に襲い掛かった。

それは、オークやオーガと呼ばれる豚顔の魔物で、私達も戦った事のあるブルータルという魔物に近い。

だけど、その体躯はそれらよりも明らかに引き締まって強靱になっており、光輝は咄嗟に躲したけど、龍太郎は吹き飛ばされた。

更に、恵理が放った炎の魔法は、こっちも突然現れた巨大な亀の様な魔物の口に吸い込まれていき、炎を吸い尽くしたと思ったら、再び口を開けてその口に赤い輝きが生まれる。

「拙い……………」

恵理が思わず声を漏らす。でも、

「にやめんな！ 守護の光は重なりて 意志ある限り蘇る “天絶”  
！」

鈴が10枚の光のシールドを展開。

直後に亀の口から超高熱の砲撃が放たれたが、それは何とか上方に逸らすことに成功した。

「ちくしょう！ 何だつてんだ！」

「なんなんだよ、この魔物は！」

「くそ、とにかくやるぞ！」

その時になつて漸く元小悪党達や永山君の他のメンバーが動き出す。

私も先程攻撃を受けそうになつたキメラと相對する。

「はあああああああつ!!」

すれ違いざまに抜刀すると同時に蛇の尾の半ばあたりを切り裂く。

「グウルアアア!!」

怒りの咆哮を上げて振り向きざまに鋭い爪を振るうキメラ。雫はそれを躲してキメラの両翼を切り裂く。

—大丈夫、攻撃は通じる—

—強い相手だけど、勝てないわけじゃない—

彼女がそう思った瞬間、

「キュワアアア!!」

魔族の女の肩に乗っていた鳥が鳴き声を上げる。すると、目の前のキメラの傷が見る見る癒えていく。

いや、キメラだけじゃない。光輝や他の皆が相手をしていた魔物達のダメージも回復していく。



「回復役まで!？」

雫は思わず叫ぶ。

「今までの魔物とレベルが違い過ぎる……………! 八重樫さん! どうする!？」

「……………」

遠藤君の言葉に、雫は一瞬思案すると、

「遠藤君、あなたの能力を見込んで頼みがあるの」

「えっ?」

「この事を、メルド団長に伝えて。天職が『暗殺者』のあなたなら、敵に気付かれずにメルド団長の所まで行ける……………!」

「お、俺が……………!？」

「これはあなたしか出来ない……………!」

「……………必ず伝えるから……………必ず……………!」

その言葉を最後に遠藤君の姿も気配もまるで感じられなくなる。

―相変わらず見事な物ね―

雫は魔族の女に向き直ると、目の前のカメラが地に沈む様に消えていく。

「勇者様どうする? このままだと……………」

どうやらその女はまだ懐柔する気がある様だ。それなら交渉すると見せかけて時間を稼げば助かるかもしれないが

「俺達は屈しない!」

光輝がにべもなく拒否する。彼のお花畑脳には卑怯な手を使う考えは無いらしい

「それを証明してやる! 『限界突破』!」

『限界突破』は一時的にステータスを3倍にする技能。

だけど、強力な分リスクも高く、常に魔力を消費する上に、使用後は使用時間に比例して弱体化してしまう諸刃の剣。

例のブルータスのような魔物が光輝に向かってメイスを振り下ろす。

でも、ステータスの上があった光輝はその一撃を受け止めることが出来た。

「刃の如き意志よ 光に宿りて敵を切り裂け 〃光刃〃！」

その一撃はその魔物を両断する。

だけど、その直後魔人族の女が詠唱していることに気付いた。

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴 大地が産みし魔眼の主 宿るは暗闇見  
通し射抜く呪い もたらすは永久不変の闇牢獄 恐怖も絶望も悲嘆  
もなく その眼まなこを以て己が敵の全てを閉じる 残るは終焉  
物言わぬ冷たき彫像 ならば ものみな砕いて大地に還せ！ 〃落  
牢〃！」

その詠唱が完了すると、魔人族の掲げた手に灰色の渦巻く球体が出来上がり、放物線を描いて私達の方へ飛来した。

その速度は余り早くなく、私達には危険は少ない様に思えた。

が、次の瞬間

「ッ!! ヤバイッ! 谷口イ!! あれを止めろお! バリア系を使え  
!」

「ふえ!? りよ、了解! ここは聖域なりて 神敵を通さず! 『聖絶』  
!」

切羽詰った野村の指示に鈴が詠唱省略した光系の上級防御魔法を発動する。輝く障壁がドーム状となって敵味方関係なく光輝達全員を包み込んだ。

直後、灰色の渦巻く球体が障壁に衝突した。灰色の球体は、障壁を突破しようと見かけによらない凄まじい威力で圧力をかけ、複数体の魔物が一斉に鈴を狙い始めたのだ。

「鈴!」

「谷口を守れ!」

恵里が鈴の名を呼びながら魔法を放って接近するブルタールモドキを妨害する。鈴を中心に恵里とは反対側でキメラや四つ目狼と戦っていた斎藤良樹と近藤礼一が、野村の呼びかけに応えて鈴の傍に駆けつけようとする。

が、「聖絶」の維持で動けない鈴に、隙間を縫うようにして黒猫が一気に接近した。野村が、咄嗟に地面から石の槍を発動させて串刺しにしようとするが、黒猫は空中でジグザグに跳躍すると、身をひねりながら石の槍を躲し、触手を全本射出した。

「谷口い!」

「あぐう!?!」

野村が鈴の名を呼んで警告するが、時すでに遅し。触手は、咄嗟に身をひねった鈴の腹と太もも、右腕を貫通し、背中から地面に叩きつけられた。

「あああああ!!」

「鈴!」

余りの痛みに絶叫する鈴と思わず悲鳴じみた声で鈴の名を呼ぶ恵里。そして、それがどうしたと言わんばかりに迫る灰色の渦巻く球体

「全員、あの球体から離れろお！」

野村が焦燥感に満ちた声で警告を発する。だが、その警告は遅すぎた。

それはそのまま地面に着弾すると音もなく破裂し猛烈な勢いで灰色の煙を周囲に撒き散らし、

近くに居た野村君や他の数人のクラスメイトを呑み込んだ。

「鈴ちゃん！」

「鈴！」

「皆！」

呑み込まれたクラスメイトに向かって叫ぶ。

「来たれ 風よ！ “風爆”！」

光輝が、咄嗟に、突風を放つ風系統の魔法で灰色の煙を部屋の外に押し出す。

煙が晴れたその先には、完全に石化し物言わぬ彫像となった斎藤君と近藤君。そして下半身を石化された鈴と、その鈴に覆いかぶさった状態で左半身を石化された野村君の姿があった。

「そんな、鈴！」

「野村くん！」

「斎藤！ 近藤！」

「貴様！ よくも！」

その姿を見て、光輝が怒りの表情で叫ぶ。だが、そんな光輝をストップパーの雫が声を張り上げて諫める。

「待ちなさい！ 光輝！ 撤退するわよ！ 退路を切り開いて！」

「仲間をやられて逃げられるか!!!」

光輝は、キツと雫を睨みつけて反論した。光輝から放たれるプレッシャーが雫にも降り注ぐが、雫は柳に風と受け流し、険しい表情のまま光輝を説得する。

「冷静になりなさい！ 悔しいのは私も一緒よ！ それに、〃限界突破〃もそろそろヤバイでしょ？ この状況で、光輝が弱体化したら、本当に終わりよ！」

今の説得で、冷静さを取り戻したのか光輝はいつもの表情になる。

「わかった！ 全員、撤退するぞ！ 雫、龍太郎！ 少しだけ耐えて！」

「任せなさい！」

「おうよ！」

二人は光輝の詠唱の時間を稼ぐために敵に立ち向かった。

懐かしい街にて

—シヨウサイド—

フューレンでミュウを一行に加えた俺達は、荒野を魔力駆動四輪で走っていた。

尚、席順は運転席のハジメは当然だが、その隣にミュウはん、白崎はん、ユエはんが並び、後部座席にテイオはんと俺とアシストである。因みに今名前が上がらなかったシアはんとは言えば、

「ヒヤッハー！… ですよ！」

左側のライセン大峡谷と右側の雄大な草原に挟まれながら、魔力駆動二輪と四輪が太陽を背に西へと疾走する。街道の砂埃を巻き上げながら、それでも道に沿って進む四輪と異なり、二輪の方は、峡谷側の荒地や草原を行ったり来たりしながらご機嫌な様子で爆走していた。

そんな様子を車内から眺めていたハジメは、

「なんで初めてであんなに乗りこなしてるんだよ………？」

余裕で高ランク難易度のバイク技を披露していくシアに呆れた声を漏らす。

「身体強化じゃない？知らんけど」

そんなシアはんを、ユエはんの上で窓から顔を出し、キラキラした目でミュウはんが、ハンドルを握りながら逆立ちし始めたシアを指差し、ハジメにおねだりを始めた。

「パパ！ パパ！ ミュウもあれやりたいの！」

「ダメに決まってるだろ」

ミュウがユエの膝の上に座りながら、全力で駄々をこねる。

「ごくら、ハジメパパを困らせないの」

「ううう〜」

白崎さんがミュウを抱えながらそう言うと、ミュウは見るからにしょぼくれる。

それを見たハジメがやれやれと肩を竦めると、

「ミュウ。後で俺が乗せてやるから、それで我慢しろ」

「ふえ？ いいの？」

「ああ。シアと乗るのは断じて許さんが……俺となら構わねえよ」

「シアお姉ちゃんはダメなの？」

「ああ、絶対ダメだ。見ろよ、あいつ。今度は、ハンドルの上で妙なポーズとりだしたぞ。何故か心に来るものがあるが……あんな危険運転するやつ乗り物に乗るなんて絶対ダメだ」

二輪のハンドルの上に立ち、右手の五指を広げた状態で顔を隠しながら左手を下げ僅かに肩を上げるといふ奇妙なポーズでアメリカンな笑い声を上げるシア。そんなジョ○ヨ的な香ばしいポーズをとる彼女にジト目を向けながら、ハジメはミュウに釘を刺す。見てないところでシアに乗せてもらったりするなよ？ と。

「そもそも、二輪は危ないんだから出来れば乗せたくないんだがなあ……二輪用のチャイルドシートとか作ってみるか？ 材料は……ブツブツ」

「ユエお姉ちゃん。パパがブツブツ言ってるの。変なの」

「……ハジメパパは、ミュウが心配……意外に過保護」

「フフ、ご主人様は意外に子煩悩なのかの？ ふむ、このギャップはな

「かなか……ハアハア」

「ユエお姉ちゃん。テイオお姉ちゃんがハアハアしてるの」

「……不治の病だから気にしちゃダメ」

最初に比べて賑やかな旅になったなと俺は実感しながら俺はアシストと肩を寄せて、お互いに身を預け合っていた。

俺達はグリューエン大火山の途中にあるホルアドについた。理由はフューレンのギルドのイルワ支部長から、この街のギルド支部長に手紙を渡す様に依頼されたからだ。

「何か……懐かしいな……」

「あの日、守れなかった約束がありましたね……」

「そんな事、もういいだろう？ 例え過去に戻れたとしても、また俺は奈落に落ちる。もちろん、香織も引き連れてな」

「どこまでもついて行くよ！ ハツくん！」

「今度は俺も落ちようかな？」

「……駄目。封印されてた時の私、裸だったから」

「それに、私にも逢えないですよ？」

「そっか。ダブルでアウトだな」

と。過去の例え話を笑いながら、そのまま街のギルドの建物に入ると、冒険者達の視線が一斉に俺達を捉えた。

「ひうー！」

その眼光のあまりの鋭さに、ハジメに抱きかかえられていたミュウが悲鳴を上げ、ハジメの胸元に顔をうずめ外界のあれこれを完全シャットアウトした。

まあ、男2人で可愛くて綺麗な女性を6人も侍らせていけば、殺気を向けられるのも当然と言えば当然だが。



しかし、それを看過できない人物が居た。もちろん、ハジメだ。

ドンツ!!

ハジメが放った『プレッシャー』でドサドサと崩れ落ちる音があちこちから響いたがサクツと無視して、たどり着いたカウンスターの受付嬢に要件を伝える。

ちなみに、受付嬢は可愛かった。ハジメと同じ年くらいの明るそうな娘だ。テンプレはここにあつたらしい。もつとも、普段は魅力的であろう受付嬢の表情は緊張でめちやくちや強張っていたが。

「支部長はいるか？ フューレンのギルド支部長から手紙を預かっているんだが……本人に直接渡せと言われているんだ」

ハジメは、そう言いながら自分のステータスプレートを受付嬢に差し出す。受付嬢は、緊張しながらもプロらしく居住まいを正してステータスプレートを受け取った。

「は、はい。お預かりします。え、えっと、フューレン支部のギルド支部長様からの依頼……ですか？」

普通、一介の冒険者がギルド支部長から依頼を受けるなどということとはありえないので、少し訝しそうな表情になる受付嬢。しかし、渡されたステータスプレートに表示されている情報を見て目を見開いた。

「き〃金〃ランク!？」

冒険者において「金」のランクを持つ者は全体の一角に満たない。そして、「金」のランク認定を受けた者についてはギルド職員に対して伝えられるので、当然、この受付嬢も全ての「金」ランク冒険者を把握しており、ハジメのこと等知らなかったので思わず驚愕の声を漏らしてしまった。

その声に、ギルド内の冒険者も職員も含めた全ての人が、受付嬢と同じように驚愕に目を見開いてハジメを凝視する。建物内がにわか騒がしくなった。

受付嬢は、自分が個人情報を大声で晒してしまったことに気がついてサツと表情を青ざめさせる。そして、ものすごい勢いで頭を下げ始めた。

「も、申し訳ありません！ 本当に、申し訳ありません！」

「あく、いや。別にいいから。取り敢えず、支部長に取り次ぎしてくれるか？」

「は、はい！ 少々お待ちください！」

放っておけばいつまでも謝り続けそうな受付嬢に、ハジメは苦笑いする。ウルで軽く戦争し、フューレンで裏組織を壊滅させるなど大暴れしてきた以上、身分の秘匿など今更だと思ったのだ。

子連れで美女・美少女ハーレム＋給仕のカップルを持つ見た目少年の「金」ランク冒険者に、ギルド内の注目がこれでもかと思えるが、注目されるのは何時ものことなので割り切って受付嬢を待つハジメ達。注目されることに慣れていないミュウが、居心地悪そうなので全員であやす。ティオのあやし方が情操教育的に悪そうだったのでアッパーカットをお見舞いしておく。そのことで更に騒がしくなったが、やはり無視だ。

やがて、と言つても五分も経たないうち、ギルドの奥からズダダダッ！と何者かが猛ダツシユしてくる音が聞こえた。何事だと、ハジメ達が音の方を注目していると、カウンター横の通路から全身黒装束の少年がズザザザザと床を滑りながら猛烈な勢いで飛び出てきて、誰かを探すようにキョロキョロと辺りを見渡し始めた。

俺達は、その人物に見覚えがあり、こんなところで再会するとは思わなかったので思わず目を丸くして呟いた。

「……………遠藤（君）？」

俺達の声に遠藤は気づき、俺の方を向いて驚く。

「！ 蒼？！何でお前がここに！？いや、それよりも！お前がいるって事は南雲もいるのか！？」

「お、おお」

そう答えると、遠藤はキョロキョロと辺りを見回し、

「南雲お！いるのか！お前なのか！何処なんだ！ 南雲お！生きてんなら出てきやがれえ！南雲ハジメエー！」

いきなり叫んだ遠藤の大声に俺達は思わず耳を塞ぐ。

「あゝ、遠藤？ ちゃんと聞こえてるから大声で人の名前を連呼するのは止めてくれ」

「!?南雲！どこだ！」

遠藤はハジメの方を向き、目が合ったが、またキョロキョロ辺りを探し始めた。

必死な遠藤の表情にハジメはドン引きしている。

「くそっ！声は聞こえるのに姿が見当たらねえ！ 幽霊か？やっぱり

化けて出てきたのか!?俺には姿が見えないってのか!?

「いや、目の前にいるだろうが、ど阿呆。つか、いい加減落ち着けよ。影の薄さランキング生涯世界1位」

「!? また、声が!? ていうか、誰がコンビニの自動ドアすら反応してくれない影が薄いどころか存在自体が薄くて何時か消えそうな男だ! 自動ドアくらい3回に1回はちゃんと開くわ!」

「ハツくんはそこまで言っていないよ……あと、3回中2回は開かないんだね……流石にそこまで来るともう特技だよ……」

そこまで言葉を交わしてようやく、目の前の白髪の男女が会話している本人だと気がついたようで、遠藤は、ハジメの顔をマジマジと見つめ始める。

「まさか……本当に南雲……と、白崎さん……なのか? ……」

「はあ……ああ、そうだ。見た目こんなだが、正真正銘 南雲ハジメだ」

「うん、そうだよ。久しぶり」

二人はサラリと答えたが、まだ信じられ無いと言う様な顔をしていた

「お前ら……生きていたのか」

「今、目の前にいるんだから当たり前だろ」

「何か、えらく変わってるんだけど……見た目とか雰囲気とか口調とか……」

「奈落の底から自力で這い上がってきたんだよ? そりや多少変わるわよ」

「そ、そういうものかな? いや、でも、そうか……ホントに生きて……」

あつけらかんとした二人の態度に困惑する遠藤だったが、それでも

死んだと思っていたクラスメイトが本当に生きていたと理解し、安堵したように目元を和らげた。遠藤は、純粋にクラスメイトの生存が嬉しかったのだ。

「つていうかお前……冒険者してたのか？ しかも『金』て……」  
「ん、まあな」

すると、遠藤はハツとしてハジメの肩を掴んで捲し立てた。

「なら頼む！一緒に迷宮に潜ってくれ！早くしないと皆死んじゃう！1人でも多くの戦力が必要なんだ！健太郎も重吾も死んじゃうかもしれないんだ！頼むよ、南雲！」

「ちよ、ちよと待て。いきなりなんだ!? 状況が全くわからないんだが？ 死んじまうって何だよ。天之河がいれば大抵何とかなるだろう？メルド団長がいれば、二度とベヒモスの時みたいな失敗もしないだろうし……」

遠藤の切羽詰まった様子にハジメも困惑しながらそう返す。

遠藤はその言葉にガクリと膝から崩れ落ち、

「……んだよ」

「は？ 聞こえねえよ。何だって？」

「……死んだって言ったんだ！メルド団長もアランさんも他の皆も！迷宮に潜ってた騎士は皆死んだ！俺を逃がすために！俺のせいだ！死んだんだ！死んだんだよお！」

遠藤はそう叫んだ。

その瞬間、白崎はんが遠藤の胸倉を掴んで自分の方に振り向かせると、

「雫ちゃん！ 雫ちゃんは!?!」

有無を言わせぬ迫力を持ってそう問いかけた。

「や、八重樫さんは無事……………少なくとも別れるまでは無事だった……………むしろ、八重樫さんに言われて俺はこうやって助けを呼びに来たんだ……………」

それを聞くと、白崎さんは遠藤を放り投げるように放すとハジメに振り向き、

「ハツくん……………!」

懇願するような表情でハジメに呼びかけた。

「そんな顔をしなくても大丈夫だ……………おい遠藤、サクツと助けてやるからさっさと案内しろ!」

「えっ……………? 南雲……………?」

「じゃあショウ、ミュウのお守り頼むぞ」

「イエス・マイ・マジエステイ」

「私も残ります」

ハジメは俺にミュウの護衛任務を与え、遠藤とオルクス大迷宮に向かった。

その後、俺は左目に大きな傷が入ったおっさん——支部長がやって来て、諸々の事情の説明と、依頼の達成を済ませた。

## 乙女の進化とインフレ

あの後、辛くも逃げ切った勇者達は、メルド団長達が居るはずの七十階層に差し掛かっていた。

鈴の傷も何とか塞がっている。石化したクラスメイトも何とか皆で後退しながら運んでいた。

けどそんな時、

「あ、あのー！わ、私、あの人の誘いに乗るべきだと思うー！」  
震えながらも、恵里が言葉を紡いだ。

「何言ってるんだテメエ！」  
「ヒィっ!？」

龍太郎がすかさず反発し、恵里が怯えた為、雫が間に入り、雫は問返した

「わ、私はただ、皆に死んでほしく無くて……………!？」

恵理の言葉に私は押し黙る。確かにこのまま戦っても勝ち目は薄い。ならば、従う振りをして生き残る道もありだというのは子供でも分かる。

「魔族なんて信用するな！」

「だけどよ、このまま撤退を続けたって、一体何人が生き残れると思ってるんだ?!？」

「そうだそうだ！あん時逃げるのに手一杯だったじゃねえか！」

光輝は元檜山組の言葉に何も言い返せない。

「1人でも多く生き残るためには、従うしか無いと思う！」  
恵理の精一杯の主張。その言葉に全員が俯いた時、

「お前達は……生き残ることだけ考えろ……！」

メルド団長の声が聞こえた。彼らは僅かな希望を持って振り向いたけど、それは幻想に過ぎなかった。

メルド団長は、血塗れで見るからに満身創痍。剣を杖代わりにして立っているのもやつの状態だった。

「メルドさんっ!？」

光輝が悲痛な声を上げる。

「これは……最初から私達の戦争だったんだ……！」

メルド団長は精一杯の声で光輝にそう告げるが、

「ッ!?うぐあっ!？」

メルド団長の目が見開かれ、背中から血が噴き出る。同時にメルド団長の背後にあのキメラの魔物と魔族の女が現れた。メルド団長はゆっくりと地面に倒れる。

「……………すまない」

メルド団長はそう呟くとゆっくりと瞼を閉じて力尽きた。

「メルドさあああああああん!!!」

光輝の悲痛な悲鳴。誰もがメルド団長がやられた事に動揺を抑えきれなかった。

「あ……………あ、ああ……………ああああああああ！」

その時、光輝の身体に限界突破の輝きが宿る。雫は咄嗟に叫んだ。



「ダメよ光輝！ 今『限界突破』したら身体が持たないわ！」  
雫は叫んだ。でも、今光輝を包む光は今までの『限界突破』とは何かが違うていた。この時の誰もが知る由も無かったけど、それは『限界突破』の派生技能「十覇潰」。

それは基本ステータスの5倍の力を得るものだった。

「貴様だけは……………貴様だけは!!倒す!!」

光輝は光を纏いながら襲い来る魔物達を切り伏せる。光輝はそれでも一瞬も足を止めずに魔族の女の元まで踏み込んだ。

「チー！」

魔族の女は咄嗟に砂塵の盾を作るけど、大上段に振りかぶった聖剣を光輝は躊躇いなく振り下ろす。その一撃はその砂塵の盾を容易く切り裂き、魔族の女に深手を負わせ、更に背後の壁まで吹き飛ばした。

「まいったね…………あの状況で逆転なんて…………まるで、三文芝居でも見てる気分だ」

魔族の女は皮肉気に口にする。光輝は即座にその女の元まで駆けると、止めの一撃をその胸に突き立てんと剣を振りかぶった。魔族の女はいつの間にか手にしていたロケットペンダントを見つめ、

「ごめん…………先に逝く…………愛してるよ、ミハイル…………」  
「!？」

そんな眩きを漏らす魔族の女に、光輝は思わず聖剣を止めてしまった。覚悟した衝撃が訪れないことに訝しそうに顔を上げて、自分の頭上数ミリの場所で停止している聖剣に気がつく魔族の女。

光輝の表情は愕然としており、目をこれでもかと思開いて魔族の女を見下ろしている。その瞳には、何かに気がつき、それに対する恐

怖と躊躇いが生まれていた。その光輝の瞳を見た魔族の女は、何が光輝の剣を止めたのかを正確に悟り、侮蔑の眼差しを返した。その眼差しに光輝は更に動揺する。

「……呆れたね……まさか、今になってようやく気がついたのかい？

“人”を殺そうとしていることに」  
「ッ!」

光輝にとって、魔族とはイシユタルに教えられた通り、残忍で卑劣な知恵の回る魔物の上位版、あるいは魔物が進化した存在くらいの認識だったのだろう。

「まさか、あたし達を“人”とすら認めていなかったとは……随分と傲慢なことだね」

「ち、ちが……俺は、知らなくて……」

「ハッ、 “知ろうとしなかった” の間違いだろ？」

「お、俺は……」

「ほら？ どうした？ 所詮は戦いですらく唯の“狩り”なのだから

？ 目の前に死に体の1匹がいるぞ？ さっさと狩ったらどうだい

？ おまえが今までそうしてきたように……」

「……は、話し合おう……は、話せばきつと……」

——あの馬鹿！——

雫は刀を抜いて出来る限り最速で魔族の女を『殺す』為に駆ける。

「雫!?! 何を!?!」

「はああああああああっ!!」

雫は深手を負っている今が最後のチャンスと斬りかかる。

「やめろ雫!」

雫の前に光輝が立ちはだかって彼女の剣を受け止めた。

「馬鹿! 邪魔しないで!」

雫は思わず怒鳴るも

「何をしようとしているのか分かっているのか!? 彼女は『人間』なんだぞ!」

光輝は雫がその事を理解していないと思っっているのか言い聞かせるようにそう言ってくる。

「そんな事分かってるわよ! それこそ、この『戦争』に参加すると決めたその時からね!」

「なっ!?!」

雫の言葉に光輝は驚いている。

「自覚の無い坊ちゃんだね……私達は『戦争』をしてるんだよ!!」

彼らの背後に新たな魔物が現れ、その攻撃で吹き飛ばされてしまふ。雫は咄嗟に立ち上がり、光輝も立ち上がるうとしていたけど、ガクンと崩れ落ちた。

「へ、こんなときに!」

おそらく限界突破のタイムリミットだろう。その威力に比例して、光輝は身動きすることもままならないらしい。

雫はそんなことを気にせず、魔族の女に向けて剣を構える。

「……へえ。やっぱりあんたは、殺し合いの自覚があるようだね。むしろ、あんたの方が勇者と呼ばれるにふさわしいんじゃないかい?」

魔族の女は白い鳥の固有魔法で回復したらしく、しつかりとした足取りで立っている。

「……そんな事どうでもいいわ。光輝に自覚がなかったのは私達の落ち度でもある。そのツケは私が払わせてもらうわ!」

馬頭の魔物は頭上で両手を組み合わせて振り下ろしてきたので、雫はスライディングでその魔物の股下を潜り抜けると、隙だらけになった背後から斬りかかった。

でもその瞬間、その馬頭の魔物の背後に魔方陣が現れ、同じ馬頭の魔物が現れた。

「ッ!？」

その振りがぶって殴りかかってきた拳を何とか刀で防御するけど、その威力は私が防ぎきれぬものじゃなかった。

刀が押し折れ、その拳が私の腹部を捉える。

途轍もない衝撃が私の体を突き抜け、雫は後方に吹き飛ばされて岩の柱を一本砕いて、更にその後ろの岩の柱に激突して止まる。

その瞬間、大量の血が込み上げ思わず吐き出す。

馬頭の魔物はそんなことに構わずに拳を振り上げる。

—動きなさい！こんな所で終わるわけには行かないのよ！香織を助けるためにも！死ねないの！絶対に勝たなきゃいけないの！死ぬ！負ける!!死…！

そう思ったその時、走馬灯が走る。

死の直前に

人が走馬灯を見る理由は

一説によると

今までの経験や記憶の中から迫りくる死を回避する方法を探しているのだと言う

『ねえ、雫ちゃん見て！この漫画可愛い剣士さんもいるよ！』

『あくそれね。確か今流行ってる漫画でしょ？』

それは、日本にいた時。親友が想い人の趣味を理解しようとして漫画とかをあさっていた頃のこと。

『雫ちゃんもこういうの出来る？』

『いや、漫画の技とかを現実で出来るの何でそうそう無いでしょ。確かにリアルに近いけど流石に無理よ……』

『うくん……ま、別に出来なくてもいつか！それより雫ちゃん一緒に読もう！』

『はいはい』

「まだよー！私は……まだ……終われない!!」

雫は重い体に鞭を打って立ち上がり。折れた刀を構え、呼吸を整える。その時、自分の中で何かが変わる。

—何？この感覚は……今までの疲れが嘘みたい—

それは体が軽く思考が晴天の様に透き通る

今、この瞬間。彼女はさっきの走馬灯の中の漫画の知識と友への思いが「剣術」から派生技能として「+透き通る世界」を発現させた。

それにより魔物や魔人族の体内や存在を感じ取れる様になり、雫は急所に一撃一撃を入れていく。

「凄い……」

誰かがそう呟いた。それもそのはず、今までの苦戦がまるで嘘の様に彼女が圧倒していく

―でも、これなら………やるしかない！―

雫は未知の感覚に疑問を思考から外し、魔物を全て切り伏せる。そして

「悪いけど、貴方には死んで貰うわ！」

そう啖呵を切った雫は躊躇いなく折れた刀で斬りかかるが女の魔族は肩にいた白い鳥を盾にしながら距離を取り、ポケットに手を入れる。

「舐めるなあ！ガキが！」

すると女の魔族はポケットから小さな銀色の珠を取り出し、そのまま口へ放り込む。

すると魔力が爆発的に膨れ上がり、背中から翼を生やす。それは清水と同じ変化、使徒に変わった。

爆発的な魔力の衝撃波でノックバックを食らい下がる雫。次に視線を転じた時には数万を超える使徒の軍団が降り立っていた。

「行きな、お前ら！」

と、魔族の指示に従い使徒が一気に迫る。

が、その標的は雫ではなく、その後ろにいるクラスメイト達

「やせないー！」

と使徒を食い止めようとすることもその数の差に追いつけず、何体かはクラスメイトに向かっていく

「もう駄目だ」誰もがそう思ったその時、迷宮の天井を貫く何かが落ちた。

——天より降り注ぐ断罪の光。

そう表現する他ない空と奈落を繋ぐ光の柱。触れたものを、一切合切消し去る無慈悲なる破壊。大気を灼き焦がし、闇を切り裂いて、まるで昼間のように太陽の光で使徒を薙ぎ払う。

キュワアアアアア!!

独特な調べを咆哮の如く世界に響き渡らせ大地に突き立った光の柱は、直径一メートルくらいだろうか。光の真下にいた使徒は地面ごと一瞬で蒸発し奈落への大穴を開けた

誰もがこの事態を理解できずに静寂がその場を制す中、天井の大きな穴から一筋の紅い光を纏った何かが走る。

それは、まるで天使なシルエットをしていたが、色合いはまるで悪魔のようだった

——数分前——

オルクス大迷宮についたハジメは『革新者』系統の技能を全て発動させ

「二気に突っ切るぞ！」

と右手を掲げると上空に大きなレンズが取り付けられた巨大な機体——【ヒュベリオン】が降臨する。

「出力は20%前後。指向性モードの小規模の一点突破」

と、設定を済ませてそれを起動させるとキュイイイイインと言う音を立ててエネルギーがチャージされ、ものの5秒でそれが発射される。

ソレは一分程で迷宮に大穴を開け、ハジメは飛び込んだ。ソレに続くように香織、ユエ、シア、テイオ、遠藤の順で飛び込んで行く。先頭のハジメは【宝物庫】から【フォームチェンジャー】を取り出し、自分の足元へ投げる。ソレをくぐって目的の場所についた時には……機械の翼を背負った天使でも悪魔でも無い「新たなハジメ」の姿があった



## 無能／最強

―雫サイド―

空から舞い降りたその存在は、天使とも悪魔とも似つかなかった。

先ず目につくのは背中から生えてる様に見える機械の羽。そこからは燦々と燐く深紅の光が羽毛の形を成している。

次に目に入るのは赤いコートの上から動きを阻害しない様な漆黒の、鎧の様な物を纏っていた。

大まかな特徴としては、形は殆ど同じだが、左だけ人間味の無い左右非対称な腕。胸部装甲に静かに輝く紅いクリスタル。腰辺りの両横に装備された折りたたみ式のレール砲。そして、SFチックなエツジとスネまで覆う程の長い靴の様な鎧。

その顔は逆光で見えないけどそれが持つ瞳は異質的なものだった。

右目は紅い結晶の義眼で血涙を流し、左目は虹色と金の八色が煌いているけどその瞳に光が無い。

その異質な存在の正体が気になる中、それは口を開いた。

「相変わらず苦労しているな。八重樫」

ソレは何処かで聞いた事のあるような声で、私の苗字を呼んだ。

私は何故私を知っているのかとか、相変わらずつてどういう事とか色々混乱し始めたが、それは直ぐにどうでも良くなった。

「雫ちゃん！」

天井の穴から一人の少女が私の名を呼びながら現れ、私を抱きしめる。それは誰なのかすぐにわかった。

髪が白くなって、目が赤くなって、体付きも変わってるけど間違いない。

「……………香織っ……………！」

4ヶ月前に想い人を追いかけて奈落へ落ちた私の親友だ

---

—他者視点—

香織と雫が再会を喜び合う中、天井の穴からユエ、シア、ティオ、そして真っ黒い服を着た少年の順番で降りてくる。

「皆……………！ 助けを呼んできたぞ……………！」

その少年、遠藤がそう言った。

「……………遠藤（君）！……………」

クラスメイト達が驚く。すると、ハジメが一通り辺りを伺うと、

「香織、怪我した奴らや石化してる奴を治療してやれ」

香織に向かってそう言う。

「うん、分かったよ。ハッ君！」

香織の口から出たその名呼び方に雫は驚愕した。

「へ？ハツくん？えっ？なに？…どういうこと？」

雫はハジメを見つめる。

よく見るとその顔立ちには確かに彼の面影が伺えるが、その豹変ぶりは凄まじく、『透き通る世界』で中身まで見える雫でさえ街ですれ違ったら気づかないレベルだ。

「えっ？えっ？南雲君？ホントに？ホントに南雲くんなの？えっ？なに？ホントどういうこと？」

「どうした？勇者(笑)パーティーの気苦労に耐えられなくなっておかしくなつたか？」

「おかしくなって無いわよ！つてか、南雲君変わり過ぎでしょ!？」

その事実混乱していた雫はハジメのボケにツツコミを入れて冷静さを取り戻す。

「ツ……………！ つう~~~~~~~~！」

血を吐き出す程の大ダメージを受けていた上、限界を超えて動いたのだ。その反動の痛みで声も出ない。

「あつ、ごめん雫ちゃん！ すぐ治すね！」

それに気づいた香織はそう言って立ち上がるとドンナーを取り出し、祈る様に額に当てる。

『回天』『万天』！

詠唱も魔法陣も使わず、その二言だけで香織は魔法を2つ同時に行使した。

リボルバーに光が宿り、そのままトリガーを引くとクラスメイトとメルド団長だけを包み、傷を癒していく。

「これは……………」

「傷が……………」

「……………う……………生きているのか……………俺は……………」

あるものは体の痛みが嘘のように無くなり、四人の石化は解け、瀕

死の重傷を負って事切れる寸前だったメルド団長でさえも、ほぼ完璧と言えるほどにまで回復させていた。

「メルドさん……………」

光輝が安堵した表情でその名を呼ぶ。

「…………一瞬であれだけの人数を回復させただと…………死にかけの騎士まで…………!?!」

魔族の女が香織の治癒魔法の力に驚きの声を漏らす。しかも、今彼女が使ったのは、中級範囲回復魔法の『回天』だが、それが並の治癒師達を使う上級回復魔法以上の回復力を見せたのだ、魔族の驚きもその為だろう。でも、南雲君はそんな事は当然とでも言うようにハジメはそれぞれに指示を飛ばす。

「ユエ、シア、テイオ。香織と一緒にあいつらの御守りを頼む」

「…ん！」

「はいー！」

「のじゃー！」

ユエは遠藤の首根っこを引っ掴み、シアは血を大量に失って貧血を起こしているメルド団長をヒョイと担ぎ上げる。

「うおっ？」

メルド団長が驚く。まあ、当たり前だ。

本来、非力な兎人族が、しかもあんな細腕で大柄で鎧も纏っているメルド団長を『ヒョイ』って擬音が聞こえてきそうなほど簡単に担ぎ上げたのだから。

そのまま彼女達は光輝達が固まっている場所へ駆けていく。

「雫ちゃん、私達も」

「ちよ、ちよつと……………！」

魔族の強力な戦力が居る中に南雲君を一人で置いて行く香織を、雫は呼び止めようとするが、

「雫ちゃん。ハツくんなら大丈夫だから」

そう言う香織からは、南雲君への絶対の信頼が伺える。

「……………」

そんな香織に逆らうことが出来ず、雫は言われるままに光輝達が居る所まで下がった。すると、

「香織！」

光輝が香織に向かって嬉しそうに声を掛ける。

「……………光輝君」

「無事だったんだな、香織！ 本当に良かった！」

回復して貰ったとは言え、あんなに戦っていた雫じゃなく香織の心配をする光輝に、雫は失望感を覚える。

「……………久しぶりだね、皆も」

香織は微笑みながらそう返すが、雫にはその微笑みが上辺だけの様に思えた。

「まさか自ら地獄に踏み入るとは、いい度胸じゃないか」

ようやく我を取り戻した魔族の女は新たに使徒を召喚しながら余裕そうにハジメに言う。

どうやら使徒の力を過信している様だ。確かに使徒は一騎当千の化け物で、それが1万。更に隠業に特化したキメラも何体か残ってお

り、奇襲も出来る。

だが、ハジメの口から出た言葉はこの場にいる誰もが思いもしない言葉だった

「その赤毛の女。今すぐ去るなら追いはしない。死にたくなければ、さっさと消えろ」

「……何だつて？」

それは、魔人族の女が、まだハジメの敵ではないが故の慈悲だった。思わずそう聞き返す魔人族の女。それに対してハジメは、呆れた表情で繰り返した。

「戦場での判断は迅速にな。死にたくなければ消えろと言ったんだ。わかったか？」

改めて、聞き間違いではないとわかり、魔人族の女はスッと表情を消すと「殺れ」とハジメを指差し魔物に命令を下した。

この時、あまりに突然の事態——特に使徒が正体不明の攻撃により一撃死したことで流石に冷静さを欠いていた魔人族の女は、致命的な間違いを犯してしまった。

ハジメの物言いもあったのだろうが、普段の彼女なら、もう少し慎重な判断が出来たはずだった。しかし、既にサイは投げられてしまった。

「なるほど。……『敵』って事でいいんだな？」

ハジメがそう呟いたのとキメラが襲いかかったのは同時だった。ハジメの背後から「南雲君！」と焦燥に満ちた警告を発する声が聞こえる。

が、次の瞬間、キメラは一条の閃光と共に爆ぜた。

ドグシャ!

そんな生々しい音を立てて、キメラの頭部が粉碎される。

再度、誰もが驚く中、閃光を辿って上を見上げるとソコには黒い十字架——「クロスビット」が複数展開されていた。

「おいおい、何だ? この半端な固有魔法は。大道芸か?」

とハジメは呆れながらドンナーを抜き、空へ飛翔する。

クロスビットと同じ位置まで上昇すると、虚空から大型兵器「エクステンド」と「ヒュベリオン」を取り出し、エクステンドを装備。ヒュベリオンを偏光射撃状態に設定。更に、『紅雷龍(九頭竜バージョン)』も降臨し、殲滅フルセット状態。

そして、探知系の技能を使い、魔物も使徒も全て見つけ、複数照準に入れる。

「フルバースト」

無慈悲な宣告と同時に引き金は引かれ、使徒は…実弾で貫かれた者。レーザーで焼き滅んだ者。荷電粒子砲で消し飛ばす者にミサイルで爆散する者やパイルバンカーで串刺しになった者など死屍累々。死山血河を築き上げる。

あり得べからざる化け物の存在に体の震えが止まらない。

—あれは何だ?なぜあんなものが存在している?どうすればあの化け物から生き残ることができる!?!—

魔族の女の頭の中では、そんな思いがぐるぐると渦巻いていた。

それは、光輝達も同じ気持ちだった。彼等は、白髪眼帯の少年の正体を直ぐさまハジメとは見抜けず、正体不明の何者かが突然、自分達を散々苦しめた魔物を歯牙にもかけず駆逐しているとしかわからなかったのだ。

「何なんだ……彼は一体、何者なんだ!？」

光輝が動かない体を横たわらせながら、そんな事を呟く。今、周りにいる全員が思っていることだった。その答えをもたらしたのは、先に逃がし、けれど自らの意志で戻ってきた仲間、遠藤だった。

「はは、信じられないだろうけど……あいつは南雲だよ」

「「「「は?」「」」」」

遠藤の言葉に、光輝達が一斉に間の抜けた声を出す。遠藤を見て「頭大丈夫か、こいつ?」と思っているのが手に取るようにわかる。遠藤は、無理もないなあ〜と思いつながらも、事実なんだから仕方ないと肩を竦めた。

「だから、南雲、南雲ハジメだよ。あの日、橋から落ちた南雲だ。迷宮の底で生き延びて、自力で這い上がってきたらしいぜ。ここに来るまでも、迷宮の魔物が完全に雑魚扱いだった。マジ有り得ねえ! つて俺も思うけど……事実だよ」

「南雲って、え? 南雲が生きていたのか!？」

光輝が驚愕の声を漏らす。そして、他の皆も一斉に、現在進行形で殲滅戦を行っている化け物じみた強さの少年を見つめ直し……やはり一斉に否定した。

「どこをどう見たら南雲なんだ?」



「いや、本当なんだって。めっちゃ変わってるけど、ステータスプレーとも見たし」

と乾いた笑みを浮かべながら、彼が南雲ハジメであることを再度伝える。

皆が、信じられない思いで、ハジメの無双ぶりを茫然と眺めていると、ひどく狼狽した声で遠藤に喰ってかかる人物達が現れた。

「んなわけねえだろ！アイツは落ちた！確かに死んだんだ！」

「そうだ！皆も見ただろ！あの時、ベヒモスに巻き込まれて……………」

「生きてる筈がねえ！そうだろ!？」

斎藤良樹、近藤礼一、中野信治の元小悪党組が狼狽を上げ、遠藤に迫る。が、そんな彼らに比喻ではなくそのままの意味で冷水が浴びせかけられた。

「…………大人しくして。鬱陶しいから」

ユエからの絶対零度の視線がつきささり、思わず言葉を呑み込んだ。

そうこうしている間に使徒の殲滅は完了し、ハジメは手刀を構え義手から新機能のビームサーベルを展開し、魔族の女に接近。そのまま両足を切り落とす。

「あがああ!!」

悲鳴を上げて崩れ落ちる魔族の女。魔物が息絶え静寂が戻った部屋に悲鳴が響き渡る。情け容赦ないハジメの行為に、背後でクラスメイト達が息を呑むのがわかった。しかし、ハジメはそんな事は微塵も気にせず、ドンナーを魔族の女に向けながら話しかけた。

「さて、普通はこういう時、何か言い遺すことは？ と聞くんだろうが

……生憎、お前の遺言なんぞ聞く気はない。それより、魔人族がこんな場所で何をしていたのか……それと、あの魔物を何処で手に入れたのか……吐いてもらおうか？」

「あたしが話すと思うのかい？ 人間族の有利になるかもしれないのに？ バカにされたもんだね」

嘲笑するように鼻を鳴らした魔人族の女に、ハジメは冷めた眼差しを返した。そして、何の躊躇いもなくドンナーを発砲し魔人族の女の両肩を撃ち抜いた。

「あああつあー！」

再び悲鳴が響く。ハジメはそんな事をお構いなしに魔人族の女を踏みつけ、ドンナーを向けて再び話しかける

「人間族だの魔人族だの、お前等の世界の事情なんぞ知ったことか。俺は人間族として聞いているんじゃない。俺が知りたいから聞いているんだ。さっさと答えろ」

「……」

「ま、大体の予想はつく。ここに来たのは、“本当の大迷宮”を攻略するためだろ？」

と、沈黙を貫く魔人族の女に勝手に推測を話し始めた。

魔人族はハジメの言葉に眉をピクリと動かした。その様子をつぶさに観察しながらハジメが言葉を続ける。

「あの魔物達は、神代魔法……いや、変成魔法か。凶星みたいだな。なるほど、魔人族側の変化は大迷宮攻略によつて変成魔法を手に入れたからか……とすると、魔人族側は勇者達の調査・勧誘と並行して大迷宮攻略に動いているわけか……」

「どうして……まさか……」

「正解だ」

「なるほどね。あの方と同じなら……化け物じみた強さも領ける……もう、いいだろ？ ひと思いに殺りなよ。あたしは、捕虜になるつもりはないからね……」

「あの方……ね。魔物は攻略者からの賜り物ってわけか……」  
「もういいだろう？ 殺りなよ。こんな所で死ぬのは悔しいが……」

魔族の女は、道半ばで逝くことの腹いせに、負け惜しみと分かりながらハジメに言葉をぶつけた。

「いつか、あたしの恋人があんたを殺すよ」

その言葉に、ハジメは口元を歪めて不敵な笑みを浮かべる。

「敵だと言うなら神だって殺す。その神に踊らされてる程度の奴じやあ、俺には届かない。安心しろ、あの世で仲良く再会させてやる」  
互いにもう話すことはないと言われ、ハジメは、ドンナーの銃口を魔族の女の頭部に向けた。

しかし、いざ引き金を引くという瞬間、大声で制止がかかる。

「待て！ 待つんだ、南雲！ 彼女はもう戦えないんだぞ！ 殺す必要はないだろ！」

「……」

ハジメは、ドンナーの引き金に指をかけたまま、「何言ってるんだ、アイツ？」と訝しそうな表情をして肩越しに振り返った。光輝は更に声を張り上げた。

「捕虜に、そうだ、捕虜にすればいい。無抵抗の人を殺すなんて、絶対ダメだ。俺は勇者だ。南雲も仲間なんだから、ここは俺に免じて引いてくれ」

余りにツツコミどころ満載の言い分に、魔族は嘲笑する様な目を勇者に向けてハジメに言う

「人間族は厄介なのを抱えているね」

「言っただろ？ 人間族なんて知らねえよ」

ドパンツ！

乾いた破裂音が室内に木霊する。解き放たれた殺意は、狙い違わず魔族の女の額を撃ち抜き、彼女を一瞬で絶命させた。

静寂が辺りを包む。クラスメイト達は、今更だと頭では分かっても同じクラスメイトが目の前で躊躇いなく人を殺した光景に息を呑み戸惑ったようにただ佇む。

だが、当然、正義感の塊たる勇者の方は黙っているはずがなく、静寂の満ちる空間に押し殺したような光輝の音が響いた。

「なぜ、なぜ殺したんだ。殺す必要があったのか……」

ハジメは、香織達の方へ歩みを進めながら、自分を鋭い眼光で睨みつける光輝を視界の端に捉え、一瞬、どう答えようかと迷ったが、次の瞬間には、そもそも答える必要ないな！ と考え、さらりと無視することにした。

もったも、そんなハジメの態度を相手が許容するかは別問題である

……

アレコレ カレコレ サレコレ

必死に感情を押し殺した光輝の声が響く中、その言葉を向けられている当人はというと、まるでその言葉が聞こえていないかのよう、スタスタ『フォームチェンジャー』を潜り、元の眼帯黒コートに着替えながら血涙を拭い、香織達の元へ向かうと

「ありがとうハツくん。お疲れ様！」

と労いの言葉をかけながら香織が抱きつく。更に、ユエがその細い腕を精一杯伸ばして二人に抱きつく。

「…………ハジメ、香織、オツカレ」

「おう、お疲れ様。ありがとなユエ。頼み聞いてくれて……………」  
「ありがとう。ユエ」

視線で「気にしないで」と伝えながらも、嬉しそうに目を綻ばせるユエ。自然、三人の眼差しも和らぎ見つめ合う形になる。

「…………三人共、空気読んで下さいよ…………ほら、正気に戻って！ ぞろぞろ集まって来ましたよ！」

既に病気と言ってもいいくらい、いつも通り三人の世界を作り始めたハジメと香織とユエに、シアがパンパンと手を鳴らしながらツツコミを入れて正気に戻す。周りを見るとメルド団長を含めたクラスメイト達が集まってきた。

「…………おい南雲、何故彼女を……………」  
「香織！ さっきも言ったけど、本当に無事だったのね！」

光輝の言葉を遮って八重樫さんが白崎さんに駆け寄って改めて再会の感動を噛み締める。

「うん。約束通り、ハツくんと一緒に戻って来たよ！」

「南雲君も無事でよかったわ。生きててくれて安心した……………」

「…………香織を一人にさせるわけにはいかないから…………運の割合

もデカかったとは思うが……意地で生き延びたよ」

と、再会を喜び合ってる所に、水を刺すものが現れる。そう、光輝だ

「……ふう、雫は本当に優しいな。クラスメイトが生きていた事を泣いて喜ぶなんて……でも、南雲は無抵抗の人を殺したんだ。話し合う必要がある。香織も、南雲から離れた方がいい」

「ちよつと、光輝！ 南雲君は私達を助けてくれたのよ？ そんな言い方はないでしょう？」

「だが、雫。彼女は既に戦意を喪失していたんだ。殺す必要はなかった。南雲がしたことは許されることじゃない」

「あのね、光輝、いい加減にしなさいよ？ 大体……」

光輝の物言いに、雫が目を吊り上げて反論する。クラスメイト達は、どうしたものかとオロオロするばかりであったが、元檜山組達は、元々ハジメが気に食わなかったこともあり、光輝に加勢し始める。

次第に、ハジメの行動に対する議論が白熱し始めたが、そんな彼らに過冷却水のように冷たい言葉がかけられる。

「え？なんでハツくんと離れなきゃいけないの？」

と、香織が光輝を蔑む様な目で睥睨する。

「何を言ってるんだ!? 香織！ 南雲は人殺しなんだぞ!? そんな奴の傍に香織を置いておけるわけないだろう!?!」

「ハツくんが人を殺す所なら何度も見てるよ？それに私も何人か殺したし」

「なっ!?!」

香織の言葉に光輝だけではなく、クラスメイト全員が絶句する。

「……………な、なんで人殺しなんて……………そんな事を……………はっ!?!そうか!脅されているんだな!」

と、光輝はご都合主義をフル回転で弁解しようとするが

「勝手な事言わないで欲しいな。私は自分の意思でハツくんの傍に居るの」

香織が心外だと言わんばかりにそう言う。

「何故だ!?何故……………」

と光輝が問い続けようとしたが

「……………くだらない連中。ハジメ、もう行こう?」

「あー、うん、そうだね」

「だな」

絶対零度と表現したくなるほどの冷たい声音で、光輝達を「くだらない」と切って捨てたのはユエだ。その声は、小さな呟き程度のものであったが、光輝達の喧騒も関係なくやけに明瞭に響いた。一瞬で、静寂が辺りを包み、光輝達がユエに視線を向ける。

ハジメは、元々遠藤から話を聞いて、香織のお願いで来ただけなので用は済んでいる。なので、二人の手を引くユエに従い、部屋を出ていこうとした。シアとテイオも、周囲を気にしながら追従する。

そんなハジメ達に、やっぱり光輝が待ったをかけた。

「待ってくれ。こっちの話は終わっていない。南雲の本音を聞かないと仲間として認められない。それに、君は誰なんだ? 助けてくれた事には感謝するけど、初対面の相手にくだらないなんて……………失礼だろ? 一体、何がくだらないって言うんだい?」

「……………」

光輝が、またズレた発言をする。言っている事自体はいつも通り正しいのだが、状況と照らし合わせると、「自分の胸に手を置いて考えろ」と言いたくなる有様だ。ここまでくれば、何かに呪われていると

言われても不思議ではない。

ユエは、既に光輝に見切りをつけたのか、会話する価値すらないと思っているようで視線すら合わせない。光輝は、そんなユエの態度に少し苛立ったように眉をしかめるが、直ぐに、いつも女の子にしているように優しい微笑みを携えて再度、ユエに話しかけようとした。

このままでは埒があかないどころかユエを不快にさせてしまうと感じたハジメは、面倒そうな表情で溜息を吐きながらも代わりに少しだけ答えることにした。

「天の河。存在自体が色んな意味で冗談みたいなお前を、いちいち構ってやる義理も義務もないが、それだとお前はしつこく絡んできうだから、少しだけ指摘させてもらう」

「指摘だって？ 俺が、間違っているとでも言う気か？ 俺は、人として当たり前の事を言っているだけだ」

ハジメから心底面倒です！という表情を向けられ、不機嫌そうにハジメに反論する光輝に取り合わず、ハジメは言葉を続けた。

「誤魔化すなよ」

「いきなり何を……」

「お前は、俺があの子を殺したから怒っているんじゃない。人死にを見るのが嫌だっただけだ。だが、自分達を殺しかけ、騎士団員を殺害したあの女を殺した事自体を責めるのは、流石に、お門違いだと思ってる。だから、無抵抗の相手を殺したと論点をズラしたんだろ？ 見たくないものを見させられた、自分が出来なかった事をあつさりやってのけられた……その八つ当たりをしているだけだ。さも、正しいことを言っている風を装ってな。タチが悪いのは、お前自身にその自覚がないこと。相変わらずだな。その息をするように自然なご都合解釈」

「ち、違う！ 勝手なこと言うな！ お前が、無抵抗の人を殺したのは



事実だろうか！」

「敵を殺す、その何が悪い？」

「なっ!?! 何がって、人殺しだぞ! 悪いに決まってるだろ!」

「はあ、お前と議論するつもりはないから、もうこれで終いな?——俺は、敵対した者には一切容赦するつもりはない。敵対した時点で、明確な理由でもない限り、必ず殺す。そこに善悪だの抵抗の有無だのは関係ない。甘さを見せた瞬間、死ぬということは嫌ってくらい理解したからな。これは、俺が奈落の底で培った価値観であり、他人に強制するつもりはない。が、それを気に食わないと言って俺の前に立ちはだかるなら……」

ハジメが一瞬で距離を詰めて光輝の額に銃口を押し付ける。同時に、ハジメの「プレッシャー」が発動し周囲に濃密な殺気が大瀑布のごとく降りかかった。息を呑む光輝達。仲間内でもっとも速い雫の動きだつて目で追える光輝だったが、今のハジメの動きはまるで察知出来ず、戦慄の表情をする。

「例え、元クラスメイトでも躊躇いなく殺す」

「お、おまえ……」

「勘違いするなよ? 俺は、戻って来たわけじゃないし、まして、お前等の仲間でもない。香織のお願いを聞いて来ただけ。ここを出たらお別れだ。俺には俺の道がある」

それだけ言うと、何も答えず生唾を飲む光輝をひと睨みして、ハジメはドンナーをホルスターにしまった。「威圧」も解けて、盛大に息を吐きハジメを複雑そうな眼差しで見るクラスメイト達だったが、光輝は、やはり納得出来ないのか、なお何かを言い募ろうとしたが、そこで言葉は遮られた。

「もう黙っててくれないかな?」

「か、香織……!?!」

「ハツくんは必死なの奈落に落ちたあの日から、ずっと。私達を護る為に必死だったの……今回だつて私が雫ちゃんを助けて欲しいつてお願いしたから動いただけ」

「だからつて殺さなくても「敵は殺す。コレはハツくんだけじゃなくて私も一緒なの」!?……………」

「もし私がハツくんの立場でも、敵なら私はあの人を殺す。だから……………もう黙つて」

と、香織から辛辣な言葉をかけられ、更にユエが

「…………戦つたのはハジメ。恐怖に負けて逃げ出した負け犬にとやかくいう資格はない」

冷たい口調で非難するというフルボッコである

「なつ、俺は逃げてなんて……………」

「よせ、光輝」

「メルドさんー!」

メルド団長が反論しようとする光輝を止めた。そして、ハジメや俺達を見回すと、

「お前達……………すまなかつた……………!!」

メルド団長は土下座する勢いで頭を下げた。

「あの時…………俺はお前達を助けられなかつた……………本当にすまなかつた……………!!」

「それから、お前達が生きていたことを本当に嬉しく思う」

メルド団長は本当に嬉しそうにそう言った。そして、天之河達に向き直ると同じように頭を下げた。

「メ、メルドさん!? どうして、メルドさんが頭を下げるんだ?」

「当たり前だ…………俺はお前達の教育係……………『戦争』をする上で『敵を殺す』ことは避けて通れない問題だ……………本当ならもつと

早く盗賊などをけしかけてお前達に『殺す覚悟』を教えるはずだった……だが、お前達はこの世界とは関係の無い人間だ。俺達の世界の都合でそのような事を教えていいのかとずっと悩んでいて、自分に言い訳をしながら先延ばしにしてみました……それが今回の結果だ。これは俺のミスだ。本当にすまなかつた」

そう言つて、再び深く頭を下げるメルド団長に、クラスメイト達はあたふたと慰めに入る。どうやら、メルドはメルドで光輝達についてかなり悩んでいたようだ。団長としての使命と私人としての思いの狭間で揺れていたのだろう。

そんな傍ら、依頼は完了したとばかりにこの場を去ろうとしたハジメ達だが、メルド団長の頼みで勇者パーティーを地上まで護衛することになった。

---

は  
――  
遡る事、数十分前。ミュウのお守り中のシヨウとアシストとミュウ

「上手い事やってるかな〜?」

「そうですね〜」

「みゆ?」

現在、露店でお昼ごはん中。パスタを美味しくいただいている。

「アシストはどう思う? 魔族の事」

「そうですね……清水さんみたいに使徒に――『使徒化』と名付けましょうか。そんな感じになったとしても今のハジメなら新フォームフリーダムアウトレイジの「自由暴虐」で勝てると思いますよ?」

「うーん、そうなんだけど……その後よ。問題は」

「その後……ああ、確かに」

シヨウの懸念する問題。それはアシストの顔だ。元々使徒の体を改造した物だが、顔に関しては一切手を加えていない為、使徒そのまんまなのだ。

「このままだと阿呆之河が間違えて攻撃しそうでな。俺、手加減とかする気は無いし」

「髪色でも変えますか?」

「うくん、『銀剣の騎士』って名乗った後だしなく……そうだ!」

と、シヨウは異空間収納から布を一枚取り出し、目にも止まらぬ速さでリボンをいくつか作る。

「髪型変えれば見分けくらいつくんじやないか?」

「まあ、妥当ですね。ソレはそれでシヨウの好みの髪型はありますか?」

「あー……うくん……」

肝心の所を決めて無かったので何にするか考え始めるシヨウ。だが、その結論はいつまでも出なかった

「?どうしました……あ!」

「あ、見た?」

心配になったアシストは【ANW】でシヨウの頭の中を見ると直ぐに分かった。

—どれになろうとアシストカワイイわbyシヨウ—

「……もう!」

と勝手に見たのに何故か照れるアシスト。めっちゃカワイイです。

「とにかく、目立ちやすいツインテールにしますよ!」

と、リボンを受け取り少し大きな声で話しながら髪を結ぶアシスト。

「うん、こつちもアリだな……………」

「アシストお姉ちゃんカワイイの」

ミュウからも絶賛の可愛さだ

「よし。そろそろ迎えに行くか」

あの後ミュウも「ツインテールにしたい」と言っただけでアシストに結んでもらい、少しシヨッピングを堪能し、そろそろ片付く時間と確認して、ハジメ達のお迎えに向かった。と言っても空間魔法でオルクス大迷宮の入口前まで転移するだけだ

「あ、ハジメだ！」

「パパあー!! おかえりなのー!!」

入口がある広場に、ミュウの元気な声が響き渡る。

ミュウはステテテテー! と可愛らしい足音を立てながら、ハジメへと一直線に駆け寄ってきた。

テンプレだと、ロケットのように突っ込んで来た少女の頭突きを腹部に受けて身悶えするところだが、生憎、ハジメの肉体はそこまで弱くない。むしろ、ミュウが怪我をしないように衝撃を完全に受け流しつつ、しっかりと受け止めた。

「ミュウ、迎えに来たのか? いい子にしてたか?」

「ミュウ!」

とハジメの顔を見て元気よく返事をするミュウ。するとハジメはミュウの変化に気づいた。

「あれ? ミュウ髪型変えたか?」

「アシストお姉ちゃんに結んで貰ったの！」

「私とお揃いです」

「どうだ、二人とも似合ってるだろ？」

と、話してゐるのを呆然と聞いていた光輝達。ハジメが、この四ヶ月の間に色々な経験を経て自分達では及びもつかないほど強くなつたことは理解したが、「まさか父親になつてゐるなんて！」と誰もが啞然とする。特に男子などは、「一体、どんな経験積んできたんだ！」と、視線が自然と香織にユエやシア、そしてテイオ、更に突然現れたメイドと執事に向き、明らかに邪推をしていた。ハジメが、迷宮で無双した時より驚きの度合いは強いかもしれない。

冷静に考えれば、行方不明中の四ヶ月で四歳くらいの子供が出来るなんて有り得ないのだが、いろいろと衝撃の事実が重なり、度重なる戦闘と死地から生還したばかりの光輝達には、その冷静さが失われていたので見事に勘違いが発生した。

そして、啞然とする光輝達の中からゆらりと一人進みでる。雫だ。雫は、ゆらりゆらりと歩みを進めると、突如、クワツと目を見開き、ハジメに掴みかかった。

「南雲君！ どういうことなの!! 本当に南雲君の子なの!! 誰に産ませたの!! 香織!? ユエさん!? シアさん!? ティオさん!? それとも、メイドさん!? まさか、執事さんにつ……………て! 蒼君!? ナンデアオイくん!? ちよつと南雲君!! 説明しなさい!!!」

ハジメをガクガクと揺さぶりながら雫は問いかける。

「し、雫ちゃん落ち着いてえ〜〜〜!」

と香織が諫めながら羽交い絞めにするも、雫には聞こえていないようだ。

そうこうしているうちに、周囲からヒソヒソと噂するような声が聞

こえて来た。

「何だあれ？ 修羅場？」

「何でも、女がいるのに別の女との間に子供作ってたらしいぜ？」

「一人や二人じゃないってよ」

「五人同時に孕ませたらしいぞ？」

「いや、俺は、ハーレム作って何十人も孕ませたって聞いたけど？」

「でも、妻には隠し通していたんだってよ」

「なるほど……それが今日バレたってことか」

「ハーレムとか……羨ましい」

「漢だな……死ねばいいのに」

どうやらハジメは、妻帯者なのにハーレムの主で何十人も女を孕ませた挙句、それを妻に隠していた鬼畜野郎という事になったらしい。未だにガクガクと揺さぶってくる雫を尻目に天を仰ぐハジメは、不思議そうな表情をして首を傾げる傍らのミュウの頭を撫でながら深い溜息をついた。

が、問題はそれだけでは無かった

「よくもノコノコと俺達の前に現れたな。蒼！」

光輝が幼稚な睨み顔で怒鳴るが、ショウは無視して雫に執事らしく丁寧な口調で雫に説明を始める。

「一先ずは落ち着き下さい。八重樫様。そちらの少女は我が主が旅の途中で保護し、ギルド支部長からの依頼でエリセンまで送り届ける為同行しているので血縁関係は一つもありません。更に言えば4ヶ月で子供が生まれてここまで育ちませんし、何より種族自体が違いますので」

「え!? そ、そうなの………」

と、雫は的確な説明を聞いて勘違いと理解した途端、トレードマークのポニテで目を覆い見事に羞恥で蹲っていた。

「穴があつたら入りたい……………」

「良ければ、お掘りしますか？」

「例えよ！」

と軽く茶化して、一段落ちつこうとしたら。シヨウの背後から3つの人影が現れる。

斎藤良樹、近藤礼一、中野信治の三人だ。大方、殺された檜山の仇討ちだろう。

「死ねえ！檜山の仇!!」

「お前さえ居なければ!!」

「くたばりやがれ!!」

と、ほごくが生憎シヨウには攻撃を全て無効化。反射する技能があるので何もしなくても返り討ちに合う

「ぐあああああああああああ！」

と耳障りな声を上げる転がる三人。ソレを見たクラスメイトの誰もが呆然する中、光輝だけがつつかかる。

「蒼！お前何をした!？」

が、当の本人はガン無視して光輝を見さえしない。

「おい！無視をするな!!」

シヨウの態度が癪に触れたのか怒鳴り声を上げる光輝。だが関わるだけ時間の無駄なのでほつとくシヨウ。

だが、このままだと無限ループでしかない。ソレを見かねたハジメはため息をつきながら言う

「シヨウ。無視しないで話してやれ」



「……………御意」

とシヨウは光輝の方を向き、先程とは態度を変え、傲慢かつ不遜な口調で話しかける

「で？何の用だ？勇者（笑）」

「何の用だじゃない！斎藤達に何をしたと聞いているんだ！」

「ああ、俺は何もしてねえよ。アイツ等が攻撃して、それが反射されて、勝手にのたうち回ってるだけだろ？」

と、ごもつともな説明をするが光輝はまだくいかかる。

「だとしても仲間こんな事を「え？誰が仲間だつて？」ツ！」

「多分ハジメにも言われていると思うけどアンタらは仲間じゃねえし、仲間だと思われたくもない」

シヨウは「それに」と続ける。

「正直言えば、アンタらほつといても別に良かったけど白崎はんが八重樫はん助けたいって言ったからハジメが助けに来たんだし、あんたらはそのオマケどころかそのおこぼれを貰って生きてる身なんだから。もう少し立場をわきまえたらどうなんだい？守ると言いながら何も守れない勇者（笑）君」

と、全てを見下す様な目で光輝を蔑み、笑いながらそう言う。

「……………だが、お前がした事はそれだけじゃない！お前は檜山を「檜山ゴミがどうしたつて？」お前が殺したんだろ！」

と怒鳴る光輝だが、シヨウはスラスラと答える

「じゃあなんでハジメを殺そうとした檜山は許されて、俺は駄目なんだ？」

「話をそら「内容は合ってたよ馬鹿が」ツ！」

「アイツはハジメを殺そうとした。だから殺した。1＋1＝2よりも簡単な原理だぞ？」

かなりの暴論ではあるが、彼にとってはハジメは恩人にして今の彼を作り上げる上で重要な存在。言わば彼の全てと言っても過言では無い。

「いい加減現実を見る。ここは異世界で日本の常識は通じない。誰かが誰かを殺す事で成り立っているクソツタレな世界だ。話はこれで終わりだ」

と、会話を打ち切り、ハジメの元へ歩み寄る

「おい、ま『もう黙れ』」

天之河が懲りずに叫ぼうとした瞬間、『言霊』で口を塞ぐ。

「あ、忘れてた」

と、シヨウは何かを思い出したかの様にその足をメルド団長の方へ運ぶ

「ど、どうしたんだ。シヨウ」

メルド団長の表情は固く、緊張している様だった。

「団長、冤罪時の猶予を作っていたいただき、ありがとうございます」と、俺は深々と頭を下げる。その光景に団長やクラスメイト達は驚く。

「お、おい、何を言ってるんだ!」

「団長が猶予を作ってくれたお陰で、俺は城を出てハジメを助けに行くことが出来ました。この借りはいつか必ず返します」

団長が慌てる中、シヨウは感謝の言葉を残してその場を後にした。

そうこうして、旅立とうとしたその時、何かを決意したように雫が顔を上げてハジメ達に駆け寄って来た。

「待って!」

そう言つてハジメ達を呼び止める。

「何？雫ちゃん。いくら雫ちゃんに言われても私達は行くよ」

「ううん、違う！止めるつもりは無いわ！だから……………私も連れてつて！」

雫が信じられないことを言いだした。

「えっ!? 雫ちゃん!？」

流石の香織も予想外だったのか、驚愕の表情で声を漏らす。

「皆には勝手言つて悪いんだけど、私は香織達の傍に居たいの」

「勇者（笑）の事は良いのか？」

と、シヨウは問いかけたら、雫は首を縦に振つて答える。

「ええ、あんな奴もういいのよ。光輝は二人が居なくなつてからは香織『だけ』の生存は疑つてなかつたわ。南雲君のことはあつさりと見限つた癖に、強くなつた途端に仲間とか言い出したり、蒼君の言い分を聞かずに悪と決めつけて罰しようとしたり、挙句に私達を助ける為に『殺す』という行為からも逃げたり……………もううんざりなの！あんなの、私の手には負えないわ!!」

「八重樫はんに見捨てられるとか……………終わつてんな。勇者（笑）」

「何か、闇落ち復讐物のラノベの序盤の様な展開だね……………」

「……………消す?」

「いいですね。やりましょう!」

「待て待てお主ら、気持ちにはわからんでもないが抑えんか。それではせっかくご主人様が生かしたい意味が無かろう」

と、『雷龍』をすてんばくいするユエとドリユッケンで肩をトントンし始めたシアをなだめるティオ。その姿からは竜人らしい思慮の深さが伺える。本当にケツパイルで悦んでた変態なのだろうか？

それは置いといて、雫はハジメの方を向くと、再び頼む

「だからお願い。私も連れて行つて……………」

「連れてけと言われてもな……………」

ハジメが困った顔をする。八重樫さんの実力を考えると、大迷宮攻略に連れて行くのは不安が残るからだろう。シヨウが「ミュウちゃんと一緒に面倒みるよ?」と提案するが、乗り気では無いハジメ。未だ迷っているハジメを見ると、雫が近付き

「……………連れてつてくれないと……………大変な事になるわよ?」

「? 大変なこと? 何が……………」

「〃白髪義眼の処刑人〃なんてどうかしら?」

「……………は?」

「それとも、〃破壊巡回〃と書いて〃アウトブレイク〃と読む、なんてどう?」

「ちよつと待て、お前、一体何を……………」

「他にも〃終焉の暴虐〃とか〃煌めく紅翼の錬成師〃なんてのもあるわよ?」

「お、おま、お前、まさか……………」

突然、わけのわからない名称を列挙し始めた雫に、最初は訝しそうな表情をしていたハジメだったが、雫がハジメの頭から足先まで面白そうに眺めていることに気がつく、その意図を悟りサツと顔を青ざめさせた。

「ふふふ、今の私は〃神の使徒〃で勇者パーティーの一員。私の発言は、それはもうよく広がるのよ。ご近所の主婦ネットワーク並みにね。さあ、南雲君、あなたはどんな二つ名がお望みかしら……………随分と、名を付けやすそうな見た目になったことだし、盛大に広めてあげるわよ?」

「さて、ちよつと、さて! なぜ、お前がそんなダメージの与え方を知っている!?!」

「香織の勉強に付き合っていたからよ。あの子、南雲君と話したくて、話題にでた漫画とかアニメ見てオタク文化の勉強をしていたのよ。

私も、それに度々付き合ってたから……知識だけなら相応に身につけてしまったわ。確か、今の南雲君みたいな人を “ちゆうに……”

「やめろおー！ やめてくれえー！」

「あ、あら、想像以上に効果てきめん……自覚があるのね」

「こ、この悪魔めえ……」

既に、生まれたての小鹿のようにガクブルしながら膝を突いているハジメ。蘇るのはリアル中学生時代の黒歴史。記憶の奥深くに封印したそれが、「呼んだ？」と顔をひよっこり覗かせる。

「ふふ、じゃあ、連れて行って？」

「……」

「ふう、破滅挽歌、復活災厄、紅雷霸王、雷帝竜機……」

「わかった！ わかったから、そんなイタすぎる二つ名を付けないでくれ」

「じゃあすぐに荷物纏めてくるから！ その間に出発したりしたら、この世界でも日本でも、あなたを題材にした小説とか出すから覚悟してね？」

「おまえ、ホントはラスボスだろ？ そうなんだろう？」

「え？ 駄目なの？ 俺、ハジメを題材にしたギャルゲー作って、愁<sup>社</sup>さんに企画を提案しようと思ってたんだけど？」

「おい、裏ボス！ マジで止めろよ！ 父さんに関しては洒落にならねえからな!!」

羞恥心に大打撃をくらい発狂寸前となって頭を抱えるハジメ。そんなハジメを少し離れたところから見ていたユエ達や他のクラスメイト達は、圧倒的強者であるハジメを言葉だけで跪かせた雫とシヨウに戦慄の表情を浮かべた。

ハジメが、己の中の黒歴史と現在の自分の見た目に対するあれこれと戦っていると、雫がパタパタと足音を鳴らして戻ってきた。そして、雫の前で項垂れるハジメを見て目を丸くする。

雫の事が気になって詳細を聞きに来たユエと香織が情報を交換する。ユエは、どうにも気心知れたやり取りをした挙句、言葉責めでハジメを下した雫に「むう〜」と唸り、香織は、そう言えば、二人でこっそり話している事がよくあったような……とハジメと雫の二人を交互に見やる。そして二人は結論を出した。もしかして、女の戦いでもラスボス？ と。

名状しがたい表情のユエと香織を気にしつつ、いよいよ出発するハジメ達。恵里や鈴など女性陣と永山のパーティー、それに報告を済ませて駆けつけたメルド団長が見送りのためホルアドの入口に集まった。そして、ハジメが取り出した魔力駆動四輪や俺のデイスティバートフォームとアシストの翼に、もはや驚きを通り越して呆れた視線を向ける。

「さあ、『救世主と行く。日本への帰還ツアー』に1名様ご案内〜」

「それ今思いついただろ」

「うん」

とふざけながらも、次の街へと出発した。

が、この時彼等は知らなかった。

これをキツカケに、新たな神の使徒が現れる事を……

## トータス放浪記①（所要、キャラ紹介）

・蒼翔

本作の主人公。ハジメとは幼馴染で天職は本職が「救世主」で、他に「執事」と「南雲ハジメの相棒」を持つ。幼くして不慮の事故により、両親を無くし、祖母と4つ下の妹の三人で貧しく暮らし。ショウが小学3年の時、貧乏な事を理由に虐めてくる年上達から何度も守られ、更に南雲家にお手伝いとして迎えられ返し切れない程の恩を貰い、その恩義でハジメを守ると決意し、仕えている。ちなみにある程度親しい人には「はん」とつけて呼ぶ癖がある。あと、愉悦部。

※ステータスに特に変化無し

・蒼アシスト

本作ヒロイン。元はショウの技能だったが、彼女（？）本来の捧身と時折漏れるショウからの愛情から彼への好意が生まれ、使徒の肉体に憑依し、僅か数日でショウの嫁になった。解説が得意で、最近は表情豊かできにかくカワイイ。現在はショウと一緒に給仕の仕事をしている。

美少女＋シンギュラリティ＋甘々＋忠身＋メタ属性

※ステータスに特に変化無し

・南雲ハジメ

原作主人公。本編とは違い香織と落ちたり、蒼がツッコミを担当したりしたからかシアへの態度が割と優しくなっている。え、ティオ？アイツは辛辣にされたほうが喜ぶでしょ（笑）。ステータスは他作品の技等が増えたりして、本作の主人公級の強さを誇る。夜戦経験と技術は彼のほうが圧倒的。あと性欲も

※ステータスに特に変化無し

・南雲香織

旧姓「白崎」。ハジメのメインヒロイン。ハジメと一緒に奈落到ちて、結ばれた。ハジメと一夜過ごした時にあまりの激しさで一回ぶっ壊れた経験がある。それからはユエやショウやアシストと手を





するある意味最強の天使。ハジメを「パパ」と呼び、シヨウを「叔父ちゃん」と呼ぶ（呼んでもらってる）。

## 力を求む神（笑）と勇者

―神域―

ソコは極彩色に彩られた世界。この場を表現するにはそう言うしか無いだろう

果てというものが認識できない、様々な色が入り乱れた空間。まるでシャボン玉の中の世界に迷い込みでもしたかのようだ。

「ほぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ―」

そんな綺麗な空間で汚い高音で叫ぶ形の無い存在。そう、皆さんがタイトルからお察しの通り。自称「神（笑）」事『エヒトルジユエ』だ。

「何なのだ！あの化け物は！いや、最早そんな言葉で片付かぬ！攻撃を無効化の上に反射？ステータスが相手に絶対勝てるぐらい？ふざけているのかアイツは!!!」

と、は神（笑）は少し錯乱して発狂する。ソレもそのはず、彼が対峙している相手は言った通りの能力だけではなく、12種類もの戦闘スタイルを持ち、更に自身の手駒を取られた上に改造され、その者と同等の力を持つ者が向こうには何体もいる。

更に、他にも厄介なのがもう一人。

「もう一人のイレギュラーに関しては無限だぞ！しかも、ふくすうしようじゅん？げんだいへいき？何もかもがおかし過ぎる！あのイレギュラーか!?イレギュラーが更にイレギュラーを育てたのか!?のおああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

と二人のイレギュラーに頭を抱えながら、エヒトはイレギュラーの打開策を何とか考えまくる。するとエヒトは一つの賭けに出た。

「こうなったら、新たに別の世界から召喚して、アイツらと戦わせるしか……………」

ソレはまるで、血を吐きながら続ける悲しいマラソンみたいな感じになっているが、今の彼にはそんな事を考える余裕は無い。あえて言うおう。

このオツサン疲れています。

同情の余地は一切無いが、今のコイツにはそんな事を関係無いと言わんばかりに彼は召喚の準備や、召喚した者の育成等の準備を始める。

「あ、そうだ。ノイント、女神とかチャホヤされてる奴を捕らえといってくれ。今騒がれると面倒だ」

「御意」

その後、愛子先生とその場に居合わせた園部が捕まった。

ハイリヒ王国城内。いつもは優雅な雰囲気を纏っているのだが、現在はとても冷たく暗いものだった。

そりやそうだ。勇者は魔族に敗北し、死んだ筈の無能が強くなって生きてたし、その上異端者とするみ協力的では無い。更にクラスメイトがまた一人抜けた上に更に二人が行方不明と、悪いニュースばかりがこんだけあれば落ち込むのも無理は無い。

そんな暗い状況の中、教皇によってクラスメイトが集められる。

「イシユタルさん、どうしたんですか？」

「実は先ほど、神託の下に南雲殿及び蒼殿が正式に異端者認定が決定しました」

『!?!』

クラスの一同は騒然とした。確かに二人の力は強大だ。僅か数人で六万以上の魔物の大群を、未知のアーティファクトで撃退した。二人の仲間も、通常では有り得ない程の力を有している。にもかかわらず、聖教教会に非協力的で、場合によつては敵対することも厭わないというスタンス。王国や聖教教会が危険視するのも頷ける。

が、何故か二人だけが異端者認定を下された。そう、二人だけ…

「な、何故二人だけなんですか？香織や雫達は？」

と不自然に思った光輝はイシユタルに質問する。すると老害——ゲフンゲフン。イシユタルからはまるで光輝のご都合解釈を助ける為の様な理由を答える。

「おそらく、洗脳か何かにかけているのでしよう。蒼と言う異端者にはソレに近い力がお有りです。勇者様も直接体験したでしょう？」

勇者の脳裏には直ぐに、蒼が言霊で自分を黙らされた事が写った。それならと納得した光輝はもう止まらない

「よし、みんな！俺達が二人から香織達を助けるぞ！」

と、光輝が皆に呼びかけるが、誰一人として反応しなかった。当たり前だ、昨今の光輝の言葉には説得力が無く。一人一人が化け物みたいな集団に勝てる筈も無い。更に、実際にハジメ達に助けられた者もいる。そんな相手に立ち向かおうとするはずが無い。

「安心してください、希望はあります。」

と、イシユタルは口を開く。

「エヒト様からの神託には続きがあります。2ヶ月後、この地に異端者を討伐する為の使徒様が御降臨されます。なので皆様には、今まで通り修練に励むのと新たに降臨される使徒様と友好的になつてもらうだけで大丈夫なのです」

そう告げるとあちらこちらからちらほらと安堵の聲が上がる。

「ねえ、何かおかしくない?」

「うん。鈴にも分かる、皆おかしい……………」

「ああ、俺にも分かる。一体どうなってんだ……………」

「ああ、何か引つかかるよな」

「でもそれがわかんねえんだよな」

「そうだな……………」

「遠藤君!?!いつの間に!」

「最初っからいたよこんちくしょう」

現在残っている愛ちゃん護衛隊と鈴、龍太郎そして遠藤はこの異変に気づくがその裏で何が起きているかは知る由もなかった……………」

イフ√：もし勇者が決闘を申し込んでいたら

「南雲ハジメ！ 俺と決闘しろ！」

光輝は聖剣を突き立て、ハジメに向けてピシツと指を差し宣言した。

「武器を捨てて素手で勝負だ！ 俺が勝ったら、二度と雫や香織には近寄らないでもらう！ そして、その彼女達も全員解放してもらおう！」

「……イタタタ、やべえよ。勇者が予想以上にイタイ。何かもう見られないんだけど」

「何をごちやごちや言っている！ 怖気づいたか！」

聖剣を地面に突き立てて素手の勝負にしたのは、きつと剣を抜いた後で、同じようにハジメが武器を使ったら敵わないと考え直したからに違いない。意識的にか無意識的にかはわからないが……ユエ達も香織達も、流石に光輝の言動にドン引きしていた。

しかし、光輝は完全に自分の正義を信じ込んでおり、ハジメに不幸にされている女の子達や幼馴染を救ってみせると息巻き、周囲の空気に気がついていない。元々の思い込みの強さと猪突猛進さ、それに初めて感じた「嫉妬」が合わさり、完全に暴走しているようだ。

ハジメの返事も聞かず、猛然と駆け出そうとしたその時、それを制するよう一人の執事——ショウが二人の間に入る。

そして彼は光輝に目もくれずにハジメの前で跪き、頭を垂れた。

「ンツ我が主、恐れ多くも進言の許可を賜りますよう」

「何だ？」

「このような雑魚に、御身を煩わせることはございません。ご命令とあらば、自分が不殺を心がけながら片付けましょう」

「ぎっ……邪魔をするな蒼！コレは俺と南雲の「大奥方を我が主から離す事が出来れば、戦う相手はどちらでもよろしいでしょう？」！」

シヨウの言葉と気迫に、光輝は思わず黙ってしまう。その間にハジメはシヨウに命じる

「なら好きにしろ」

「御意」

シヨウはそのまま立ち上がり、光輝の方を向く

「そう言うことだ。お前の相手は俺だ」

「そうか……お前を倒せば皆が解放されるんだな？」

「別に縛っては無いけどな……」

「黙れ！それなら容赦はしないぞ！」

と、光輝は近くに刺さっていた聖剣を引き抜き、振りかぶりながら駆け出す。

さつき「武器を捨てて素手で勝負だ！」と言ったときながら相手が丸腰だったら武器を使う。ご都合主義ここに極まれり。

最早、クラスメイトですら引いている。

シヨウはそんな事を気にせずに「フォームチェンジャー」を展開し光輝の攻撃を遮った後、そのまま潜る。

潜り抜けた頃には姿は一変。

メカツチックなイヌミミと白と紺の兵器を組み込んだ鎧を纏う【暴乱狼王】へと姿を変え、両手で身の丈以上ある大型のメイスを大きく振りかぶる。



















## 砂漠と病気

雫を仲間に加え、「グリユーエン大火山」を目指して砂漠を魔力駆動四輪で突っ走っているときの事だった。

「ん？ なんじゃ、あれは？ ご主人様よ。三時方向で何やら騒ぎじゃ」

不意に、そんな様子を面白げに見ていたテイオがハジメに注意を促した。窓の外に何かを発見したらしい。

ハジメが、言われるままにそちらを見ると、どうやら右手にある大きな砂丘の向こう側に、いわゆるサンドワームと呼ばれるミミズ型の魔物が相当数集まっているようだった。砂丘の頂上から無数の頭が見えている。

「？ なんて、アイツ等あんなところでグルグル回ってた？」

そう、ただ、サンドワームが出現しているだけならテイオも疑問顔をしてハジメに注視させる事はなかった。ハジメの感知系スキルなら、サンドワームの奇襲にも気がつけるし、四輪の速度なら直前でも十分攻撃範囲から抜け出せるからだ。異常だったのは、サンドワームに襲われている者がいるとして、何故かサンドワームがそれに襲いかからずに、様子を伺うようにして周囲を旋回しているからなのである。

「まるで、食うべきか食わざるべきか迷っているようじゃのう？」

「まあ、そう見えるな。そんな事あんのか？」

「妾の知識にはないのじゃ。奴等は悪食じゃからの、獲物を前にして躊躇うということはないはずじゃが……」

DMの変態であるテイオだが、ユエ以上に長生きな上、ユエと異なる



り幽閉されていたわけでもないので知識は結構深い。なので、魔物に関する情報などでは頼りになる。その彼女が首をかしげるといふことは、何か異常事態が起きているのは間違いないだろう。

しかし、わざわざ自分達から関わる必要もないことなので、ハジメは、確認せず巻き込まれる前にさっさと距離を取ることにした。

と、そのとき、

「っ?! 掴まれ!」

ハジメは、そう叫ぶと一気に四輪を加速させた。直後、四輪の後部にかすりつつ、僅かに車体を浮き上げながら砂色の巨体が後方より飛び出してきた。大口を開けたそれはサンドワームだ。どうやら、不運なのはハジメ達も同じだったらしい。

ハジメは、さらに右に左にとハンドルをきり、砂地を高速で駆け抜けていく。そのSの字を描くように走る四輪の真下より、二体目、三体目とサンドワームが飛び出してきた。

「きゃあああ!」

「ひう!」

「わわわ!」

「ベブス!」

雫、ミュウ、シア、そして荷台でアシストの膝枕で半分寝てたシヨウの順に悲鳴が上がる。そんなでもって現在進行形でサンドワームの奇襲を受けながらも、ハジメは最近向上しつつあるドライビングテクニクを駆使し、避けまくる。

「南雲君! 貴方の事だからこの車にも色々武装が積んであるのよね!？」

と、雫がハジメに問うと、当の本人はニヤリと笑い

「そんじやありクエストにお応えするとしますか！」  
「おー！」

特定部位に魔力を流して特殊ギミックを作動させる。  
それと同時に車にドリフトをかけてサンドワームに車体前面をむけると、ボンネットの一部がスライドして開き、その中からライフルの様な形状の武器が展開される。

ライフルはカクカクと動いてサンドワームに狙いを定めると、魔法陣を投影。するとサンドワームは一瞬の内に分解された。

「そう言えば何げに使うの初めてだな」

「そうだな。見ろよ、ドンドン綺麗に消えてくぜ」

「これならミュウちゃんに見せても問題無いわね」

「…………ソコの三人は血も涙も無いのね」

「失礼な。俺等は立派な人間だよ？ちよつとバグってるだけ」

「あれでちよつとな訳無いでしょ!？」

と、地球組のお話はさておき。近寄って確認したらサンドワームが襲うかどうか迷っていたのはやはり人だった。

エジプトの民族衣装に似た白い服を身に纏った20代半ばぐらいの男だった。

だが、香織が驚いたのは、そこではなく、その青年の状態だった。苦しそうに歪められた顔には大量の汗が浮かび、呼吸は荒く、脈も早い。服越しでもわかるほど全身から高熱を発している。しかも、まるで内部から強烈な圧力でもかかっているかのように血管が浮き出ており、目や鼻といった粘膜から出血もしている。明らかに尋常な様子ではない。ただの日射病や風邪というわけではなさそうだ。

ハジメは、まるでウイルス感染者のような青年の傍にいる事に危機感を覚えたが、治癒の専門家が診察しているので大人しく様子を見ることにした。香織は『浸透看破』を行使する。これは、魔力を相手に浸透させることで対象の状態を診察し、その結果を自らのステータスプレートに表示する技能である。その結果……

「……魔力暴走？ 摂取した毒物で体内の魔力が暴走しているの？」

「香織？ 何がわかったんだ？」

「う、うん。これなんだけど……」

そう言って香織が見せたステータスプレートにはこう表示されていた

|||||  
|||||  
|||||

状態：魔力の過剰活性 体外への排出不可

症状：発熱 意識混濁 全身の疼痛 毛細血管の破裂とそれに伴う

出血

原因：体内の水分に異常あり

|||||  
|||||  
|||||

「おそろくだけど、何かよくない飲み物を摂取して、それが原因で魔力暴走状態になっているみたい……しかも、外に排出できないから、内側から強制的に活性化・圧迫させられて、肉体が付いてこれてない……このままじゃ、内蔵や血管が破裂しちゃう。出血多量や衰弱死の可能性も……『万天』」

香織はそう結論を下し、回復魔法を唱えた。使ったのは『万天』。中級回復魔法の一つで、効果は状態異常の解除だ。鈴達にかけられた石化を解いた術である。

しかし……

「……ほとんど効果がない……どうして？ 浄化しきれないなんて……それほど溶け込んでいるということ？」

「どうやら、『万天』では、進行を遅らせることは出来ても、完全に治すことは出来なかったようだ。」

「じゃあ、治療を変えよう」

シヨウは【狂侵精神】にフォームチェンジし、ガントレットの指先からコードの様な物が伸ばし、吸盤の様な先端を展開して貼り付ける。

「治療最適解、検索開始。身体状況、確認。症状を現世界の過去の事例と照合——照合完了。治療用魔法式、構築開始……構築完了」

『全事象把握』と『ANW』を駆使し、世界そのものの情報から最適解を抽出し、実行する。

構築が終わるやいなやその場で作った魔法を得物に生成魔法で付与し、行使する

『滅魔』

【ブルー・フアング】から淀んだ蒼色の魔力が溢れ、青年を包みこんで行く。

「えつと……南雲君、蒼君は何をやってるのかしら？」

「それは俺に聞かないでくれ。てかアシストさんや、解説頼む」

「はい。アレは反魔法『滅魔』。その効果は対象の魔力……それとそれによって起きた事象を『無かった事』にする魔法です」

「もう何でもアリね……所で蒼君。貴方の魔力どのくらいなの？ 最初はマイナスだったけど」

「今もマイナス。——∞だよ」

「……もう考えるのは辞めましょう」

「雫ちゃん、大丈夫？回復魔法かける？」

「多分大丈夫よ……多分……」

雫は目元を抑えながら空を見上げ、改めて自分とこのパーティとの  
実力差を痛感しながら、シヨウの万能性に衝撃を受けていたのであつ  
た……

## 砂漠の国アンカジ公国

「まず、助けてくれた事に礼を言う。本当にありがとう。あのまま死んでいたらと思うと……アンカジまで終わってしまうところだった。私の名は、ビイズ・フォウワード・ゼンゲン。アンカジ公国の領主ラズイ・フォウワード・ゼンゲン公の息子だ」

「どうやらこのビイズと名乗った男は結構な大物だったようだ。」

ビイズ曰く、四日前、アンカジにおいてオアシスの汚染が原因で、高熱を発し倒れる人が続出し、国がピンチらしい

その為ビイズがゼンゲン公の代理として、救援要請直接救援要請をする必要があった。

「父上や母上、妹も既に感染していて、アンカジにストックしてあった静因石を服用することで何とか持ち直したが、衰弱も激しく、とても王国や近隣の町まで赴くことなど出来そうもなかった。だから、私が救援を呼ぶため、一日前に護衛隊と共にアンカジを出発したのだ。その時、症状は出ていなかったが……感染していたのだろうな。おそらく、発症までには個人差があるのだろう。家族が倒れ、国が混乱し、救援は一刻を争うという状況に……動揺していたようだ。万全を期して静因石を服用しておくべきだった。今、こうしている間にも、アンカジの民は命を落としていっているというのに……情けない！」

治りたてで力の入らない体に、それでもあらん限りの力を込めて拳を己の膝に叩きつけるビイズ。アンカジ公国の次期領主は、責任感の強い民思いな人物らしい。護衛をしていた者達も、サンドワームに襲われ全滅したというから、そのことも相まって悔しくてならないのだろう。

僥倖だったのは、サンドワーム達が、おそらくこの病を察知して捕食を躊躇ったことだ。病にかかったがゆえに力尽きたが、それゆえにサンドワームに襲われず、結果、ハジメ達と出会うことが出来た。人生、何が起きるかわからないものである。

「……君達に、いや、貴殿達にアンカジ公国領主代理として正式に依頼したい。どうか、私に力を貸して欲しい」

そう言つて深く頭を下げた。領主代理が、そう簡単に頭を下げるべきでないことはビイズ自身が一番分かっているのだろうが、降つて湧いたような僥倖を逃してなるものかと必死なのだろう。

全員の視線がハジメを向く。決断はハジメに任せるということなのだろうが、香織とユエとテイオとアシスト以外は、皆、その眼差しの中に明らかに助けてあげて欲しいという意思が含まれていた。懇願するような眼差しが向けられている。ミュウは、もつと直接的だ。

「パパー。たすけてあげないの?」

そんなことを物凄く純真な眼差しで言ってくる。ハジメなら、何だつて出来るが無条件に信じているようだ。ミュウにとって、ハジメは、紛れもなくヒーローなのだろう。そんなミュウの眼差しに、ハジメは「しようがねえな」と苦笑い気味に肩を竦めた。

ユエとシアとテイオは、そんなハジメに「ふふ」と笑みをこぼしている。雫もハジメの行動に安堵する。ハジメが、ふと傍らの香織を見ると、彼女は……いつも通りだ。ハジメが、どんな選択をしても己の全てで力になる。言葉にしなくても香織の気持ちはハッキリ伝わった。ハジメは、そつと香織の頬をひと撫ですると、ビイズに向かって了承の意を伝えた。

もともと、「グリューエン大火山」行く際に、ミュウはアンカジに預

けていこうと考えていた。いくら何でも、四歳の幼子で大迷宮に連れて行くのは妥当ではない。感染症に関しては、そもそも大体の問題を解決可能なシヨウがいるのでミュウのお守りを頼みながら全員治療で粗方問題無いだろう。

そう考えてハジメがミラー越しにシヨウを見ると、彼は良い笑顔を浮かべながらサムズアップしていた

赤銅色の砂が舞う中、たどり着いたアンカジは、中立商業都市フューレンを超える外壁に囲まれた乳白色の都だった。外壁も建築物も軒並みミルク色で、外界の赤銅色とのコントラストが美しい。

ただ、フューレンと異なるのは、不規則な形で都を囲む外壁の各所から光の柱が天へと登っており、上空で他の柱と合流してアンカジ全体を覆う強大なドームを形成していることだ。時折、何かがぶつかったのか波紋のようなものが広がり、まるで水中から揺れる水面を眺めているような、不思議で美しい光景が広がっていた。

どうやら、このドームが砂の侵入を防いでいるようだ。月に何度か大規模な砂嵐に見舞われるそうだが、このドームのおかげで曇天のような様相になるだけでアンカジ内に砂が侵入することはないという。

ハジメ達は、これまた光り輝く巨大な門からアンカジへと入都した。砂の侵入を防ぐ目的から門まで魔法によるバリア式になっているようだ。門番は、魔力駆動四輪を見ても、驚きはしたがアンカジの現状が影響しているのか暗い雰囲気で覇気もなく、どこか投げやり気味であった。もつとも、四輪の後部座席に次期領主が座っていることに気がついた途端、直立不動となり、兵士らしい覇気を取り戻したが。



アンカジの入場門は高台にあった。ここに訪れた者が、アンカジの美しさを最初に一望出来るようにという心遣いらしい。

確かに、美しい都だとハジメ達は感嘆した。太陽の光を反射してキラキラときらめくオアシスが東側にあり、その周辺には多くの木々が生えていて非常に緑豊かだった。オアシスの水は、幾筋もの川となって町中に流れ込み、砂漠のど真ん中だというのに小船があちこちに停泊している。町のいたるところに緑豊かな広場が設置されていて、広大な土地を広々と利用していることがよくわかる。

北側は農業地帯のようだ。アンカジは果物の産出量が豊富という話を証明するように、ハジメが「遠見」で見る限り多種多様な果物が育てられているのがわかった。西側には、一際大きな宮殿らしき建造物があり、他の乳白色の建物と異なって純白と言っていい白さだった。他とは一線を画す荘厳さと規模なので、あれが領主の住む場所なのだろう。その宮殿の周辺に無骨な建物が区画に沿って規則正しく並んでいるので、行政区にでもなっているのかもしれない。

砂漠の国でありながら、まるで水の都と表現したくなる……アンカジ公国はそんなところだった。

だが、普段は、エリセンとの中継地であることや果物の取引で交易が盛んであり、また、観光地としても人気のあることから活気と喧騒に満ちた都であるはずが、今は、暗く陰気な雰囲気に覆われていた。通りに出ている者は極めて少なく、ほとんどの店も営業していないようだ。誰もが戸口をしっかり締め切って、まるで嵐が過ぎ去るのをジツと蹲って待っているかのような、そんな静けさが支配していた。

「……ハジメ殿や皆様にも、活気に満ちた我が国をお見せしたかった。すまないが、今は、時間が無い。都の案内は全てが解決した後にでも私自らさせていただきます。一先ずは、父上のもとへ。あの宮殿だ」

一行は、ビイズの言葉に頷き、原因のオアシスを背にして進みだした。

「父上！」

「ビイズ！ お前、どうしつ……いや、待て、その方は誰だ!？」

ビイズの顔パスで宮殿内に入ったハジメ達は、そのまま領主ランズイの執務室へと通された。衰弱が激しいと聞いていたのだが、どうやら治癒魔法と回復薬を多用して根性で執務に乗り出していたらしい。

そんなランズイは、一日前に救援要請を出しに王都へ向かったはずの息子が帰ってきたことに驚きをあらわにしつつ、その息子の有様を見て、ここに来るまでの間に宮殿内で働く者達が見せたのと全く同じ様に目を剥いた。

無理もない。なにせ、現在ビイズは、シヨウにおんぶされている。

執事（本職：救世主）に背負われる微妙に情けない姿でありながらも、事情説明を手早く済ませるビイズ。話はトントントン拍子に進んだ。

「じゃあ、動くか。俺とシヨウはオアシスの浄化に向かう。香織達は医療院と患者が収容されている施設へ。魔晶石も持っていけ」

ハジメがメンバーに指示を出す。ハジメ達のやることは簡単だ。香織が、『廻聖』と言う魔法を使って、患者たちから魔力を少しずつ抜きつつ、『万天』で病の進行を遅らせてシヨウが来るまで患者を持たせる。その間にシヨウが『滅魔』でオアシスの汚染を浄化する

ハジメの号令に、全員が元気よく頷いた。

現在、領主のランズイと護衛や付き人多数、そしてハジメ、シヨウはオアシスの前に来ていた。

オアシスは、相変わらずキラキラと光を反射して美しく輝いており、とても毒素を含んでいるようには見えなかった。

しかし……

「……ん？」

「ハジメ、気づいたか？」

二人が、眉をしかめてオアシスの一点を凝視する。様子の変化に気がついたユエがハジメに首を傾げて疑問顔を見せた。

「ああ。今、魔眼石に反応があつたような……領主。調査チームってのはどの程度調べたんだ？」

「……確か、資料ではオアシスとそこから流れる川、各所井戸の水質調査と地下水脈の調査を行ったようだ。水質は息子から聞いての通り、地下水脈は特に異常は見つからなかった。もつとも、調べられたのは、このオアシスから数十メートルが限度だが。オアシスの底まではまだ手が回っていない」

「オアシスの底には、何かアーティファクトでも沈めてあるのか？」  
「？ いや。オアシスの警備と管理に、とあるアーティファクトが使われているが、それは地上に設置してある……結界系のアーティファクトでな、オアシス全体を汚染されるなどありえん事だ。事実、今までオアシスが汚染されたことなど一度もなかったのだ」

ランズイのいうアーティファクトとは「真意の裁断」といい、実は、このアンカジを守っている光のドームのことだ。砂の侵入を阻み、空気や水分など必要なものは通す作用がある便利な障壁なのだ

が、何を通すかは設定者の側で決めることが出来る。そして、単純な障壁機能だけでなく探知機能もあり、何を探知するかの設定も出来る。その探知の設定は汎用性があり、闇系魔法が組み込まれているのか精神作用も探知可能なのだ。

つまり、〃オアシスに対して悪意のあるもの〃と設定すれば、〃真意の裁断〃が反応し、設定権者であるランズイに伝わるのである。もちろん、実際の設定がどんな内容かは秘匿されており領主にしかわからない。ちなみに、現在は調査などで人の出入りが多い上、既に汚染されてしまっていることもあり警備は最低限を残して解除されている。

「……へえ。じゃあ、あれは何なんだろうな」

アンカジ公国自慢のオアシスを汚され、悔しそうに拳を握り締める姿は、なるほど、ビイズの父親というだけあってそっくりである。そんなランズイを尻目に、ハジメは、口元を歪めて笑った。ハジメの魔眼石とシヨウの全事象把握には、魔力を発する「何か」がオアシスの中央付近の底に確かに見えていたのだ。

あるはずのないものがあると言われランズイ達が動揺する。そんな中でハジメがシヨウに命じる。

「シヨウ。そいつを釣れ」

「御意」

シヨウは新たな札を切る。「フォームチェンジャー」をぐり抜けたシヨウの姿はまたも一新。

下から順に茶色いブーツに黒のカーゴパンツを蛇のベルトで止め。上半身はジユストコールを素肌の上から纏い、指ぬきグローブと指輪や首飾りにピアス等の装飾品を身に付け、頭には髑髏マークが刺繍さ

れた三角帽子（所要、海賊帽）を被り、その背中には錨をモチーフにした釣り針が付けられた釣竿を背負っている。

これぞ、シヨウの第7のフォーム【WAVE波乗海賊】だ。

「さーてと。キミ、俺に釣られて見る？」

そう何処ぞのキザな青い亀みたいな台詞を吐きながら釣竿を手にし、針を飛ばす。そのままリールを回して糸を伸ばし、水中へどんどん沈める。

そして、オアシスの底にいる「何か」と接触。

「ヒット」

シヨウがそう呟くと釣竿の持ち手から魔力を流し、釣竿に付与されている『纏雷』を発動し、

バチバチバチバチバチバチ！

オアシスごと「何か」に電撃を浴びせる。

シュバ！

風を切り裂く勢いで無数の水が触手となってハジメ達に襲いかかった。咄嗟に、ハジメはドンナー・シユラークで迎撃し水の触手を弾き飛ばす。

何事かと、オアシスの方を見たランズイ達の目に、驚愕の光景が飛び込んできた。

シヨウの電撃に怒りをあらわにするように水面が突如盛り上がったかと思うと、重力に逆らってそのまませり上がり、十メートル近い

高さの小山になったのである。

「なんだ……これは……」

ランズイの呆然としたつぶやきが、やけに明瞭に響き渡った。

## 問題全部お片付け

オアシスより現れたそれは、体長十メートル、無数の触手をウネウネとくねらせ、赤く輝く魔石を持っていた。スライム……そう表現するのが一番わかりやすいだろう。

だが、サイズがおかしい。通常、スライム型の魔物はせいぜい体長一メートルくらいなのだ。また、周囲の水を操るような力もなかったはずだ。少なくとも触手のように操ることは、自身の肉体以外では出来なかったはずである。

「なんだ……この魔物は一体何なんだ？ バチエラム……なのか？」

呆然とランズイがそんな事を呟く。バチエラムとは、この世界のスライム型の魔物のことだ。語源はウザイアイツ。

「まあ、何でもいいさ。こいつがオアシスが汚染された原因だろ？ 大方、毒素を出す固有魔法でも持っているんだろう」

「……確かに、そう考えるのが妥当か。だが倒せるのか？」  
ハジメとランズイが会話している間も、まるで怒り心頭といった感じで触手攻撃をしてくるオアシスバチエラム。が、その攻撃はシヨウウがサクツと張った聖絶が拒む。

その様子を見て、もう驚いていられるかと投げやり気味にスルーすることを決めて、冷静な態度でハジメに勝算を尋ねた。

「ん〜……ああ、大丈夫だ。『紅雷竜』」

ランズイの質問に対してお座なりな返事をしながら、ハジメは深紅の竜を降臨させて、その口から放たれる荷電粒子砲がオアシスバチエラムの核を消し飛ばす。

同時にオアシスバチユラムを構成していた水も力を失ってただの水へと戻った。ドザアー！ と大量の水が降り注ぐ音を響かせながら、激しく波立つオアシスを見つめるランズイ達。

「……終わったのかね？」

「ああ、もう、オアシスに魔力反応はねえよ。原因を排除した事がイコール浄化と言えるのかは分からないが」

ハジメの言葉に、自分達アンカジを存亡の危機に陥れた元凶が、あっさり撃退されたことに、まるで狐につままれたような気分になるランズイ達。それでも、元凶が目の前で消滅したことは確かなので、慌ててランズイの部下の一人が水質の鑑定を行った。

「……どうだ？」

「……いえ、汚染されたままです」

ランズイの期待するような声音に、しかし部下は落胆した様子で首を振った。オアシスから汲んだ水からも人々が感染していたことから予想していたことではあるが、オアシスバチユラムがいなくても一度汚染された水は残るといふ事実には、やはり皆落胆が隠せないようだ。

「じゃあ後は浄化すれば良いのか。『絶像』」

シヨウの一言で神代の魔法が発動し、蒼い魔力光がオアシスを包み込む。

「3分したら汚染前に戻るから少し待ってて」

「カップ麺かよ」

「ポッポー、ポッポー」

三分後、ランズイは部下に命令して再び水質の鑑定を行う。すると、目に見えて分かる程驚愕して何度も鑑定をしていた



「でっ・どうだい?」

シヨウは答えが分かりきった質問をし、水質を鑑定した者は涙と鼻水を流しながら、声を震わせてランズィに報告する

「お、オアシスの毒素は——完全に無くなっています! 本当に奇跡だ……奇跡が起きたんだ!!」

部下はそう言っつて水を飲み、浄化された事を証明した。

それを見たランズィ達はお互いを抱き合う様に喜んだ。

「……しかし、あのバチュラムらしき魔物は一体なんだったのか……新種の魔物が地下水脈から流れ込みでもしたのだろうか?」

気を取り直したランズィが首を傾げてオアシスを眺める。それに答えたのはハジメだった。

「おそらくだが……魔人族の仕業じゃないか?」

「?! 魔人族だと? ハジメ殿、貴殿がそう言うからには思い当たる事があるのだな?」

ハジメの言葉に驚いた表情を見せたランズィは、しかし、すぐさま冷静さを取り戻し、ハジメに続きを促した。元凶の排除とオアシスの浄化を成し遂げたハジメ（ほとんどシヨウがやったが）に、ランズィは敬意と信頼を寄せているようで、最初の、胡乱な眼差しはもはや微塵もない。

ハジメは、オアシスバチュラムが、魔人族の神代魔法による新たな魔物だと推測していた。それはオアシスバチュラムの特異性もそうだが、ウルで愛子を狙い、オルクスで勇者一行を狙ったという事実があるからだ。

おそらく、魔族の魔物の軍備は整いつつあるのだろう。そして、いざ戦争となる前に、危険や不確定要素、北大陸の要所に対する調査と打撃を行っているのだ。愛子という食料供給を一変させかねない存在と、聖教教会が魔族の魔物に対抗するため異世界から喚んだ勇者を狙ったのがいい証拠だ。

そして、アンカジは、エリセンから海産系食料供給の中継点であり、果物やその他食料の供給も多大であることから食料関係において間違いなく要所であると言える。しかも、襲撃した場合、大砂漠のど真ん中という地理から、救援も呼びにくい。魔族が狙うのもおかしい話ではないのだ。

その辺りのことを、ランズィに話すと、彼は低く唸り声を上げ苦い表情を見せた。

「魔物のことは聞き及んでいる。こちらでも独自に調査はしていたが……よもや、あんなものまで使役できるようになっているとは……見通しが甘かったか」

「まあ、仕方ないんじゃないか？ 王都でも、おそらく新種の魔物なんて情報は掴んでいないだろうし。なにせ、勇者一行が襲われたのも、つい最近だ。今頃、あちこちで大騒ぎだろうよ」

「いよいよ、本格的に動き出したということか……ハジメ殿、……貴殿は冒険者と名乗っていたが……そのアーティファクトといい、強さといい、やはり香織殿と同じ……」

ハジメが、何も答えず肩を竦めると、ランズィは何か事情があるのだろうとそれ以上の詮索を止めた。どんな事情があらうとアンカジがハジメ達に救われたことに変わりはない。恩人に対しては、無用な詮索をするよりやるべき事がある。

「……ハジメ殿、シヨウ殿。アンカジ公国領主ランズィ・フォウワー

ド・ゼンゲンは、国を代表して礼を言う。この国は貴殿等に救われた」  
そう言うのと、ランズィを含め彼等の部下達も深々と頭を下げた。領主たる者が、そう簡単に頭を下げるべきではないのだが、ハジメやシヨウが「神の使徒」の一人であるか否かに関わらず、きつと、ランズィは頭を下げてだろう。ほんの少しの付き合いかないが、それでも彼の愛国心が並々ならぬものであると理解できる。だからこそ、周囲の部下達もランズィが一介の冒険者を名乗るハジメ達に頭を下げて止めようとせず、一緒に頭を下げているのだ。この辺りは、息子にもしつかり受け継がれているのだろう。仕草も言動もそっくりである。

そんな彼等に、ハジメはニツコリと満面の笑みを見せる。そして、

「いや、俺は何もしていない。今回の功労者はシヨウだ。だからシヨウにたっぷり感謝してくれ。そして、決してこの巨大な恩を忘れないようにな」

「悪魔かよー」

思いつきり恩に着せた。それはもう、清々しいまでに。ランズィは、てつきり「いや、気にしないでくれ。人として当然のことをしたまでだ」等と謙遜しつつ、さり気なく下心でも出してくるかと思っていたので、思わずキョトンとした表情をしてしまう。別にランズィとしては、救国に対する礼は元からするつもりだったので、それでも構わなかったのだが、まさか、ここまでド直球に来るとは予想外だった。

そしてシヨウのツツコミも綺麗に炸裂した。確かに、今回の功労者はシヨウであるが、ここまで清々しく恩を着せさせられるとは思ってもしなかった。

シヨウとしては、この後ベビシッターの仕事もあるので、ミユウをお留守番しなければならぬ以上、アンカジの安全確保は必要なことだったので、それほど感謝される程の事でもなかった。

だが、せつかく感謝してくれているし、いざという時味方をしてくれる人は多いに越したことはないだろうと、ハジメはすっかり恩を売っておくことにしたのだ。ランズィなら、その辺の対応は誠実だろうとは思ったが、彼も政治家である以上、言質は取っておこうというわけである

「あ、ああ。もちろんだ。末代まで覚えているとも……だが、アンカジには未だ苦しんでいる患者達が大勢いる……それも、頼めるかね？」

政治家として、あるいは貴族として、腹の探り合いが日常とかしているランズィは、ド直球なハジメの言葉に少し戸惑った様子だったが、やがて何かに納得したのか苦笑いをして頷いた。そして、感染者たちの治療を依頼した。

「そつちもショウがやる。問題無い」

「ハジメがやれと言うなら、俺は何でもやるよ」

あっさり引き受けたハジメ達にホッと胸を撫で下ろし、ランズィはハジメ達との出会いを神に感謝するのだった。

医療院では、アシストがハジメlover, sを伴って獅子奮迅の活躍を見せていた。アシストと香織、は緊急性の高い患者から魔力を一斉に抜き取っては魔晶石にストックし、半径十メートル以内に集めた患者の病の進行を一斉に遅らせ、同時に衰弱を回復させるよう回復魔法も行使する。

シアとテイオ。それと雫は、動けない患者達を、軽々と一気に運んでいた。シアに関しては、馬車を走らせるのではなく、馬車に詰めた患者達を馬車ごと持ち上げて、建物の上をピョンピョン飛び跳ねながら他の施設を行ったり来たりしている。緊急性の高い患者は、香織が各施設を移動するより、集めて一気に処置した方が効率的だからだ。

もつとも、この方法、非力なはずのウサミミ少女の有り得ない光景に、それを見た者は自分も病気にかかって幻覚を見始めたのだと絶望して医療院に駆け込むという姿が多々見られたので、余計に医療院が混乱するという弊害もあったのだが。

医療院の職員達は、上級魔法を連発したり、複数の回復魔法を当たり前のように同時行使するアシストと香織の姿に、驚愕を通り越すと深い尊敬の念を抱いたようで、今や、全員が二人の指示のもと患者達の治療に当たっていた。

そんな二人を中心とした彼等の元に、ハジメ達がやって来る。そして、共にいたランスイより元凶の排除とオアシスの浄化がなされた事が大声で伝えられると、一斉に歓声が上がった。多くの人が亡くなり、砂漠の真ん中で安全な水も確保できず、絶望に包まれていた人達が笑顔を取り戻し始める。

「さて、じゃあ治療を済ませますか。『滅魔』」

淀んだ蒼色の魔力がその場も包み、国民全員を全て治療した。

医療院の職員が診察をし、その結果に歓喜の声を上げる。

「か、感染が消えた！奇跡だ！奇跡が起きたんだー！」

その喜ぶ様に一部の者はデジャブを感じながら危機が去った事を喜びあった。

---

「ミュウ、それじゃあ行ってくる。シヨウ達といい子で留守番してるんだぞ？」

「うう、いい子してるの。だから、早く帰ってきて欲しいの、パパ」

「ああ、出来るだけ早く帰る」

やることも終わり、いよいよ出発の時が来た。服の裾をギョツと両手で握り締め、泣くのを我慢するミュウと、それを優しく宥めるハジメの姿は、種族など関係なく、誰が見ても親子だった。

「みんなには、コレを」

二人が親子のやり取りをしている間、シヨウはハジメラヴァーズ（+ 雫）に「フォームエンジャー」を一枚つつ渡して行く。

「一応、間に合わせた。アーティファクトはハジメ謹製だから機能は保証するよ」

「あ、やつと出来たんだ！これ！」

「…遂に変身デビュー」

「あ、これがそうなんです！いや〜楽しみですよ〜」

「ふむ、これがご主人とシヨウの合作……」

「ねえ、蒼君、何で私の分まであるの？ねえ？」

各反応を頂戴し、雫の疑問に答える

「八重樫はんのはついで。刀を中心にした衣装だから問題は無いよ」

「そ、そう。分かったわ」

そうしている内に、向こうはスキんシップが終わったのでシヨウがハジメに声をかけた。

「行ってらっしゃい」

「おう、ミュウの事頼んだぞ」

「ああ」

二人は拳を合わせて、ニヤリと笑い合う。

こうして、ハジメ達はシヨウ達を残し、「グリユーエン大火山」へと出発するのだった。

チエンジンジ！デイメンクインフォーム！

【グリーンエン大火山】

それは、アンカジ公国より北方に進んだ先、約百キロメートルの位置に存在している。見た目は、直径約五キロメートル、標高三千メートル程の巨石だ。普通の成層火山のような円錐状の山ではなく、いわゆる溶岩円頂丘のように平べったい形をしており、山というより巨大な丘と表現するほうが相応しい。ただ、その標高と規模が並外れているだけで。

この【グリーンエン大火山】は、七大迷宮の一つとして周知されているが、【オルクス大迷宮】のように、冒険者が頻繁に訪れるということはない。それは、内部の危険性と厄介さ、そして【オルクス大迷宮】の魔物のように魔石回収のうまみが少ないから……というのもあるが、一番の理由は、まず入口にたどり着ける者が少ないからである。

その原因は、【グリーンエン大火山】は、かの天空の城を包み込む巨大積乱雲のように、巨大な渦巻く砂嵐に包まれているのだ。その規模は、【グリーンエン大火山】をすっぽりと覆って完全に姿を隠すほどで、砂嵐の竜巻というより流動する壁と行ったほうがしっくりくる。

しかも、この砂嵐の中にはサンドワームや他の魔物も多数潜んでおり、視界すら確保が難しい中で容赦なく奇襲を仕掛けてくるというのだ。並みの実力では、【グリーンエン大火山】を包む砂嵐すら突破できないというのも頷ける話である。

……………一部例外を除いては

その砂嵐の壁を物ともせず進む人影、否。それは人影と言うには余りにも武骨で大きくかった。

地面を力強く踏みしめる車輪のついた太い足。まるでゴムの様にしなやかで固い3本の指を持つゴツイ腕。進を覆う黒い金属。こちらの言葉で言う「トランスフォーマー」の様な存在であろう。

が、その正体は――

「……………ハジメさん、この車どうなってるんですか？」

「俺とシヨウがロマンを積めれるだけ詰め込んだ過載機だ。」

魔王と救世主が遊びまくった結果何か凄い事になった魔動四輪である。

正直な所、「アンタら何やってんの!？」と突っ込みたい所だが、これがまた滅茶苦茶強いのである。

シヨウ作成の分解砲撃だけでなくミサイルにパイルバンカー。さらに攻撃反射結界までついて魔力はハジメから無限供給と隙が全くない。更には空間魔法で見た目以上に広く、暖冷完備でマジで快適である。

やがて、たどり着いた頂上は、無造作に乱立した大小様々な岩石で埋め尽くされた煩雑な場所だった。尖った岩肌や逆につるりとした光沢のある表面の岩もあり、奇怪なオブジェの展示場のような有様だ。砂嵐の頂上がとても近くに感じる。

そんな奇怪な形の岩石群の中でも群を抜いて大きな岩石があった。歪にアーチを形作る全長十メートルほどの岩石である。

ハジメ達は、その場所にたどり着くと魔動四輪を降り、アーチ状の岩石の下に「グリューエン大火山」内部へと続く大きな階段を発見した。ハジメは、階段の手前で立ち止まると肩越しに背後に控える香



織、ユエ、シア、テイオ、雫の顔を順番に見やり、自信に満ちた表情で一言、大迷宮挑戦の号令をかけた。

「やるぞー！」

「うん！」

「んっ！」

「はいですー！」

「うむっ！」

「ええ！」

【グリユーエン大火山】の内部構造は、他の大迷宮よりもヤバかった。

まず、マグマが宙を流れている。亜人族の国フェアベルゲンのように空中に水路を作って水を流しているのではなく、マグマが宙に浮いて、そのまま川のような流れを作っているのだ。空中をうねりながら真っ赤に赤熱化したマグマが流れていく様は、まるで巨大な龍が飛び交っているようだ。

また、当然、通路や広間のいたるところにマグマが流れており、迷宮に挑む者は地面のマグマと、頭上のマグマの両方に注意する必要がある。あつた。

しかも、壁のいたるところから唐突にマグマが噴き出し始めるのである。本当に突然な上に、事前の兆候もないので察知が難しい。まさに天然のブービートラップだった。普通なら、警戒のため慎重に進まざるを得ず攻略スピードが相当落ちていくところだ。

そして、なにより厳しいのが、茹だるような暑さ——もとい熱だ。

通路や広間のいたるところにマグマが流れているのだから当たり前ではあるのだが、まるでサウナの中にでもいるような、あるいは熱したフライパンの上にもいるような気分である。「グリュウエン大火山」の最大限に厄介な要素だ。

のだが――

「ねえハツくん。この装備どうなってるの？」

「……マグマの暑さを感じられない」

「すっごい快適ですう！こんな楽しんで良いんでしょうか？」

「マグマの熱で悶えられ無いのは残念じゃが、冷静に考えるとこのアーティファクトとんでもないのじゃ」

「南雲君、聞きたくは無いのだけれど……説明求むわ？」

と女性陣から新装備への疑問の声が上がる。

それぞれの装備を解説していくと、人形の方の神の使途のソレとはまた違うベクトルの黒い戦衣装にそれぞれの装飾がされていた。

香織には薄黒にハジメの魔力光の様な紅い宝石で装飾されたデザインにガーターベルトと一体になっているホルスター。右腕にはハジメの義手に酷似したデザインのガントレット、左手の薬指に指輪が嵌められている。

ユエには胸元に深紅のブローチが付き、袖は分割しフリルがあしらわれている。スカートは一回り大きくなり、鎧を彷彿とさせるような黄金のプレートを纏い、赤いマントを身に付けていた。もちろん、左手の薬指には指輪をつけている

シアにはウサギの横顔が向かい合っているデザインの赤いサンダラスに青みがかった白い軽装。そして、腰の辺りには大剣の様な物が追加されている。

テイオにはいくつかの装甲がついているがソレを繋ぐ様に血の様な赤い導線が接続されており、胸部の中央には地球に似た絵が描かれていた。

雫には戦衣装の上から黒に赤いラインの羽織に刀が2本装備されていて、靴の代わりに足袋と草履でかなり和風テイストになっている。

「ああ、シヨウ曰く【魔王妃】デイメンクイーンフォームって言ってその装備には温度管理機能が付与されていていつでも一定の温度を保てる仕様になっている。ついでに言えば、その装備はシヨウがそれぞれのポテンシャルを最大限以上に引き出す仕掛けが仕組まれている筈だが、使い難かったら言ってくれ。後で改良する」

「まって！今王妃って言わなかった!？」

雫は、装備の機能より名前の単語に反応したが、ハジメはスルーしつつ、話題を変えようとした。

「ま、名前はともかく。シヨウのびっくりチェンジと比べたら霞んで見えるかもしれないがアイツのはお前らのはまたベクトルが違うから気にするな」

「そう言えばシヨウさんってフォームチェンジしたらガラツと戦い方が変わりますう。アレって何ですか?」

シアがシヨウのフォームチェンジについて疑問を持つ。

「あ?そう言えば知らなかったか?アイツのフォームチェンジの理由」

「え?アレってロマン的なのじゃないの?」

「…ん」

「確かにそれもあるが………ロマンは3割位だ」

ハジメの言葉に香織達は驚きながらハジメは続ける

「アイツは技能の数がとんでもない位多い。それで手札に迷う事がある。だから、合えて絞る事で戦い易くしているんだ」

「……………因みに、どのくらいあるのかしら?」

「確か派生抜きで22個。それも含めたら50は余裕で越える」

「……………」

八重樫さん、あまりのチートっぷりに絶句。偽装状態の頃の面影が一つも無くてかなり引き吊った表情をしていた。

「つてな感じでロマン三割、実用六割、後付け様に一割残して出来たのがあのフォームチェンジャーだ」

「多分、全部乗せだね」

「……………遺影」

「いえ、仏壇ですう!」

「意外と見た目が変わらぬかものう」

「いや、シヨウの最終フォーム予想大会開くなよ。それに、まだ作って無いし」

「っへくちゅ!」

「こんな暑い所で風邪ですか?」

「いや、多分違うと思うけど……………」

大迷宮の道中で装備をならしながら進む一向。先へ進んで行くと、明らかに今までと雰囲気異なる場所にたどり着いた。

「……………あそこが住処?」

ユエが、チラリとマグマドームのある中央の島に視線をやりながら

眩く。

「階層の深さ的にも、そう考えるのが妥当だね……でも、そうなるか……」

「最後のガーディアンがいるはず……じゃな？　ご主人様よ」

「ああ、一応正規ルートの手筈だが……どっかに見落としがあったのか……?」

と警戒しつつも見落としが無いか思考を巡らせるハジメ。それが正しかった事は、直後、宙を流れるマグマから、マグマそのものが弾丸のごとく飛び出してくるという形で証明された。

「むっ、任せよ!」

テイオの掛け声と共に魔法が発動し、マグマの海から炎塊が飛び出して頭上より迫るマグマの塊が相殺された。

しかし、その攻撃は唯の始まりの合図に過ぎなかったようだ。テイオの放った炎塊がマグマと相殺され飛び散った直後、マグマの海や頭上のマグマの川からマシンガンのごとく炎塊が撃ち放たれたのだ。

「ちっ、散開だ!」

このままでは、今いる場所に釘付けにされると判断したハジメは、近くの足場に散開するように指示を出した。凄まじい物量の炎塊が一瞬前までハジメ達がいた小舟を粉碎し、マグマの海へと沈めていく。

ハジメ達は、それぞれ別の足場に着地し、なお、追ってくるマグマの塊を迎撃していった。迎撃そのものは切羽詰るというほどのものではなかったのだが、いつ終わるともしれない波状攻撃に苛立たしげな表情を見せるハジメ達。

そんな状況を打開すべく、ハジメは、ガンスピニングしてドンナー・シユラークのリロードを終えると同時に、振り返らず肩越しにシユラークの銃口を真後ろに向けた。そして、前方に向けた義手の肘から散弾を発射してマグマの塊を迎撃しつつ、背後で香織に迫っていたマグマの塊を、シユラークの連射で撃ち落とした。

遠くにいるユエに視線を飛ばすハジメ。それを瞬時に読み取ったユエは重力魔法を発動する。

『絶禍』

響き渡る魔法名と共にハジメ達五人の中間地点に黒く渦巻く球体が出現し、飛び交うマグマの塊を次々と引き寄せていった。黒き小さな星は、呑み込んだ全てを超重力のもと押し潰し圧縮していく。

ユエの魔法により炎塊の弾幕に隙ができ、ハジメは、『空力』で宙を跳ぶと一気にマグマドームのある中央の島へと接近した。

ハジメ達を襲う弾幕で一番厄介なのは、止める手段が目に見えないことだ。場所的に、明らかに「グリューエン大火山」の最終試練なのだが、今までの大迷宮と異なり目に見える敵が存在しないので、何をすればクリアと判断されるのかが分からない。そのため、もつとも怪しい中央の島に乗り込んでやろうと、ハジメは考えたのである。

ハジメは、中央の島へと宙を駆けながら『念話』を使う。

—中央の島を調べる。香織はこっちに、他は援護を頼む—

—うん！—

—了解—

ユエの『絶禍』の効果範囲からマグマの塊がハジメを襲うが、そう

はさせじとテイオがマグマの海より無数に炎弾を飛ばして迎撃し、シアもドリユッケンを戦鎚に展開せずショットガンモードで迎撃していく。ユエは、『絶禍』を展開維持。雫は【魔王妃】の刀に魔力を流し、斬撃を飛ばしてマグマを落としていく。

ユエ達の援護をもらって、一直線に中央の島へと迫ったハジメ達は、『空力』による最後の跳躍を行い飛び移ろうとした。

だが、その瞬間、

「ゴオアアアアア!!」

「ッ!?!」

そんな腹の底まで響くような重厚な咆哮が響いたかと思うと、宙を飛ぶハジメの直下から大口を開けた巨大な蛇が襲いかかってきた。

全身にマグマを纏わせているせいか、周囲をマグマで満たされたこの場所では熱源感知にも気配感知にも引つかからない。また、マグマの海全体に魔力が満ちているようなので魔力感知にも引つかからなかったことから、完全な不意打ちとなった巨大なマグマ蛇の攻撃。

しかし、ハジメは超人的な反応速度で体を捻り易々とその顎門による攻撃を回避した。

「ハックくん!」

一瞬前までハジメがいた場所を、マグマ蛇がバクンッ! と口を閉じながら通り過ぎる。近くに居た香織が銃口を離れていくマグマ蛇の頭に照準し発砲した。必殺の破壊力を秘めた閃光が狙い変わらずマグマ蛇の頭を捉え、弾き飛ばす。

「えっ!?!」

しかし、上がった声はマグマ蛇の断末魔ではなく、香織の驚愕の声だった。

当然、その原因は、マグマ蛇にある。なんと、マグマ蛇の頭部は確かに弾け飛んだのだが、それはマグマの飛沫が飛び散っただけであり、中身が全くなかったのだ。今までの「グリュウエン大火山」の魔物達は、基本的にマグマを身に纏ってはいたが、それはあくまで纏っているのであって肉体がきちんとあった。断じて、マグマだけで構成されていたわけではない。

ハジメ達は直ぐに立ち直ると、物は試しにと頭部以外の部分を滅多撃ちにした。幾条もの閃光が情け容赦なくマグマ蛇の体を貫いていくが、やはり、どこにも肉体はなかった。どうやら、このマグマ蛇は、完全にマグマだけで構成されているらしい。

二人は驚きつつも、取り敢えず、体のあちこちを四散させたことでマグマ蛇を行動不能に出来たので、その脇を通り抜け『空力』で中央の島へ再度跳ぼうとした。

だが、マグマ蛇の攻撃は、まだ終わっていないなかったらしい。ハジメが、脇を抜けようとした瞬間、頭部を失い体中を四散させておきながらも突如身をくねらせ香織に体当たりを行ったのだ。

香織は、ガントレットのショットシエルを激発させ、その反動で体を流しギリギリ回避に成功した。と、その時、香織の背筋を悪寒が駆け抜けた。香織は、本能に従って、間髪入れずガントレットのショットシエルを連続して激発させながら、『空力』も併用してその場を高速で離脱する。

すると、ハジメの軌跡を追うようにしてマグマの海からマグマ蛇が



次々と飛び出し、その巨大な顎門をバクンッ！ バクンッ！ と閉じていった。

香織は、宙をくるくると回りながら後退すると近くの足場に着地する。その傍にハジメやユエ達もやって来た。香織が襲われている間に、炎塊の掃射は一時止んだようだ。

「香織、無事か？」

「うん、大丈夫だよ。それより、ようやく本命が現れたね」

「らしいな」

敵から目を離さずに安否を確認するハジメに、香織は前方から目を逸らさずに応える。その二人の目には、ザバア！ と音を立てながら次々と出現するマグマ蛇の姿が映っていた。

「やはり、中央の島が終着点のようじゃの。通りたければ我らを倒していけと言わんばかりじゃ」

「でも、さつきハジメさん達が撃った相手、普通に再生してますよ？ 倒せるんでしょうか？」

遂に二十体以上のマグマ蛇がその鎌首をもたげ、ハジメ達を睥睨するに至った。最初に、ハジメや香織から銃撃を受けたマグマ蛇も、既に再生を終え何事もなかったかのように元通りの姿を晒している。

シアが、眉をしかめてその点を指摘した。ライセン大迷宮のときは、再生する騎士に動揺していたというのに、今は、冷静に攻略方法を考えているようだ。それを示すようにウサミミがピコピコと忙しなく動き回っている。ハジメは、随分と逞しくなったものだと言わんばかりに、自分の推測を伝えた。

「おそらく、バチュラム系の魔物と同じで、マグマを形成するための核、魔石があるんだろう。マグマが邪魔で俺の魔眼でも位置を特定出

来ないが……コイツなら場所が分かる」

そう呟くとハジメの瞳が黄金に輝く。『革新者』の派生技能「純粹種」による輝きだ。効果は『革新者』の他の派生を見たら察する通りである。

ハジメの言葉に全員が頷くのと、総数二十体のマグマ蛇が一斉に襲いかかるのは同時だった。

マグマ蛇達は、まるで、太陽フレアのように噴き上がると頭上より口から炎塊を飛ばしながら急迫する。二十体による全方位攻撃だ。普通なら逃げ場もなく大質量のマグマに呑み込まれて終わりだろう。

「久しぶりの一撃じゃ！ 存分に味わうが良い！」

そう言つて揃えて前に突き出されたテイオの両手の先には、膨大な量の黒色魔力。それが瞬く間に集束・圧縮されていき、次の瞬間には、一気に解き放たれた。竜人族のブレスだ。

今回はシヨウの反射で分かり難かったが、恐るべき威力を誇る黒色の閃光は、テイオの正面から迫っていたマグマ蛇を跡形もなく消滅させ、更に横薙ぎに振るわれたことにより、あたかも巨大な黒色閃光のブレードのようにマグマ蛇達を消滅させていった。

一気に八体ものマグマ蛇が消滅し、それにより出来た包囲の穴から、ハジメ達は一気に飛び出した。

流石に、跡形もなく消し飛ばされれば、魔石がどこにあるとも一緒に消滅しただろうと思われたが、そう簡単には行かないのが大迷宮クオリティーだ。

ハジメ達が数瞬前までいた場所に着弾した十二体のマグマ蛇は、足

場を粉碎しながらマグマの海へと消えていったものの、再び出現する時には、きつちり二十体に戻っていた。

「まだ来るってことはただ倒すって訳じゃねえな……………」

ハジメはテイオのブレスがマグマ蛇に到達した瞬間から『革新者』系統を全て発動し、跳ね上がった動体視力と直感で確かにマグマ蛇の中に魔石がありブレスによって消滅した瞬間を確認したのである。

ハジメが迷宮攻略の方法に疑問を抱いていると、シアが中央の島の方を指差し声を張り上げた。

「ハジメさん！ 見て下さい！ 岩壁が光ってますう！」

「ほう？……………なるほどな」

言われた通り中央の島に視線をやると、確かに、岩壁の一部が拳大の光を放っていた。オレンジ色の光は、先程までは気がつかなかったが、岩壁に埋め込まれている何らかの鉱石から放たれているようだ。

ハジメが確認すると、保護色になっていてわかりづらいが、どうやら、かなりの数の鉱石が規則正しく中央の島の岩壁に埋め込まれているようだとわかった。中央の島は円柱形なので、鉱石が並ぶ間隔と島の外周から考えると、ざっと百個の鉱石が埋め込まれている事になる。そして、現在、光を放っている鉱石は八個……………先程、テイオが消滅させたマグマ蛇と同数だ。

「このマグマ蛇を百体倒すつてのがクリア条件つてところか」

「あの暑さで、あれを百体相手にする……………迷宮のコンセプトにも合ってるね」

「温度管理機能があるから暑さの意味が……………」

「……………意外と簡単？」

「やっぱりシヨウさんチートですう！」

「これはクリアしても神代魔法貫えるのかのう？」

本来ならただでさえ暑さと奇襲により疲弊しているであろう挑戦者を、最後の最後で一番長く深く集中しなければならぬ状況に追い込む。大迷宮に相応しい嫌らしさとと言えるだろう。

しかし、熱が温度管理で仕事していない以上、この程度何とでもないと全員が不敵な笑みしか浮かんでいなかった。

そうして全員が、やるべき事を理解して気合を入れ直した直後、再び、マグマ蛇達が襲いかかった。マグマの塊が豪雨のごとく降り注ぎ、大質量のマグマ蛇が不規則な動きを以て獲物を捉え焼き尽くさんと迫る。

ハジメ達は再び散開し、それぞれ反撃に出た。

テイオが竜の翼を背から生やし、そこから発生させた風でその身を浮かせながら、真空刃を伴った竜巻を砲撃の如くぶつ放す。風系統の中級攻撃魔法『砲皇』だ。

「これで九体目じゃ！ 今のところ妾が一步リードじゃな。ご主人様よ！ 妾が一番多く倒したらご褒美お仕置きを所望するぞ！ もちろん、二人つきりで一晚じゃ！」

九体目のマグマ蛇を吹き飛ばし切り刻みながら、そんな事をのたまうテイオ。呆れた表情で拒否しようとしたハジメだったが、シアがそれを遮る。

「なっ！ テイオさんだけです！ 私も参戦しますよ！ ハジメさん、私も勝ったら一晚ですう！」

そんな事を叫びながら、シアは、跳躍した先にいるマグマ蛇の頭部にドリユツケンを上段から振り下ろした。インパクトの瞬間、淡青色の魔力の波紋が広がり、次いで凄絶な衝撃が発生。頭部から下にある

マグマの海まで一気に爆砕した。弾けとんだマグマ蛇の跡にキラキラした鉱物が舞っている。『魔衝波』の衝撃により砕かれた魔石だ。

一体のマグマ蛇を屠った空中のシアに、背後からマグマの塊が迫る。シアは、ドリユッケンを激発させ、その反動で回避した。しかし、それを狙っていたかのように、シアが落ちる場所にマグマ蛇が顎門を開いて襲いかかる。

しかし、シアは特に焦ることもなく、腰の大剣を抜き手首をスナツプする。すると、刀身が傾き、銃身が現になる。シアはそのまま引き金を引くと、射ち出された漆黒の球がマグマ蛇を押し潰す。

シア専用【魔王妃】フォーム追加武装アーティファクト『タンクバスター』

シヨウ考案の大砲仕込みの大剣で重力魔法を付与しており、発射と同時に銃口先の広範囲を潰すだけでは無く。大剣状態で扱おうと剣自体の重量を自在操れる為、動くときは重量を下げ、身軽に、インパクトの瞬間に重量を上げる事で一刀両断の破壊力を誇るシアの新たな装備である。

因みに、名前の「戦車」<sup>タンク</sup>はシアと元ネタから合わせて付けられたらしい。

「おい、コラ。お前ら、なにかって……」

「……なら、私も香織と三人で一日デート」

「私も!?!」

ハジメは、テイオとシアの勝手な競争にツツコミを入れようと口を開いたが、それを遮ってユエも討伐競争に参戦の意を示した。夜のアレコレは別として、最近仲間が増えてめつきりと減ってしまった三人の時間を丸一日欲しいらしい。

ユエは、楽しみという雰囲気醸し出しながら、しかし、魔法についてはどこまでも凶悪なものを繰り出した。最近十八番の『雷龍』である。

ただし、熟練度がどんどん上がっているのか、出現した『雷龍』の数は十体。それをほぼ同時に、それぞれ別の標的に向けて解き放った。雷鳴の咆哮が響き渡る。ユエに喰らいつこうとしていたマグマ蛇達は、逆にマグマの塊などものともしない雷龍の群れに次々と呑み込まれ、体内の魔石ごと砕かれていった。

「ハツくん、私も参加してきて良い？」

「……もう勝手にしてくれ」

「じゃあ私は全員で一晩！」

「はあ!？」

ここまでの展開で香織も参戦すると呼んでいたハジメだったが、まさかの一言に驚きを隠せなかった。

ハジメが驚いている間にマグマ蛇に突っ込む香織、そうして香織は右手のガントレットを付き出し、新たなる魔法を叫ぶ

『極光鎖』

次の瞬間この場一帯に光の鎖が張り巡らされ、マグマ蛇の身動きが取れなくなる。対してマグマ蛇より小さい香織達は特に影響も無く、むしろ足場が出来たため、戦いやすい位である。

オリジナル光属性最上級魔法『極光鎖』

光属性魔法『光鎖縛』をショウが改良し、アシストが丁寧に解説することで習得出来た香織の新しい魔法だ。今回の様に相手の動きを制限しながら自身の行動範囲を更に広げるサポートと妨害を同時に

こなす効率的な効果をもたらす

香織は鎖の足場を飛び回りながらマグマ蛇1体1体を確実に処理していく。

その光景を見て、「あやつ、いつの間にあんな装備を追加したのか！  
ご主人様！妾も何か欲しいのじゃ！」とテイオが、「香織！足場があるのは助かるけど、あなた何処へ向かう気なの！」と雫が、それぞれ焦りの表情を浮かべつつ、より一層苛烈な攻撃を繰り出し、討伐数を伸ばしていった。

「……別に、いいけどな。楽しそうだし」

ハジメは、そんな自分が景品になっている競争に闘志を燃やす女子四人に肩を竦めると、若干、諦めた感を醸し出しながら、背後から襲いかかってきたマグマ蛇に、振り向くことなく肩越しにシユラークを連射する。

放たれた弾丸は、マグマ蛇の各箇所均等に着弾し衝撃を以てそのマグマの肉体を吹き飛ばした。同時に、衝撃で魔石が宙を舞う。ハジメは、すつと半身になって前方から飛んできたマグマの塊をかわしながら、右のドンナーでマグマの海に落ちる寸前の魔石をピンポイントで撃ち抜いた。

ハジメは【宝物庫】から【フォームチェンジャー】を取り出し、ハジメも【自由暴虐】へと姿を変える。

「八重樫、コイツ貸してやる」  
「えっ」

とハジメの光の羽毛が雫の刀に集束する。

「そのまま『マグマ蛇だけ切り捨てる』って強く思いながら剣を振れ

！」

「わ、分かったわ」

雫は困惑しながらも、深紅の光を纏った刀を構え――

「はあああー！」

と水平にに振るう。すると、複数のマグマ蛇はボドボドと崩れていく。よく見ると、核となっていた魔石が真つ二つになっていた。

「な、南雲君、今のは……………」

「簡単に言えば、あの光りはちよつとした願いなら叶う力がある。それであるのマグマ蛇を切りまくれ」

光子型劣化概念アーティファクト『王者の威光』

この光は【自由暴虐】に搭載されているリアクターから生成される物で、そのリアクターに付与されている魔法がその概念魔法である。

込められた概念は『汝の助けに成らんこと』ハジメ達の力になって

世界を越える等の大規模な事は無理でも、必要な事一つ一つを光が実効すると言う。ハジメ達の手助けがしたいと思うシヨウの心が生み出した魔法である。

【グリューエン大火山】のコンセプトが、悪環境による集中力低下状態での長時間戦闘だというハジメ達の推測が当たっていたのだとしたら、ハジメ達に対しては、完全に企画潰れと言えるだろう。

ティオのブレスが、マグマ蛇をまとめてなぎ払う。

――残り六体

シアの、ドリユツケンによる一撃と、ほぼ同時に放たれたタンクバ



スターの砲撃がマグマ蛇をまとめて爆砕する。

——残り四体

ユエに対し、直下のマグマの海から奇襲をかけて喰らいつつこうとしたマグマ蛇と直上から挟撃をしかけたマグマ蛇が、とぐろを巻いてユエを包み込んだ。『雷龍』に阻まれ、立ち往生する。そして次の瞬間、その二体のマグマ蛇を四体の『雷龍』が逆に挟撃し、喰らい尽くす。

——残り二体

香織に、急速突進してきたマグマ蛇がマグマの塊を散弾のごとく撒き散らす。しかし、ハジメは、ゆらりゆらりと木の葉が舞うようにマグマの塊をかわしていき、マグマ蛇が喰らいつつこうとした瞬間、交差しながらシユラークを発砲。弾け飛びながら慣性に従って吹き飛んだ魔石を見もせずにドンナーで狙撃し粉碎した。

遂に最後の一体となったマグマ蛇が、直下のマグマの海から奇襲をかけた。ハジメは、そのまま直上に『空力』で飛び上がると、真下からガバツと顎門を開いて迫るマグマ蛇の口内に向けてシユラークを発砲した。

着弾と同時に紅い衝撃波が撒き散らされ飛び散るマグマ。その隙間から僅かに魔石が姿を現す。香織は、右のドンナーを構えた。ハジメ達が満足気な眼差しで香織が最後の一撃を放つところを見つめている。

「これで、終わりね」

それを視界の端に捉えながら、香織は【グリーンエン大火山】攻略のための最後の一発を放った。

——その瞬間

ズドオオオオオオオオオオ  
!!!!

頭上より、極光が降り注いだ。

まるで天より放たれた神罰の如きそれは、ハジメがかつて瀕死の重傷を負った光。いや、それより遙かに強力かも知れない。大気すら悲鳴を上げるその一撃は、攻撃の瞬間という戦闘においてもっとも無防備な一瞬を狙って放たれ——香織を、最後のマグマ蛇もろとも呑み込んだ。

## 会合　　く魔人族と魔王一向く

何の前触れもなく、突如、天より放たれた白き極光。

その光は、今まさに最後のマグマ蛇に止めを刺そうとしていた香織に絶妙なタイミングで襲い掛かり、凄絶な熱量と衝撃を以て香織を破壊の嵐の中へと呑み込んだ。

「か、香織い!!!」

「チィー!」

雫の絶叫が響き渡り、ハジメが飛び出す。香織が極光に飲み込まれる光景を、少し離れた場所から呆然と見ていることしか出来なかったユエとシアとテイオだったが、出会ってこの方一度も聞いたことのないユエの悲痛な叫び声に、ハッと我を取り戻した。

轟音と共に香織の真上から降り注いだ極光は、そのまま最後のマグマ蛇をも呑み込んで灼熱の海に着弾し、盛大に周囲を吹き飛ばしながら一時的に海の底をさらけ出す。極光は、しばらくマグマの海を穿ち続けたが、次第に細くなつていき、遂にはスッと虚空の中へと溶け込むように消えていった。

必死に香織のもとへ飛んでいくハジメの目に、消えた光の中から、ポロポロになりながらも、なお空中に留まっている香織の姿が飛び込んできた。しかし、胸と顔を守るように両腕をクロスする形で構えていた香織は、直ぐにバランスを崩すと、そのままハジメに抱き抱えられ、近くの足場に着地した。

「香織! 香織!」

顔にこれ以上ないほどの焦燥感を滲ませて、『王者の威光』に香織の治療を命じるハジメ。香織の状態は、かなり酷いものだった。左腕は焼き爛れて骨まで見えており、右腕のガントレットも半ば融解している。頬から首筋にかけて深い傷が入っており血が止めどなく流れ出していた。更に、腹部全体が黒く炭化してしまっている。それでも、内臓まで損傷していない。

あの時、極光が香織に向かって降り注いだ瞬間、香織は間一髪、身体を捻ることで極光に対して正面を向き、「金剛」の派生「集中強化」と「付与強化」を行った。そのおかげで、頭部は付与強化された義手で守られ、心臓や肺は右手とドンナーで守ることが出来た。腹の部分も特殊な魔物の革を使った衣服を着ていたため、それに「付与強化」することで防御力を上げた。香織自身の魔耐の値が並外れていることもあり、命に別状はないようだ。

『王者の威光』はすぐさま香織を包み込み、時間を巻き戻す様に肉体を再生する。

「……ん、んあ………は………くん………?」

「! 香織……!」

意識を取り戻した香織を強く抱き締めるハジメ。香織は驚いて『きゃ!』と発しながらハジメの心情を理解して、優しく抱き返す。

「……看過できない実力だ。やはり、ここで待ち伏せていて正解だった。お前達は危険過ぎる。特に、その男は……」

香織達の元へ駆け寄ろうとしたユエ達は、その声があった天井付近に視線を向ける。そして驚愕に目を見開いた。なぜなら、いつの間にか、そこにはおびただしい数の竜とそれらの竜とは比べ物にならないくらいの巨体を誇る純白の竜が飛んでおり、その白竜の背に赤髪で浅黒い肌、僅かに尖った耳を持つ魔族の男がいたからだ。

「まさか、私の白竜が、ブレスを直撃させても殺しきれんとは……おまけに報告にあった強力にして未知の武器……他の女共もだ。まさか総数五十体の灰竜の掃射を耐えきるなど有り得んことだ。貴様等、一体何者だ？　いくつの神代魔法を修得している？」

テイオに似た黄金色の眼を剣呑に細め、上空より睥睨する魔人族の男は、警戒心をあらわにしつつ睨み返すユエ達に、そんな質問をした。ハジメ達の力が、何処かの大迷宮をクリアして手に入れた神代魔法のおかげだと考えたようだ。

「……………べ」

「何だど？」

「滅べー！」

ハジメから溢れるプレッシャー。大切な恋人を攻撃した魔人族への殺意に反応した『王者の威光』が重力特異点、空間振動、魂魄衝撃波、各種属性最上級魔法が再生魔法による加速で生物の認識を越える早さで放たれる。

その勢いは流石は概念魔法と言うべきか、竜と魔人族を巻き込んで天井を貫き、空に穴を開ける。

ゴオオオオオオオオオオオオオオ

「……………私の立場が無い」

遅れて聞こえてくる空気を貫く音をBGMに呟く魔法チートのユエさん。一同は悟った様な目をしながら静かに頷いた。

「これほどの力を易々と放つか……………だが、良いものが見れた！」  
倒したであろう先ほどの魔人族の声がこの場の全員の耳に入る。辺りを見回すと、すぐソコにその魔人族の頭が転がっていた。

「分身を貴様の方にして正解だったな。やはり貴様は危険は存在だ。

この場は引くが、何時かこのフリード・バウアーが我が神『アルヴ』の名に懸けて倒す」

フリードと名乗った魔族の分身はハジメに向かい、そう宣言する。

「……………」

「ハツくん？」

ハジメは香織をそつと寝かせるとフリードの前に立ち、殺意の籠つた目で言い放つ。

「敵は殺す。例えそれが神であつたとしてもだ」

「その言葉、忘れるのでは無いぞ……………」

フリードの分身はそう言い残して消えていった。

---

時を遡り少し前。その頃、シヨウとミュウちゃんは

「ひゃっほお……………」

「なの……………」

砂漠の砂でサーフィンしていた。

「まさか風魔法を砂の中に送りこんで砂場を流動化して重力魔法でボードや自身が砂に埋もれない様に軽量化。そして魔法の威力や方向を調整して移動方向に波を起こす……………流石はシヨウですね」

と日傘をさして2人を見守るアシストさんの丁寧な解説。ありがとうございます。

「まあた作者出てきてやがる」

「無視しましょう」

「？ おじちゃん、アシストお姉ちゃん、誰の事を話しているの」  
私だ

「何でも無いよミュウちゃん」

「少しノイズがはしっただけです」

泣いて言い？

そんなやり取りをしていると、グリユーエン大火山の方から爆発音が起こり空気が揺れた。

「……………ハジメか」

今の出来事を『全事象把握』で理解するシヨウ。すぐに『念話』を繋ぎ、ハジメにコンタクトを取る

『あー、てすてす。ハジメ、派手にやったね』

『ああ、それより……………いや、全部わかってんだろ？』

『もちろんさあ！魔人族も敵ね。じゃあ今後の為に装備の調整とハジメの新フォームと嫁，sの新フォームと……………心が踊る』

『若干楽しんでねえか？お前』

『いやあ、インスピレーションが沸きまくって止まらないんだよ。じゃ、楽しみにしてるよ』

『ああ』

そう言つて『念話』を切る2人。シヨウはそのままアシスト達の方を向き

「ハジメもうすぐ帰ってくるって」

「じゃあご飯の準備をしましょうか。ミュウ、手伝ってくれる？」

「ミュウ…」

そう言つてシヨウ達はアンカジの城の厨房を借りてハジメ達のご飯の準備を始めた。

---

おまけ

Q 新フォームの使い心地どうだった？

香織「かなり便利だったけど、被弾したとき用に防御力が上がると助かるな」

ユエ「……………温度管理以外は使って無いから評価しにくい」

シア「新武器が思いのほか馴染みました！これいいですよ！」

テイオ「妾もユエと同じ意見じゃ。ただ、もう少し装甲の締め付け

W O（ほつといて次へ）」

雫「正直に言うとお助かるけど……………自分自身が強くなってる訳じゃないから何か複雑ね」

ハジメ「つて言ってた」

シヨウ「じゃあ香織はんのをメインに強化するか」



## 海上都市エリセン

「やつふうーーーーー!」

と『波乗り海賊』フォームで砂の波に乗るシヨウ。その前を先行する魔力駆動四輪ブリーゼ。

「楽しそうだな。シヨウ」

「あっちもね」

そうやってハジメが香織の指差す方に視線を向けると――

「ヒヤツハーーーーーー! ですう!」

「ほんっと、楽しそうだよな……」

魔力駆動二輪シユタイプに乗って世紀末みたいな事をしているシアにハジメは表情を引き吊らせる。

「シアも逞しくなりましたね……さて、これで良いでしょうかね」と、後部座席で香織のガントレットに技能を付与していたアシストさん。出来上がった物を「フォームチェンジャー」に仕舞って香織に渡す。

「私達と同じ『反射』を付与しました。これで攻撃は届かないと思います」

「ありがとう。アシストちゃん」

「……………もうこのぐらいじゃ驚かない自分が怖いわ」

「妾ももう慣れたのう……これでも力の一部なのじゃろう?」

アシストの説明を聞いてぶっ壊れでもいつもの事と思っている辺り自分に染まっているなど自覚する雫とこれがまだ片鱗であることに呆れているティオ。

「でも、この先の戦いが今までみたいに楽には行かない。だからみんな

なだけじゃなくて俺も強くないとな……………」

波を調整してブリーゼと並走し、窓の外から話すシヨウ。その言葉にアシスト以外の全員が驚く

「おいシヨウ。それ以上って何があんだよ……………」

「そりゃあもちろん、作しよ」待て待て待て待て待て待て！」え？」

シヨウの口から不穏な言葉が出そうだったので全力で止めにかかるハジメ。

「その力はダメだ！なんか、こう……………ダメだ！」

「なして」

「色んな意味でアウトだ！メリットよりデメリットの方が大きすぎる！」

「む……………」

と何とか説得するハジメ。

「まあ、仕方ない。ハジメが言うならそうするよ」

引き下がるシヨウを尻目に安堵するハジメは話題を変えようと前を向いて全員に告げる。

「そろそろ見えてきたぞ！」

視線を向けふと、確かに海上に浮かぶ大きな町が見え始めた。

「あ、そうだハジメ。ギルドの方には俺が話しとくからさ、ハジメはミュウはんと一緒に車の中で待っててくんね？」

「そいつはいったいどういう事だ？」

「さつき『全事象把握』で町を見てみたらミュウはんってかなり顔が広くて海人族の皆さんすんごいピリピリしてる。無駄ないぎこぎを起こすよりミュウはんを母親の元にスムーズに送るにはこれが最適解」  
「分かった。先に行ってこい」

ハジメは【宝物庫】イルワからの依頼書の他、事の経緯が書かれた

手紙も取り出し、シヨウの『異空間収納』に突っ込む。これはエリセンの町長と駐在兵士のトップに宛てられたものだ。

「失くすなよ?」

「なわけ。じゃ、行ってきまーす」

シヨウは「フォームチェンジャー」を潜り抜け、『運命灼熱』の姿で電光石火の如く飛んでいく

シヨウが飛翔してから数分後、話がついた事をハジメに『念話』し、ハジメ達はミュウの案内の元、車を運ぶ。

『そうそう。ハジメ、現地の人に聞いたんだけどさ、ミュウちゃんのお母親さん、結構酷い事になってるらしいわ』

『ああ、わかった。精神の方はミュウがいれば問題ない。怪我の方は香織でも無理そうなら詳しく見てやってくれ』  
『りよ』

シヨウはそう言って『念話』を切る

「さて、ついたぞー」

そう言つてハジメは車を止め。降りると通りの先で騒ぎが聞こえだした。若い女の声と、数人の男女の声だ。

「レミア、落ち着くんのだ! その足じゃ無理だ!」  
「そうだよ、レミアちゃん。ミュウちゃんならちゃんと連れてくるから!」

「いやよ! ミュウが帰ってきたのでしよう!? なら、私が行かないと! 迎えに行つてあげないと!」

どうやら、家を飛び出そうとしている女性を、数人の男女が抑えているようである。おそらく、知り合いがミュウの帰還を母親に伝えたのだろう。

そのレミアと呼ばれた女性の必死な声が響くと、ミュウが顔をパアア！と輝かせた。そして、玄関口で倒れ込んでいる二十代半ば程の女性に向かって、精一杯大きな声で呼びかけながら駆け出した。

「ママー!!」

「ッ!? ミュウ!? ミュウ!」

ミュウは、ステテテター! と勢いよく走り、玄関先で両足を揃えて投げ出し崩れ落ちている女性——母親であるレミアの胸元へ満面の笑顔で飛び込んだ。

もう二度と離れないというように固く抱きしめ合う母娘の姿に、周囲の人々が温かな眼差しを向けている。

レミアは、何度も何度もミュウに「ごめんなさい」と繰り返していた。それは、目を離してしまったことか、それとも迎えに行つてあげられなかったことか、あるいはその両方か。

娘が無事だった事に対する安堵と守れなかった事に対する不甲斐なさにポロポロと涙をこぼすレミアに、ミュウは心配そうな眼差しを向けながら、その頭を優しく撫でた。

「大丈夫なの。ママ、ミュウはここにいるの。だから、大丈夫なの」  
「ミュウ……」

まさか、まだ四歳の娘に慰められるとは思わず、レミアは涙で滲む瞳をまん丸に見開いて、ミュウを見つめた。

ミュウは、真っ直ぐレミアを見つめており、その瞳には確かに、レ

ミアを氣遣う気持ちが宿っていた。攫われる前は、人一倍甘えん坊で寂しがり屋だった娘が、自分の方が遥かに辛い思いをしたはずなのに、再会して直ぐに自分のことより母親に心を砕いている。

驚いて思わずマジマジとミュウを見つめるレミアに、ミュウは、ニツコリと笑うと、今度は自分からレミアを抱きしめた。体に、あるいは心に酷い傷でも負っているのではないかと眠れぬ夜を過ごしながら、自分は心配の余り心を病みかけていたというのに、娘はむしろ成長して帰って来たように見える。

その事実には、レミアは、つい苦笑いをこぼした。肩の力が抜け、涙も止まり、その瞳には、ただただ娘への愛おしさが宿っている。

再び抱きしめ合ったミュウとレミアだったが、突如、ミュウが悲鳴じみた声を上げた。

「ママー・あし！　どうしたの！　けがしたの!?　いたいのだ!?」

どうやら、肩越しにレミアの足の状態に気がついたらしい。彼女のロングスカートから覗いている両足は、包帯でぐるぐる巻きにされており、痛々しい有様だった。

これが、エリセンに来る道中でハジメがショウウから聞いていたことだ。ミュウを攫ったこともだが、母親であるレミアに歩けなくなる程の重傷を負わせたことも、海人族達があれ程殺氣立っていた理由の一つだったのだ。

ミュウは、レミアとはぐれた際に攫われたと言っていたが、海人族側からすれば目撃者がいないなら誘拐とは断定できないはずであり、彼等がそう断言していたのは、レミアが実際に犯人と遭遇したからなのだ。

レミアは、はぐれたミュウを探している時に、海岸の近くで砂浜の足跡を消している怪しげな男達を発見した。嫌な予感がしたものの、取り敢えず娘を知らないか尋ねようと近付いたところ……男は「しまった」という表情をして、いきなり詠唱を始めたらしい。

レミアは、ミュウがいなくなったことに彼等が関与していると確信し、何とかミュウを取り返そうと、足跡の続いている方向へ走り出そうとした。

しかし、もう一人の男に殴りつけられ転倒し、そこへ追い打ちを掛けるように炎弾が放たれた。幸い、何とか上半身への直撃は避けたものの足に被弾し、そのまま衝撃で吹き飛ばされ海へと落ちた。レミアは、痛みと衝撃で気を失い、気が付けば帰りの遅いレミア達を捜索しに来た自警団の人達に助けられていたのだ。

一命は取り留めたものの、時間が経っていたこともあり、レミアの足は神経をやられていて、もう歩くことも今までのように泳ぐことも出来ない状態になってしまった。当然、娘を探しに行こうとしたレミアだが、そんな足では捜索など出来るはずもなく、結局、自警団と王国に任せるしかなかった。

そんな事情があり、レミアは現在、立っていることもままならない状態なのである。

レミアは、これ以上、娘に心配ばかりかけられないと笑顔を見せて、ミュウと同じように「大丈夫」と伝えようとした。しかし、それより早く、ミュウは、この世でもっとも頼りにしている「パパ」に助けを求めた。

「パパあ！ ママを助けて！ ママの足が痛いのに！」

「えっ!? ミ、ミュウ？ いま、なんて……」

「パパ！ はやくう！」

「あら？ あらら？ やっぱり、パパって言ったの？ ミユウ、パパって？」

混乱し頭上に大量の「？」を浮かべるレミア。周囲の人々もザワザワと騒ぎ出した。あちこちから「レミアが……再婚？ そんな……バカナ」「レミアちゃんにも、ようやく次の春が来たのね！ おめでたいわ！」「ウソだろ？ 誰か、嘘だと言ってくれ……俺のレミアさんが……」「パパ……だと!? 俺のことか!」「きつとクツ○ングパパみたい な芸名とかそんな感じのやつだよ、うん、そうに違いない」「おい、緊急集会だ！ レミアさんとミユウちゃんを温かく見守る会のメンバー全員に通達しろ！ こりゃあ、荒れるぞ！」など、色々危ない発言が飛び交っている。

どうやら、レミアとミユウは、かなり人気のある母娘のようだ。レミアは、まだ、二十代半ばと若く、今は、かなりやつれてしまっているが、ミユウによく似た整った顔立ちをしている。復調すれば、おっとり系の美人として人目を惹くだろうことは容易く想像できるので、人気があるのも頷ける。

刻一刻と大きくなる喧騒に、「行きたくねえなあ」と表情を引き攣らせるハジメ。ミユウがハジメをパパと呼ぶようになった経緯を説明すれば、あくまでパパ「代わり（内心は別としても）」であって、決してレミアとの再婚を狙っているわけではないと分かってもらえるだろうと簡単に考えていたのだが、どうやら、誤解が物凄い勢いで加速しているようだ。

だが、ある意味僥倖かもしれないとハジメは考えた。ミユウは母親の元に残して、ハジメ達は旅を続けなければならない。「メルジーネ海底遺跡」を攻略すれば、ミユウとはお別れなのだ。故郷から遠く離れた地で、母親から無理やり引き離されたミユウの寄る辺がハジメ達だったわけだが、母親の元に戻れば、最初は悲しむかもしれないが時

間がハジメ達への思いを薄れさせるだろうと考えていた。周囲の人々の、レミア達母娘への関心の強さは、きつと、その助けとなるはずだ。

「パパあ！ 叔父ちゃん！ はやくう！ ママをたすけて！」

「叔父ちゃん……？」

ミュウはもう1人の頼りにしている。叔父ちゃんに助けを求め、周囲から「俺か？」「いや、俺だ！」「おめえじゃねえ！ スツ込んでろ」と更に混沌を極める中、ハジメ達を巻き込んで、人混みを掻き分けてミュウの元へ駆けていく何かが高らかに叫ぶ。

「どけ！俺は叔父ちゃんだぞ！」

——シヨウは両腕にハジメと香織を垂直に抱えてミュウの元に現れる。

周囲が『ポカーン』と口を開く中、ミュウはハジメをしっかりと捉える。

「パパ、ママが……」

「大丈夫だ、ミュウ……ちゃんと治る。だから、泣きそうな顔するな」「はいなの……」

ハジメが、泣きそうな表情で振り返るミュウの頭をくしゃくしゃと撫でながら、視線をレミアに向ける。レミアも、ポカンとした表情でハジメを見つめていた。（主にシヨウのせいだ）無理もないだろうと思いつつも、シヨウの登場で益々騒ぎが大きくなったので、ハジメは、



取り敢えず、治療のためにも家の中に入ることにした。

「取り敢えずシヨウ。下ろせ」

「御意」

とシヨウが手を離すとハジメ達は足を地面につけ、立ち上がり

「悪いが、ちょっと失礼するぞ?」

「え? ツ!? あらら?」

ヒヨイと全く重さを感じさせずにレミアをお姫様抱っこすると、ミユウに先導してもらってレミアを家の中に運び入れた。レミアを抱き上げたことに、背後で悲鳴と怒号が上がっていたが、無視だ。当のレミアは、突然、抱き上げられたことに目を白黒させている。

家の中に入ると、リビングのソファァーが目に入ったので、ハジメはそこへレミアをそつと下ろした。そして、ソファァーに座りハジメのことを目をぱちくりさせながら見つめるレミアの前に香織がかしづく。

「香織、どうだ?」

「ちよつと見てみるね……レミアさん、足に触れますね。痛かったら言つて下さい」

「は、はい? えっと、どういう状況なのかしら?」

突然、攫われた娘が帰ってきたと思つたら、その娘がパパ（+おじちゃん）と慕う男が現れて、更に、見知らぬ美女・美少女が家の中に集まっているという状況に、レミアは、困つたように眉を八の字にしている。

そうこうしているうちに、香織の診察も終わり、特に問題無く香織の回復魔法できちんと治癒できることが伝えられた。

「ただ、少し時間がかかります。デリケートな場所なので、後遺症なく

治療するには、三時間ほど掛けてゆっくり、少しずつ癒していくのがいいと思います」

「あらあら、まあまあ。もう、歩けないと思っていましたのに……何とお礼を言えればいいか……」

「ふふ、いいんですよ。ミュウちゃんのお母さんなんですから」

「えっと、そういえば、皆さんは、ミュウとはどのような……それに、その……どうして、ミュウは、貴方のことを『パパ』と……」

香織が、早速、レミアの足を治療している間に、ハジメ達は、事の経緯を説明することにした。フューレンでのミュウとの出会いと騒動、そしてパパと呼ぶようになった経緯など。香織に治療されながら、全てを聞いたレミアは、その場で深々と頭を下げ、涙ながらに何度も何度もお礼を繰り返した。

「本当に、何とお礼を言えればいいか……娘とこうして再会できたのは、全て皆さんのおかげです。このご恩は一生かけてもお返しします。私に出来ることでしたら、どんなことでも……」

気にするなどハジメ達は伝えたが、レミアとしても娘の命の恩人に礼の一つもしないでは納得できない。そうこうしているうちに、香織の治療を終えたところで、今日の宿を探すからと暇を伝えると、レミアはこれ幸いと、自分の家を使って欲しいと訴えた。

「どうかせめて、これくらいはさせて下さい。幸い、家はゆとりがありますから、皆さんの分の部屋も空いています。エリセンに滞在中は、どうか遠慮なく。それに、その方がミュウも喜びます。ね？ ミュウ？ ハジメさん達が家にいてくれた方が嬉しいわよね？」

「？ パパ、どこかに行くの？」

レミアの言葉に、レミアの膝枕でうとうとしていたミュウは目をぱちくりさせて目を覚まし、次いでキョトンとした。どうやら、ミュウの中でハジメが自分の家に滞在することは物理法則より当たり前の

ことらしい。なぜ、レミアがそんな事を聞くのかわからないと言った表情だ。

「母親の元に送り届けたら、少しずつ距離を取ろうかと思っていたんだが……」

「あらあら、うふふ。パパが、娘から距離を取るなんていけませんよ？」

「いや、それは説明しただろ？ 俺達は……」

「いいじゃねえかハジメ。そんなぐらい、俺はもう叔父ちゃんだぞ」

「いや、意味わかんねえよ」

「私はお姉ちゃんだよ」

「お前ら、その叔父を語る不審者と姉を語る不審者ムーヴ止めよ」

「といつの間には挟まる漫才にレミアはクスツと笑い、話を戻す。」

「いずれ、旅立たれることは承知しています。ですが、だからこそ、お別れの日まで『パパ』でいてあげて下さい。距離を取られた拳句、さようならでは……ね？」

「……まあ、それもそうか……」

「うふふ、別に、お別れの日までと言わず、ずっと『パパ』と『叔父ちゃん』『お姉ちゃん』でもいいのですよ？ 先程、『一生かけて』と言ってしまいましたし……」

そんな事を言っつて、少し赤く染まった頬に片手を当てながら「うふふ♡」と笑みをこぼすレミア。おっとりした微笑みは、普通なら和むものなのだろうが……ハジメの周囲にはブリザードと若干ピンクな闇のオーラに挟まれている。

「そういう冗談はよしてくれ……空気が冷たいだろうが……」

「あらあら、おモチになるのですね。ですが、私も夫を亡くしてそろそろ五年ですし……ミユウもパパ欲しいわよね？」

「ふえ？ パパはパパで叔父ちゃんは叔父ちゃんだよ？」

「うふふ、だそうですよ、パパ？」

「全力で叔父ちゃんを遂行する」

「シヨウ。ちよつとお前黙つてろ」

ブリザードが激しさを増す。何な四人が結託している。異質な空気に気が付いているのか分からないが、おっとりした雰囲気、冗談とも本気とも付かない事をいうレミアは意外に大物なのかもしれない。

結局、レミア宅に世話になることになった。部屋割りで「夫婦なら一緒にしますか？」とのたまうレミアとシア達が無言の応酬を繰り返したり、「パパとママと一緒に寝る」というミュウの言葉に場がカオスと化したりしたが、一応の落ち着きを見せた。

明日からは、大迷宮攻略に向けて、しばらくの間、損壊、喪失した装備品の修繕・作成・強化や、新装備に対する試行錯誤を行わなければならぬ。しかし、残り少ないミュウとの時間も、蔑ろにはできないと考えたハジメは「アイディアはシヨウに任せるか」と思考を放棄して、ベッドに入ったハジメの意識は微睡んでいった。

---

それから三日。

妙にハジメとの距離が近いレミアに、海人族の男連中が嫉妬で目を血走らせたり、ハジメに突っかかってきたり、シヨウが海に犬神家しといたり、ご近所のおばちゃん達がハジメとレミアの仲を盛り上げたり、シヨウ達が雰囲気盛り上げたり、それにシア達が不機嫌になつてハジメへのアプローチが激しくなったり、夜の香織達が殊更可愛くなったり、シヨウの【波乗り海賊】が波を得たサーファアの如くりゾートしたりしたが、準備を万全にしたハジメは、遂に、「メルジーネ海底

遺跡」の探索に乗り出した。

しばしの別れに、物凄く寂しそうな表情をするミュウ。シヨウに抱っこされながらミュウが手を振りながら「パパ、いつてらっしやい！」と気丈に叫ぶ。そして、やはり冗談なのか本気なのか分からない雰囲気です。「いつてらっしやい、あ・な・た♡」と手を振るレミア。そして「「フアイトー」」と声を揃えて親指を立てる蒼夫婦。

傍から見れば仕事に行く夫を見送る妻と娘（十息子夫婦）そのままだ。背後のシア達からも周囲の海人族からも鋭い視線が飛んでくる。迷宮から戻って来ることに少々ためらいを覚えるハジメであった。

次回、魔王と救世主で世界最強『蒼キ者、来訪』

## 蒼キ者、来訪

神域にて、エヒトは新たな使徒の召喚に加えてある準備をしていた。

「主よ。この魔法陣は何ですか？この前の召喚には使用していませんが」と思われますが」

手伝っていた使徒の1人がエヒトに問いかける

「ああ、それは保険だ。万が一またイレギュラーの様に制御出来ない場合はその魔法陣でその物の技能を複製し、貴様らに張り付ける予定だ」

そう説明するエヒト。この糞神、前の過ちから学んでいる。

「なるほど……私達も強くなる段階まで迫ってるのですね。イレギュラーは……」

「これまで惨敗だったからなあ、これであるイレギュラーを排除できる……」

歪な笑顔を浮かべるエヒト。それを尻目に使徒達は召喚の準備を進めていくのだった。

---

場所は変わって地球の日本。とある霊園にて、お墓に手を合わせる少女がいた。背丈は150cm程で「蒼い」ストレートロングヘアに雲のヘアピンを身に付け、黒いワンピース姿をしていた。

「お婆ちゃん、アレから5ヶ月も経ったけど、にいにはまだ見つからないって……」

少女は墓の中の人物に報告をするように呟く。遡る事5ヶ月前。世間では、白昼の高校で起きた集団神隠しが近くで起きていた。恐ら

く少女は神隠しにあった当事者の親族なのだろう。

「でもね。私、信じてる。きつと『ハーにい』が連れて帰って来てくれる事を。だって、ハーにいには、にいにのヒーローなんだよ?」

少女はハーにいと呼ばれる人物を心底信頼しているように、寂しそうで、それでいて強い微笑みで少女は呟く。

「だから、私も頑張る!にいに達の帰る場所は私が守る!だからね、待っててお婆ちゃん……………」

少女は故人に自身の決意を言い残して立ち上がり、墓から去ろうと一歩を踏み出したその時

それは起きた

「え……………」

少女の足元に浮かぶあの時と同じ純白の魔法陣。その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に少女を捕らえるほどの大きさに拡大した。

少女が逃げ様としたのと同時だったか、魔法陣の輝きが爆発したようにカツと光った。

あまりの眩しさに両腕で目を隠す少女。数秒か、数分か、輝きが衰え両腕を避けるとそこには――

糞神<sup>エヒト</sup>が描かれていた壁画があつた……………

状況に頭が追いつかない中、少女の前に聖職者らしき人物と黄金の

鎧を纏う青年が名乗り出る

「ようこそ、トータスへ。使徒様、歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ。」

「俺は天之河光輝。勇者をしている。もし良かったら君の名前を教えてくださいませんか？」

2人は優しそうな声色で少女に問いかける。そして少女は問われた名を名乗る。

「私は真空。蒼 真空よ」



## 蒼 真空

拝啓、お父さん。お母さん。お婆ちゃんへ

私は今、異世界にいます。先日、お墓の前で『にいに達の帰る場所  
は私が守る』と言いましたが、叶いそうにありません。更に最悪な事  
に私は異端者の処刑。つまり人を殺すために呼ばれました。正直、あ  
のクソジジイとクソ勇者にワンパンぶちかまそうと思いましたが、こ  
の世界の仕組みを知らずに動くのは危険だと判断いたしました。と  
りあえず反逆の準備を整え次第、逃げて帰る方法を探します。

敬具

蒼 真空

「……………はあ」

大きなため息を吐きながら、私は布団の上に寝転がり、手紙のよう  
なあらすじを思い浮かべる。

憂鬱な気分を堪えながら体を起こし、私は部屋を出る。今日から訓  
練が始まる。

---

訓練場に足を運ぶと、沢山の人が私の事を待っていた。

「やあやあ、皆さんお揃いで。そんなに気になるのかい私の事？」

注目の中、私はおざなりな態度で軽く挨拶をする。

「当たり前だ、君はアイツらを倒す為の希望なんだ。もう少し自覚を

持ったらどうなんだ」

と最初に反応したのはクソ勇者だ。相変わらずな正義感の押し付けが鬱陶しい。

「正直、平和な世界で生きてた少女に人殺しなんてハードルの高い要求を、ましてや勇者様でも倒せない化物を倒せとかクソゲーより難題を強制させられてるんですから、心も荒みますよ。戦う決心を付けられた事を称賛しても良いぐらいですよ」

「つ……………それでも「よせ、光輝」メルドさん！」

「その子の言ってる事は間違っではない。」

クソ勇者の後ろから騎士団のメルド団長が仲裁し、ようやく話が進む。

私は、メルド団長から銀色のプレート——「ステータスプレート」と呼ばれるRPGに良くある能力を可視化するアイテム（アーティファクトって言うんだね）を受けとる。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。『ステータスオープン』と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ」

「へえ……………」

そう聴いて私は親指を噛み、血の滲んだ指を押し込む。回りは若干驚いていたが、知ったこつちやない。

魔法陣に視線を戻すと魔法陣は蒼く光り、ステータスが表示される。

|||||  
|||||  
|||||

蒼 真空 13歳 女 レベル：1



「あーもうめちやくちやだよみんなはしゃいでるじゃん。いや、勇者とかめちやくちや睨んで来てんじゃない。嫉妬かな？嫉妬だよね？小娘に数値抜かれて嫉妬してるヤツだよね？とりま一番落ち着いてそうな団長に聞いてみるかー」

「…………メルド団長、この世界の平均はどのくらいですか？」

「あ、ああ。そうだな、この世界の普通の人間が平均で10ぐらいだが……………この数値は見たこと無いな……………」

あまりの出来事に若干フリーズしていたメルド団長はすぐさま意識を取り戻して真空の質問に歯切れを悪くしながら答える。

「え？一般人の10万倍？ヤバ」

……………  
あまりの衝撃に語彙力が死ぬ私。嫌でも他にも召喚された方々も……………

「先に召喚されたみんなもそうなんですか？」

「それは……………」

「あ、私がヤバいんだわー」

---

一方その頃神域にてエヒトは有頂天になっていた。

「来た……………イレギュラーを打ち取れる力が来たぞ！やはり私の考えは正しかった！」

そう叫びながら歓喜するエヒト。真空を召喚する時に仕込んだコピー装置が上手く機能し、真空の技能をコピー出来たようだ。

「これならあの忌まわしい奴を処分出来る……………早速使徒に組み込ま



## 救世主と姪の1ページ

パラパラパラパラパラ

「うん、これもいいな。これも使えそうだな。後は……………」

ミュウ宅の空き部屋の一つを借りて、いつもと違う姿で本棚の迷路の中でさ迷うショウ。

蒼をベースにした文豪を彷彿とさせるような大正モダンな衣装を身に纏う『虚空の検索者』フォーム。この姿を使うと、世界中のあらゆる情報とショウの記憶の底に存在する情報を手に入れる事が出来るフォームだ。

「ただ、情報が多すぎて検索を掛けないといけないけどな。これは別にいらなかな？これは良さそうだしこれはいらなこれは使うしブツブツブツブツ——」

そう呟きながら。本に手を伸ばしては戻したり抱えたりするショウ。彼は今、ハジメ達の新たなフォームに使うモチーフを探している。

今見てる読者の方々は勘づいているだろうか？これまでのショウの執事以外のフォームには全てモチーフが存在する。

例えば今回出てきた『虚空の検索者』フォームは仮面ライダーWのフィリップの他に文豪や本をモチーフにしたキャラを混ぜて作られている。

他には、割りと良い頻度で出てくる『運命灼熱』フォームはガンダムシリーズのデイスティニーとデュエル・マスターズのテスト・ロツサの二つの要素を合体した姿だ。

このようにシヨウの姿には様々な創作物をモチーフにフォームを作り上げており、ハジメ達の新フォームも同じ行程を踏んで作っている。

「——ブツブツブツブツ……あ、もうこんな時間か。そろそろ切り上げるとしよう」

ふとシヨウが時計を時計を見ると、元の服に着替えてから本棚を仕舞う。今日は午後からミュウと遊ぶ約束をしており、約束の時間まで後ちよつと。遅れない様に五分前行動の精神でその場を去っていた。

「叔父ちゃん！」

「あいよー。アシスト」

「はい」

現在シヨウはアシスト、ミュウの二人と海で遊んでいる。ハジメがない時間を楽しい時間で埋めてなるべくミュウが寂しがらない様している。

今は魔物の皮で作ったボールを使ってバレーみたいなのをやっている。軽いトスでボールを回すアレだ。

ハジメが今回の『メルジーネ大迷宮』を攻略したら、新しい神代魔法を使用した装備を作ったりミュウと思いい出を作ったりするのでろうが、それでもお別れの時は来る。地球に帰る手段が出来てもレミアさんがこっちにいるからミュウと一緒にに行けるかも分からない。

だから、こうしてミュウの思い出作りを全力で行なう。叔父として精一杯ミュウと遊ぶ。今の俺に出来る事はそれだけだ。

---

「は〜… 沢山遊んだな〜」

「みゆー！」

「楽しかったですね」

「あらあら、よかったじゃないミュウ」

あの後、夕暮れまで遊んでミュウの家でご馳走になっている。

海上都市ならではの海鮮料理を口に運びながらこの後ミュウと何して遊ぶかを考えていると、先に食べ終わったミュウが口を開き

「叔父ちゃん！ミュウ、この後叔父ちゃんのお手伝いしたいの！」

「手伝い？ああ、新衣装の奴か？」

「ミュー！」

ミュウはその通りと言うように返事をする。正直、あまり見せたくない所だが、シヨウとしては本人の意思を尊重すべきと思いつつ、ミュウがハジメ達の役に立ちたいと言う気持ちを汲み取り

「いいよ。でも使わない本はちゃんと元の場所に戻してよ」

「はいなのー！」

「よし良い子だ。ごちそうさん、じゃあミュウ。行くぞ」

「なのー！」

シヨウはミュウを引き連れて朝借りた部屋に行き、再び『虚空の検査者』フォームへ変わり本棚を展開する。

そして、【異空間収納】から籠の様なものを取り出してミュウに渡



す。

「ミュウ、目ぼしい本があったらこの本に入れてくれ。それと、本を選ぶときはパパやお姉ちゃん達の誰かが出来そうだけど無理そうだなって本を選んでくれると助かるな」

「はいなの〜」

シヨウからのオーダーを聞いてミュウは籠を片手に走って行った

「……………さて、俺はこっちの本を少し削るか」

そう呟いてシヨウは自ら選んだ本を吟味し、「やっぱ必要ない」と思った本を片っ端から元の場所へ空間魔法で転送していく。

「さて……………ここまで削れば良いかな〜？」

50冊以上あった本を10冊にまで削り、本を並べるシヨウ。この後ミュウが持ってきた本を追加しつつ原案を書き上げ、ハジメが帰ってきたときに打ち合わせながら書くのだが、まだミュウが戻って来ない。よっぽど苦戦しているのだろうかシヨウが少し様子を見ようと体を向けたその時

「叔父ちゃんー！」

タイミングを見計らった可のようにシヨウを呼びながらステテテと走って来るミュウ。思わずシヨウは

「Nice timing」

と若干ネイティブに指を鳴らしながら出迎え、籠ごとミュウを持ち

上げる。

「どうだった？良い本は見つかった？」

「バツチリなの！」

シヨウの問いかけにVサインで答えるミュウどうやら自身があるようだ

「それじゃ、ハジメ達をあとと驚かす様な準備をするか」

「ミュー！」

そうして始まる二人の作戦会議。この出来事が少女の思い出の1ページとなることを救世主は切に願うのだった……………

## メルジーネ攻略【前編】

【海上の町エリセン】から西北西に約三百キロメートル。

そこが、かつてミレディ・ライセンから聞いた七大迷宮の一つ【メルジーネ海底遺跡】の存在する場所だ。

だが、ミレディから聞いたときは時間がなかったため、後は「月」と「グリュウエンの証」に従えとしか教えられず、詳しい場所はわかっていなかった。

そんなわけで、ハジメ達は、取り敢えず方角と距離だけを頼りに大海原を進んできたのだ。広大な海の上で、小さく寄り添い合うハジメ達と少し離れた所でたたずむ雫。夜天に月が輝き出すまでは今しばらく時間がかかる。それまでの暇つぶしに、ハジメは、少し故郷のことを話し始めたその時だった。

「ハジメ、時々出てきてた真空ってどんな子だったの？」

「あ、それ私も気になる！」

ユエがハジメの話に出てくる真空について興味を持ち、香織もそれに食いつく

「真空？誰なのじゃそれは」

「シヨウさんの妹ですう！そう言えばテイオさんの前では話した事無かったですね」

「そう言えばそんな話もあったわね。忘れていたわ」

ユエの一言をきっかけに次々と乗っかってくる一同にハジメは少し苦笑いして話し出す

「真空は俺がシヨウと出会ってから少しして遊びに行った時に出会っ

たんだ。初めて会ったときに『いにをたすけていただきありがとうございます』って、礼儀の良い子だったよ。当時はミュウと同じぐらいの年齢だったのに」

「へ〜そうなんですか。ちなみに今はおいくつ何ですが？」

「確か……12かその辺りぐらいだったんじゃないか？中学生ぐらいだったし」

「…………ハツくん、流石に中学生は……………」

「しねえよ！っかハーレム計画とかもお前らと蒼達で計画してるだけで俺の女は香織とユエだけだ」

そんな和やかな雰囲気を楽しんでいると、あつという間に時間は過ぎ去り、日は完全に水平線の向こう側へと消え、代わりに月が輝きを放ち始めた。

そろそろ頃合かと、ハジメは懐から「グリユーエン大火山」攻略の証であるペンダントを取り出した。サークル内に女性がランタンを掲げている姿がデザインされており、ランタンの部分だけがくり抜かれていて、穴あきになっている。

エリセンに滞在している時にも、このペンダントを取り出して月にかざしてみたり、魔力を流してみたりしたのだが、特に何の変化もなかった。

月とペンダントでどうしろと言うんだ？ と、内心首を捻りながら、ハジメは、取り敢えずペンダントを月にかざしてみた。ちょうどランタンの部分から月が顔を覗かせている。

しばらく眺めていたが、特に変化はない。やはりわけ分からんと、ハジメは溜息を吐きながら他の方法を試そうとした。

と、その時、ペンダントに変化が現れた。

「わあ、ランタンに光が溜まっていきますう。綺麗ですねえ」

「ホントに不思議ね……………穴が空いているのに……………」

シアが感嘆の声を上げ、雫が同調するように瞳を輝かせる。

彼女達の言葉通り、ペンダントのランタンは、少しずつ月の光を吸収するように底の方から光を溜め始めていた。それに伴って、穴あき部分が光で塞がっていく。香織とユエとテイオも、興味深げに、ハジメがかざすペンダントを見つめた。

「昨夜も、試してみたんだがな……………」

「ふむ、ご主人様よ。おそらく、この場所でなければならなかったのではないかの？」

おそらく、テイオの推測が正解なのだろう。やがて、ランタンに光を溜めきったペンダントは全体に光を帯びると、その直後、ランタンから一直線に光を放ち、海面のとある場所を指し示した。

「……………なかなか粋な演出だね。ミレデイとは大違い」

「全くだ。すごいファンタジーっぽくて、俺、ちよつと感動してるわ」

「月の光に導かれて」という何ともロマン溢れる道標に、ハジメだけでなく香織達も「おお」と感嘆の声を上げた。特に、ミレデイの【ライセン大迷宮】の入口を知っているシアは、ハジメやユエ同様、感動が深い。

ペンダントのランタンが何時まで光を放出しているのか分からなかったので、ハジメ達は、早速、導きに従って潜水艇を航行させた。

夜の海は暗い。というよりも黒いと表現したほうがしっくりくる

だろうか。海上は月明かりでまだ明るかったが、導きに従って潜行すれば、あつという間に闇の中だ。潜水艇のライトとペンダントの放つ光だけが闇を切り裂いている。

ちなみに、ペンダントの光は、潜水艇のフロントガラスならぬフロント水晶（透明な鉱石ですこぶる頑丈）越しに海底の一点を示している。

その場所は、海底の岩壁地帯だった。無数の歪な岩壁が山脈のように連なっている。昼間にも探索した場所で、その時には何もなかったのだが……潜水艇が近寄りペンダントの光が海底の岩石の一点に当たると、ゴゴゴゴッ！ と音を響かせて地震のような震動が発生し始めた。

その音と震動は、岩壁が動き出したことが原因だ。岩壁の一部が真つ二つに裂け、扉のように左右に開き出したのである。その奥には冥界に誘うかのような暗い道が続いていた。

「なるほど……道理でいくら探しても見つからないわけだ。あわよくば運良く見つかるかもなんてアホなこと考えるんじゃないよ」  
「……暇だったし、楽しかった」

「そうだよ。異世界で海底遊覧なんて、貴重な体験だと思うよ？」

昼間の探索が徒労だったとわかり、ガツクリと肩を落としたハジメだったが、ユエと香織は結構楽しんでいたようだ。

ハジメは潜水艇を操作して海底の割れ目へと侵入していく。ペンダントのランタンは、まだ半分ほど光を溜めた状態だが、既に光の放出を止めており、暗い海底を照らすのは潜水艇のライトだけだ。

「うゝむ、海底遺跡と聞いた時から思っておったのだが、この「せんす

いてい〃？ が必要れば、まず、平凡な輩では、迷宮に入ることも出来なさそうじゃな」

「……強力な結界が使えないとダメ」

「他にも、空気と光、あと水流操作も最低限同時に使えないとダメだな」

「でも、ここにくるのに【グリューエン大火山】攻略が必須ですから、大迷宮を攻略している時点で普通じゃないですよね」

「もしかしたら、空間魔法を利用するのがセオリーなのかも」

道なりに深く潜行しながら、ハジメ達は潜水艇がない場合の攻略方法について考察してみた。確かに、ファンタジックな入口に感動はしたのだが、普通に考えれば、超一流レベルの魔法の使い手が幾人もいなければ、侵入すら出来ないという時点で、他の大迷宮と同じく厄介なことこの上ない。

ハジメ達は、気を引き締め直し、フロント水晶越しに見える海底の様子に更に注意を払った。

と、その時、

ゴオウン!!

「うおっ!?!」

「んっ!」

「わわっ!」

「きゃっ!」

「何じゃっ!?!」

突如、横殴りの衝撃が船体を襲い、一気に一定方向へ流され始めた。マグマの激流に流された時のように、船体がぐるぐるんと回るが、そこは既に対策済みだ。組み込んだ船底の重力石が一気に重みを増し船体を安定させる。

「うつ、このぐるぐる感はもう味わいたくなかったですう」

シアが、「グリューエン大火山」の地下で流されたときの事を思い出  
し、顔を青くしてイヤイヤと頭を振った。

「直ぐに立て直しただろ？ もう、大丈夫だって。それより、この激流  
がどこに続いているかだな……」

そんなシアに苦笑いを浮かべつつ、ハジメは、フロント水晶から外  
の様子を観察する。緑光石の明かりが洞窟内の暗闇を払拭し、その全  
体像をあらわにしている。見た感じ、どうやら巨大な円形状の洞窟内  
を流れる奔流に捕まっているようだ。

船体を制御しながら、取り敢えず流されるまま進むハジメ達。しば  
らくそうしていると、船尾に組み込まれている「遠透石」が赤黒く光  
る無数の物体を捉えた。

「なんか近づいてきてるな……まあ、赤黒い魔力を纏っている時点で  
魔物だろうが」

「……殺る？」

ハジメがそう呟くと、隣の座席に座るユエが手に魔力に集めながら  
可愛い顔でギャングのような事をさらりと口にする。

「いや、武装を使おう。有効打になるか確認しておきたいし」

ハジメが、潜水艇の後部にあるギミックを作動させる。すると、  
ペットボトルくらいの大きさの魚雷が無数に発射された。ご丁寧な  
悪戯っぽい笑みを浮かべるサメの絵がペイントされている。

激流の中なので、推進力と流れがある程度拮抗し、結果、機雷のよ  
うにばら撒かれる状態となった。

潜水艇が先に進み、やがて、赤黒い魔力を纏って追いかけてくる魔



物——トビウオのような姿をした無数の魚型の魔物達が、魚雷群に突っ込んだ。

ドオゴオオオオ!!!

背後で盛大な爆発が連続して発生し、大量の気泡がトビウオモドキの群れを包み込む。そして、衝撃で体を引きちぎられバラバラにされたトビウオモドキの残骸が、赤い血肉と共に泡の中から飛び出し、文字通り海の藻屑となって激流に流されていった。

「うん、効果は抜群の様だな」

「うわあ、ハジメさん。今、窓の外を死んだ魚のような目をした物が流れて行きましたよ」

「シアよ、それは紛う事無き死んだ魚じゃ」

「改めて思ったのだけど、南雲君の作るアーティファクトって反則よね。」

それから度々、トビウオモドキに遭遇するハジメ達だったが容易く蹴散らし先へ進む。

どれくらいそうやって進んだのか。

代わり映えのない景色に違和感を覚え始めた頃、ハジメ達は周囲の壁がやたら破壊された場所に出くわした。よく見れば、岩壁の隙間にトビウオモドキのちぎれた頭部が挟まっており、虚ろな目を海中に向けている。

「……………」、さっき通った場所か？」

「……………」、そうみたい。ぐるぐる回ってる？」

どうやら、ハジメ達は円環状の洞窟を一周してきたらしい。大迷宮の先へと進んでいるつもりだったので、まさか、ここはただの海底洞窟で道を誤ったのかと疑問顔になるハジメ。結局、今度は道なりに進

むのではなく、周囲に何かないか更に注意深く探索しながらの航行となった。

その結果、

「あつ、ハツくん。あそこにもあつたよ！」

「これで、五ヶ所目か……」

洞窟の数ヶ所に、五十センチくらいの大きさのメルジーネの紋章が刻まれている場所を発見した。メルジーネの紋章は五芒星の頂点のひとつから中央に向かって線が伸びており、その中央に三日月のような文様があるというものだ。それが、円環状の洞窟の五ヶ所にあるのである。

ハジメ達は、じっくり調べるため、最初に発見した紋章に近付いた。激流にさらされているので、船体の制御に気を遣う。

「まあ、五芒星の紋章に五ヶ所の目印、それと光を残したペンダントとくれば……」

そう呟きながら、ハジメは首から下げたペンダントを取り出し、フロント水晶越しにかざしてみた。すると、案の定ペンダントが反応し、ランタンから光が一直線に伸びる。そして、その光が紋章に当たると、紋章が一気に輝きだした。

「これ、魔法でこの場に来る人達は大変だね……直ぐに気が付けないと魔力が持たないよ」

香織の言う通り、このようなRPG風の仕掛けを魔法で何とか生命維持している者達にさせるのは相当酷だろう。「グリユーエン大火山」とは別の意味で限界ギリギリを狙っているのかもしれない。

その後、更に三ヶ所の紋章にランタンの光を注ぎ、最後の紋章の場所にやって来た。ランタンに溜まっていた光も、放出することに少な

くなっていき、ちょうど後一回分くらいの量となっている。

ハジメが、ペンダントをかざし最後の紋章に光を注ぐと、遂に、円環の洞窟から先に進む道が開かれた。ゴゴゴゴッ！ と轟音を響かせて、洞窟の壁が縦真つ二つに別れる。

特に何事もなく奥へ進むと、真下へと通じる水路があった。潜水艇を進めるハジメ。すると、突然、船体が浮遊感に包まれ一気に落下した。

「おお？」

「おっと！」

「んっ」

「ひゃっ!？」

「ぬおっ」

「きやあ！」

それぞれ、六者六様の悲鳴を上げる。ハジメは、股間のフワツと感に耐える。直後、ズシンツ！ と轟音を響かせながら潜水艇が硬い地面に叩きつけられた。激しい衝撃が船内に伝わり、特に体が丈夫なわけではない雫が呻き声を上げる。

「つ……八重樫、無事か」

「うう、だ、大丈夫よ。それよりも、ここは？」

雫が顔をしかめながらもフロント水晶から外を見ると、先程までと異なり、外は海中ではなく空洞になっているようだった。取り敢えず、周囲に魔物の気配があるわけでもなかったので、船外に出るハジメ達。

潜水艇の外は大きな半球状の空間だった。頭上を見上げれば大きな穴があり、どういう原理なのか水面がたゆたっている。水滴一つ落

ちることなくユラユラと波打っており、ハジメ達はそこから落ちてきたようだ。

「どうやら、ここからが本番みたいだな。海底遺跡っていうより洞窟だが」

「……全部水中でなくて良かった」

ハジメは、潜水艇を“宝物庫”に戻しながら、洞窟の奥に見える通路に進もうとユエ達を促す……寸前で香織に呼びかけた。

「香織」

「知ってる」

それだけで、香織は即座に障壁を展開した。

刹那、頭上からレーザーの如き水流が流星さながらに襲いかかる。圧縮された水のレーザーは直撃すれば、容易く人体に穴を穿つだろう。

しかし、香織の障壁は、例え即行で張られたものであっても強固極まりないものだ。それを証明するように、天より降り注ぐ暴威をあっさり防ぎ切った。二人が魔力の高まりと殺意をいち早く察知し、奇襲は奇襲となり得なかったのである。当然、ハジメが呼びかけた瞬間に、攻撃を察していたユエにシアやテイオにも動揺はない。

だが、雫はそうはいかなかった。

「きやあ!？」

余りに突然かつ激しい攻撃に、思わず悲鳴を上げながらよろめく。傍にいたハジメが、咄嗟に、腰に腕を回して支えた。

「い、ごめんなさい」

「いや、気にするな」

あつさり離れたハジメをチラ見しながら、雫の表情は優れない。自分だけが醜態を晒したことに少し落ち込んでいるようだ。

そして、それ以上に、香織の成長に改めてショックを覚える。

「グリューエン大火山」で新たな姿を手に入れ、多少にかかわらずなりとも強くなっている筈だが、それでも埋まらない力の差。自分は、足でまといにしかならないのではないか？ その思いが雫の胸中を過る。

「どうした？ 八重樫」

「えっ？ あ、ううん。何でもないよ」

「……そうか」

雫は咄嗟に誤魔化し、無理やり表情を引き締める。ハジメは、そんな雫の様子に少し目を細めるが、特に何も言わなかった。

そのことに、雫が少しの寂しさと安堵を感じていると、未だに続いている死の豪雨を防いでいる香織がジッと自分を見ていることに気がついた。その瞳が、まるで雫を気遣ってるようで雫は目をそらした。

香織は、何も無かったかのように再び頭上に視線を戻した。同時に、ユエとティオが火炎を繰り出し、天井を焼き払う。それに伴って、ポロポロと攻撃を放っていた原因が落ちてきた。

それは、一見するとフジツボのような魔物だった。天井全体にびっしりと張り付いており、その穴の空いた部分から水流を放っていたようだ。なかなか生理的嫌悪感を抱く光景である。

水中生物であるせいか、やはり火系には弱いようで、テイオの炎系攻撃魔法「螺旋」により直ぐに焼き尽くされた。

フジツボモドキの排除を終えると、ハジメ達は、奥の通路へと歩みを進める。通路は先程の部屋よりも低くなっており、足元には膝くらいまで海水で満たされていた。

「あゝ、歩きにくいな……」

「……降りる？」

ザバアサバアと海水をかき分けながら、ハジメが鬱陶しそうに愚痴をこぼす。それに対して、ハジメの肩に座っているユエが、気遣うようにそう言った。ユエの身長的に、他の者より浸かる部分が多くなってしまうのでハジメが担ぎ上げたのだ。

少し羨ましそうに見つめてくるシアの視線をスルーして、問題ないと視線で返しながら、ハジメはユエが落ちないように太ももに手を置いてしっかりと固定した。ユエも、ハジメの首筋に手を回してぴたりとくっついた。

益々、羨ましそうな眼差しを送るシア達だったが、魔物の襲撃により、集中を余儀なくされる。

現れた魔物は、まるで手裏剣だった。高速回転しながら直線的に、あるいは曲線を描いて高速で飛んでくる。ハジメは、スッとドンナーを抜くと躊躇わず発砲し空中で全て撃墜した。体を砕けさせて、プカーと水面に浮かんだのはヒトデっぽい何かだった。

更に、足元の水中を海蛇のような魔物が高速で泳いでくるのを感知し、ユエが、氷の槍で串刺しにする。

「……弱すぎないか？」

ハジメの呟きに全員が頷いた。

大迷宮の敵というのは、基本的に単体で強力、複数で厄介、単体で強力かつ厄介というのがセオリーだ。だが、ヒトデにしても海蛇にしても、海底火山から噴出された時に襲ってきた海の魔物と大して変わらないか、あるいは、弱いくらいである。とても、大迷宮の魔物とは思えなかった。

皆、首を傾げるのだが、その答えは通路の先にある大きな空間で示された。

「っ……何だ？」

ハジメ達が、その空間に入った途端、半透明でゼリー状の何かが通路へ続く入口を一瞬で塞いだのだ。

「私がやります！ うりゃあ!!」

咄嗟に、最後尾にいたシアは、その壁を壊そうとドリユツケンを振るったが、表面が飛び散っただけで、ゼリー状の壁自体は壊れなかった。そして、その飛沫がシアの胸元に付着する。

「ひゃわ！ 何ですか、これ！」

シアが、困惑と驚愕の混じった声を張り上げた。ハジメ達が視線を向ければ、何と、シアの胸元の衣服が溶け出している。衣服と下着に包まれた、シアの豊満な双丘がドンドンさらけ出されていく。

「シア、動くでない！」

咄嗟に、ティオが、絶妙な火加減でゼリー状の飛沫だけを焼き尽くした。少し、皮膚にもついてしまったようでシアの胸元が赤く腫れている。どうやら、出入り口を塞いだゼリーは強力な溶解作用があるよ

うだ。

「っ！ また来るぞ！」

警戒して、ゼリーの壁から離れた直後、今度は頭上から、無数の触手が襲いかかった。先端が槍のように鋭く尖っているが、見た目は出入り口を塞いだゼリーと同じである。だとすれば、同じように強力な溶解作用があるかもしれないと、再び、香織が障壁を張る。更に、ユエとティオが炎を繰り出して、触手を焼き払いにかかった。

「正直、香織の防御とユエとティオの攻撃のコンボって、割と反則臭いよな」

鉄壁の防御と、その防御に守られながら一方的に攻撃。ハジメがそう呟くのも仕方ない。それを余裕と見たのか、シアがハジメの傍にそろうりそろりと近寄り、露になった胸の谷間を殊更強調して、実にあざとい感じで頬を染めながら上目遣いでおねだりを始めた。

「あのお、ハジメさん。火傷しちゃったので、お薬塗ってもらえませんかあ」

「……お前、状況わかってんの？」

「いや、香織さんとユエさんとティオさんが無双してるので大丈夫かと……こういう細かなところでアピールしないと、雫の参戦で影が薄くなりそうですし……」

「いや私は違うわよ！別に南雲君の事はそう言う目で——」

「聖浄と癒しをここに『天恵』」

雫が弁解をし終わる前にノールックで火傷を治す香織。「ああ、お胸を触ってもらおうチャンスがあ！」と嘆くシアに、全員が冷たい視線を送る。

「む？ ……ハジメ、このゼリー、魔法も溶かすみたい」

嘆くシアに冷たい視線を送っていると、ユエから声がかかる。見れ



ば、ユエの張った障壁がジワジワと溶かされているのがわかった。

「ふむ、やはりか。先程から妙に炎が勢いを失うと思っておったのじゃ。どうやら、炎に込められた魔力すらも溶かしているらしいの」  
ティオの言葉が正しければ、このゼリーは魔力そのものを溶かすことも出来るらしい。中々に強力で厄介な能力だ。まさに、大迷宮の魔物に相応しい。

そんなハジメの内心が聞こえたわけではないだろうが、遂に、ゼリーを操っているであろう魔物が姿を現した。

天井の僅かな亀裂から染み出すように現れたそれは、空中に留まり形を形成していく。半透明で人型、ただし手足はヒレのようで、全身に極小の赤いキラキラした斑点を持ち、頭部には触覚のようなものが二本生えている。まるで、宙を泳ぐようにヒレの手足をゆらりゆらりと動かすその姿は、クリオネのようだ。もともと、全長十メートルのクリオネはただの化け物だが。

その巨大クリオネは、何の予備動作もなく全身から触手を飛び出させ、同時に頭部からシャワーのようにゼリーの飛沫を飛び散らせた。

飛沫を香織の結界で防ぎながらユエはティオと一緒に巨大クリオネに向けて火炎を繰り出した。ハジメとシアも、砲撃を撃ち放つ。

全ての攻撃は巨大クリオネに直撃し、その体を爆発四散させた。いつちよ上がり！ とばかりに満足気な表情をするユエ達だったが、それにハジメが警告の声を上げる。

「まだまだ！ 反応が消えてない。なんだこれ、魔物の反応が部屋全体に……」

「うん。何かがおかしいよ……」

二人の感知系能力は部屋全体に魔物の反応を捉えていた。しかも、ハジメの魔眼石で見える視界は赤黒い色一色で染まっており、まるで、部屋そのものが魔物であるかのようだった。未だかつて遭遇したことのない事態に、自然、ハジメの眼が鋭さを帯びる。

すると、その懸念は当たっていたようで、四散したはずのクリオネが瞬く間に再生してしまった。しかも、よく見ればその腹の中に、先程まで散発的に倒していたヒトデモドキや海蛇がおり、ジュワーと音を立てながら溶かされていた。

「ふむ、どうやら弱いと思っておった魔物は本当にただの魔物で、こやつは食料だったみたいじゃな……ご主人様よ。無限に再生されてはかなわん。魔石はどこじゃ？」

「そういえば、透明の癖に魔石が見当たりませんか？」

ティオの推測に頷きつつ、シアがハジメを見るが、ハジメは巨大クリオネを凝視し魔石の場所を探しつつも困惑したような表情をしている。

「……ハジメ？」

ユエが呼びかけると、ハジメは、頭をガリガリと掻きながら見たままを報告した。

「……ない。あいつには、魔石がない」

その言葉に全員が目丸くする。

「な、南雲君？ 魔石がないって……じゃあ、あれは魔物じゃないってこと？」

「わからん。だが、強いて言うなら、あのゼリー状の体、その全てが魔石だ。俺の魔眼石には、あいつの体全てが赤黒い色一色に染まって見える。あと、部屋全体も同じ色だから注意しろ。あるいは、ここは既

に奴の腹の中だ！」

ハジメが驚愕の事実を話すと同時に、再び、巨大クリオネが攻撃を開始した。今度は、触手とゼリーの豪雨だけでなく、足元の海水を伝って魚雷のように体の一部を飛ばしてきてもいる。

ハジメは、“宝物庫”からフォームチェンジャーを手に取り、「自由暴虐」に変身。『王者の威光』を撒き散らし、勅命を下す。

「焼き払え」

次の瞬間部屋全体が一瞬青白く光り、消えると同時に燃えカスの様な物があたり一面に広がるのであった。

「なんと言うか………南雲君1人で良くないかしら？」

ここまで来ると、もうどうしても良く感じて。開き直って行こうと雫は心に誓ったのだった

## メルジーネ攻略【中編】

アレから数時間後。焼き尽くしたクリオネ以外に厄介な敵は存在せず、ハジメ達はサクサクと先へ進んでいくき、密林を抜ける。

「これは……船の墓場つてやつか？」

「すごい……帆船なのに、なんて大ききなの……」

密林を抜けた先は岩石地帯となっており、そこにはおびただしい数の帆船が半ば朽ちた状態で横たわっていた。そのどれもが、最低でも百メートルはありそうな帆船ばかりで、遠目に見える一際大きな船は三百メートルくらいありそうだ。

ハジメ達はその中を警戒しながら先へ進む。

「それにしても……戦艦ばっかだな」

「うん。でも、あの一番大きな船だけは客船っぽいよね。装飾とか見ても豪華だし……」

墓場にある船には、どれも地球の戦艦（帆船）のように横腹に砲門が付いているわけではなかった。しかし、それでもハジメが戦艦と断定したのは、どの船も激しい戦闘跡が残っていたからだ。見た目から言って、魔法による攻撃を受けたものだろう。スツパリ切断されたマストや、焼け焦げた甲板、石化したロープや網など残っていた。

大砲というものがなければ、遠隔の敵を倒すには魔法しかなく、これらの跡から昔の戦闘方法が想像できた。

そして、その推測は、ハジメ達が船の墓場のちょうど中腹に来たあたりで事実であると証明された。

——うおおおおおおおおおおおお  
——ワアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!

「ッ!?なんだ!？」

「ハツくん! 周りがっ!」

突然、大勢の人間の雄叫びが聞こえたかと思うと、周囲の風景がぐにやりと歪み始めた。驚いて足を止めたハジメ達が何事かと周囲を見渡すが、そうしている間にも風景の歪みは一層激しくなり——気が付けば、ハジメ達は大海原の上に浮かぶ船の甲板に立っていた。

そして、周囲に視線を巡らせば、そこには船の墓場などなく、何百隻という帆船が二組に分かれて相對し、その上で武器を手に雄叫びを上げる人々の姿があった。

「な、なんだこりゃ……」

「ハツくん? 私達、夢でも見てるのかな?」

「いや、全員起きてる。俺の技能がそう言ってる。恐らく、再生魔法で過去を“再生”してるんだろう」

ハジメは某救世主の持つ神代魔法の中から該当しそうな魔法を予想し、推測を立てる。

「でもこの迫力……流石は大迷宮ね……」

ハジメの言葉に対して雫がそう言う。

そうこうしている内に、大きな火花が上空に上がり、火花のように大きな音と共に弾けると、何百隻という船が一斉に進み出した。ハジメ達が乗る船と相對している側の船団も火花を打ち上げると一斉に進み出す。

そして、一定の距離まで近づくと、そのまま体当たりでもする勢いで突貫しながら、両者とも魔法を撃ち合いだした。

ゴオオオオオオオオ!!

ドオガアアアン!!

ドバアアアアア!!!

「おっ?」

「よつと!」

「んっ!」

「ですう!」

「おお!」

「きやあ!」

轟音と共に火炎弾が飛び交い船体に穴を穿ち、巨大な竜巻がマストを狙って突き進み、海面が凍りついて航行を止め、着弾した灰色の球が即座に帆を石化させていく。

ハジメ達の乗る船の甲板にも炎弾が着弾し、盛大に燃え上がり始めた。船員が直ちに、魔法を使って海水を汲み上げ消火にかかる。

戦場——文字通り、このおびただしい船団と人々は戦争をしているのだ。放たれる魔法に込められた殺意の風が、ぬるりと肌を撫でていく。

その様子を呆然と見ていたハジメ達の背後から再び炎弾が飛来した。放っておけばハジメ達に直撃コースだ。

ハジメは、なぜいきなり戦場に紛れ込んだのか? などと疑問で頭の中を埋め尽くしながらも、とにかく攻撃を受けた以上皆殺しOKの精神でドンナーを抜き、炎弾を迎撃すべくレールガンを撃ち放った。

炸裂音と共に一条の閃光となって飛翔した弾丸は、しかし、全く予

想外なことに炎弾を迎撃するどころか直撃したにも関わらず、そのまますり抜けて空の彼方へと消えていつてしまった。

「なっ!？」

もう何度目かわからない驚愕の声を上げながら、それぞれが回避行動をとる。

そんな中、香織は魔王妃フォームに姿を変え、『反射』を試みる。

しかし、炎弾は香織が生み出した『反射』に触れると、まるで防がれる様に消える。

「……そういう事か？」

それを見て、攻撃の有効性についてある程度の推測を立てたハジメは、別の攻撃方法を試してみることにした。ドンナーに『風爪』を発動した。そして、回避と同時に『風爪』で炎弾を斬り付けると、今度は、炎弾をすり抜けることもなく真つ二つにすることが出来た。

「えつと、南雲君？」

「どうやら、ただの幻覚ってわけでもないが、現実というわけでもないようだ。実体のある攻撃は効かないが、魔力を伴った攻撃は有効らしい。全く、本当にどうなってるんだか」

「あ、なるほど。ならこっちで行きましょう！」

そう言ってシアは魔王妃フォームへ姿を変え、タンクバスターを大砲モードで幻覚に向けてぶっぱなす。

「私達も……」

「一気に行くかのう！」

そう言って二人は風魔法で広範囲に渡り、兵士をを蹴散らす。

「私だって！」

雫も魔王妃フォームに変身し、黒刀を構え――

『風爪』

黒刀に付与された魔法を起動。剣を振るうと同時に風の爪で兵士達を切り裂いていく。

――ほう、結構戦うのにも馴れてきてるのか？ま、そんなぐらい出来るならありがたい――

その姿にハジメは満足そうな笑みを浮かべながら、ドンナーを発砲した。ただし、飛び出したのは弾丸ではなく、純粋な魔力の塊だ。

『魔力操作』の派生技能。「＋魔力放射」と「＋魔力圧縮」によって放たれたそれは、通常であれば、対象への物理作用は殆んどなく、魔力そのものを吹き飛ばすという効果した持たない。

魔力が枯渇すれば人も魔物も動けなくなるので、無傷で無力化という意味では使えるが、そもそも敵を殺す事が前提のハジメには使う事が殆んど無いため、お蔵入りになっていた技だが、今回は役に立つ機会があったようだ。

香織もハジメの見よう見まねで魔力を放ち、一同は一体つつ確実に処理していく。

最後の兵士達を消滅させた直後、再び、周囲の景色がぐにやりと歪み、気が付けば、ハジメ達は元の場所に戻っていた。



「今の、何だったのかな？」

香織は首を傾げながら疑問を上げる。その疑問にテイオが少し考えたあと推測を話した。

「おそらくじやが、昔あつた戦争を幻術か何かで再現したんじやろうな。……まあ、迷宮の挑戦者を襲うという改良は加えられているみたいじゃが……あるいは、これがこの迷宮のコンセプトなのかもしれない」

「それが当たっているとすれば、ここは……」

「狂った神がもたらすものの悲惨さを知れ……」

「そう言う事ね……どうりで気持ち悪かったわけだわ……」

思い返せば兵士達は口々に「全ては神の御為にい！」「エヒト様あ！

万歳い！」「異教徒めえ！ 我が神の為に死ねえ！」と狂気の宿った瞳で体中から血を噴き出しながらも哄笑し続ける者や、死期を悟ったからか自らの心臓を抉り出し神に捧げようと天にかかげる者、ハジメ達を殺すために弟ごと刺し貫こうとした兄と、それを誇らしげに笑う弟。戦争は狂気が満ちる場所なのだろうが、それにしても余りに凄惨だった。その全て「神の御為」というのだから、尚更……

「にしてもやけに平気そうだな、八重樫。アレは俺でも気持ち悪かったぞ」

「……………思い出させないで。これでもキツいんだから」

雫が若干つらそうにそう言うのと、香織は手を取り真っ直ぐな優しい眼差しで雫を見ながら言う

「大丈夫だよ、雫ちゃん。一緒に頑張つて攻略しよ！」

香織の力強い言葉に雫は安堵する。いくら強くなっても変わらないう香織との関係に喜びを感じながら雫は確固たる意思で返事する

「ええ、絶対に攻略するわよ！香織！」

そうしてハジメ一行は、また先へと進んで行く。

## メルジーネ攻略【後編】

ハジメ達が見上げる帆船は、地球でもそうそうお目にかかれない規模の本当に巨大な船だった。

全長三百メートル以上、地上に見える部分だけでも十階建て構造になっていて。そこかしこに荘厳な装飾が施してあり、朽ちて尚、見るものに感動を与えるほどだ。木造の船で、よくもまあ、これほどの船を仕上げたものだど、同じく物造りを得意とするハジメは、当時の職人達には尊敬の念を抱かずにはいられなかった。

ハジメ達は、それぞれの方法で飛び上がり、豪華客船の最上部にあるテラスへと降り立った。すると、案の定、周囲の空間が歪み始める。

「またか……お前ら、気をしっかりもてよ。どうせ碌な光景じゃない」  
ハジメの言葉に一同は気を引き締める。そうこうしている内に周囲の景色は完全に変わり、今度は、海上に浮かぶ豪華客船の上にあった。

時刻は夜で、満月が夜天に輝いている。豪華客船は光に溢れキラキラと輝き、甲板には様々な飾り付けと立食式の料理が所狭しと並んでいて、多くの人々が豪華な料理を片手に楽しげに談笑をしていた。

「パーティー……よね？」

「ああ。随分と煌びやかだが……メルジーネのコンセプトは勘違いだったか？」

予想したような凄惨な光景とは程遠く肩透かしを喰ったような気になりながら、その煌びやかな光景を、ハジメ達は、おそらく船員用の一際高い場所にあるテラスから、巨大な甲板を見下ろす形で眺めていた。

すると、ハジメ達の背後の扉が開いて船員が数名現れ、少し離れたところで一服しながら談笑を始めた。休憩にでも来たのだろう。

その彼等の話に聞き耳を立ててみたところ、どうやら、この海上パーティーは、終戦を祝う為のものらしい。長年続いていた戦争が、敵国の殲滅や侵略という形ではなく、和平条約を結ぶという形で終わらせることが出来たのだという。船員達も嬉しそうだ。よく見れば、甲板にいるのは人間族だけでなく、魔人族や亜人族も多くいる。その誰もが、種族の区別なく談笑をしていた。

「こんな時代があつたんですね」

「終戦のために奔走した人達の、まさに偉業だね。終戦からどれくらい経っているのか分からないけど……全てのわだかまりが消えたわけでもないのに……あれだけ笑い合えるんだ……」

「きつと、あそこに居るのは、その頑張った人達なんじゃないかしら？」

皆が皆、直ぐに笑い合えるわけじゃないだろうし……」

「そうだね……」

楽しげで晴れやかな人々の表情を見ると、こつちも自然と頬が緩んだ。しばらく眺めていると、甲板に用意されていた壇上に初老の男が登り、周囲に手を振り始めた。それに気がついた人々が、即座におしやべりを止めて男に注目する。彼等の目には一様に敬意のようなものが含まれていた。

初老の男の傍には側近らしき男と何故かフードをかぶった人物が控えている。時と場合を考えれば失礼に当たるところと思うのだが……しかし、誰もフードについては注意しないようだ。

やがて、全ての人々が静まり注目が集まると、初老の男の演説が始まった。

「諸君、平和を願い、そのために身命を賭して戦乱を駆け抜けた勇猛なる諸君、平和の使者達よ。今日、この場所で、一同に会す事が出来たことを誠に嬉しく思う。この長きに渡る戦争を、私の代で、しかも和平を結ぶという形で終わらせる事が出来たこと、そして、この夢のような光景を目に出来たこと……私の心は震えるばかりだ」

そう言つて始まった演説を誰もが身じろぎ一つせず聞き入る。演説は進み、和平への足がかりとなった事件や、すれ違い、疑心暗鬼、それを覆すためにした無茶の数々、そして、道半ばで散つていった友……演説が進むに連れて、皆が遠い目をしたり、懐かしんだり、目頭を抑えて涙するのを堪えたりしている。

どうやら初老の男は、人間族のとある国の王らしい。人間族の中でも、相当初期から和平のために裏で動いていたようだ。人々が敬意を示すのも頷ける。

演説も遂に終盤のようだ。どこか熱に浮かされたように盛り上がる国王。場の雰囲気も盛り上がる。しかし、ハジメは、そんな国王の表情を何処かで見たことがあるような気がして、途端に嫌な予感に襲われた。

「——こうして和平条約を結び終え、一年経つて思うのだ………実に、愚かだったと」

国王の言葉に、一瞬、その場にいた人々が頭上に「？」を浮かべる。聞き間違いかと、隣にいる者同士で顔を見合わせる。その間も、国王の熱に浮かされた演説は続く。

「そう、実に愚かだった。獣風情と杯を交わすことも、異教徒共と未来を語ることも……愚かの極みだった。わかるかね、諸君。そう、君達のことだ」

「い、一体、何を言っているのだ！ アレイストよ！ 一体、どうした

と言うツがはっ!？」

国王アレイストの豹変に、一人の魔人族が動揺したような声音で前に進み出た。そして、アレイスト王に問い詰めようとして……結果、胸から剣を生やすことになった。

刺された魔人族の男は、肩越しに振り返り、そこにいた人間族を見て驚愕に表情を歪めた。その表情を見れば、彼等が浅はかならぬ関係であることが分かる。本当に、信じられないと言った表情で魔人族の男は崩れ落ちた。

場が騒然とする。「陛下あー!」と悲鳴が上がり、倒れた魔人族の男に数人の男女が駆け寄った。

「さて、諸君、最初に言った通り、私は、諸君が一同に会してくれ本当に嬉しい。我が神から見放された悪しき種族ごときが国を作り、我ら人間と対等のつもりでいるという耐え難い状況も、創世神にして唯一神たる「エヒト様」に背を向け、下らぬ異教の神を崇める愚か者共を放置せねばならん苦痛も、今日この日に終わる! 全てを滅ぼす以外に平和などありえんのだ! それ故に、各国の重鎮を一度に片付けられる今日この日が、私は、堪らなく嬉しいのだよ! さあ、神の忠実な下僕達よ! 獣共と異教徒共に裁きの鉄槌を下せえ! ああ、エヒト様! 見ておられますかあ!!!」

膝を付き天を仰いで哄笑を上げるアレイスト王。彼が合図すると同時に、パーティー会場である甲板を完全に包囲する形で船員に扮した兵士達が現れた。

甲板は、前後を十階建ての建物と巨大なマストに挟まれる形で船の中央に備え付けられている。なので、テラスやマストの足場に陣取る兵士達から見れば、眼下に標的を見据えることとなる。海の上で逃げ場もない以上、地の利は完全に兵士達側にあるのだ。それに気がついた

のだろう。各国の重鎮達の表情は絶望一色に染まった。

次の瞬間、遂に甲板目掛けて一齐に魔法が撃ち込まれた。下という不利な位置にいる乗客達は必死に応戦するものの……一方的な暴威に晒され抵抗虚しく次々と倒れていった。

何とか、船内に逃げ込んだ者達もいるようだが、ほとんどの者達が息絶え、甲板は一瞬で血の海に様変わりした。ほんの数分前までの煌びやかさが嘘のようだ。海に飛び込んだ者もいるようだが、そこにも小舟に乗った船員が無数に控えており、やはり直ぐに殺されて海が鮮血に染まっていく。

「うっ」

「雫ちゃん！」

吐き気を堪えるように、雫が手すりに身を預け片手で口元を抑えた。余りに凄惨な光景だ。無理もないと、香織は雫を支える。

アレイスト王は、部下を伴って船内へと戻っていった。幾人かは咄嗟に船内へ逃げ込んだようなので、あるいは、狩りでも行う気なのかもしれない。

彼に追従する男とフードの人物も船内に消える。

と、その時、ふと、フードの人物が甲板を振り返った。その拍子に、フードの裾から月の光を反射してキラキラと光る銀髪が一房、ハジメには見えた。

——やっぱりそう言う事かよ……——

ハジメがそう思っていると、周囲の景色がぐにやりと歪む。どうやら、先程の映像を見せたかっただけらしく、ハジメ達は元の朽ちた豪

華客船の上に戻っていた。

「八重樫、少し休め」

「いえ、大丈夫よ。ちよつと、キツかったけど……それより、あれで終わり？ 私達何もしてないのに……」

「おそろくじゃが、この船の墓場は、ここが終着点じゃの。結界を超えて海中を探索して行くことは出来るようじゃが……普通に考えれば、深部に進みなければ船内に進めという意味なんじゃないかのう？」

あの光景は、見せることそのものが目的じゃったのかもな。神の凄惨さを記憶に焼き付けて、その上でこの船を探索させる……中々、嫌らしい趣向じゃよ。特に、我ら以外の者にとってはな」

この世界の人々は、そのほとんどが信仰心を持っているはずであり、その信仰心の行き着く果ての惨たらしさを見せつけられては、相当精神を苛むだろう。そして、この迷宮は精神状態に作用されやすい魔法の力が攻略の要だ。ある意味、「ライセン大迷宮」の逆なのである。異世界人であるハジメ達や神に信仰心が無いユエ達だからこそ、精神的圧迫もこの程度で済んでいるのだ。

ハジメ達は甲板を見下ろし、そこで起きた凄惨な虐殺を思い出して気の進まない表情になった。雫以外の場合、ただ単にウザそうなだけのようにだったが。

一同は意を決して甲板に飛び降り、アレイスト王達が入って言った扉から船内へと足を踏み入れた。

船内は、完全に闇に閉ざされていた。外は明るいので、朽ちた木の隙間から光が差し込んでいてもおかしくないのだが、何故か、全く光が届いていない。ハジメは、「宝物庫」から緑光石を使ったライトを取り出し闇を払う。

「……………さつきの光景……終戦したのに、あの王様が裏切ったってい

うこと？」

「そうみたいじゃな……ただ、ちよつと不自然じゃなかつたかのう？  
壇上に登った時は、随分と敬意と親愛の籠った眼差しを向けられていたのに……内心で亜人族や魔人族を嫌悪していたのじゃとしたら、あんなに慕われると思うかのう？」

「……そうね……あの人の口ぶりからすると、まるで終戦して一年の間にかががあつて豹変した……と考えるのが妥当かも……問題は何かあつたのかということだけだ」

「おそらく、神の回し者だろう。側近のフードの奴から銀髪が見えた」  
「……………1匹いたら、何万匹もいると思え……」

「それなんて虫ですう？」

ユエが「使徒ゴ○ブリ説」を唱えながら、先程の光景を考察しながら進んでいると、前方に向けられたハジメのライトが何かを照らし出した。白くヒラヒラしたものだ。

ハジメ達は足を止めて、ライトの光を少しずつ上に上げていく。その正体は、女の子だった。白いドレスを着た女の子が、俯いてゆらゆらと揺れながら廊下の先に立っていたのだ。

猛烈に嫌な予感がするハジメ達。特に、香織の表情は死んでいる。ハジメは、こんなところに女の子がいるはずないので取り敢えず撃ち殺そうとドンナーの銃口を向けた。

その瞬間、女の子がペシャと廊下に倒れ込んだ。そして、手足の関節を有り得ない角度で曲げると、まるで蜘蛛のように手足を動かし、真っ直ぐハジメ達に突っ込んで来た！

ケタケタケタケタケタケタケタツ！

奇怪な笑い声が廊下に響き渡る。前髪の隙間から炯々と光る眼でハジメ達を射抜きながら迫る姿は、まるで何処その都市伝説のよう



だ。

ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！

ハジメが射つ前に放たれた三発の弾丸。精密なその攻撃は直撃し  
ケタケタの様な少女を確実に仕留める。

ハジメが後ろを向くと、某神の使徒並みに無表情の香織がドンナー  
を発砲した姿があつた。

「か、香織って、こういうの苦手だったわよね？大丈夫なの？」

「……………奈落よりマシだけど……………ツライ」

「あ、ソコは変わってないのね。少し安心したわ」

「まあ、魔物とでも思えば良いだろ？」

「……………頑張る」

その後も、廊下の先の扉をバンバン叩かれたかと思うと、その扉に  
無数の血塗れた手形がついていたり、首筋に水滴が当たって天井を見  
上げれば水を滴らせる髪の毛の長い女が張り付いてハジメ達を見下ろし  
ていたり、ゴリゴリと廊下の先から何かを引きずる音がしたかと思つ  
たら、生首と斧を持った男が現れ迫ってきたり…………

そのほとんどは、香織が魔力弾で撃ち抜くか、シアとハジメのヤク  
ザキツク、テイオやユエの魔法で瞬殺するか、雫が切り捨てたりした  
のだが…………

「……………」

「か、香織さん。」

「……………？」

「せめて喋って欲しいですう！」

「香織！本当に大丈夫!？」

「……………」コクコク

と首を縦に振って返事をする香織。ここまで来ると無心の域に近い。

【メルジーネ海底遺跡】の創設者マイル・メルジーネは、どうやらとことん精神的に追い詰めるのが好きらしい。大迷宮を作るのには適した性格と言えるだろうか？

そんなこんなで船倉までたどり着いた。

重苦しい扉を開き中に踏み込む。船倉内にはまばらに積荷が残っており、ハジメ達は、その積荷の間を奥に向かって進む。すると、少し進んだところで、いきなり入ってきた扉がボタンツ！ と大きな音を立てて勝手に閉まってしまった。

「ぴっ!？」

「お、戻ってきた」

香織がその音に驚いて変な声を上げる。それに対してハジメはクスツと笑いながら、無心の域から帰って来た事を確認する。

「ハツくくくんくん!」

「クスツ……………」

「あ〜! 雫ちゃんまで〜!」

「…………お帰り、香織」

「お帰りなさいですう!」

「お帰りなのじゃ」

「みんなまでからかわないでよ〜!」

と楽しそうに無心の域から帰ってきた香織を温かく向かい入れる一同。香織的には不服な様だ。

なんて事をしていたら、また異常事態が発生した。急に濃い霧が視界を閉ざし始めたのだ。

「ハハハハハハ、ハツくん!？」

「何か陽気な外人の笑い声みたいになってるぞ。今まで通り、ぶっ飛ばせばいいだけだ。大丈夫だって」

ハジメがそう答えた瞬間、ヒュ！ と風を切る音が鳴り霧を切り裂いて何かが飛来した。咄嗟に、ハジメが左腕を掲げると、ちょうど首の高さで左腕に止められた極細の糸が見えた。更に、連続して風を切る音が鳴り、今度は四方八方から矢が飛来する

「ここに来て、物理トラップか？ ほんとに嫌らしいな！ 解放者つてのはどいつもこいつも！」  
「でも、ミレディに比べたらなんともないですう！」

ハジメは、一瞬、意表を突かれたものの、所詮はただの原始的な武器であることから難なく捌き、各々も防御や反射、トラップその物に攻撃など各自の対応を取る。

直後、前方の霧が渦巻いたかと思うと、凄まじい勢いの暴風がハジメ達に襲いかかった。

ハジメは、靴のスパイクで体を固定し飛ばされないようにしつつ、咄嗟に、全員の手を掴もうとしたが、一瞬の差で手が届かなかった。

「ぎゃあ!？」

雫は悲鳴を上げて暴風に吹き飛ばされ霧の中へと姿を消す。ハジメは舌打ちをして感知系能力や『革新者』を使い雫の居場所を把握しようとした。しかし、どうやらこの霧は「ハルツィナ樹海」の霧と同じように方向感覚や感知系の能力を阻害する働きがあるようで、『革新者』以外では雫を捉えられなかった。

「ハツくん！ここは任せて、雫ちゃんを！」

「分かった！」

ハジメは【自由暴虐】を身に纏い、霧の中へと飛んで行った

一方、その雫はというと、ハジメ達の姿が見えなくなってしまった事に猛烈な不安と恐怖を感じていた。戦力はハジメ達のお陰で強化されているものの、一人で行動するのは初めてであり、素のステータスはこのメンバーの中で一番低い事や技術の差、様々な事が雫の中で渦巻く。

こんなことではいけないと震える体を叱咤して、雫は何とか立ち上がる。と、その時、雫の肩に手が置かれた。おそらくハジメが、あのチートスペックで直ぐに駆けつけたのではと思っただけで雫は安堵し、

「南雲く……」

と直ぐに振り向こうとし、しかし、その前に、雫は、肩に置かれた手の温かみが妙に薄いことに気がついた。いや、もつと正確に言うなら、温かいどころか冷たい気さえする。自分の後ろにいるのは、ハジメではない。直感で悟る。

では、一体だれ？

雫は直ぐ様、背後の存在から距離を取って刀を構える。

振り返った雫の目に写ったのは……目、鼻、口——顔の穴という穴の全てが深淵のような闇色に染まった女の顔があった。

その頃、ハジメは、わずか二秒程で五十体近い戦士の亡霊達を撃滅していた。大体、0.04秒で歴戦の戦士を一体屠っている計算だ。と、その時、一瞬、攻勢が止んだかと思うと、霧の中から大剣を大上段に振りかぶった大男が現れ、霧すら切り裂きながら莫大な威力を秘めた剣撃を繰り出した。

ハジメは、半身になってその一撃をかわす。しかし、最初から二ノ剣が想定されていたのか、地面にぶつかった反動も利用して大剣が跳ね上がった。

ハジメは、その場で跳躍すると、『金剛』をかけたつ大剣に義手を引っ掛けその上に飛び乗る。そして、振り切られた大剣の上に膝立ちするハジメは、スつとドンナーを大男の頭部に向け魔力弾を撃ち放った。

頭部を吹き飛ばされ大男が霧散すると同時に、周囲の霧も晴れ始める。

「八重樫！ どこだー！」

ハジメは、雫の気配を感知しようと集中する。しかし、そんなことをするまでもなく、雫はあっさり見つかった。

「ここよ。南雲君」

「八重樫、無事だったか……」

微笑みながら歩み寄ってくる雫に、ハジメは安堵の吐息をもらす。そんなハジメの様子に、雫は更に婉然と微笑むと、そつとハジメに寄

り添った。

「すごく、怖かったわ……」

「そうか……」

「うん。だからね、慰めて欲しいの」

そう言っつて、雫はハジメの首に腕を回して抱きついた。そして、鼻と鼻が触れ合いそんなほど間近い場所で、その瞳がハジメの口元を見つめる。やがて、ゆっくりと近づいていき……

ゴツツ

と音を立てて、雫のこめかみにドンナーの銃口が突きつけられた。

「な、なにを……」

狼狽した様子を見せる雫に、ハジメの眼が殺意を宿して凶悪に細められる。

「なにを？　じゃねえよ。八重樫はそんなキャラじゃねえ」

そう言っつて、ハジメは微塵も躊躇わず引き金を引いた。ドンナーから紅色に輝く弾丸が撃ち放たれ容赦なく雫のこめかみを穿ち、吹き飛ばす。

「南雲君、どうしてこんなことツツ!？」

しかし、ハジメは取り合わず再び雫に魔力弾を撃ち込んだ。

「八重樫の声で勝手に話すな。八重樫の体で勝手に動くな。全て見えているぞ？」　八重樫に巢食ったゴミクズの姿がな」

そう、ハジメの魔眼石には、雫と重なるようにしてとり憑いている女の亡霊のようなものが映っていた。正体がバレていると悟ったのか、雫の姿をした亡霊は、先程までの怯えた表情が嘘のように、今度はニヤニヤと笑い出した。

「ウフフ、それがわかっててもどうする事も出来ない……もう、この女は私のものツ!？」

そう話しながら立ち上がろうとした雫（憑）だったが、ハジメに馬乗り押し倒され再び倒れこんだ。

「まてっ！　なにをするの！　この女は、あんたの女！　傷つけるつもりツ!？」

「頭の悪い奴だ。話すな、動くなと言っただろう？　別に八重樫は傷つけないさ。魔力弾で肉体は傷つかない。苦しむのは取り憑いたお前だけだ」

「私が消滅すれば、この女の魂も壊れるのよ！　それでもいいの!？」  
その言葉に、ハジメの手が止まる。ハツタリの可能性も十分にあるが、真偽を確かめるすべがない。普通なら、躊躇し手を出せなくなるだろう。雫（憑）もそう思ったのか、再びニヤつきながら、上からどけとハジメに命令した。それに対するハジメの返答は、

「丁寧な説明ご苦労さん。だが………無駄だ」

「へ?」

次の瞬間、撒き散らされる『王者の威光』。それが雫を包み込む。

『八重樫に取り付いたゴミだけ排除しろ』

「ぎややあああああああああああああああ!」

勅命を受けた威光は雫の中へと入っていき、魂魄魔法で亡霊をジワジワと削っていきながら雫の魂魄を保護し、安全かつ確実に亡霊を消滅させにかかる。

「痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！死にたい！死にたい！死にたい！死にたい！死にたい！死にたい！死にたい！死にたい！死にたい！」

「俺達？の『大切』に手を出したんだ……楽に消滅なんてさせない。散々苦しんだ挙げ句、叫びながら消えろ」

ハジメの体から紅色の魔力が噴き上がり、白髪が煽られてゆらゆらと揺らめく。殺気も魔力も荒れ狂い、にもかかわらず瞳だけが氷のよう凍てついている。

ハジメは、激怒しているのだ。かつてないほど。ただ敵を殺すだけでは飽き足りない、*「残虐性」*が発露するほどに。

雫にとり憑いた亡霊は、余りに濃密でおぞましい殺意に、もはや硬直してハジメを凝視する以外何も出来なかった。この時になって、ようやく悟ったのである。自分が決して手を出してはいけない化け物の、否、化け物達の決して触れてはいけない禁忌に触れてしまったのだ。

刻一刻と近づく消滅の瞬間。無限に伝わる激痛を喰らいながら亡霊は絶望しながら絶叫する。

「嫌だああああああああああああああああああああああああああああ！」

断末魔を響く中、亡霊は苦悶の表情のまま消えていった……………



## メルジーネ攻略（完）

あれから数分後、香織達と合流した後、大迷宮の中だったこともあり、雫が意識を取り戻すまで担がれた状態で先に進む事になった。

「ん……………んん……………こ、ここは……………」

「お、起きたか？八重樫」

雫が意識を取り戻すと、ハジメは確認するように問う。

「え？南雲君!? ってなんで!? 担がれてるの!?!」

「ああ、先を急いでな。つーか、目醒めたんなら歩けるか」

と雫を軽々と下ろし、眼の前に立たせる。

「ごめんなさいね、南雲君。迷惑かけちゃったみたいで……………」

暗い表情で気まずそうに言う雫。ハジメは少ししやがむと――

ブニ。

「……………ファヒヒなにヘンホホ、ハフホフンよ、南雲君」

ハジメは雫の頬を両手で摘んでいた。はじめはそのまま口を開く

「よく聞け八重樫。お前は真面目過ぎるんだよ。ここには暴走特急だった頃の香織も居なければ天之河も坂上もない。もっと適当に行け、適当に。取り敢えず、生きてさえいれば後でいくらでも何でも出来るんだ。後俺達を頼れ。俺でもどうしようもない時はシヨウに頼る」

「いやしれつと蒼君に頼ってどうするのよ！ソコは『俺達を頼れ』だけでいいじゃない！」

ハジメの手を振り切り、盛大なツツコミを上げる雫。

「いや八重樫お前普通に頼れって言ったら遠慮するだろ。どうせシヨウに関しては何しても負担にならないし。」

「そ、それは……………そうだけど……………」

と某救世主思い浮かべると何食わぬ顔で何でもこなす所と恋人といちやつく姿と謎の叔父ちゃんムーヴをこなすシーンしか出てこない。

「……………南雲君、蒼君って何なの？」

「何でも無いだろ」

「え？」

ハジメから帰ってきた意外な答えに雫は目を丸くする。

「アイツがどれだけ強くなって、変わって、離れてもアイツは蒼 翔だ。それだけは絶対に間違いない」

「どれだけ強くなって、変わって、離れても……………」

雫はそう呟いて二人を見る。どれだけ人外の強さを手にしても、どれだけ見た目が変わっても、どれだけ実力が離れていても、ソコにいるのは紛れもなく白崎香織と南雲ハジメである。

「そっか。私は心の何処かで南雲君達を勝手に遠い存在だと思っただのね……………」

何か大切な物が見えた気がした雫は一呼吸置くと、とんでもない事を口にする

「それじゃあ南雲君達に頼りたいんだけど……………私を強くして」

「はっ」

「だって頼れって言ったの南雲君でしょ？だから私もフォームチェンジ無しで一緒に戦える様に強くして」

雫はハジメはハジメで、香織は香織であることには納得したがそれはそれとして、そのままでもいいなどは微塵も思っていなかった。二

人の隣に立つことを諦めるつもりなど毛頭なかった。

だから雫は力を望む。例えばその手段が誰かに頼ることだったとしても。「頼れ」と言ってくれる人がいるのなら。

「……………まあ、分かった。シヨウに相談してプランは建てとく」

頭をかきながら歩き出すハジメ。その後ろについていく雫を見ながら香織達は目を合わせる

「……………思ったより攻略早そう?」

「いやー……………まだじゃない?もう少しかな?」

「と言つてももう一押しですう。もしかしたらラスボスはまた別にいるかもですう」

「それはもうラスボスなのかのう……………?まあご主人様の方は依然として変わらずじゃが……………」

---

淡い光が海面を照らし、それが天井にゆらゆらと波を作る。

その空間には、中央に神殿のような建造物があり、四本の巨大な支柱に支えられていた。支柱の間には壁はなく、吹き抜けになっている。神殿の中央の祭壇らしき場所には精緻で複雑な魔法陣が描かれていた。また、周囲を海水で満たされたその神殿からは、海面に浮かぶ通路が四方に伸びており、その先端は円形になっている。そして、その円形の足場にも魔法陣が描かれていた。

その四つある魔法陣の内の一つが、にわかに輝き出す。そして、一瞬の爆発するような光のあと、そこには人影が立っていた。ハジメ達

一行だ。

「……………ここは……………あれは魔法陣？ まさか、攻略したのか？」

「えっと、何か問題あるのかしら？」

「いや、まさかもウクリアとは思わなくて……………他の迷宮に比べると少し簡単だった気が……………」

どうやら、メイル・メルジーネの住処に到着したようだとなり、ハジメは少し拍子抜けしたような表情になる。それに対して、雫は苦笑いしながら答えた。

「あのね、南雲君。十分大変な場所だったわよ。最初の海底洞窟だって、普通は潜水艇なんて持ってないんだから、クリアするまでずっと沢山の魔力を消費し続けるし、下手をすれば、そのまま溺死だわ。クリオネみたいなのは、本来は有り得ないくらい強敵だったし、亡霊みたいなのは物理攻撃が効かないから、また魔力頼りになる。それで、大軍と戦って突破しなきゃならなかったのよ？ 十分、おかしな難易度よ……………」

「むっ、そう言われればそうなんだろうが……………」

「まして、この世界の人なら信仰心が強いだろうし……………あんな狂気を見せられたら……………」

「余計、精神的にキツイか……………」

追加で入る香織の指摘は、要するにハジメが強すぎたという事だ。そこまで言われると、確かに、「グリーンエン大火山」も最後のフリードの襲撃さえなければ香織も無傷で攻略出来ていたなあと納得するハジメ。

祭壇に到着したハジメ達は、全員で魔法陣へと足を踏み入れる。いつもの通り、脳内を精査され、記憶の確認が終わり、無事に全員攻略者と認められたようである。ハジメ達の脳内に新たな神代魔法が刻

み込まれていった。

「……でこの魔法か……大陸の端と端じゃねえか。解放者め」

「……見つけた『再生の力』」

ハジメが悪態をつく。それは、手に入れた【メルジーネ海底遺跡】の神代魔法が『再生魔法』だったからだ。

思い出すのは、【ハルツィナ樹海】の大樹の下にあった石版の文言。先に進むには確かに『再生の力』が必要だと書かれていた。つまり、東の果てにある大迷宮を攻略するには、西の果てにまで行かなければならなかったということであり、最初に【ハルツィナ樹海】に訪れた者にとつては途轍もなく面倒である。ハジメ達は、魔力駆動車という高速の移動手段を持っているからまだマシだったが。

ハジメが解放者の嫌らしさに眉をしかめていると、魔法陣の輝きが薄くなっていくと同時に、床から直方体がせり出てきた。小さめの祭壇のようだ。その祭壇は淡く輝いたかと思うと、次の瞬間には光が形をとり人型となった。どうやら、オスカー・オルクスと同じくメツセージを残したららしい。

人型は次第に輪郭をはっきりとさせ、一人の女性となった。祭壇に腰掛ける彼女は、白いゆったりとしたワンピースのようなものを着ており、エメラルドグリーンの長い髪と扇状の耳を持っていた。どうやら解放者の一人メール・メルジーネは海人族と関係のある女性だったようだ。

彼女は、オスカーと同じく、自己紹介したのち解放者の真実を語った。おっとりした女性のようで、憂いを帯びつつも柔らかな雰囲気を感じている。やがて、オスカーの告げたのと同じ語りを終えると、最後に言葉を紡いだ。

「……どうか、神に縋らないで。頼らないで。与えられる事に慣れないで。掴み取る為に足掻いて。己の意志で決めて、己の足で前へ進んで。どんな難題でも、答えは常に貴方の中にある。貴方の中にしかない。神が魅せる甘い答えに惑わされないで。自由な意志のもとにこそ、幸福はある。貴方に、幸福の雨が降り注ぐことを祈っています」

そう締め括り、メール・メルジーネは再び淡い光となって霧散した。直後、彼女が座っていた場所に小さな魔法陣が浮き出て輝き、その光が収まると、そこにはメルジーネの紋章が掘られたコインが置かれていた。

「証の数も四つですね、ハジメさん。これで、きっと樹海の迷宮にも挑戦できます。父様達どうしてるでしょう」

シアが、懐かしそうに故郷と家族に思いを馳せた。しかし、脳裏に浮かんだのは「ヒヤッハー！」する父親達だったので、頭を振ってその光景を霧散させる。ハジメは、証のコインを『宝物庫』にししまうと、シアと同じように「ヒヤッハー！」するハウリア族を思い出し、頭を振ってその光景を追い出した。

と、証をしまった途端、神殿が鳴動を始めた。そして、周囲の海水がいきなり水位を上げ始めた。

「うおっ!? チツ、強制排出ってかつ。全員、掴み合え!」

「よっと!」

「……んっ」

「ら、乱暴すぎるわよ!」

「最後の最後で適当ですう〜!」

「水責めとは……やりおるのお」

凄まじい勢いで増加する海水に、ハジメ達は潜水艇を出して乗り込

む暇もなく、あつという間に水没していく。咄嗟に、また別々に流されては敵わないと、全員がしつかりお互いの服を掴み合い、  
“宝物庫”から酸素ボンベ取り出して口に装着した。

そして、その直後、天井部分が【グリユーエン大火山】のショートカットのように開き、猛烈な勢いで海水が流れ込む。ハジメ達も、その竖穴に流れ込んで、下から噴水に押し出されるように、猛烈な勢いで上方へと吹き飛ばされた。

おそらく、【メルジーネ海底遺跡】のショートカットなのだろうが、おっとりしていて優しいお姉さんといった雰囲気のメール・メルジーネらしくない、滅茶苦茶乱暴なショートカットだった。しかも、強制的だった。意外に、過激な人なのかもしれない。

押し上げられていくハジメ達は、やがて頭上が行き止まりになっていることに気が付く。しかし、ハジメ達がぶつかるといった瞬間、天井部分が再びスライドし、ハジメ達は勢いよく遺跡の外、広大な海中へと放り出された。ハジメは確信する。メール・メルジーネは絶対、見た目に反して過激で大雑把な性格だと。

ハジメ達は海面に浮かび上がると、仰向けになり、酸素ボンベを外す。

「お前ら〜大丈夫か〜？」

と一同の安否を確認するハジメ。全員の返事を聞くと、ハジメは“宝物庫”から潜水艇を出し、艦のヒレ部分に全員打ち上げられる。

「さあ、帰ろうか」

## 魔王の帰還

「叔父ちゃん！ 朝なのー！ 起きるのー！」

海上の町エリセンの一角、とある家の二階で幼子の声が響き渡る。時刻は、そろそろ早朝を過ぎて、日の温かみを感じ始める頃だ。窓から、本日もいい天気になることを予報するように、朝日が燦々と差し込んでいる。

ドスンッ！

「へぶんっ！」

そんな朝日に照らされるベッドで爆睡しているのはショウだ。そして、そんなショウを元気な声で起こしに来たのはミュウである。

ミュウは、ベッドの直前で重さを感じさせない見事な跳躍を決めると、そのまま叔父(?)たるショウの腹の上に十点満点の着地を決めた。もちろん足から着地し、スツと体操選手のようにポーズを取る。

まだ四歳の幼子とはいえ、その体重は既に十五、六キロくらいはある。そんな重量が勢い付けて腹部に飛び乗れば呻き声の一つでも出る。まあ、痛みは無いが割りと良い衝撃を食らって目を覚ました。

「叔父ちゃん、起きるの。朝なの。おはようなの」

「……ああ、ミュウはん。おはようさん。起きるから降りてくれ」

ショウは、朝の挨拶をしながら上半身を起こしミュウを抱っこすると、優しくそのエメラルドグリーンの髪を梳いてやった。気持ちよさ



そうに目を細めるミュウに、シヨウの頬も緩む。

「……………ンツん…シヨウ？ ミュウ？」

そんなほのぼのした空気の中に、突如、どこか無機質さを感じさせる声音が響いた。シヨウが、そちらに目を向けて少しシーツを捲ると、そこには白く繊細な指先で目元をなぞる眠たげな美女——アシストだ。

寝起きなのに寝癖など全くない滑らかな長い銀髪を、窓から差し込む朝日でキラキラと輝かせて、使徒由来の碧瞳をシパシパとさせている。シヨウと同じモコモコの寝間着を着ていて、相反する可愛さを作り出している。

「二人とも、それ暑くないなの？」

「無いな」

「ですね」

ミュウの疑問に、実に息ぴったりと即答する二人。確かにもう夏に近い季節なのに二人ともまだモコモコふわふわした寝間着で蒸れなのか……………

ミュウが不思議そうな表情をしていると、シヨウの寝癖の内一本が世話しなく動きだす。

「あ、ハジメからだ」

「それアンテナなの？」

「冗談だよ。魔法でちよつと動かしただけ、ハジメの方は本当だけど」  
「パパからのなの!？」

シヨウの言葉に目をキラキラさせて迫るミュウ。まあ、愛しのパパのことだから仕方がない。

「ああ、昼頃には帰ってくるって。さて、そろそろ降りんべ」

「みゆー！」

そう言つてシヨウはミュウを抱き抱え、アシストと共に一階へと階段を降りていく。

「あら、おはようございます」

「あーおはよーレミアはん」

「おはようございますレミア。朝ごはんの準備手伝いしましょうか？」

一階に降りると同じエメラルドグリーンの髪をしたミュウの母レミアが朝ごはんの支度をしていた。

「いえ、もうすぐ出来るのでゆっくりしてもらつて構いませんが――」

とレミアが言いかけた所である疑問を持つ。それは

「それ暑くないんですか？」

「無いね」

「そうですか……………」

ミュウと同じ事を訪ねて来たのでくすりと笑いながらそう答える。

「あ、それとハジメは昼頃に帰ってくるよ」

「あら、そうですか。良かったねミュウ」

「みゆー！」

そう言つて四人は食卓を取囲み、朝ごはんを共にしたのだった。

---

昼頃になると、ハジメ達が乗つてる潜水艦が街の港に到着する。

「パパー！おかえりなのー！」

と潜水艦から飛び降りてきたハジメに向かって飛び込んでいくミュウ。ハジメは「よつと」とミュウをキャッチしながら飛び込んできた勢いを逃す様にくるっと回転する。

「ただいま、ミュウ。そしてシヨウ達も。帰ったぞ」

「ただいま、みんな！」

「……………ただいま」

「ただいまですう！」

「ただいまなのじゃ」

「ただいま……………でいいのかしら」

それぞれがただいまと戻ってきたのを暖かく受け入れるシヨウ達。そのままシヨウはハジメの元へ駆け寄り

「でき、ハジメ。さっきの話なんだけど後で打ち合わせ良いか？」

「ああ。そうしてくれ。今はミュウの方を優先したい」

「みゆ？」

曇りなき瞳でハジメを見つめるミュウ。どうやらハジメと遊びたい様だ

「わかった。でも、先に昼飯にしよう。まだ食って無いだろ」

「そうだな。じゃ行こうか。ミュウ」

「みゆー！」

ミュウを肩車して歩き出すハジメ。その後ろを香織達が追いかけるその光景をシヨウは優しい目で見つめていた。

「なんとも暖かい光景ですね」

「そうだな……………」

そう答えるとアシストから意外な質問が飛んでくる。

「羨ましいですか？」

「それは無いって言ったら嘘になるが、あんな光景が見たかったって

のも本音だ」

シヨウの口から紡がれた心からの言葉、ハジメの幸せを望み、死力を尽くした光景に満足している様だった。

「さ、俺達も行くかうか」

シヨウはアシストの手を取りハジメ達の方へと引く。アシストは微笑みながらついて行ったのだった。